熊本県文化財調査報告　第101集

七地水田遺跡

―「九州縦貫自動車道(八代～人吉間)」建設に伴う埋蔵文化財調査―

平成元年1月

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告書　第101集

七地水田遺跡

―― 熊本県人吉市七地町字原畑所在の七地水田遺跡 ――

平成元年1月

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の依頼を受けて、「九州縦貫自動車道(八代～人吉間)」建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行いました。

ここに報告する熊本県人吉市七地町字原畑所在の『七地水田遺跡』は、昭和59年３月から９月にかけて発掘調査を実施し、昭和62・63年度に整理・報告書作成を行ったものであります。

調査の結果、球磨川沿岸の低河岸段丘に拓かれた現水田の下層から、室町時代の埋没水田址を初めとして、縄文時代後期・晩期の遺物包含層などが確認され、貴重な資料を得る事ができました。この報告書が文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から多大な御配慮を賜り、地元の方々からは、調査に対する御理解をいただきました。さらに、専門調査員の先生方からは御指導・御助言を賜りました。ここに心から厚く御礼申しあげます。

平成元年１月31日

熊本県教育長　　松　村　敏　人

九州縦貫自動車道（八代～人吉間）球磨川第３橋工事の概要

一級河川「球磨川」は九州中央山地国定公園市房山に源を発し、九州中央山地南西部の水を集め、人吉盆地を経て、八代に至る急流河川である。

九州縦貫自動車道は八代～人吉間で球磨川と３回交差するが、その最も上流に位置するのが球磨川第３橋で、その他、ＪＲ湯前線、市道願成寺線を通過する。

本工事の工事内容は次の通りである。

橋　　長	４８０ｍ
上　部　工	ＰＣ連続ラーメン橋
下　部　工	円柱式橋脚（ hmax＝37ｍ ）　壁式橋脚（ ｈ＝26ｍ ）
基　礎　工	ニューマチックケーソン工法　直接基礎　深礎ぐい

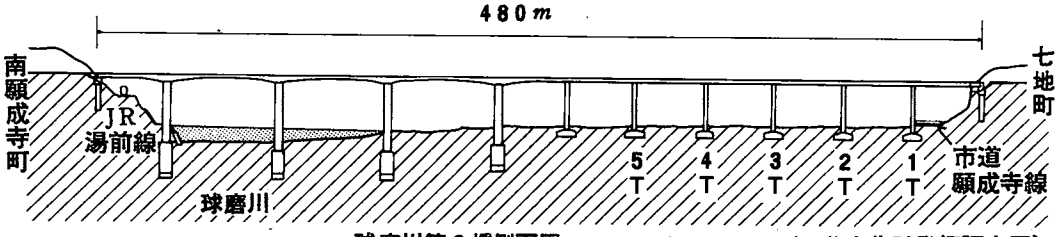
河川部基礎は水中基礎となるが、河川の洗掘の影響を受けないこと、施工時に水を濁さない事等を配慮して、ニューマチックケーソン工法[(1)]により、基礎底面を河床より20ｍ下の位置に設けた。

河川部上部工は橋脚高が高く、ＪＲとの交差等より、地上からの支保工を設置しない張り出し架設工法[(2)]により施工した。

このようにして昭和59年10月の工事着工より昭和61年12月までの 900日間の日数と24億円の工費により本橋工事を無事完了することができた。現在は前後の土木工事の運搬路として利用されているが、平成元年度の八代～人吉間の開通時には、人吉ＩＣから国道 219号線への取付道路の一部として一般共用されることとなっている。

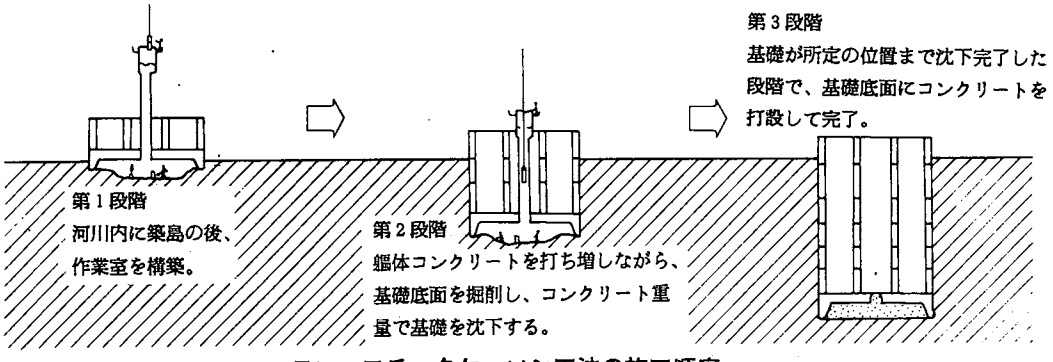
平成元年１月３１日

日本道路公団福岡建設局
人吉工事事務所　構造工事長　　明　石　行　雄



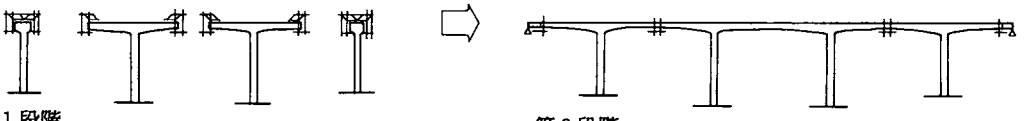
球磨川第３橋側面図　　１Ｔ～５Ｔ（埋蔵文化財発掘調査区）

(1)ニューマチックケーソン工法：基礎工下部に圧縮空気を送り、浸水を防ぎながら人力で掘削する工法である。



ニューマチックケーソン工法の施工順序

(2)張出架設工法：橋脚上にワーゲンという枠組みを固定し、型枠鉄筋を吊り下げて、コンクリートの打設を行い、左右の荷重バランスを保ちながら1ブロック4mづつ桁を張り出させて行く。張り出しが完了すると、各橋脚から張り出してきた桁を連結して、上部工を完成させる工法である。



第1段階
ワーゲンを組み立て、各橋脚より両側に張り出す。

第2段階
張り出し完了後、桁を連結して上部工が完成。

張り出し架設施工順序

例　　言

1．本書は日本道路公団の「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」の建設工事に伴い、事前に実施した、埋蔵文化財調査の報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県人吉市七地町字原畑に所在する「七地水田遺跡」で、日本道路公団福岡建設局から委託を受けて、熊本県教育庁文化課が発掘調査を行った。

3．当遺跡の発掘調査は、昭和58年度に試掘、昭和59年度に本調査を実施し、その整理・報告書作成は主に昭和63年度（一部は62年度）に行った。なお、出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

4．発掘調査は大田幸博・黒田裕司がその任にあたった。

5．発掘調査過程の写真撮影は大田・黒田が行い、整理後の出土遺物の写真撮影は大田が行った。

6．出土遺物の実測は主として大田が行ったが、石器は松舟博満が担当し、一部を坂田和弘・最上　敏・網田龍生・岩崎充宏・吉内素子・山下志保が行った。遺構および遺物の製図は、石工みゆき・溝口真由美が行った。

7．本書の執筆は、主として大田がこれにあたったが、第Ⅰ章第2節を隈　昭志、第Ⅰ章第5節・第Ⅳ章を菖蒲和弘、第Ⅲ章第3節を松舟博満が担当した。付論は前川清一県文化課文化財保護主事の執筆による。

8．本書に使用した地形図・字図は、国土地理院発行のものと、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所と人吉市役所管財課からの提供によるものである。

9．発掘調査区の土壌「プラントオパール定量分析」は、宮崎大学農学部の藤原宏志助教授（農作業管理学）に依頼した。

10．本書に掲載した『人吉城月城下之図』は故小山勝清氏が所有されていたものを、上川　香氏（人吉市文化財保護委員）が、同氏の生前中、写真撮影されたものである。

11．九州縦貫自動車道（八代～人吉間）球磨川第3橋工事の概要文は、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所の明石行雄構造工事長の執筆による。

12．出土遺物の整理は、仮設の熊本県教育庁文化課人吉事務所で行った。なお、事務所敷地については、熊本県衛生部と人吉保健所の協力を得た。

13．本書の編集は、桑原憲彰調査第2係長の総括のもと、大田が行い、溝口・石工の協力を得た。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要……1

第1節　調査の組織……1

第2節　調査に至る経緯……3

第3節　調査の方法と経過……4

第4節　遺跡の位置と地理的環境……6

第5節　人吉・球磨地方の歴史的環境…8

第Ⅱ章　調査の成果……12

第1節　遺跡の概要……12

第2節　1トレンチの調査結果……13

第3節　2トレンチの調査結果……15

第4節　3トレンチの調査結果……16

第5節　4トレンチの調査結果……17

第6節　5トレンチの調査結果……17

第7節　土　　坑……17

第8節　4・5トレンチの土層断面……22

第9節　炉跡について……29

第10節　集石遺構（墓）……37

第Ⅲ章　出土遺物……38

第1節　歴史時代……38

1．1トレンチ出土の遺物……38

2．2トレンチ出土の遺物……38

3．3トレンチ出土の遺物……39

4．4トレンチ出土の遺物……48

5．5トレンチ出土の遺物……62

第2節　縄文式土器……72

1．4トレンチ出土の縄文式土器……72

2．5トレンチ出土の縄文式土器……80

3．1～3トレンチ出土の縄文式土器……87

第3節　縄文時代石器……93

1．打製石斧……93

2．石核・剥片……116

3．磨製石斧……120

4．礫　　器……120

5．円盤状礫器……120

6．石　　錘……124

7．敲石・磨石……127

8．石　　皿……136

9．不明石器……136

10．石　　棒……136

11．石　　鏃……139

12．石　　匙……139

13．小　　結……139

第Ⅳ章　絵図および文献からみた七地水田遺跡……147

第1節　七地水田の変遷……147

第2節　絵図に見る地名と寺社堂宇……147

第3節　岡本河内守頼真について……152

付　論　球磨の石塔拾遺（抜粋）――御薬園正和塔――　前　川　清　―……154

第Ⅴ章　総　　括…… 155
〔付記〕プラント・オパール定量分析結果…… 159

挿　図　目　次

第１図　九州縦貫・横断自動車道路線図… 2
第２図　九州縦貫自動車道と七地水田遺跡 5
第３図　七地水田遺跡位置図（１）…… 6
第４図　七地水田遺跡位置図（２）…… 7
第５図　人吉盆地地形図…… 7
第６図　七地水田遺跡周辺の遺跡分布図… 9
第７図　七地水田遺跡周辺の字図……11
第８図　七地水田遺跡と球磨川第３橋
　　建設予定図……12
第９図　１Ｔの土層配置図……13
第10図　ａ地点土層図……14
第11図　ｂ地点土層図……14
第12図　ｃ地点土層図……14
第13図　ｄ地点土層図……14
第14図　ｅ地点土層図……14
第15図　２Ｔの土層配置図……15
第16図　ｆ地点土層図……15
第17図　ｇ地点土層図……15
第18図　ｈ地点土層図……15
第19図　３Ｔの土層配置図……16
第20図　ｉ地点土層図……16
第21図　ｊ地点土層図……16
第22図　ｋ地点土層図……16
第23図　ｌ地点土層図……17
第24図　ＳＥ０６実測図……18
第25図　４・５Ｔ検出の埋没水田配置図…19
第26図　４Ｔ検出の埋没水田実測図……20
第27図　５Ｔ検出の埋没水田実測図……21
第28図　４Ｔ北壁土層図……23
第29図　４Ｔ南壁土層図……24
第30図　４Ｔ東壁土層図……25
第31図　４Ｔ西壁土層図……25
第32図　５Ｔ北壁土層図……26
第33図　５Ｔ南壁土層図……27
第34図　５Ｔ東壁土層図……28
第35図　５Ｔ西壁土層図……28
第36図　４・５Ｔ検出の炉跡及び集石遺構
　　配置図……30
第37図　ＳＫ０１実測図……31
第38図　ＳＫ０２実測図……31
第39図　ＳＫ０３実測図……32
第40図　ＳＫ０４実測図……32
第41図　ＳＫ０５実測図……33
第42図　ＳＫ０６実測図……33
第43図　ＳＫ０７実測図……33
第44図　ＳＫ０８実測図……33
第45図　ＳＫ０９実測図……34
第46図　ＳＫ１０実測図……34
第47図　ＳＫ１１実測図……34
第48図　ＳＫ１２実測図……35
第49図　ＳＫ１３実測図……35
第50図　ＳＫ１４実測図……35
第51図　集石遺構（墓）実測図……37
第52図　１Ｔ出土遺物の実測図①……39
第53図　１Ｔ出土遺物の実測図②……41
第54図　１Ｔ出土遺物の実測図③……43
第55図　２Ｔ出土遺物の実測図……45
第56図　３Ｔ出土遺物の実測図……46

第57図　4Ｔ出土遺物の実測図①……49
第58図　4Ｔ出土遺物の実測図②……50
第59図　4Ｔ出土遺物の実測図③……52
第60図　4Ｔ出土遺物の実測図④……54
第61図　4Ｔ出土遺物の実測図⑤……57
第62図　4Ｔ出土遺物の実測図⑥……60
第63図　4Ｔ出土遺物の実測図⑦……61
第64図　5Ｔ出土遺物の実測図①……63
第65図　5Ｔ出土遺物の実測図②……64
第66図　5Ｔ出土遺物の実測図③……67
第67図　5Ｔ出土遺物の実測図④……69
第68図　5Ｔ出土遺物の実測図⑤……70
第69図　4Ｔ出土の縄文式土器実測図①…73
第70図　4Ｔ出土の縄文式土器実測図②…74
第71図　4Ｔ出土の縄文式土器実測図③…76
第72図　4Ｔ出土の縄文式土器実測図④…77
第73図　4Ｔ出土の縄文式土器実測図⑤…79
第74図　5Ｔ出土の縄文式土器実測図①…81
第75図　5Ｔ出土の縄文式土器実測図②…83
第76図　5Ｔ出土の縄文式土器実測図③…85
第77図　5Ｔ出土の縄文式土器実測図④…86
第78図　1～3Ｔ出土の縄文式土器実測図87
第79図　縄文式土器の水平・垂直分布図
（4トレンチ出土）……89・90
第80図　縄文式土器の水平・垂直分布図
（5トレンチ出土）……91・92
第81図　打製石斧実測図①……94
第82図　打製石斧実測図②……95
第83図　打製石斧実測図③……96
第84図　打製石斧実測図④……97
第85図　打製石斧実測図⑤……98
第86図　打製石斧実測図⑥……99
第87図　打製石斧実測図⑦…… 100
第88図　打製石斧実測図⑧…… 101
第89図　打製石斧実測図⑨…… 102
第90図　打製石斧実測図⑩…… 103
第91図　打製石斧実測図⑪…… 104
第92図　打製石斧実測図⑫…… 105
第93図　打製石斧実測図⑬…… 106
第94図　打製石斧実測図⑭…… 107
第95図　打製石斧実測図⑮…… 108
第96図　打製石斧実測図⑯…… 110
第97図　打製石斧実測図⑰…… 111
第98図　打製石斧実測図⑱…… 112
第99図　打製石斧実測図⑲…… 113
第100図 打製石斧実測図⑳…… 114
第101図 打製石斧実測図㉑…… 115
第102図 石核・剝片実測図①…… 117
第103図 石核・剝片実測図②…… 118
第104図 磨製石斧実測図…… 119
第105図 礫器実測図①…… 121
第106図 礫器実測図②…… 122
第107図 円盤状礫器実測図…… 123
第108図 石錘実測図①…… 125
第109図 石錘実測図②…… 126
第110図 敲石・磨石実測図①…… 127
第111図 敲石・磨石実測図②…… 128
第112図 敲石・磨石実測図③…… 129
第113図 敲石・磨石実測図④…… 130
第114図 敲石・磨石実測図⑤…… 131
第115図 敲石・磨石実測図⑥…… 132
第116図 敲石・磨石実測図⑦…… 133
第117図 敲石・磨石実測図⑧…… 134
第118図 敲石・磨石実測図⑨…… 135
第119図 石皿・不明石器実測図…… 137
第120図 石棒・石鏃・石匙実測図…… 138

第121図 石斧の形状変化想像図…… 140
第122図 石斧の着柄想像図…… 141
第123図 縄文時代石器の水平・垂直分布図（４トレンチ出土）…… 143・144
第124図 縄文時代石器の水平・垂直分布図（５トレンチ出土）…… 145・146
第125図 『人吉繊月城下之図』と七地水田遺跡①…… 150
第126図 『人吉繊月城下之図』と七地水田遺跡②…… 151
第127図 御薬園正和塔実測図…… 154

表　目　次

第１表 九州縦貫自動車道（八代～えびの間）建設地の埋蔵文化財包蔵地一覧… 3
第２表 ａ地点土層観察表……13
第３表 ｂ地点土層観察表……14
第４表 ｃ地点土層観察表……14
第５表 ｄ地点土層観察表……14
第６表 ｅ地点土層観察表……14
第７表 ｆ地点土層観察表……15
第８表 ｇ地点土層観察表……15
第９表 ｈ地点土層観察表……15
第10表 ｉ地点土層観察表……16
第11表 ｊ地点土層観察表……16
第12表 ｋ地点土層観察表……16
第13表 ｌ地点土層観察表……17
第14表 検出土層一覧表……18
第15表 ＳＥ０６土層観察表……18
第16表 ４・５Ｔ基準土層観察表……22
第17表 ＳＫ０１土層観察表……31
第18表 ＳＫ０２土層観察表……31
第19表 ＳＫ０３土層観察表……32
第20表 ＳＫ０４土層観察表……32
第21表 ＳＫ０５土層観察表……33
第22表 ＳＫ０６土層観察表……33
第23表 ＳＫ０７土層観察表……33
第24表 ＳＫ０８土層観察表……33
第25表 ＳＫ０９土層観察表……34
第26表 ＳＫ１０土層観察表……34
第27表 ＳＫ１１土層観察表……34
第28表 ＳＫ１２土層観察表……35
第29表 ＳＫ１３土層観察表……35
第30表 ＳＫ１４土層観察表……35
第31表 ４・５Ｔ検出の炉跡観察表……36
第32表 １Ｔ出土遺物の観察表①……40
第33表 １Ｔ出土遺物の観察表②……42
第34表 １Ｔ出土遺物の観察表③……44
第35表 ２・３Ｔ出土遺物の観察表……45
第36表 ３Ｔ出土遺物の観察表……47
第37表 ４Ｔ出土遺物の観察表①……51
第38表 ４Ｔ出土遺物の観察表②……53
第39表 ４Ｔ出土遺物の観察表③……55
第40表 ４Ｔ出土遺物の観察表④……56
第41表 ４Ｔ出土遺物の観察表⑤……58
第42表 ４Ｔ出土遺物の観察表⑥……59
第43表 ４Ｔ出土遺物の観察表⑦……61
第44表 ４Ｔ出土遺物の観察表⑧……62
第45表 ５Ｔ出土遺物の観察表①……65
第46表 ５Ｔ出土遺物の観察表②……66
第47表 ５Ｔ出土遺物の観察表③……68
第48表 ５Ｔ出土遺物の観察表④……70
第49表 ５Ｔ出土遺物の観察表⑤……71

第50表　4Ｔ出土の縄文式土器観察表①…74
第51表　4Ｔ出土の縄文式土器観察表②…75
第52表　4Ｔ出土の縄文式土器観察表③…78
第53表　4Ｔ出土の縄文式土器観察表④…79
第54表　5Ｔ出土の縄文式土器観察表①…82
第55表　5Ｔ出土の縄文式土器観察表②…84
第56表　5Ｔ出土の縄文式土器観察表③…86
第57表　5Ｔ出土の縄文式土器観察表④…87
第58表　1～3Ｔ出土の縄文式土器観察表…88
第59表　打製石斧計測表①…… 100
第60表　打製石斧計測表②…… 109
第61表　打製石斧計測表③…… 116
第62表　石核・剝片計測表…… 120
第63表　磨製石斧計測表…… 120
第64表　礫器・円盤状礫器計測表…… 124
第65表　石錘計測表…… 124
第66表　敲石・磨石計測表…… 136
第67表　石皿・不明石器・石棒・石鏃
　　石匙・計測表…… 139
第68表　石斧の欠損率一覧表…… 139
第69表　石斧の形状による分類表…… 140
第70表　出土石器の組織表…… 142
第71表　プラント・オパール定量分析表①159
第72表　プラント・オパール定量分析表②160

写真図版目次

図版１　①調査区航空写真　②調査区を南から望む
図版２　①１Ｔ調査区　②２Ｔ調査区　③５Ｔ検出の畦畔　④４Ｔ検出の畦畔
図版３　①５Ｔ西壁の土層断面　②４Ｔ検出の水田址　③４Ｔ検出の近世墓坑
図版４　①４Ｔ縄文調査(1)　②４Ｔ縄文調査(2)　③５Ｔ縄文調査　④４Ｔ検出の集石遺構
図版５　①４Ｔ検出の炉跡（SK03）検出状況②４Ｔ検出の炉跡（SK03）発掘終了
　　③５Ｔ検出の炉跡（SK11）検出状況④５Ｔ検出の炉跡（SK11）発掘終了
図版６　出土遺物〔歴史時代〕①
図版７　出土遺物〔歴史時代〕②
図版８　出土遺物〔歴史時代〕③
図版９　出土遺物〔縄文式土器〕
図版10　出土遺物〔打製石斧（第Ⅰ類）〕
図版11　出土遺物〔打製石斧（第Ⅱ類・第Ⅲ類）、石核・剝片〕
図版12　出土遺物〔磨製石斧、礫器、円盤状礫器、石錘、敲石〕
図版13　出土遺物〔磨石、石皿、石棒、石鏃、石匙〕

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　文化課長　岩崎辰喜（昭和57年度：試掘）　米村嘉人（昭和58年度：本調査）
森　一則（昭和59年度：本調査）
丸木保賢（昭和62年度：整理）　江崎　正（昭和63年：整理）

調査総括　〔発掘〕　隈　昭志（文化課長補佐）
〔整理〕　桑原憲彰（文化財調査第2係長）

発掘調査　大田幸博（文化財保護主事：試掘・本調査）　黒田裕司（昭和59年度　嘱託：本調査）　西住欣一郎（文化財保護主事：調査協力）　鶴島俊彦（昭和59年度　嘱託：調査協力）

報告書　大田幸博（文化財保護主事）　菖蒲和弘・松舟博満（嘱託）
網田龍生・岩崎充宏・吉内素子・山下志保（昭和62年度　熊本大学考古学研究室）石工みゆき・溝口真由美（臨時職員）最上　敏・坂田和弘

専門調査員　白木原和美（熊本大学教授）　松本寿三郎（熊本大学教授）　甲元眞之（熊本大学助教授）　藤原宏志（宮崎大学助教授）　田辺哲夫（日本考古学協会員）

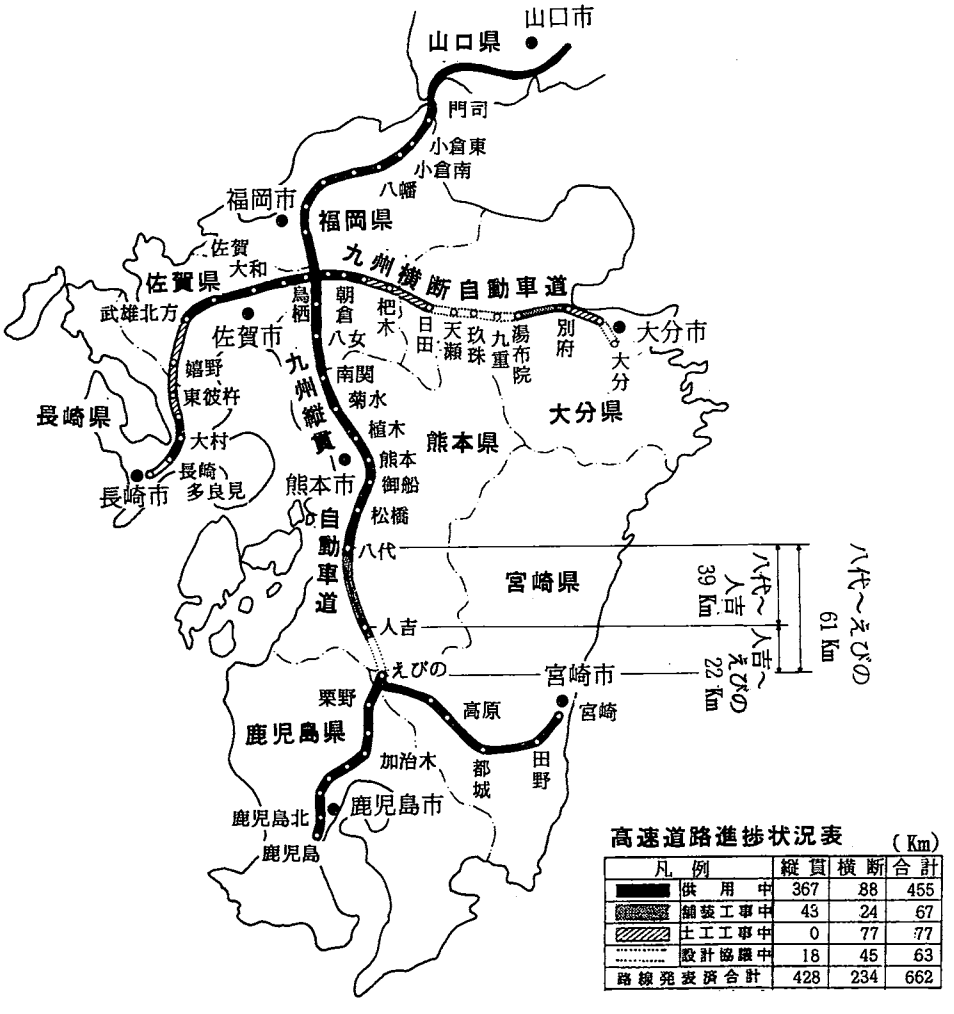
調査事務局　文化課長補佐：林田茂一（昭和57・58年度）　佐々木正則（昭和59年度）
林田敏嗣（昭和62・63年度）
主幹経理係長：大塚正信（昭和57・58年度）　柴田和馬（昭和59年度）
松崎厚生（昭和62・63年度）
参　　事：松崎厚生（昭和57・58年度）　花田隆三（昭和59年度）
主任主事：谷　喜美子（昭和62年度）
主　　事：上村祐司（昭和62・63年度）　泉野順子（昭和63年度）

日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所
発掘調査時：坂巻持千男（前所長）永渕善吾・鹿島　忠（前副所長）村田文敏（前
（昭和59年度）　工務課長）古賀文雄（前庶務課長）豊永盛喜（前工務課）
報告書作成時：近藤俊一（所長）財津　勝（工務課長）
（昭和63年度）　松本茂久・信国興勝（副所長）岩永一男（庶務課長）
明石行雄（構造工事長）石丸　祐（庶務課）

協力者　上川　香（人吉市文化財保護委員）

発掘作業員　田頭一義（班長）・岡本　実・中村正好・山本正照・井川静香・石工タツト
市岡ミツコ・上原ツユ子・上村ヤサメ・岡田ヒトム・緒方逸子・尾園スソエ
勝原カノエ・勝山タツ・勝山ミサコ・勝山良子・加村キミ子・迫田チフ
迫田初子・迫田洋子・澤見すま子・田中スソコ・西　徳子・浜田教子
久本さつ子・深水トシ子・福川シマエ・増田キヨ子・松村ハツ子・宮川邦子
村山祐子・山口ひとみ・山本清子・渡辺テル子

整理作業員　〔人吉調査事務所〕　緒方千代・村山清子・中島典子・緒方朋子
尾方信子・迫田洋子
〔熊本県文化財収蔵庫〕　吉永都美子・笠間いつ子・渕上慶子・水本寿美子
重永照代・永広絹代・塩田喜美子



高速道路進捗状況表　（Km）

凡例	縦貫	横断	合計
供用中	367	88	455
舗装工事中	43	24	67
土工工事中	0	77	77
設計協議中	18	45	63
路線発表済合計	428	234	662

第１図　九州縦貫・横断自動車道路線図

第２節　調査に至る経緯

「九州縦貫自動車道（八代～えびの間）」の着工を前に、日本道路公団福岡建設局（局長：大城金夫）から、昭和52年３月29日付けで熊本県教育委員会（教育長：林田正恒）あてに分布調査の依頼があった。県教育庁文化課では同年８月４～６日・８月10～12日の２回にわたり調査を行った。その結果、八代市（東片町古墳群・上片町条里遺跡）、球磨郡山江村（淡島遺跡・狸谷遺跡・本城遺跡・高城跡・大丸遺跡）、人吉市（笹栗山遺跡・梢山遺跡・佐無田狩所遺跡・岩清水遺跡・七地条里遺跡・尾丸横穴群・原城跡・尾丸古塔碑群・七地遺跡・人我胸遺跡・昼

No	遺跡名	所在地	分布調査時の所見	踏査	路線内の遺跡の有無	本調査	備考
1	東片町古墳群	八代市東片町	古墳群及び古墳時代の住居跡群。	○	×	—	
2	上片町条里遺跡	八代市上片町	八代平野の東片町・西片町・中片町・上片町に条里制地割の残存が考えられる。	○	○	○	
3	淡島遺跡	球磨郡山江村万江字淡島	淡島神社の西側丘陵上に、石器や石材片が散布している。	×	—	—	工法により保存
4	狸谷遺跡	球磨郡山江村山田字狸谷	サービスエリア予定地内に、縄文時代早期の押型文土器・石器・石材が散布している。	○	○	○	
5	本城遺跡	球磨郡山江村山田字本城	台地上に土師器片が散布する。	○	×	—	
6	高城跡	球磨郡山江村山田字城・本城	地名と遺構から、中世城跡である。	○	○	○	
7	大丸・藤ノ迫遺跡	球磨郡山江村山田字藤ノ迫	周辺は切り落とし状の急斜面で、城跡の可能性がある。台地上に古墳時代の住居跡が考えられる。	○	○	○	
8	笹栗山遺跡	人吉市願成寺町字笹栗山	弥生式土器片・土師器片が散布し、住居跡と水田跡の可能性がある。	○	×	—	
9	梢山遺跡	人吉市北願成寺町字梢山	土師器片が散布する。	○	×	—	
10	鼓ケ峰遺跡	人吉市願成寺町字鼓ケ峰	土師器片が散布するほか、相良氏第四代頼俊の居館関連の遺構が存在すると予測される。	○	○	○	
11	岩清水遺跡	人吉市願成寺町字岩清水	縄文式土器（市来系）・石器や石材片が散布する。	○	×	—	工法により保存
12	七地水田遺跡	人吉市七地町字原畑	条里遺構で、付近に「大坪」の地名が残っている。	○	○	○	
13	尾丸横穴群	人吉市七地町字天道ケ尾	台地の北側崖面に凝灰岩が露頭し、古墳時代後期の横穴が存在する。	○	×	—	一部、周辺を試掘
14	天道ケ尾遺跡	人吉市七地町字天道ケ尾	人吉城関連「原城」の一部をなす城跡とと推定される。多量の土師質土器片が散布する。	○	○	○	
15	尾丸古塔碑群	人吉市七地町字尾丸	板碑や五輪塔の残欠が積んであり、中世～近世の墓地があったと思われる。	○	×	—	
16	七地遺跡	人吉市七地町字七地	縄文・弥生・古墳時代の土器、中世の土器・陶磁器が散布する。	○	×	—	
17	人我胸遺跡	人吉市赤池水無町字人我胸	弥生式土器・土師器片が散布する。	—	—	—	人吉～えびの間へ持ち越し
18	昼子遺跡	人吉市上漆田町字昼子	微細な土器片が散布する。	—	—	—	〃
19	山田城跡Ⅰ	球磨郡山江村山田字大王谷	山田城跡の南側部分が路線内となる。	○	○	○	
20	山田城跡Ⅱ	球磨郡山江村山田字城山	地名と遺構から、中世城跡である。	○	○	○	

（注）① 19・20の山田城跡Ⅰ・Ⅱについては、昭和60年度に追加。
② 遺跡名変更・・・２．上片町条里遺跡→上片町水田遺跡　10．佐無田狩所遺跡→鼓ケ峰遺跡　13．原城遺跡→天道ケ尾遺跡
７．大丸遺跡→大丸・藤ノ迫遺跡　12．七地条里遺跡→七地水田遺跡

第１表　九州縦貫自動車道（八代～えびの間）建設地の埋蔵文化財包蔵地一覧

子遺跡）以上18ケ所の遺跡の存在が考えられた。

本書に取り上げる「七地水田遺跡」は後半の分布調査によって確認された遺跡の「七地条里遺跡」に該当し、調査担当者は熊本県文化課の隈　昭志・杉村彰一・島津義昭・田添夏喜の4名であった。分布調査時の所見は「人吉盆地には断片的に小範囲の条里が分布しているが、七地地区にも条里制地割が認められる。復元すればN80°Eを示す条里制地割で、球磨川左岸に広がっている。字名にも大坪などの条里関係の地名が残る」であった。

この結果を昭和52年9月9日付けで日本道路公団福岡建設局へ回答し、その後、日本道路公団から昭和53年4月11日付けで文化庁長官あての協議書が提出され、これに熊本県教育委員会の意見を付けて同年5月19日付けで文化庁長官あてに具申した。

文化庁からは、昭和53年6月12日付けで「熊本県教育委員会と協議の上、事前に発掘調査を実施すること。なお調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によるその保存に配慮すること」という通知があり、昭和53年6月20日付けで日本道路公団あて通知した。

昭和57年度から熊本県教育委員会は日本道路公団の調査依頼を受け、各遺跡の試掘調査を行った。七地条里遺跡を初め、笹栗山・梢山・佐無田狩所・岩清水遺跡については、昭和58年4月～7月に実施し、これには熊本県文化財保護主事大田幸博・嘱託黒田裕司があたった。

試掘調査の結果、七地条里遺跡は縄文遺跡と中世水田遺跡であることが判り、さらに近世では、低丘陵に築かれた墓坑群が削平され、水田化されていることが確認された。その為、遺跡名を「七地水田遺跡」と改め、日本道路公団と協議の上、本格的な発掘調査を昭和59年度から実施することとなり、本調査は文化財保護主事大田幸博と嘱託黒田裕司が担当した。

第3節　調査の方法と経過

「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」の建設に際し、人吉市南願成寺町字釜屋から七地町字天道ケ尾に 480mの球磨川第3橋が建設される事を因とする発掘調査は、架橋ボックスの基礎部分5箇所について実施した。

調査区は、30m×20mの区画を5箇所設定し、南側から北側へ1トレンチ～5トレンチとした。さらに、各トレンチを5m×5mの小区画に細分した。

発掘調査の経過

昭和59年3月5日から本調査に入り、9月20日に終了した。以下、調査日誌の抄略である。

昭和59年3月：　5日に現場事務所を設置。1～5トレンチの現水田層を重機で除去。4～5トレンチからはⅣ層土の洪水層を切り込む近世墓坑の存在が明らかとなる。10日過ぎから墓坑を掘り下げる。

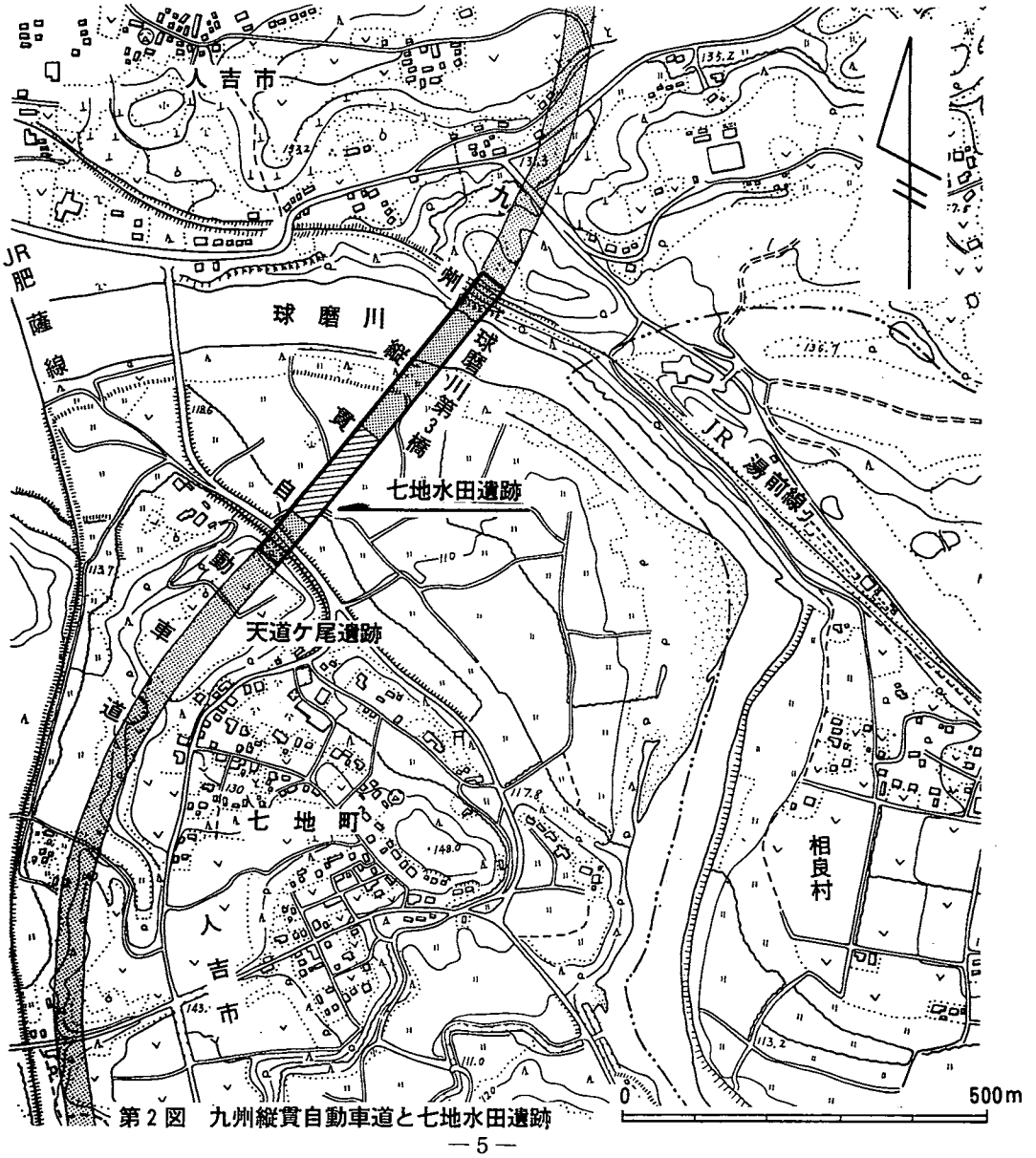
4月：　4・5トレンチのⅣ層土を掘り下げる。多量の中世遺物が出土する。特に、管状土錘の出土が目立つ。

5～6月：　4・5トレンチのⅤ層土から室町時代の埋没水田を検出。畦畔を確認した後、埋没水田を構成するⅤ～Ⅶ層土を掘り下げる。Ⅳ層土と同様に中世遺物が多量に出土する。

7月：　1～3トレンチは部分的にⅣ～Ⅴ層土あたりまで掘り下げる。周辺の水田で田植えが始まり、調査中、水がかりの余波でトレンチが度々水没する。水中ポンプで排水しながら作業を行う。

8月：　4・5トレンチのⅧ・Ⅷ'層で、縄文時代の調査を行う。土器や石器（石斧が中心）が大量に出土する。

9月：　4・5トレンチから遺物を取り上げた段階で、15基の炉跡と1基の土坑（墓坑）を検出した。



第2図　九州縦貫自動車道と七地水田遺跡

第４節　遺跡の位置と地理的環境

（１）位　　置

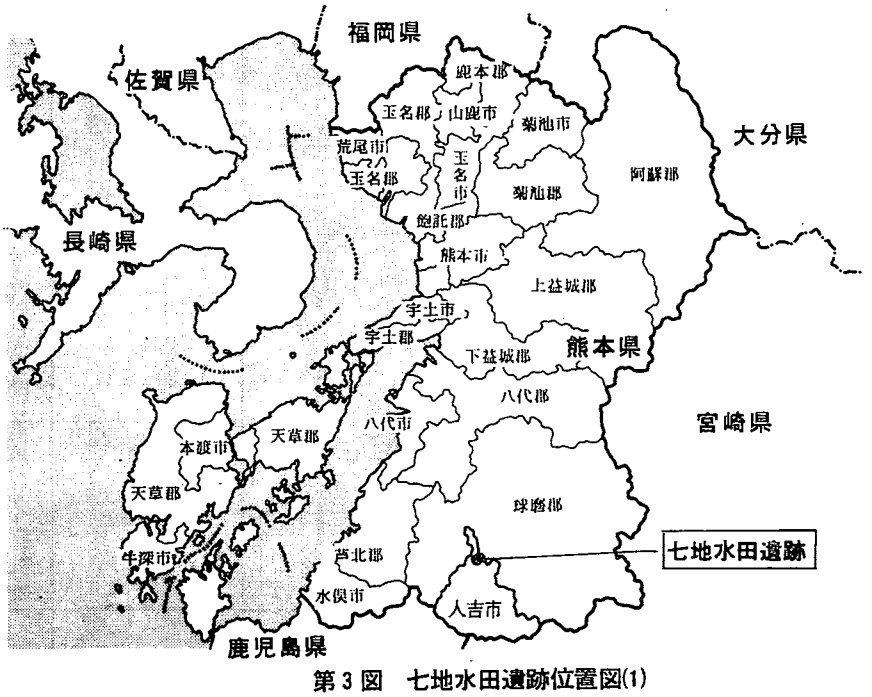
七地水田遺跡は熊本県人吉市七地町字原畑の水田地帯に位置する。国土地理院発行５万分の１の地形図『人吉』に位置を求むれば、図幅南から 9.5cm、西から 5.5cmの所にあり、調査区の標高は約 109mである。

遺跡の所在する七地町の水田地帯は、北側と東側を球磨川の流れに囲まれ、背後の南側と西側に丘陵地帯を荷負う低河岸段丘に開けたものである。長円形を縦に半裁したような形状で、規模は背後の丘陵地側で、県道を基準にして全長約１km、丘陵裾部より球磨川までの幅は約0.3kmである。

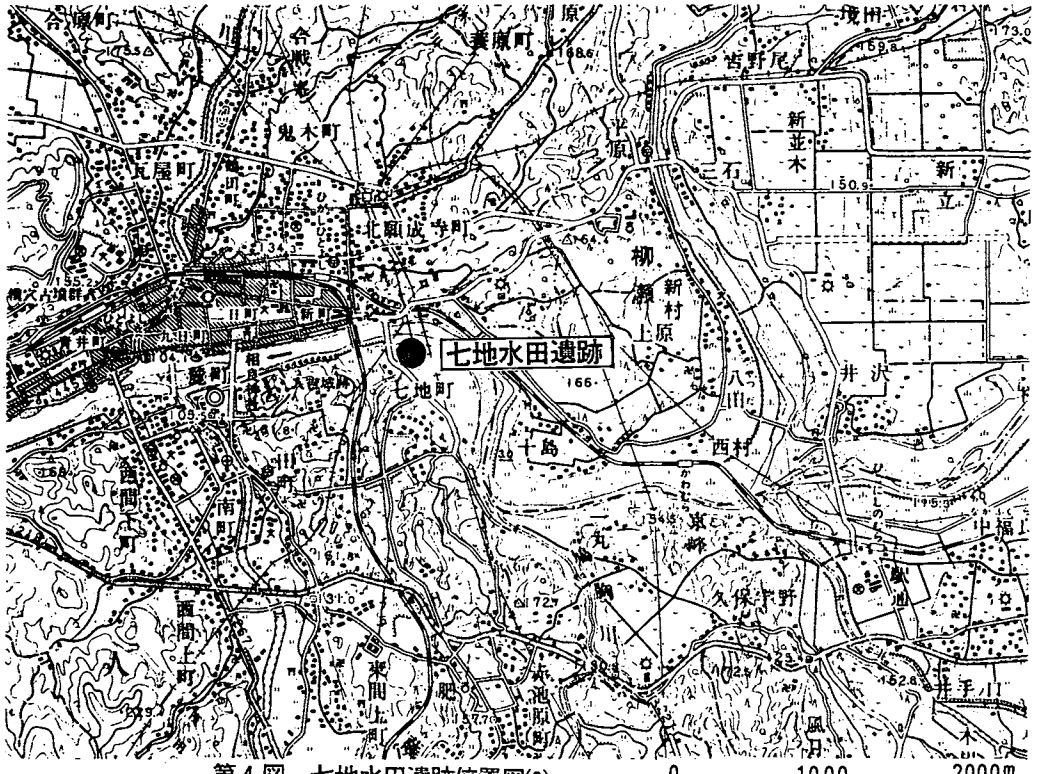
発掘調査の契機となった九州縦貫自動車道の球磨川第３橋は、この水田地帯の西側寄りに架けられた。

（２）地理的環境

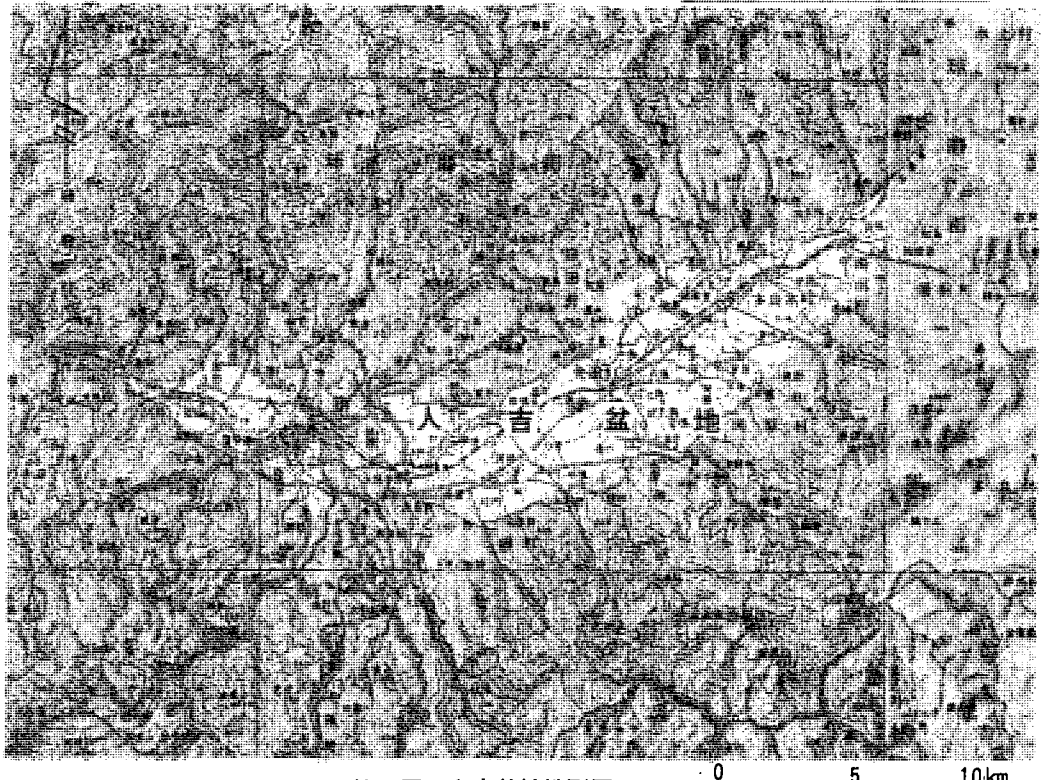
人吉盆地は、熊本県の南東部に位置し、周囲を祖母山・国見山・市房山などの九州山地に囲まれた標高 100～200 mの断層盆地である。盆地の中央部には、日本三急流の一つである球磨川が東から西に流れている。球磨川の北岸は川辺川による扇状地が隆起して形成された高原台地が連続しており、南岸は白髪岳断層崖下よりの複合扇状地が展開する。人吉市の南部は熔岩台地で、古い霧島火山群が残存しており、温泉が湧沸する。



第３図　七地水田遺跡位置図(1)



第4図　七地水田遺跡位置図(2)



第5図　人吉盆地地形図

第５節　人吉・球磨地方の歴史的環境

（１）先土器時代

球磨・人吉地方では31箇所の遺跡が確認されているが、それらの遺跡の殆どは山江村や人吉市を中心とした地域で、河川に近い標高 150m前後の台地・丘陵地からである。その中で、昭和57年から63年にかけて県文化課の「九州縦貫自動車道(八代～人吉間)」建設に伴う発掘調査が行われ、先土器時代関係の遺跡としては、高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、狸谷遺跡、鼓ケ峰遺跡、天道ケ尾遺跡が調査対象地となった。さらに、昭和61年度には人吉市教育委員会によって村山闇谷遺跡の発掘調査が実施された。

これらの遺跡には、すべて姶良カルデラを起源とする入戸火砕流(シラス・ＡＴ)が見られ、遺物はシラスの上層から出土した。その中で狸谷遺跡は、厚さ２ｍ近いシラスの下層からも先土器時代の遺物が数多く出土し、シラスの下位層石器群を第Ⅰ文化層、シラスの上位層石器群を第Ⅱ文化層とした。調査の結果から同遺跡は、九州先土器時代の標準的な遺跡になり得ると思われる。

（２）縄文時代

早期の遺跡として、狸谷遺跡、高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、村山遺跡、岩清水遺跡、射場ノ本遺跡などがあり、押型文系の楕円文・山形文、塞ノ神土器、手向山式土器、曽畑式土器が出土した。

前期以降の遺跡では、鼓ケ峰遺跡と射場ノ本遺跡があげられ、曽畑式土器・船元式土器・並木式土器が出土している。

後期の遺跡は、矢黒神社前遺跡があり、後期後半の遺物や石刀の柄部が採集されている。晩期の遺跡は、七地水田遺跡を初めとして、丘陵上に村山闇谷遺跡・天道ケ尾遺跡があり、アンモン山遺跡からは黒川式土器と 299本の石斧が出土した。

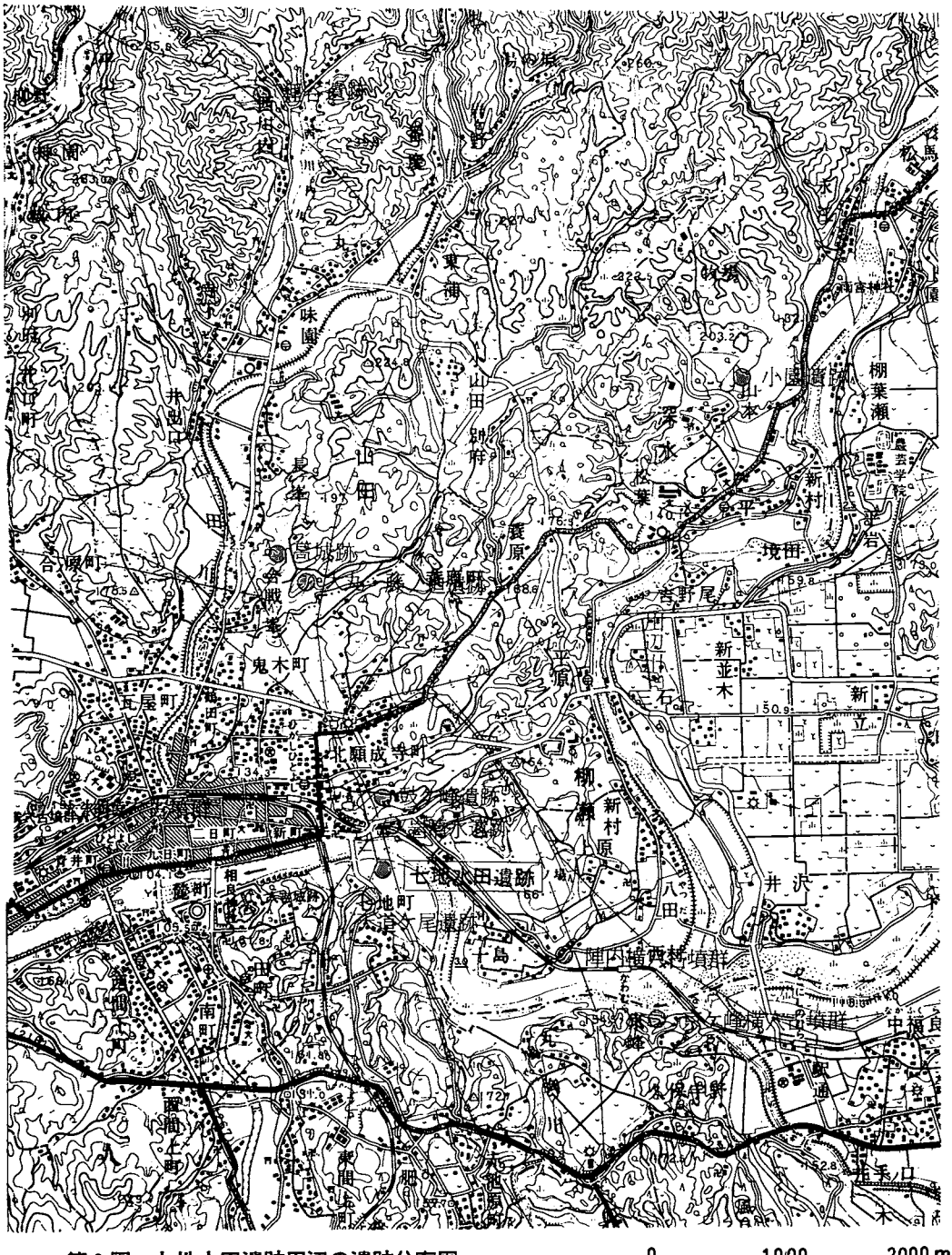
（３）弥生時代

球磨・人吉地方の弥生時代は後期に特徴があり、免田式土器が多く出土している。遺跡は30箇所を数え、人吉盆地の中央部に集中する。分布域の周辺部にあたる大丸・藤ノ迫遺跡からは、免田式土器を伴う10基の住居址が検出されている。

（４）古墳時代

古墳時代になると球磨・人吉地方では広範囲に横穴・高塚古墳が見られ、中でも人吉市の大村、錦町の京ケ峰、相良村の陣内などの装飾横穴古墳群が広く知られている。また前方後円墳では分布の南限とされる錦町の亀塚古墳群があり、大型円墳では免田町の四塚・才園四塚古墳群、須恵村の鬼ノ釜古墳、多良木町の夫婦塚古墳などがあげられる。これらは人吉盆地の中央に位置するもので、その周辺にも横穴古墳群や小規模な古墳群が点在する。

天道ケ尾遺跡からは、地下式横穴が発見され、鉄鏃９本が出土した。また、深田村の新深田と荒毛・尾園遺跡からは、地下式板石積石室墓と共に免田式土器が出土している。アンモン山遺跡では成川式土器と須恵器が共伴し、住居跡が検出された。最近では、相良村の小園遺跡から成川式土器を伴う古墳時代の住居跡が16基検出された。



第６図　七地水田遺跡周辺の遺跡分布図

（５）歴史時代

古代の球磨郡は『古事記』『日本書紀』の中で熊襲征伐の「熊縣」に比定されている。この時期の遺跡に須恵器の下り山窯跡、瓦の梼木窯跡・久鹿遺跡・寺田遺跡があり、その周辺の廻り迫遺跡を初めとする４遺跡で蔵骨器が出土している。また、黒田平城周辺からは銅板墓誌が出土している。

「球磨郡」という文字の初見は、平安時代の中頃に編纂された『和名類聚抄』である。同書によれば球磨郡に「人吉・西村・東村・久米・球玖・千脱」の６郷があった事になる。しかし今日、郷の比定と郡衙の所在地については諸説があり、確定までには至っていない。

鎌倉時代に入ると、文書・金石文・史料もかなり残存している。球磨郡の田数と領主を書き上げた建久八年(1197)の『肥後国球磨郡図田帳写』によると、球磨郡は人吉・須恵・永吉庄の３つの庄園に分かれ、公田として豊富・豊永郷があり、領主は在地の久米・須恵・人吉・平川氏などであったことがわかる。

西遷御家人相良氏の球磨郡下向は、元久二年(1205)の相良永頼「人吉庄地頭職」補任後と思われる。寛元二年(1244)に永頼は「下知違背之咎」として人吉庄地頭職が中分され、北方は北条得宗家に奪われた。ちなみに、七地水田遺跡一帯は南方に属し、相良氏の支配下に入っていたと思われる。

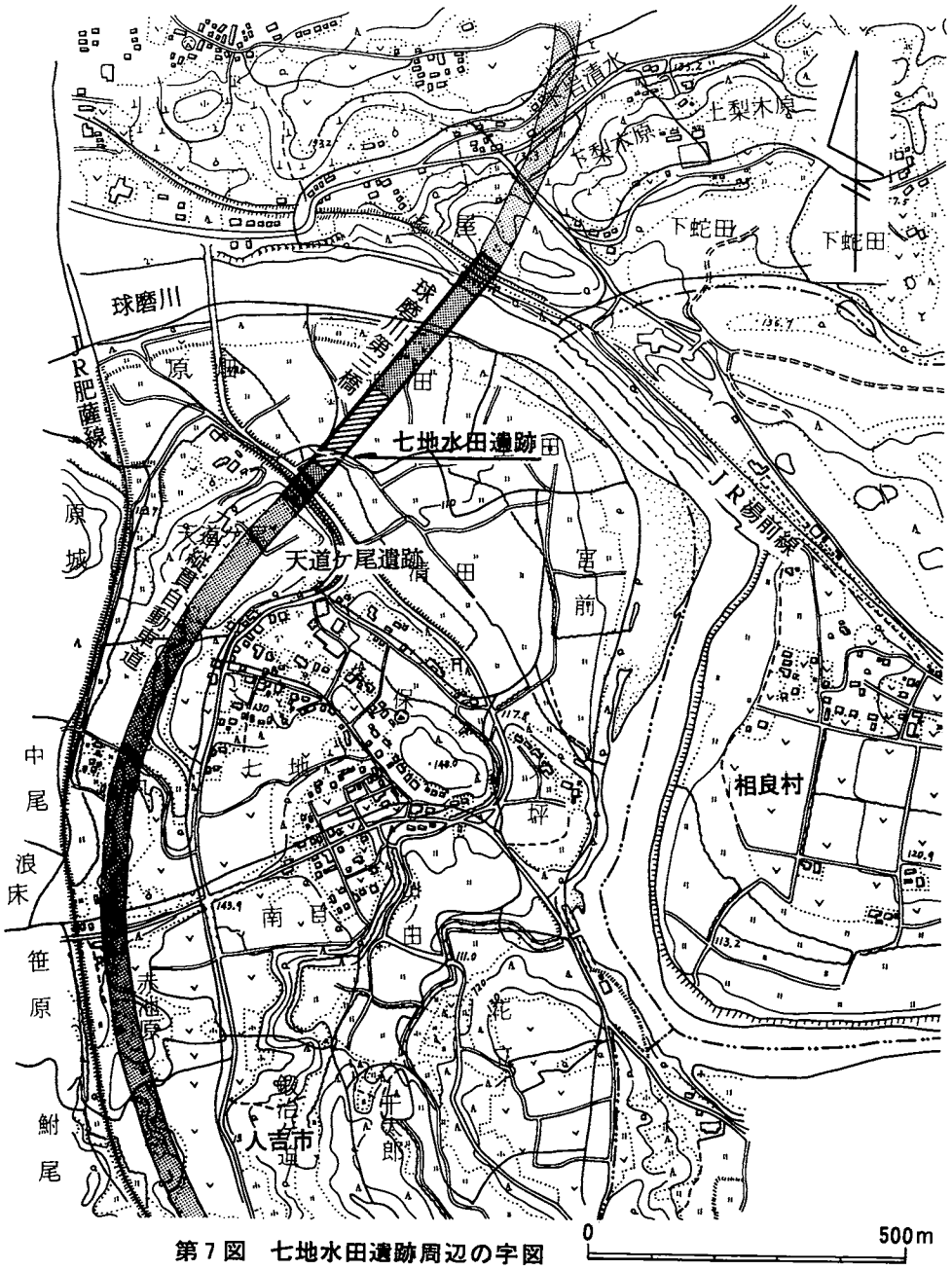
南北朝時代は多良木の上相良氏(経頼)と人吉の下相良氏(定頼・前頼)が敵対し、これに球磨郡国人の平川・須恵・岡本・永里・宮原・橘氏等が加わって、激しい内乱となった。この様な状況の中で、下相良氏の前頼・氏頼兄弟が「ながとみとの」宛へ契状を出すなど、庶子の勢力も大きいものであった。このころになると各村ごとに城・砦等が築かれていった。

室町時代に入ると、人吉城主相良前続が死去し、幼主の尭頼が家督を継いだ。しかし、上相良氏はすかさず人吉へ押し寄せ、幼主尭頼を追放した。続いて山田城主と伝えられる永留長続が、上相良氏を人吉から追い払い、自ら人吉城に入城した。さらに、文安五年(1448)八月には多良木の上相良頼仙・頼観を滅亡させ、これに加担した久米・平川・須恵・岡本・永里氏などの有力国人を滅ぼし、郡内を一挙に統一した。永留（相良）長続は、その後、薩摩と肥後の芦北・八代へ勢力を伸ばし、その子為続の時代には、球磨・芦北・八代を支配下に置くなど版図を広げた。治政では相良家法度を定め、文芸や芸能も盛んに行い、社寺の造営も数多く行った。

為続から長毎・長祇と家督が譲られ、長唯の代で初めて庶民の上村氏から晴広を迎え入れたが、晴広の代で本家の上村三兄弟が反乱を起こし、さらに、人吉でも動揺が続き、相良氏の球磨郡支配の弱さを露呈した。結果として本拠地を八代の麓から人吉へと移すことになる。義陽の代には、日向の伊東氏と薩摩の島津氏の勢力が、徐々に球磨郡へ延びており、義陽は真幸・大口へ軍勢を差し向けるなど、領内の警戒を強めた。しかし、天正九年(1581)肥後の水俣城の落城を機に、義陽は戦わずして島津義久の軍門に降り、八代・芦北郡を放棄し、球磨郡のみが

安堵された。そして、同年十二月に義陽は島津氏の先陣として、阿蘇氏の臣・甲斐宗運と響野原にて戦い、打死している。

その後、島津政権下で忠房が家督を継ぎ、やがて豊臣秀吉の九州征伐で、島津・相良氏とも秀吉の支配下に入ることになる。天正十五年には、秀吉から相良長毎に「旧領球磨郡安堵」がなされ、以後、二万二千石の外様大名として相良氏は明治時代の廃藩置県まで、長きに渡って球磨郡を支配した。

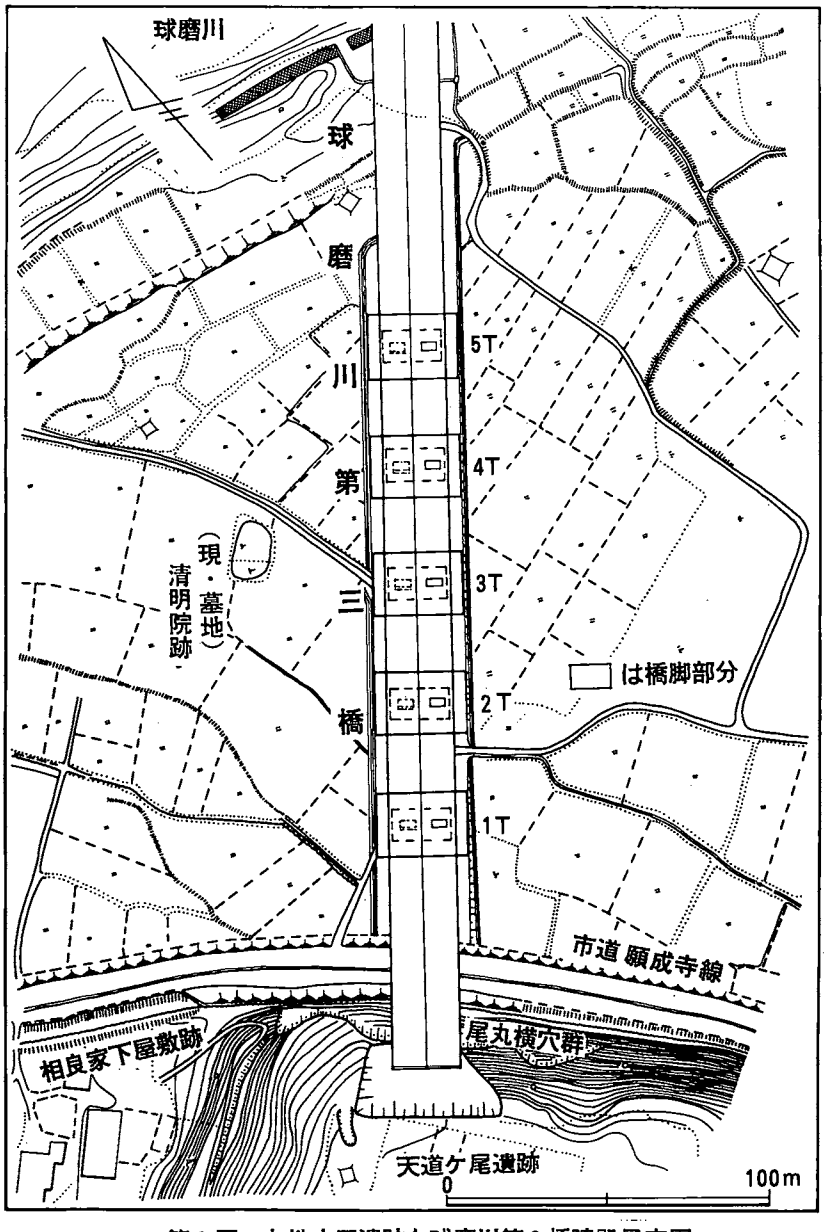


第7図　七地水田遺跡周辺の字図

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　遺跡の概要

橋脚部分の５ケ所について南北20×東西30mの調査区を設定し、南から北へ便宜的に１～５トレンチと呼称した。調査の結果、４・５トレンチの２ケ所について、現水田層の下層から近世墓坑を初めとし、洪水層（推定）に覆われた埋没水田や縄文時代の遺物包含層が検出された。



第８図　七地水田遺跡と球磨川第３橋建設予定図

洪水層に比定されるのは黄灰色土層で、小礫が多く混じり、プラント・オパール検査でも、イネの含有率が前後層（6.923 ～10.361）に比べて著しく低い数値（1.178 ～1.251)を示した。この層からは中世末の遺物が多量に出土した。(P159 プラント・オパール定量分析結果参照)

さらにこの層を切り込む12基の土坑が検出され、４基からは江戸時代の近世陶器と腐食の進んだ鉄釘の一部が検出された。中世遺物のみを出土した土坑もあったが、土坑の形状や埋土色から、これらのものは同一時代と推定される。江戸時代の墓坑であろう。

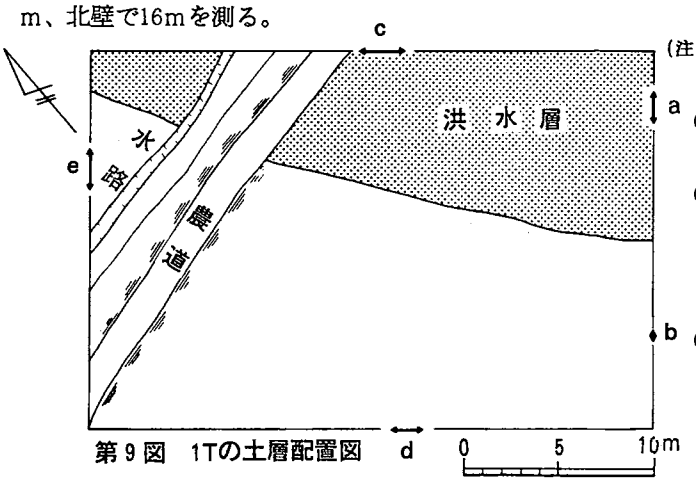
埋没水田は両トレンチから各々10枚前後が検出された。内、２枚が完全な形の水田で、短冊型の形状を呈し、長軸畦畔15～16.5m×短軸畦畔７～８ｍを測った。長軸の向きはほぼ南北方向にあり、短軸が東西方向を示した。この埋没水田からも相当量の中世遺物が検出された。

縄文時代の遺物包含層は後晩期のもので、埋没水田の下層から検出された。多くの土器片と217点に及ぶ打製石斧などが出土した。さらに、遺物と同時代の遺構として15基の炉跡が検出された。

１～３トレンチからは、一部、洪水層のみが確認され、遺構は検出されなかったが、現水田層から近世遺物に混じって中世遺物が出土した。

第２節　１トレンチの調査結果

（洪水層）　トレンチの北東側寄りから検出された。層厚５～15cm、範囲はトレンチ東壁で10ｍ、北壁で16ｍを測る。



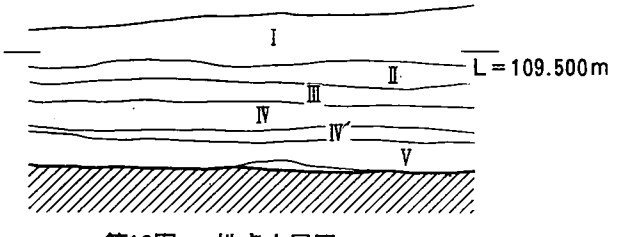
第９図　1Tの土層配置図

（注）　土層図の土色説明で使用した記号については、例文で意味を示す。

① 黄色砂土>灰色土は黄色砂土をベースに灰色土が混入する。

② 黄色砂土～灰色土＋赤褐色鉄分土は、黄色砂土と灰色土の混入度合がほぼ均等で、これに少量の赤褐色鉄分土が混入する。

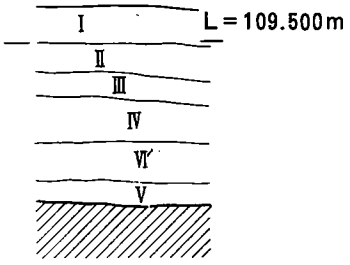
③ 黄色砂土≫灰色土＋赤褐色鉄分土は、黄色砂土をベースに灰色土が混入するが、その割り合いは少ない。これに少量の赤褐色鉄分土が混入する。



第10図　ａ地点土層図

層		土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
洪水層	Ⅳ	黄色砂土>灰色土
	Ⅳ′	黄色砂土～灰色土＋赤褐色鉄分土
地山	Ⅴ	黄色土

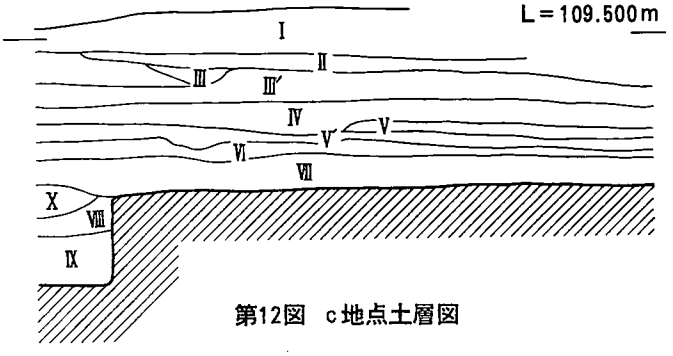
第２表　ａ地点土層観察表



第11図　b地点土層図

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
地山	Ⅳ	灰色土＞赤褐色鉄分土（やや粘着）
	Ⅳ′	灰色土赤褐色鉄分土（粘着）
	Ⅴ	灰色土＞茶褐色土＋赤褐色鉄分土

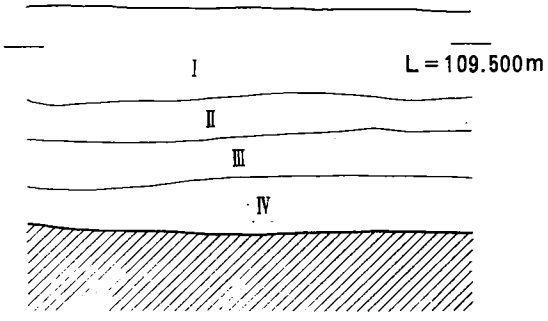
第３表　b地点土層観察表



第12図　c地点土層図

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰色黒土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
	Ⅲ′	灰色土＞赤褐色鉄分土
洪水層	Ⅳ	黄色砂土＞灰色土
	Ⅴ	黄色砂土＞灰色土＋赤褐色鉄分土
	Ⅴ′	黄色砂土》灰色土＋赤褐色鉄分土
地山	Ⅵ	灰色土＞茶褐色土＋赤褐色鉄分土
	Ⅶ	灰（黒）色土
	Ⅷ	灰オリーブ色土～茶色土
	Ⅸ	褐灰色粘土
	Ⅹ	褐灰色土＞茶褐色土

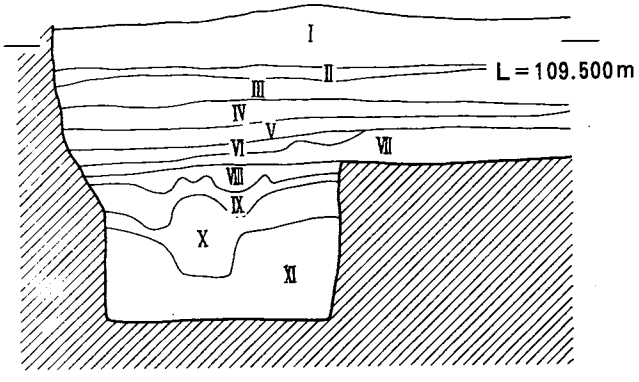
第４表　c地点土層観察表



第13図　d地点土層図

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
地山	Ⅳ	灰色土＞赤褐色鉄分土

第５表　d地点土層観察表



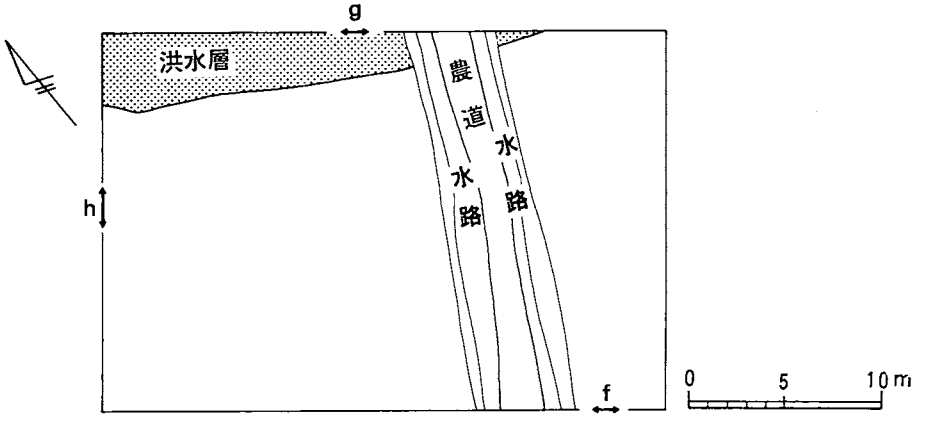
第14図　e地点土層図

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
地山（粘土）	Ⅳ	灰色土＞赤褐色鉄分土
	Ⅴ	黄色土
	Ⅵ	灰（黒）色土
	Ⅶ	灰（黒）色土＞灰黄色砂土
	Ⅷ	灰褐色土＞茶褐色土
	Ⅸ	赤褐色鉄分土＞灰褐色土
	Ⅹ	褐灰色土＞茶褐色土
	Ⅺ	褐灰色土

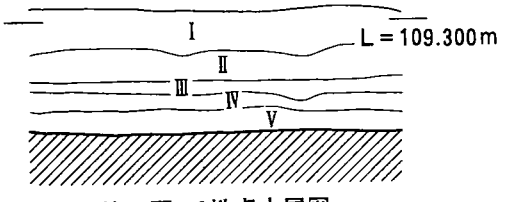
第６表　e地点土層観察表

第３節　２トレンチの調査結果

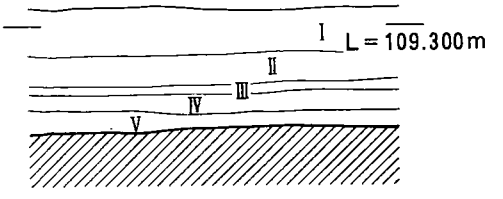
（洪水層）　トレンチの北西側から検出された。範囲はトレンチ西壁で４ｍ、北壁で23mである。２トレンチに限って遺物の出土量は極端に少なかった。



第15図　2Tの土層配置図



第16図　ｆ地点土層図



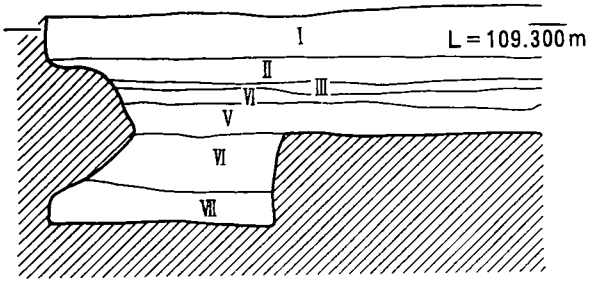
第17図　ｇ地点土層図

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
地山	Ⅳ	灰（黒）色土＞灰黄砂土
	Ⅴ	灰褐色土＞茶褐色土＋赤褐色鉄分土

第７表　ｆ地点土層観察表

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
地山	Ⅳ	黄色土
	Ⅴ	灰（黒）色土＞灰黄砂土

第８表　ｇ地点土層観察表



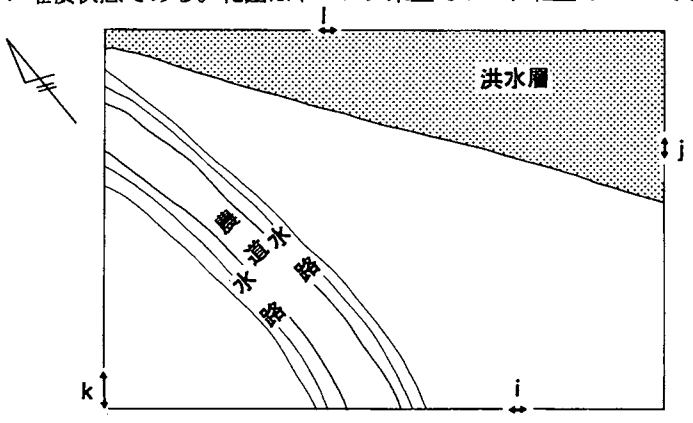
第18図　ｈ地点土層図

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
地山	Ⅳ	黄色土
	Ⅴ	灰（黒）色土＞灰黄砂土
粘土	Ⅵ	灰褐色土＞茶褐色土＋赤褐色鉄分土
	Ⅶ	褐灰色土

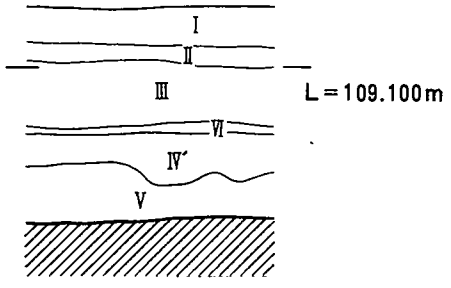
第９表　ｈ地点土層観察表

第４節　３トレンチの調査結果

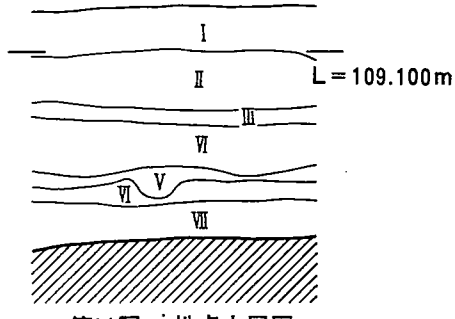
（洪水層）　トレンチの北東側寄りから検出された。層厚は５～20cmで、西側に薄く、東側へ厚い堆積状態である。範囲はトレンチ東壁で９ｍ、北壁で18ｍを測る。



第19図　3Tの土層配置図



第20図　i地点土層図



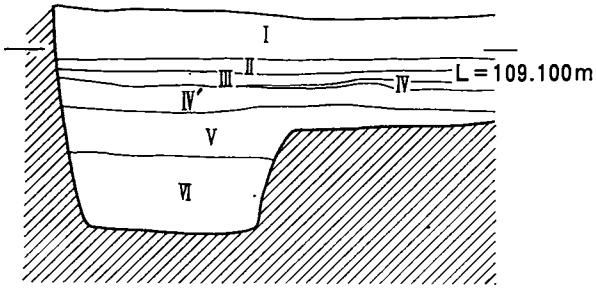
第21図　j地点土層図

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
地山（粘土）	Ⅳ	黄色粘土＞灰褐色土
	Ⅳ′	黄色粘土
	Ⅴ	灰褐色土＞茶褐色土（硬）

第10表　i地点土層観察表

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
洪水層	Ⅳ	黄色砂土＞灰色土
地山（粘土）	Ⅴ	黄色土
	Ⅵ	茶褐色土＞灰色土
	Ⅶ	灰白色土＞褐色土＋赤褐色鉄分土

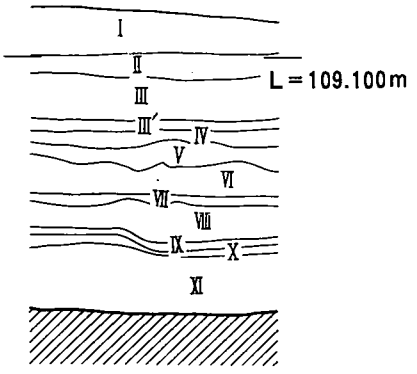
第11表　j地点土層観察表



第22図　k地点土層図

	層	土　　色
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
地山（粘土）	Ⅳ	黄色土～灰色土
	Ⅳ′	黄色土
	Ⅴ	灰色土～黄色土・茶褐色土（土壌粒子）
	Ⅵ	褐灰色土＞茶褐色土

第12表　k地点土層観察表



第23図　Ⅰ地点土層図

	層	土　色
現水層	Ⅰ	灰褐色土（耕作土）
	Ⅱ	灰（白）黒色土
	Ⅲ	灰白色土（床土）
	Ⅲ′	灰白色土＞黄色土（床土）
洪水層	Ⅳ	黄色砂土＞灰色土
地山（粘土）	Ⅴ	黄色土
	Ⅵ	赤褐色鉄分土＞褐灰色土
	Ⅶ	茶褐色土＞灰色土
	Ⅷ	灰白色土＞褐色土＋赤褐色鉄分土
	Ⅸ	Ⅷ層土にオレンジ色土混入
	Ⅹ	褐灰色土～茶褐色土
	Ⅺ	褐灰色土

第13表　Ⅰ地点土層観察表

第５節　４トレンチの調査結果

（洪 水 層）　厚さ約20cmでトレンチ全体に堆積している。

（埋没水田）　厚さ20～25cm程の水田層でトレンチ内から合計11枚の短冊型をした水田区割りが検出された。内、１枚分については完全な形で、長軸15m、短軸８ｍを測り、畦畔の方位は長軸でほぼ南北方向にあり、短軸で東西方向を示した。畦畔の幅は東西方向の短軸で 0.6～1.1ｍと幅広く、南北方向の長軸で 0.3～ 0.4mを測った。東西方向の畦畔については、トレンチ南側のものが幅 1.1mと特に大きく、主たる畦道として利用されていたものと思われる。

第６節　５トレンチの調査結果

（洪 水 層）　厚さ約20mでトレンチ全体に堆積している。

（埋没水田）　厚さ20cm程の水田層で、トレンチ内から合計10枚の短冊型をした４トレンチと同様な造りの水田区割りが検出された。５トレンチも１枚分が完全な形で検出されたが、やや歪な形状で、短軸は同じ７ｍを測るものの、長軸が東側で15m、西側で16.5mと差異があった。畦畔は、トレンチの中央で東西と南北に交差するものが、幅 0.6～ 0.7mと幅広であった。他の畦畔は 0.3～0.4 mで４トレンチと同じ大きさである。

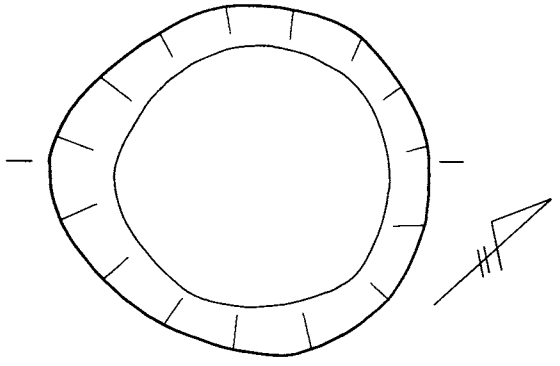
第７節　土　　坑

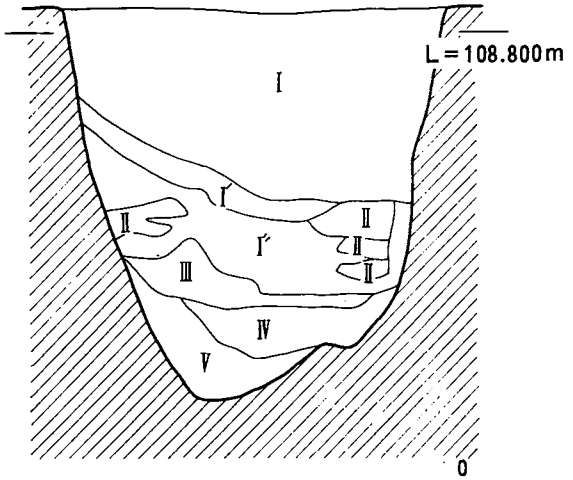
４トレンチからは洪水層を切り込む10基の土坑が検出された。埋土は灰色土で、検出状況から同時期のものと考えられる。土坑の年代はＳＥ０１とＳＥ０７から近世の陶器(169) と雑器(177) が出土しており、江戸時代のものであることが判る。性格についてはＳＥ０３から鉄釘の小破片(171) が出土した事と、調査区に隣接して近世墓地がある事などから、墓坑と推察される。大きさは直径１ｍ前後で、深さは0.43～ 1.1mを測る。

5トレンチでは北西隅から、2基の土坑が検出された。ＳＥ１１の大きさは直径1.01mで深さは 1.1mを測る。埋土の上位部分から青白磁の碗片（250)が出土した。

土坑No.	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
ＳＥ０１	1.20	0.88	0.59	青磁(168) 近世染付(169)	東側の一部が崩壊
ＳＥ０２	0.68	―――	0.85		平面プランはほぼ円形
ＳＥ０３	0.57	0.48	0.43		
ＳＥ０４	0.66	0.60	0.82	土師器(170) 鉄器(171) 須恵器(172 173)	
ＳＥ０５	1.05	―――	1.13	須恵器(174) 青白磁(175)	平面プランはほぼ円形
ＳＥ０６	1.08	0.93	0.95	管状土錘(176)	
ＳＥ０７	1.16	1.09	1.03	近世雑器(177)	
ＳＥ０８	1.17	1.08	0.95	鉄器(178) 近世陶器(179)	
ＳＥ０９	1.10	0.94	0.97		
ＳＥ１０	1.18	1.12	1.21		
ＳＥ１１	1.01	1.20	1.10	青白磁(250)	東側は路線外
ＳＥ１２	1.85	1.70	1.39		平面プランはやや歪

第14表　検出土坑一覧表



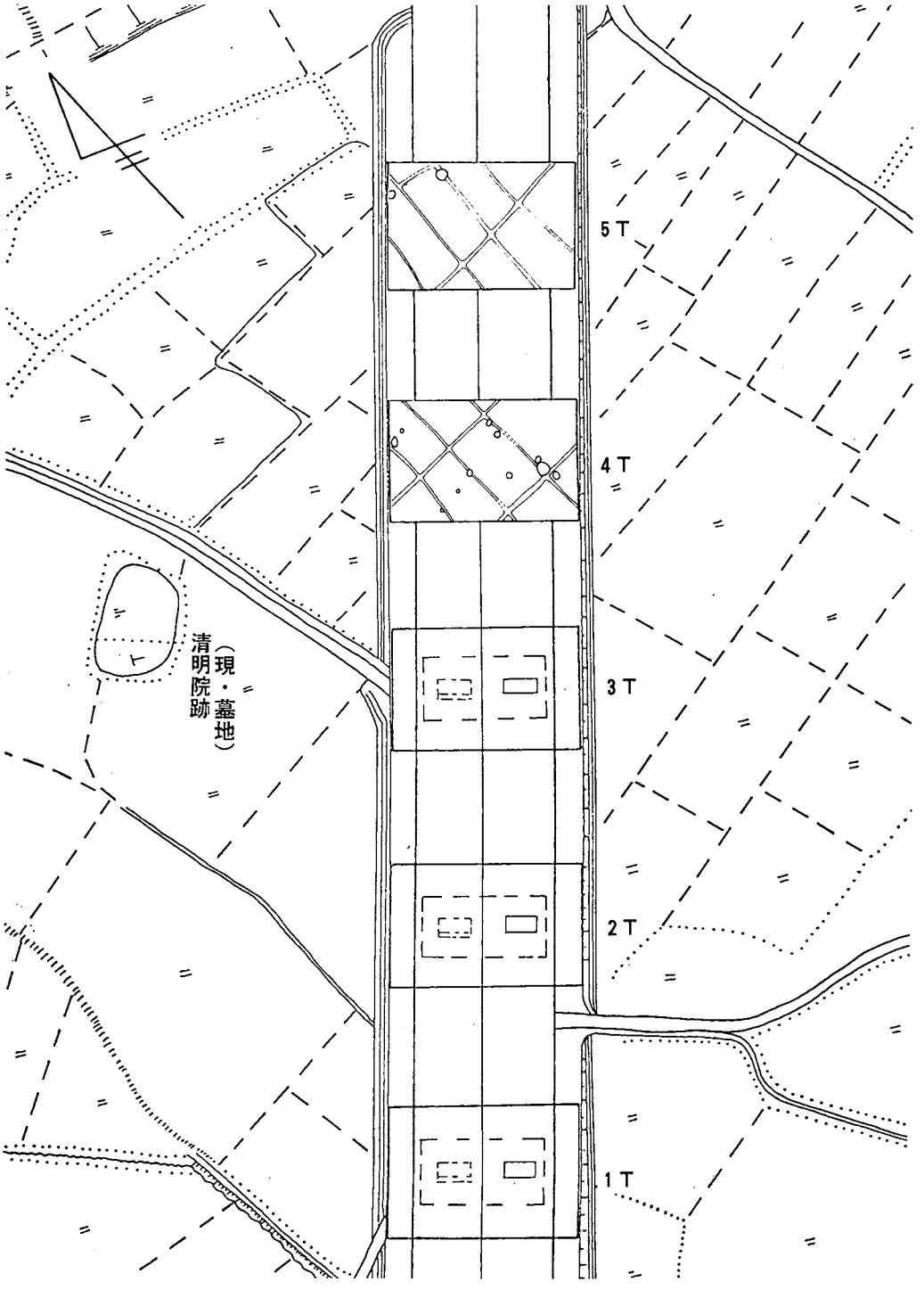


層	土色
Ⅰ	灰色土
Ⅰ′	～黄褐色土
Ⅰ″	～鉄分土（斑点・ブロック状）
Ⅱ	鉄分土（塊）
Ⅲ	暗黄褐色土～鉄分土
Ⅳ	赤褐色土
Ⅴ	にぶい黄褐色土～灰色土（瓦層）

第15表 ＳＥ０６土層観察表

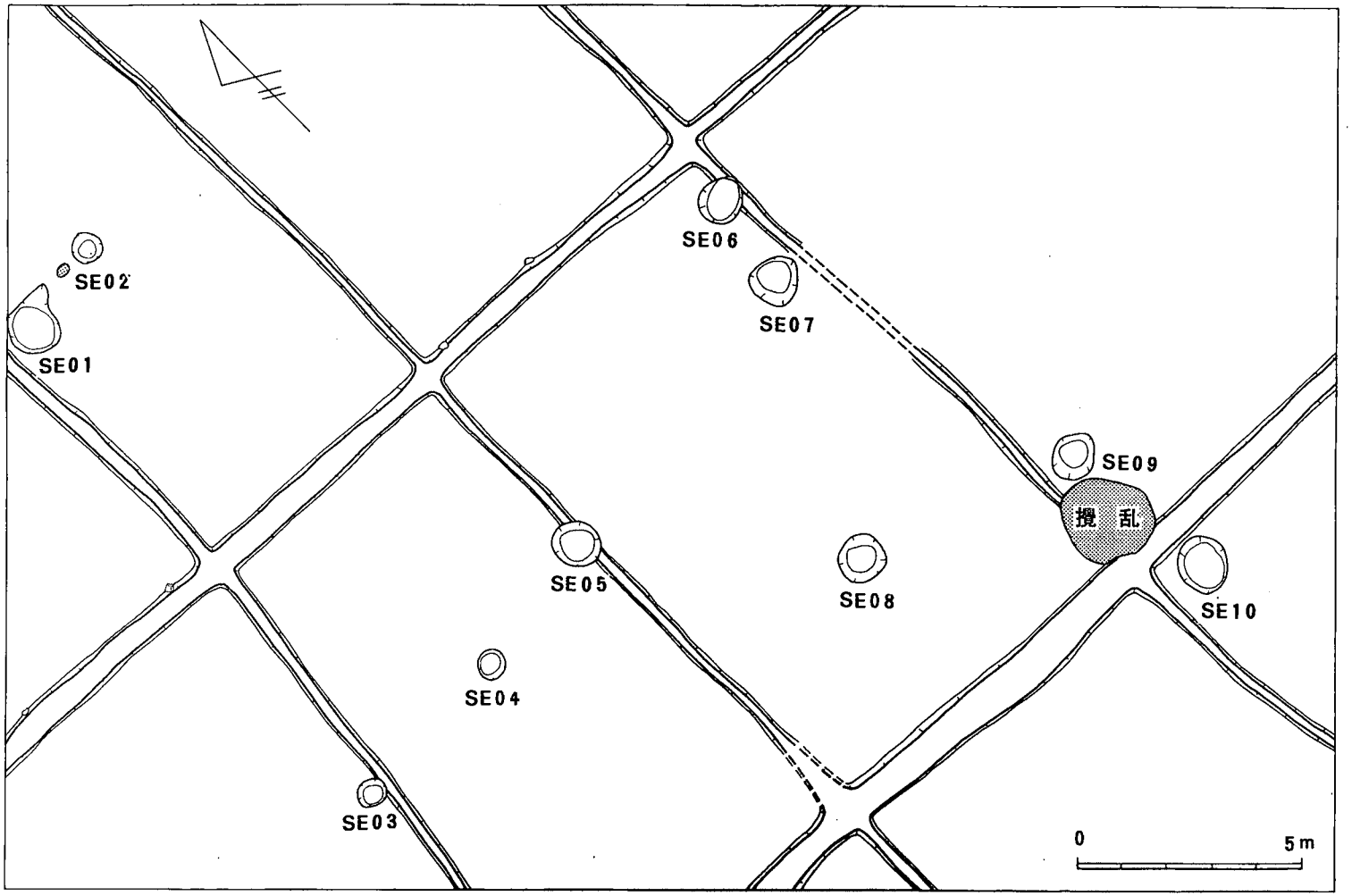
第24図 ＳＥ０６実測図

0　1m

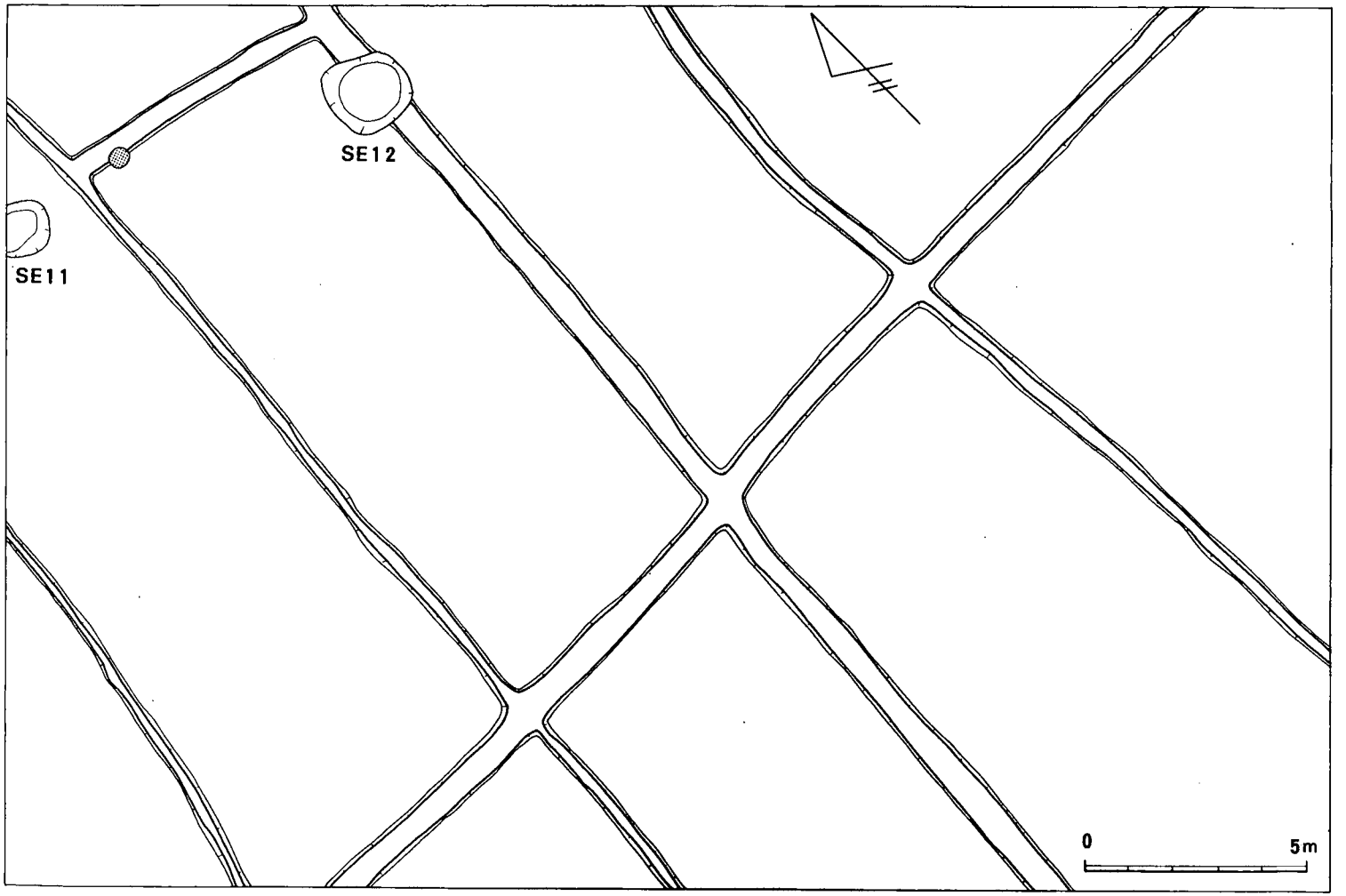


第25図　4・5T検出の埋没水田配置図

0　50m



第26図　4T検出の埋没水田実測図



第27図　5T検出の埋没水田実測図

第8節　4・5トレンチの土層断面

Ⅰ～Ⅲ層までは現水田を構成する土層で、層厚30～40cmを測る。多くの近世遺物や中世遺物が出土した。Ⅰ層土は層厚25cmの灰黒色土で、今日の耕作面である。Ⅱ層土は灰（白）黒色土で、現水田の下位層にあたる。やや締まった土層で、層厚5～10cmを測り、砂粒の混入が目立つ。Ⅲ層土は硬く引き締まった灰白色土で、現水田の床土である。層厚5～10cmを測る。

Ⅳ層土は黄色砂土と灰褐色土の混入土で、ウズラ卵大や小豆大の小礫が多量に混じる。層厚20cmを測り、多くの中世遺物が出土した。

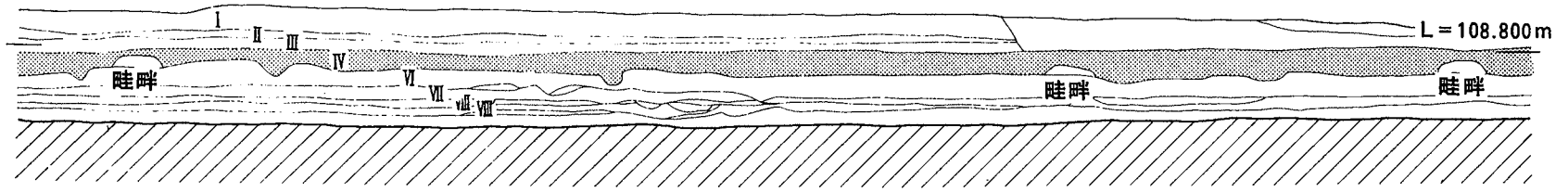
Ⅴ～Ⅶ層は埋没水田を構成する土層で、層厚25～30cmを測る。中世遺物の包含層である。Ⅴ層土は埋没水田の上位層で、灰色土に茶褐色土の土壌粒子が混入しており、層厚20cmを測る。Ⅵ層土は埋没水田の下位層で、Ⅴ層土に灰黒色土や多量の赤褐色鉄分土が混じる。非常な硬層で、層厚は5cmを測る。Ⅶ層土は埋没水田の床土で、褐色土にオレンジ色土やⅥ層土の一部が混入する。硬層で層厚5cmを測る。

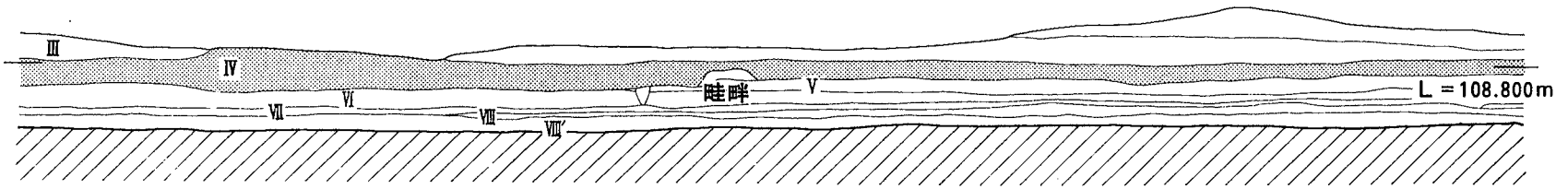
Ⅷ層土は褐色土に茶褐色土の土壌粒子が混入する。縄文後晩期の遺物包含層である。層厚5～10cmを測る。この土層を炉跡が切り込んでいる。

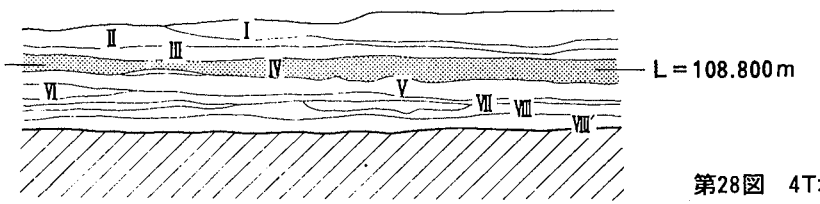
Ⅷ'層土はⅧ層土と比較して土壌が引き締まり、茶褐色土の土壌粒子の混入が目立つ。Ⅷ層土と同じ縄文後晩期の遺物包含層で、層厚20cmを測る。

	層	土　　色	
現水田	Ⅰ	灰黒色土（耕作土）	近世遺物包含層
	Ⅱ	灰（白）黒色土	
	Ⅲ	灰白色土（床土）	中世遺物包含層
洪水層	Ⅳ	黄色砂土＞灰褐色土	
埋没水田	Ⅴ	灰色土＞茶褐色土（土壌粒子）	
	Ⅵ	Ⅴ層土に灰黒色土＋赤褐色鉄分土	
	Ⅶ	褐色土＞オレンジ土＋赤褐色鉄分土（床土）	
粘土	Ⅷ	褐色土＞茶褐色土（土壌粒子）	縄文後期・晩期の遺物包含層
	Ⅷ'	褐色土～茶褐色土（土壌粒子）	

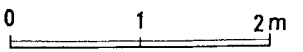
第16表　4・5T基準土層観察表

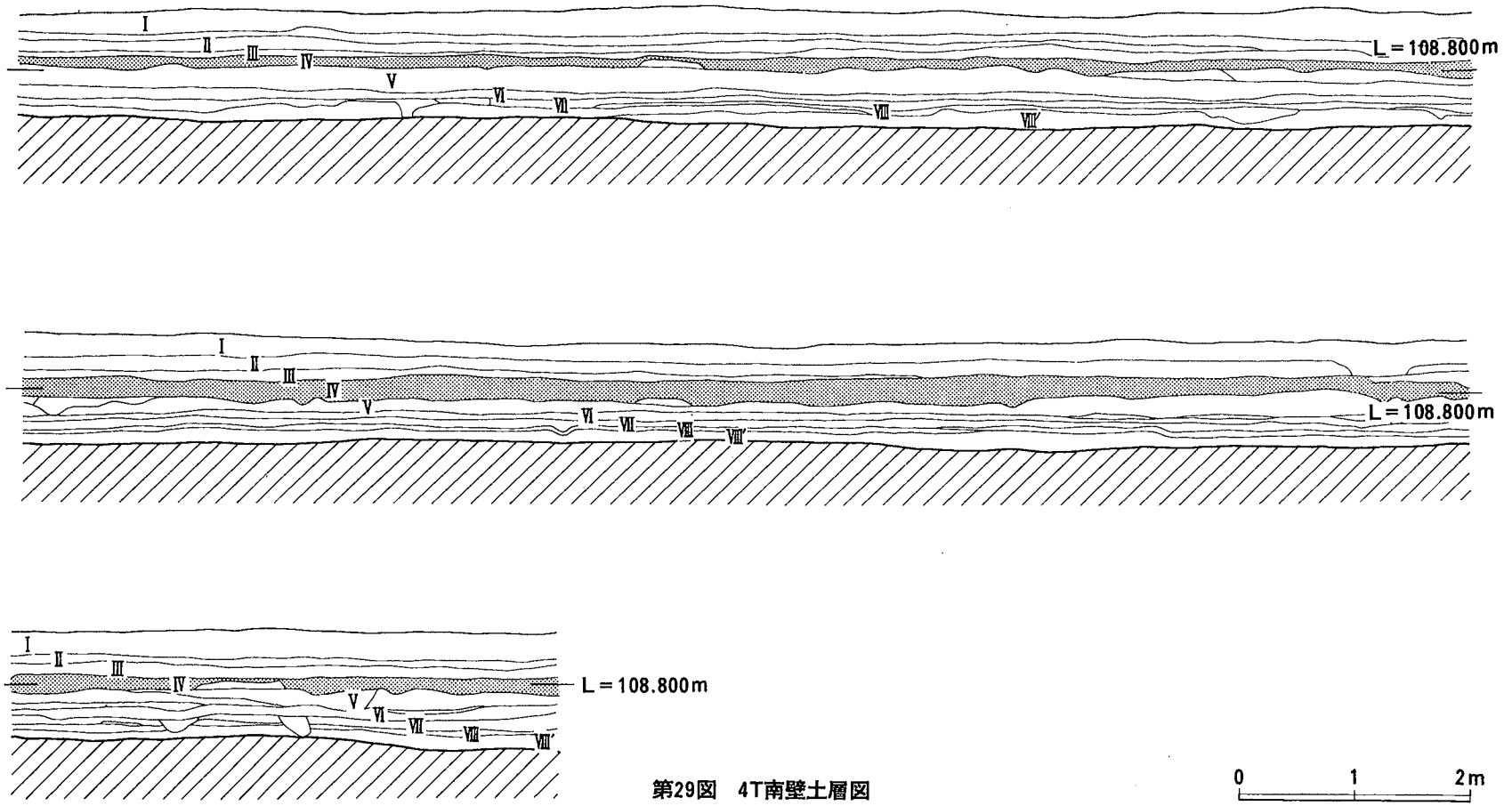




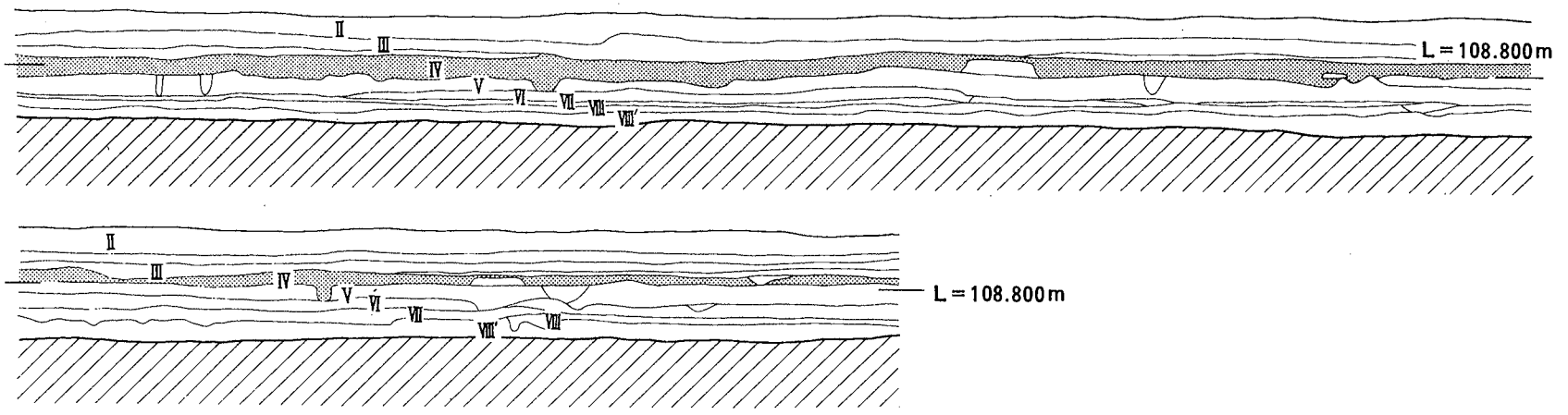


第28図　4T北壁土層図

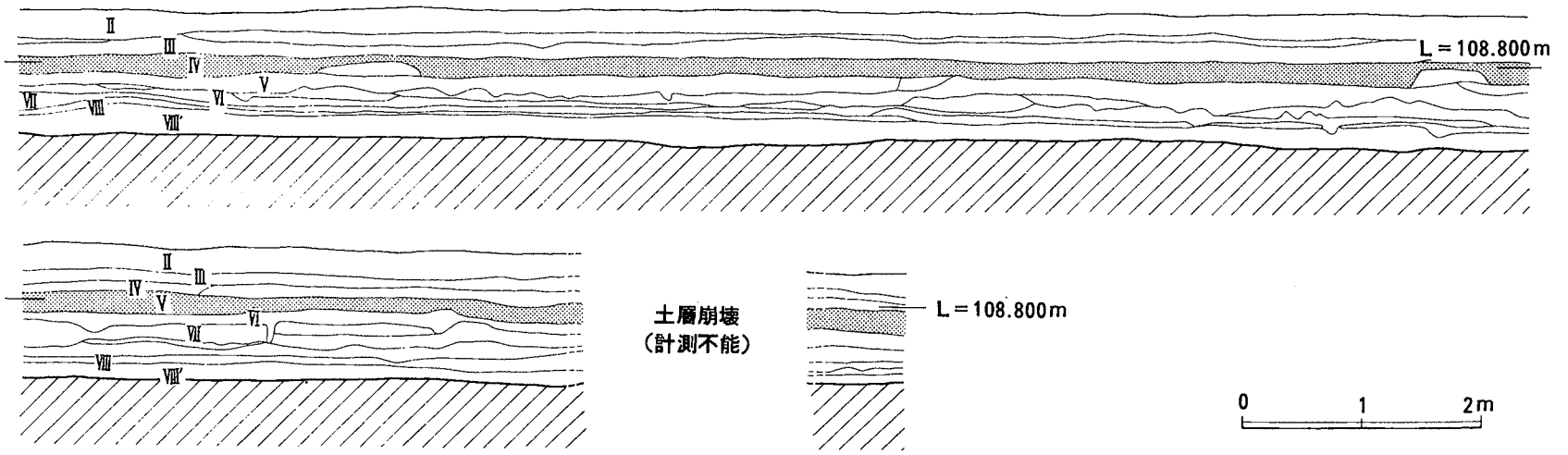




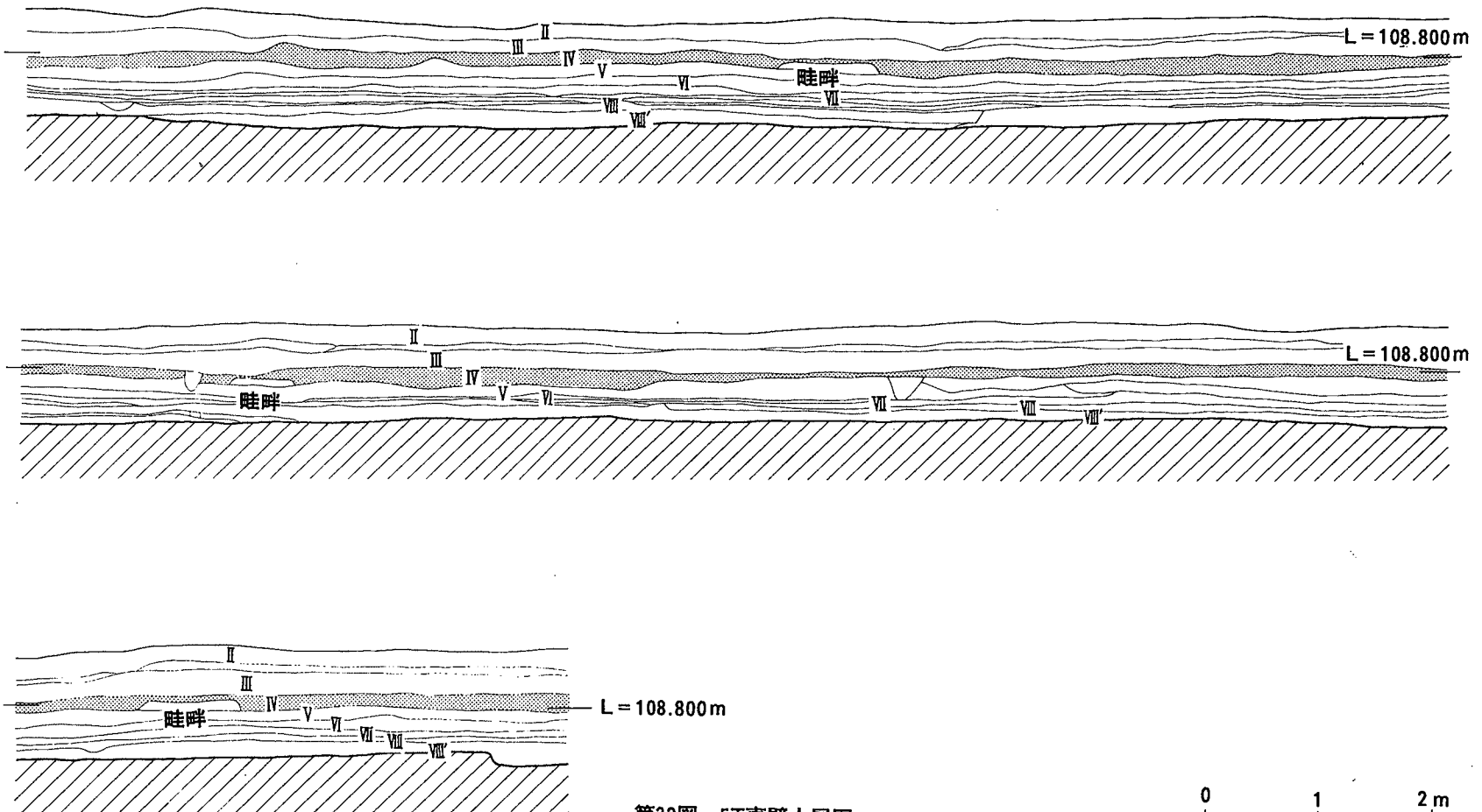
第29図　4T南壁土層図



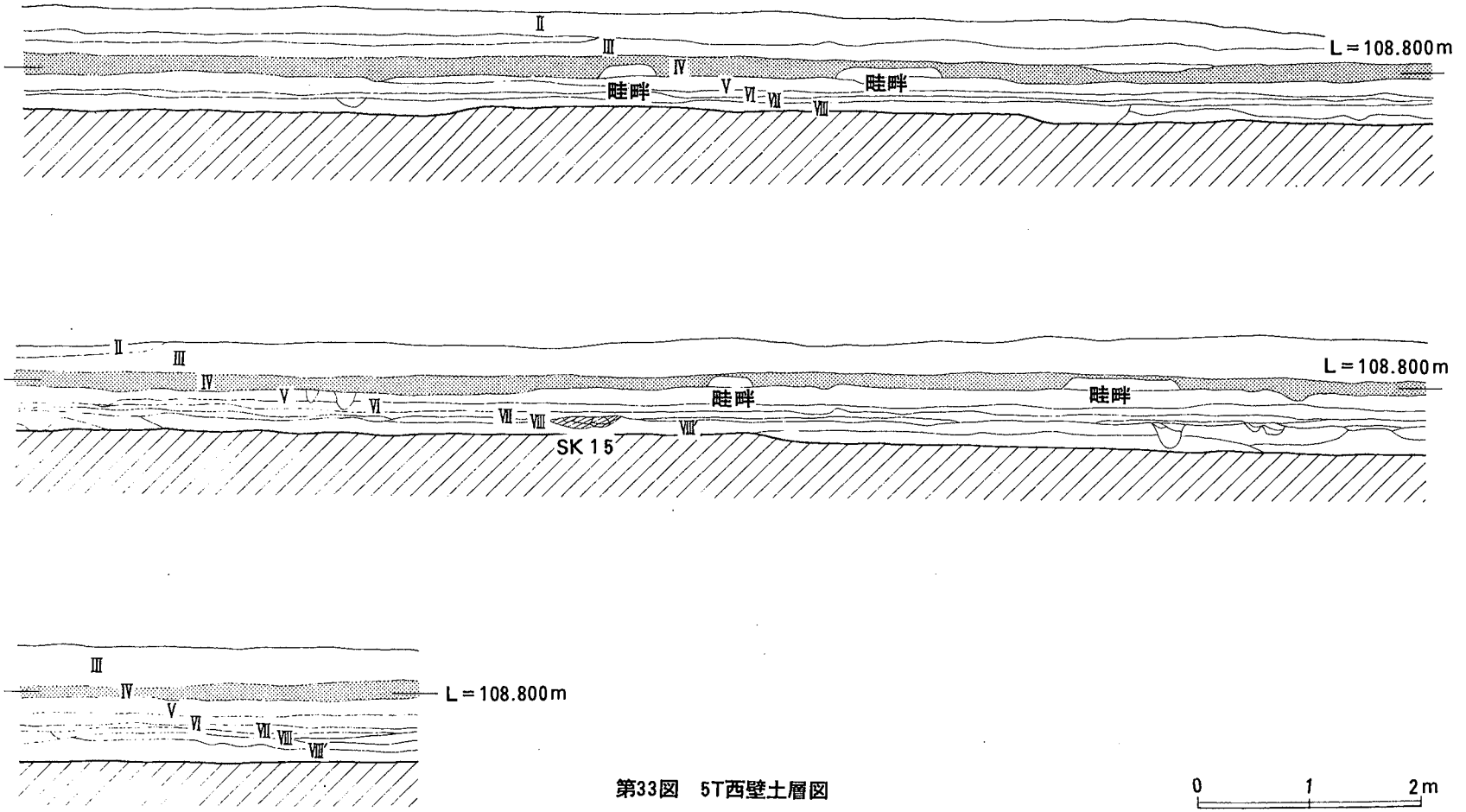
第30図　4T東壁土層図



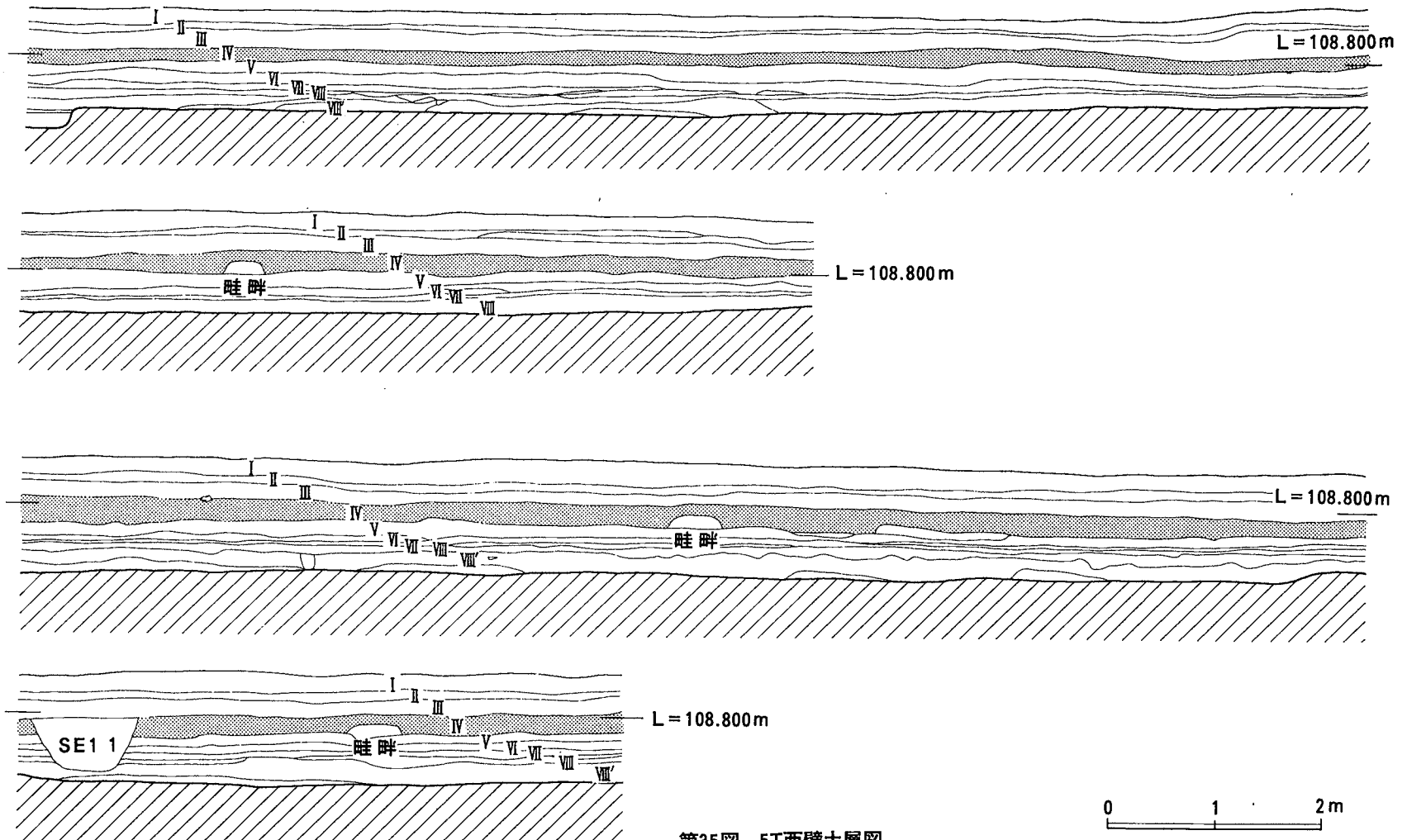
第31図　4T西壁土層図



第32図　5T東壁土層図



第33図　5T西壁土層図



第35図　5T西壁土層図

第９節　炉跡について

Ⅷ層出土の縄文式土器や石斧などの石器を取り上げた段階で、15基の炉跡を検出した。炉跡は平面プランにより溝状を呈するものと長円形を呈するものとに大別されるが、唯一、両方のプランを兼ね備えるものがあった。

〔溝状プランの炉跡〕

ＳＫ０１・ＳＫ０７・ＳＫ１０の３基であるが、ＳＫ１０は一部が調査外で、完掘が出来なかった。

ＳＫ０１は長軸 249cm・短軸44cm・深さ11cmで、南北両壁の北側寄りが熱変し、紫色化している。炉跡の中央部は近世墓坑によって切られている。ＳＫ０７は長軸 225cm・短軸15～40cm・深さ25cmで、炉跡周辺の東端に硬化した焼土面の広がりがあり、西端からは馬蹄型遺構が検出された。

〔長円形プラン（変形のものを含む）の炉跡〕

ＳＫ０２・ＳＫ０５・ＳＫ０８・ＳＫ０９・ＳＫ１１・ＳＫ１２・ＳＫ１３・ＳＫ１４の８基である。

ＳＫ０２は西端がやや歪で、東側寄りは、後世、ほとんど削平されている。長軸 138cm・短軸47cm・深さ４cmを測り、炉跡内から焼土層が検出された。底部の東側寄りは熱変し、紫色化している。炉跡周辺の東側から北側にかけて、木炭層の広がりがある。

ＳＫ０５は長軸 118cm・短軸55～79cmで、東西両側に大小２つの掘り込みがある。東側は深さ79cmで、西側は８cmを測る。

ＳＫ０８は長軸 130cm・短軸50cm・深さ12cmを測り、東西両壁は熱変し、紫色化している。炉跡周辺の南端に硬化した焼土面の広がりがある。

ＳＫ０９は長軸 150cm・短軸54cmで、南北両側の底部はやや浅く、中央部が最深で20cmを測る。炉跡内の全面に木炭の小片が散らばる。南側寄りの壁面は熱変し、紫色化している。

ＳＫ１１は長軸85cm・短軸20～30cm・深さ26cmを測る。底部と埋土の中位に、熱変し紫色化した粘土層があり、間に焼土が間層として入る。

ＳＫ１２は長軸97cm・短軸44cm・深さ13cmを測り、炉跡内から木炭層と焼土層が検出された。

ＳＫ１３は、東側寄りで一部削平されている。復元長軸 106cm・短軸39cm・深さ19cmを測る。北側の壁面は熱変し、紫色化している。

ＳＫ１４は長軸75cm・短軸67cm・深さ14cmを測り、炉跡内の３ケ所から、木炭の塊が出土している。

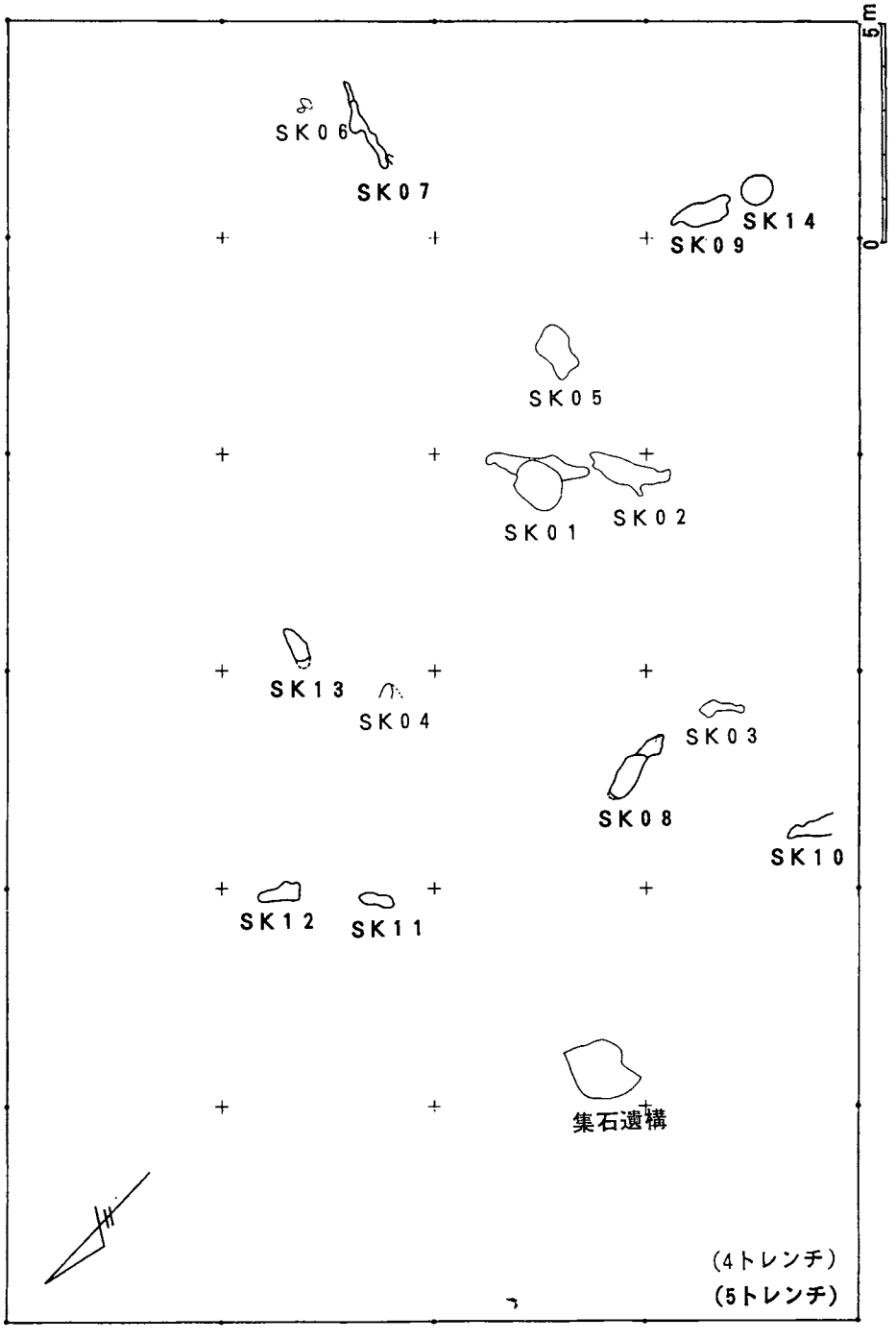
〔溝状プランと楕円形プランを兼ね備える炉跡〕

ＳＫ０３で、北東側が楕円形プランで、南西側が溝状のプランを呈する。楕円形プランは長

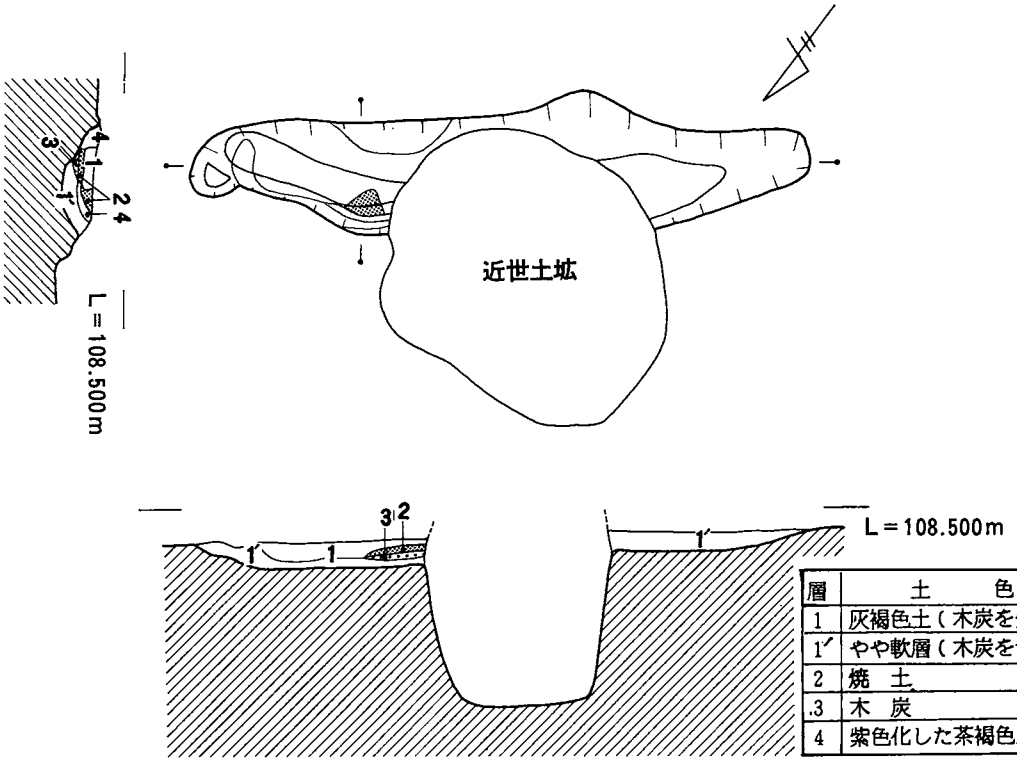
さ34cm・短軸19～26cm・深さ84cmで、埋土の下位から焼土層が検出された。溝状プランは長さ73cm・短軸11～22cm・深さ23cmである。

〔後世の削平により平面プランが不明なもの〕

ＳＫ０４・ＳＫ０６で、両炉跡からは木炭層が検出された。ＳＫ０６については炉跡周辺の北端にＬ型を呈する木炭層の広がりがある。



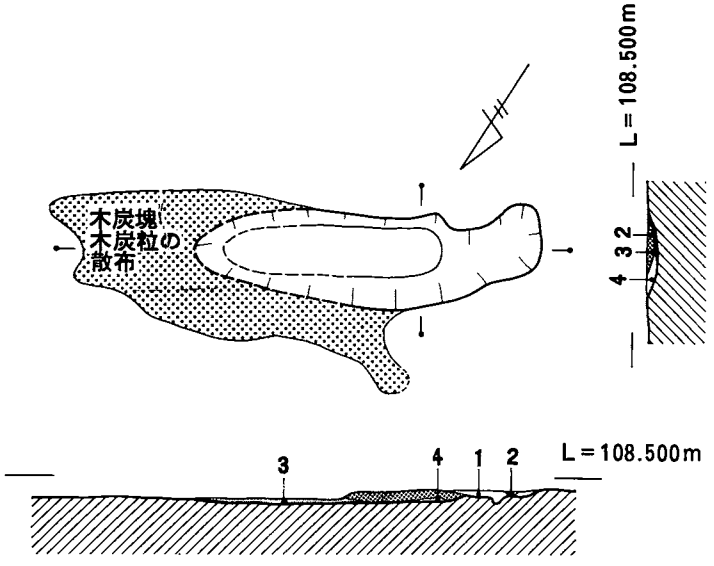
第36図　4・5T検出の炉跡及び集石遺構配置図



第37図　ＳＫ０１実測図

層	土　　色
1	灰褐色土（木炭を少し含む）
1′	やや軟層（木炭を含む）
2	焼　土
3	木　炭
4	紫色化した茶褐色土

第17表　ＳＫ０１土層観察表

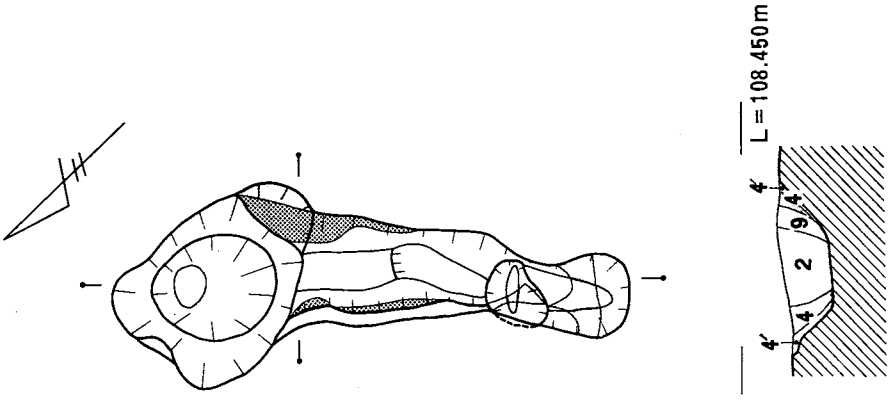


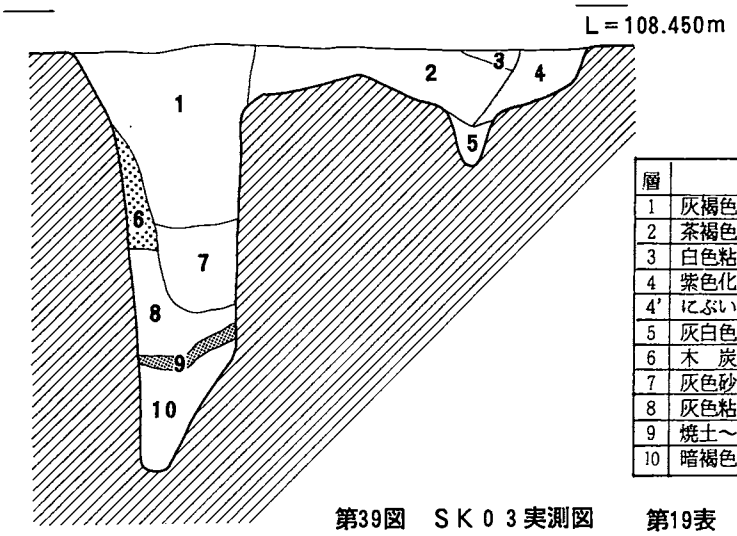
第38図　ＳＫ０２実測図

層	土　　色
1	焼土～紫色化した茶褐色土
2	焼土（～少　木炭）
3	紫色化した茶褐色土～木炭
4	黄褐色土～木炭

第18表　ＳＫ０２土層観察表

0　1m

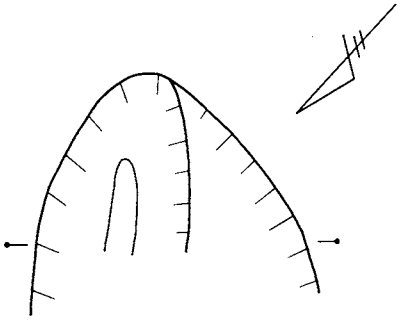


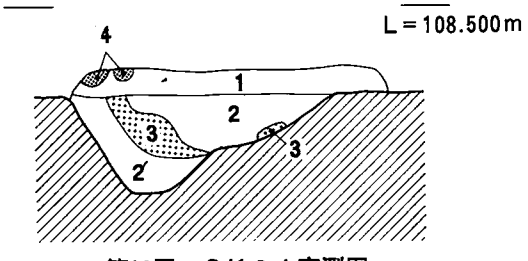


第39図　ＳＫ０３実測図

層	土　　色
1	灰褐色土
2	茶褐色土（～焼土・木炭）
3	白色粘土
4	紫色化した茶褐色土
4'	にぶい赤色砂土（熱変した地山）
5	灰白色砂土
6	木　炭
7	灰色砂土
8	灰色粘土
9	焼土～炭化物
10	暗褐色土～炭化物

第19表　ＳＫ０３土層観察表

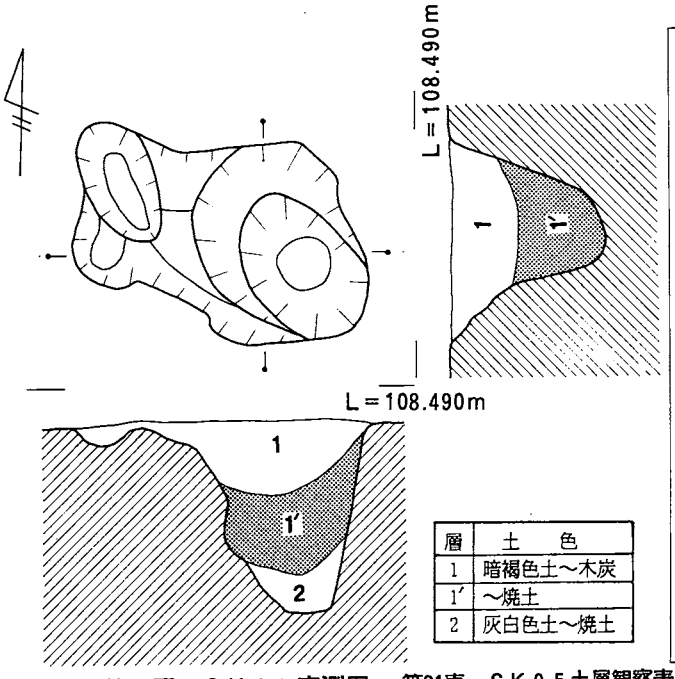




第40図　ＳＫ０４実測図

層	土　　色
1	Ⅷ層土（縄文遺物包含層）
2	暗褐色土
2'	（～焼土）
3	木　炭
4	焼　土

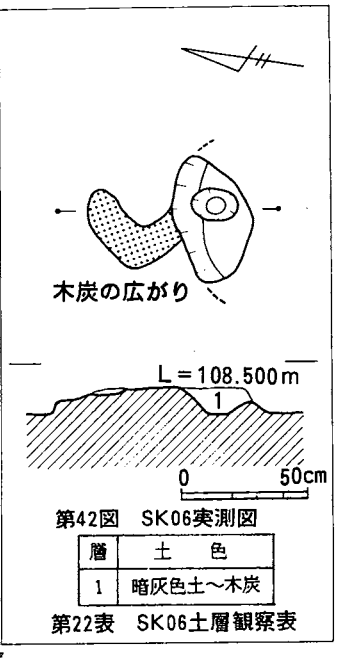
第20表　ＳＫ０４土層観察表



第41図　ＳＫ０５実測図

層	土　色
1	暗褐色土～木炭
1′	～焼土
2	灰白色土～焼土

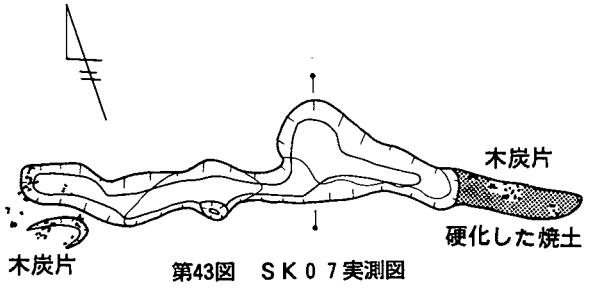
第21表　ＳＫ０５土層観察表



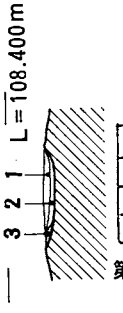
第42図　SK06実測図

層	土　色
1	暗灰色土～木炭

第22表　SK06土層観察表

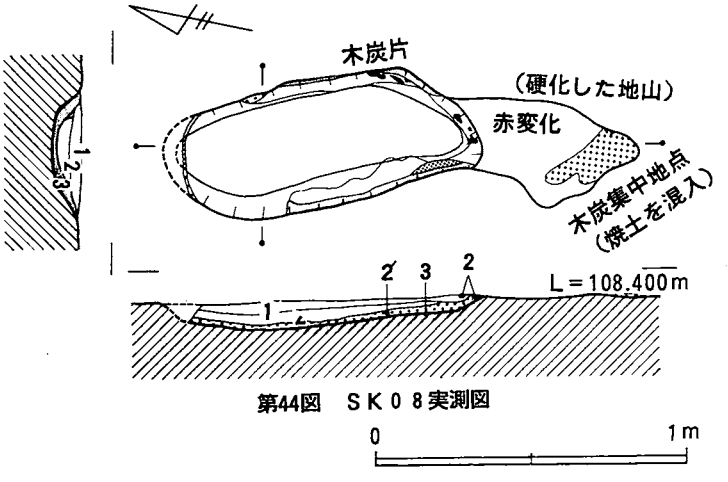


第43図　ＳＫ０７実測図



層	土　色
1	灰色土～㊦木炭
2	明褐色土～㊧焼土・木炭
3	焼　土

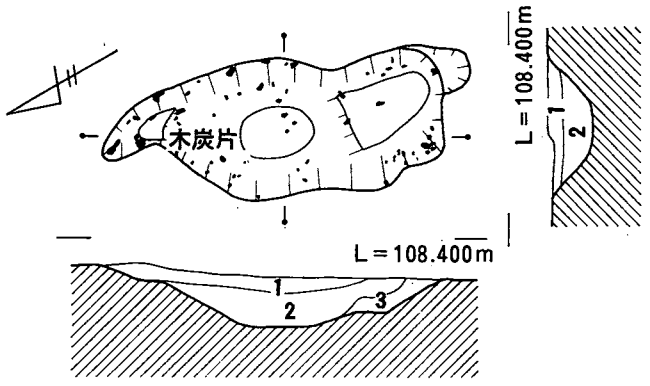
第23表　ＳＫ０７土層観察表



第44図　ＳＫ０８実測図

層	土　色
1	明褐色土～㊧木炭
2	褐色土（～鉄分土・㊧木炭）
2′	～㊦　木炭
3	紫色化した茶褐色土

第24表　ＳＫ０８土層観察表

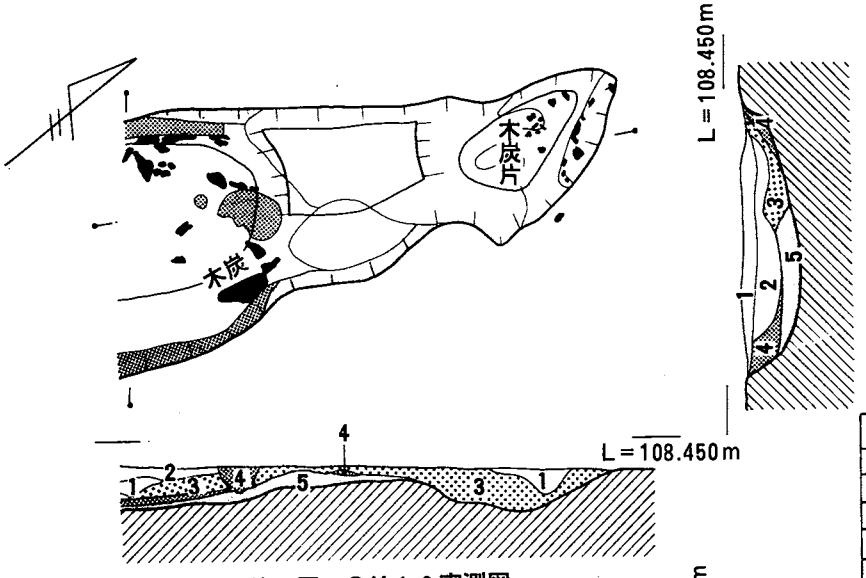


第45図　ＳＫ０９実測図

層	土　　色
1	明褐色土～木炭
2	暗褐色土～木炭
3	紫色化した茶褐色土～㊥焼土・㊦木炭

0　　1m

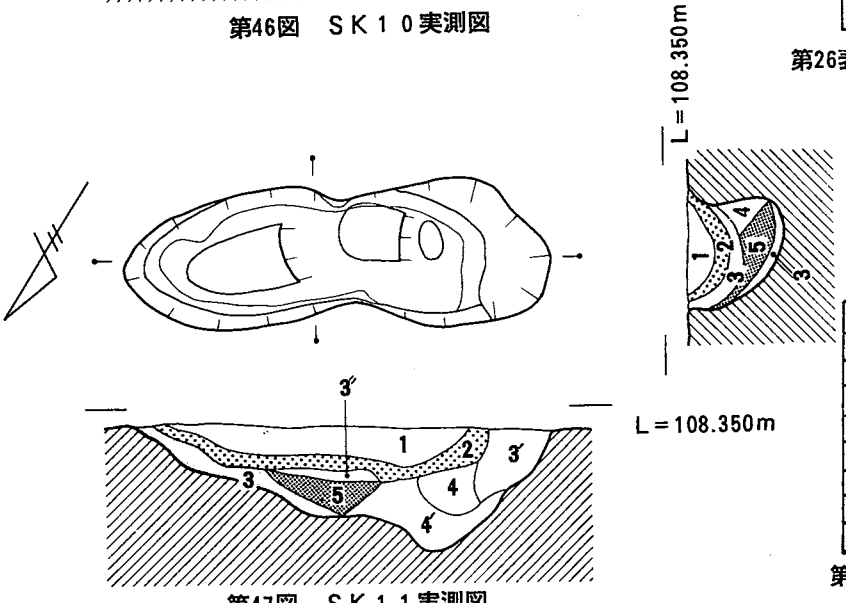
第25表　ＳＫ０９土層観察表



第46図　ＳＫ１０実測図

層	土　　色
1	明褐色土
2	黄褐色土
3	木　炭
4	焼　土
5	紫色化した茶褐色土

第26表　ＳＫ１０土層観察表

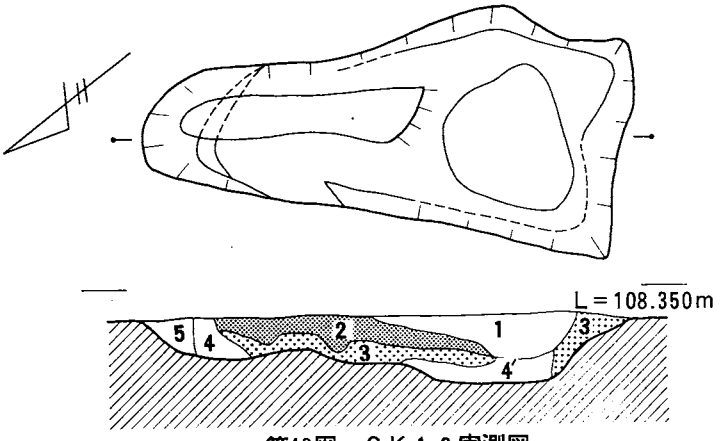


第47図　ＳＫ１１実測図

層	土　　色
1	黄褐色土～㊦木炭
2	木　炭
3	紫色化した茶褐色土～焼土
3′	～㊥　焼土・木炭
3″	～㊦　焼　土
4	灰褐色土
4′	～　木　炭
5	焼　土

第27表　ＳＫ１１土層観察表

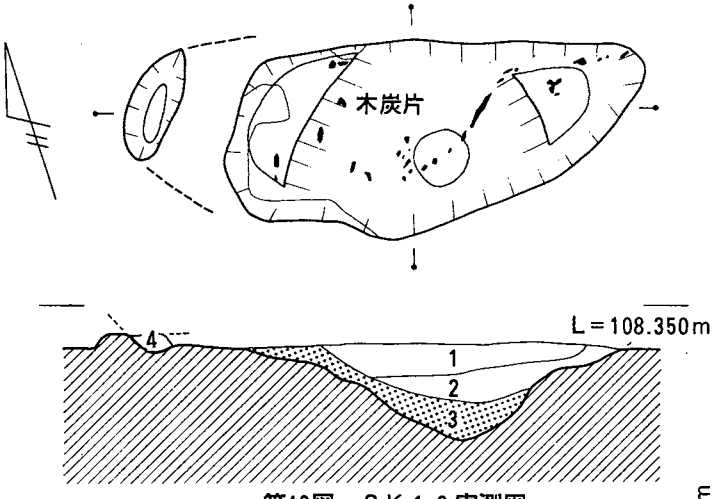
0　　5.0cm



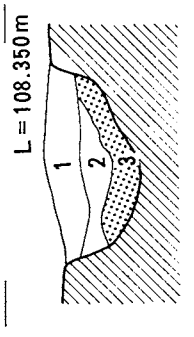
第48図　ＳＫ１２実測図

層	土　　色
1	黄褐色土～㊀木炭
2	焼　土
3	木　炭
4	灰褐色土（硬層）
4′	灰褐色土～焼土・木炭（やや軟層）
5	紫色化した茶褐色土

第28表　ＳＫ１２土層観察表

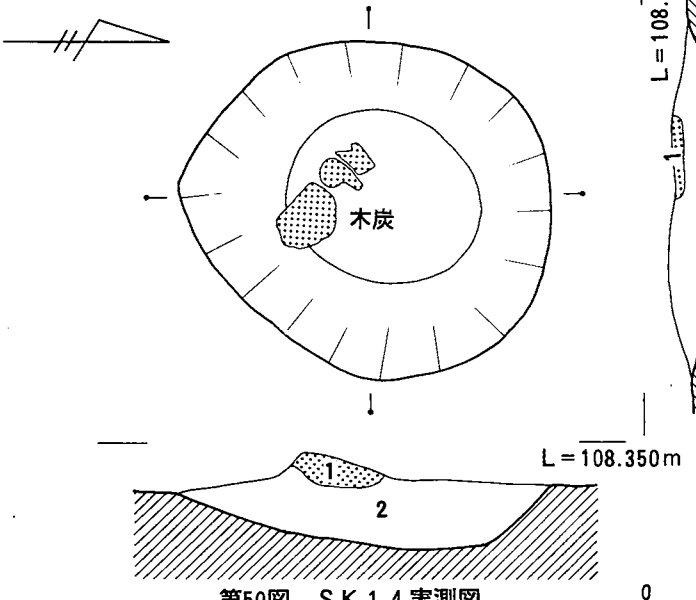


第49図　ＳＫ１３実測図

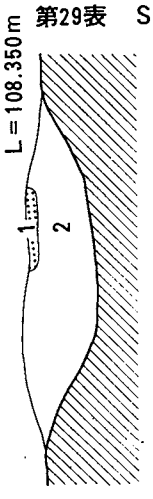


層	土　　色
1	黄褐色土～木炭
2	明褐色土～木炭
3	木炭～焼土・茶褐色土
4	紫色化した茶褐色土～木炭

第29表　ＳＫ１３土層観察表



第50図　ＳＫ１４実測図



層	土　　色
1	木　炭
2	暗褐色土～木炭

第30表　ＳＫ１４土層観察表

0　50cm

炉跡No.	形　　状	規　　模	主　軸	木炭と焼土の混入	備　　考
SK01 (4T)	溝状。北東側寄りが最深で、底面は南西側の端部へ向かい、漸次浅くなる。	長軸 249cm・短軸44cm・深さ11cm (残存部の最大幅)	N53° E	○	南北両壁の北東寄りは熱変し、紫色化。 近世墓坑によって中央部がカットされている。
SK02 (4T)	長円形。西側はやや歪。 東側寄りは後世に削平されて、極くわずかしか残存していない。	長軸 138cm・短軸47cm・深さ4cm (西側寄り2cm未満)	N81° E	○	炉跡周辺の東から北側へかけて木炭の小塊と粒が散布する。 東側へ→長さ62cm×幅50cm 北側へ→長さ85cm×幅22cm 炉跡内に木炭粒を含む焼土あり。(厚さ4cm・長さ48cm) 東側寄りの底部は熱変し、紫色化。
SK03 (4T)	北東側がやや楕円形で、南西側が溝状のプラン。 北東側の掘り方は深い柱穴状となる。(北東側の壁は内側へやや屈曲)	やや楕円形のプラン (長軸34cm・短軸19～26cm・深さ84cm) 溝状のプラン (長軸73cm・短軸11～22cm・深さ23cm)	N40° E	○	柱穴状の掘り込みの下位に焼土層がある。(厚さ4cm)
SK04 (4T)	平面プランは不明。 極一部の残存。	残存長軸50cm 残存短軸37cm	――	○	底部から壁面にかけて、厚さ8cmの木炭層。
SK05 (4T)	やや長円形。東西両側に大小2っの掘り込み。東側が大きく深い。壁の立ち上がりは東側がほぼ垂直に近く、西側は緩傾斜で、やや凸凹の状態。	長軸 118cm・短軸55～79cm・最深79cm 東側の掘り込み：長軸61cm・短軸41cm 深さ79cm 西側の掘り込み：長軸52cm・短軸27cm 深さ8cm	N68° W	○	――――
SK06 (4T)	平面プラン不明。 極く一部の残存。	残存長軸25cm・残存短軸15cm 深さ5cm	――	木炭のみ	残存の掘り込み部分には、木炭層が堆積している。 炉跡周辺の北端に木炭がL型に広がる(縦軸18cm・横軸13cm・幅7cm)
SK07 (5T)	溝状。中途で最大幅を呈する。	長軸 225cm・短軸15～40cm・深さ5cm	N83° W	○	炉跡周辺の東端に硬化した焼土面(長さ50cm・幅12cm)。 西端に馬蹄形遺構あり。(13×24cm)
SK08 (5T)	長円形。	長軸 130cm(先端部を推定復元) 短軸 50cm・深さ12cm	N36° E	○	東西両壁は熱変し、粘土が紫色化。 炉跡周辺の南端に硬化した焼土面。 (南端寄りは木炭混入。長さ65cm・幅31～43cm)
SK09 (5T)	長円形(南北両端はやや歪)。南北両側の底部は浅く、中央部が最深となる。	長軸 150cm・短軸54cm 深さ 20cm(中央部)・13cm(南側) 6cm(北　側)	N87° E	○	全面に木炭小片が散らばる。 南側寄りの壁面は熱変し、紫色化。
SK10 (5T)	溝状。南側寄りは調査区外。底部は多少起伏している。	検出部分の長軸 110cm 短軸 49cm(最大幅) 深さ 13cm	N30° E	○	北側よりの掘り込みには木炭層が堆積。 南壁寄りの東西両壁に焼土層。
SK11 (5T)	長円形(中央部はややくびれる)。 南側寄りに最深。	長軸85cm 短軸30cm(西側寄り) 20cm(くびれ部分) 27cm(東側寄り)	N57° E	○	底部と埋土の中位に熱変し紫色化した粘土層があり、厚さ7cmの焼土が間層となっている。 埋土の2層は厚さ3cmの木炭層。
SK12 (5T)	長円形の変形(南端部分は方形に近い)。 南側寄りに最深。	長軸97cm・短軸44cm(最大幅) 深さ13cm	N36° E	○	木炭層(厚さ4cm)の上位に焼土層(厚さ7cm)が堆積。
SK13 (5T)	やや長円形 東側寄りで一部カットされている。西側寄りに最深。	復元長軸 106cm・短軸39cm・深さ19cm	N74° W	木炭のみ	北側の壁面は熱変し、紫色化。
SK14 (5T)	やや楕円形	長軸75cm・短軸67cm・深さ14cm	N6° E	木炭のみ	長さ13cm・幅10cm・厚さ3cmの木炭の塊と、これより、やや小規模の木炭の塊を2ケ所から検出。

第31表　4・5T検出の炉跡観察表

第10節　集石遺構（墓）

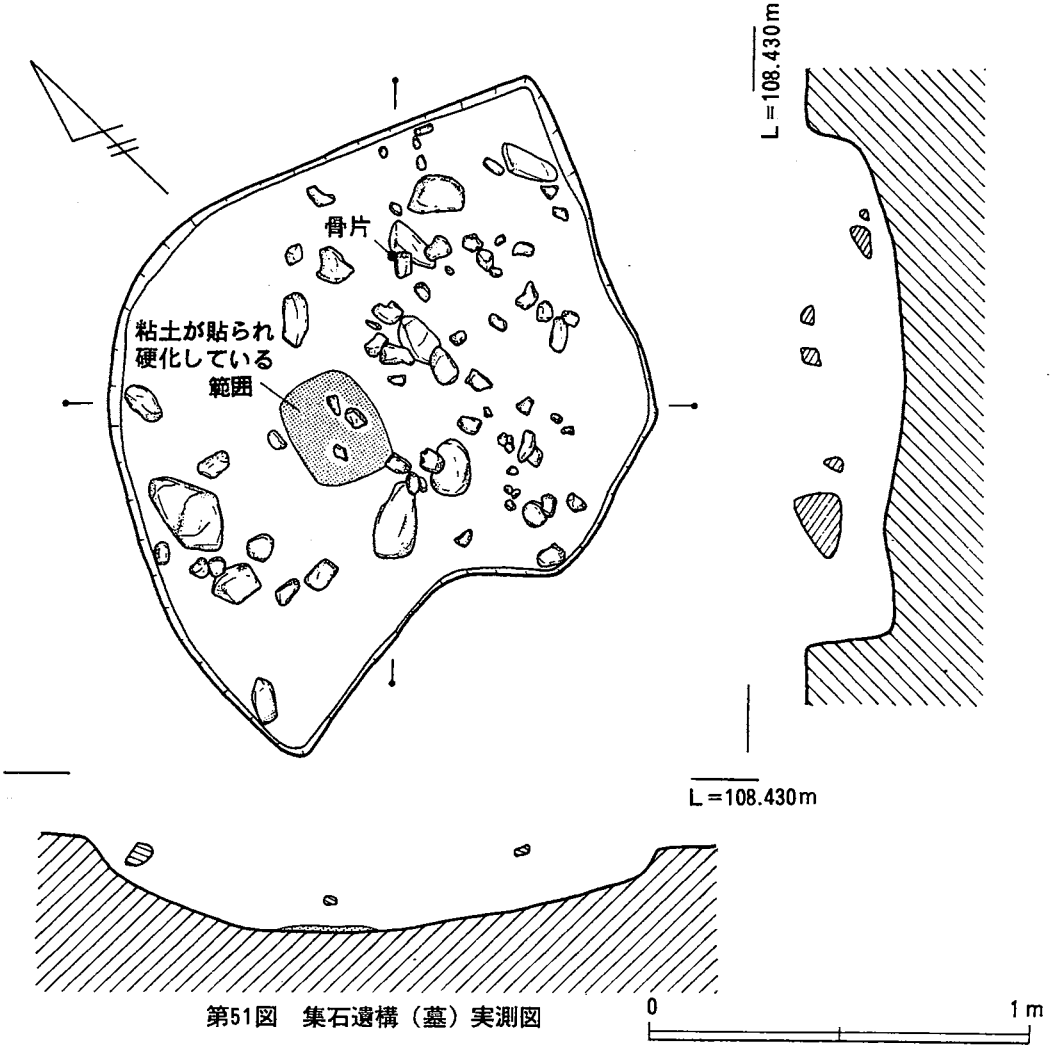
第Ⅷ層から炉跡と共に検出された。

集石は大きさで大別すれば、大11個、中44個、小 141個であったが、全体として火を受けた状況を呈していない。遺構確認面の上層で、多数の小石が出土した。

集石は定形プランではないが、上層に限り、中型の石の集まりは見た目に長方形プランを呈する。

集石を除去した段階で土坑を検出した。土坑の平面プランはやや歪な方形で、長軸 140cm、短軸 115・125 cm 、深さ47cmを測る。埋土は分層できず、単色の暗褐色土で、床面は黄褐色粘土である。床面は中央部に限り、一部、硬化した箇所もある。

土坑中から極小片の骨が１つ出土した事により、墓坑とも考えられる。



第51図　集石遺構（墓）実測図

第Ⅲ章　出土遺物

第１節　歴史時代

１．１トレンチ出土の遺物

〔現水田層より出土〕

１～３は青磁である。１は碗の底部で内底面に抽象的な文様が描かれている。２は稜花皿で内器面の口縁下に浅い３条の沈線が巡る。３の底部は薄手である。釉色は１・３が緑灰色で、２は淡いオリーブ色を呈する。

４～７は白磁である。４は高台に抉りのある皿で、他は碗である。５は玉縁状の口唇部を有し、焼成はやや不良である。６・７は同一タイプ型の小型碗で、やや内弯気味にラッパ状に開く体部は、上位でわずかに外反し、復元口径 6.5～ 6.7cm・器高 3.2cm・復元底径 2.0cmを測る。

８は青白磁で、体部は大きく外弯し、高台は外側へ張り出す。

９・10は土師器皿で、９は復元口径 6.7cm・器高 2.0cm・復元底径 4.1cm、10は復元口径 6.1 cm・器高 2.5cm・復元底径 3.6cmを測る。器形は９が船型で10がややラッパ状を呈する。

11は焼成不良の須恵器で平行の叩き痕が残る。12・13は瓦質の擂鉢である。条線の一単位は両器とも５本を数える。14～18は中世雑器で19は土師器皿である。

〔洪水層より出土〕

20～26は青磁で、20に蓮弁文様、24に単弁文様、26に雷文帯文様が見られる。釉色は20・24・25・26がオリーブ灰色で、21・23が緑灰色を呈する。27は青白磁で、復元口径は 8.9cmを測り、外器面に稜線が目立つ。

28は土師器坏で、焼き締めが効いており、質量感のある土器である。

29・30は須恵器である。叩き痕は29が平行・同心円で、30は格子目、同心円である。31は脚付きの土師器で内器面はあたかも内黒土器であるかのように黒色を呈する。

32は瓦質の擂鉢で条線の一単位は４本である。33は瓦質土器で器面に横方向のハケ目が入る。43・44も瓦質の擂鉢である。

34～41は管状土錘で、小型の34～37と、やや大型の38～41に大別される。42は刀子である。

２．２トレンチ出土の遺物

〔現水田より出土〕　45は須恵器の短頸壺で、46は小型の管状土錘である。47は寛永通宝で、３枚半が重なり合って接着している。

〔地山直上から出土〕　48・49は小型の管状土錘である。

3．3トレンチ出土の遺物

〔現水田より出土〕

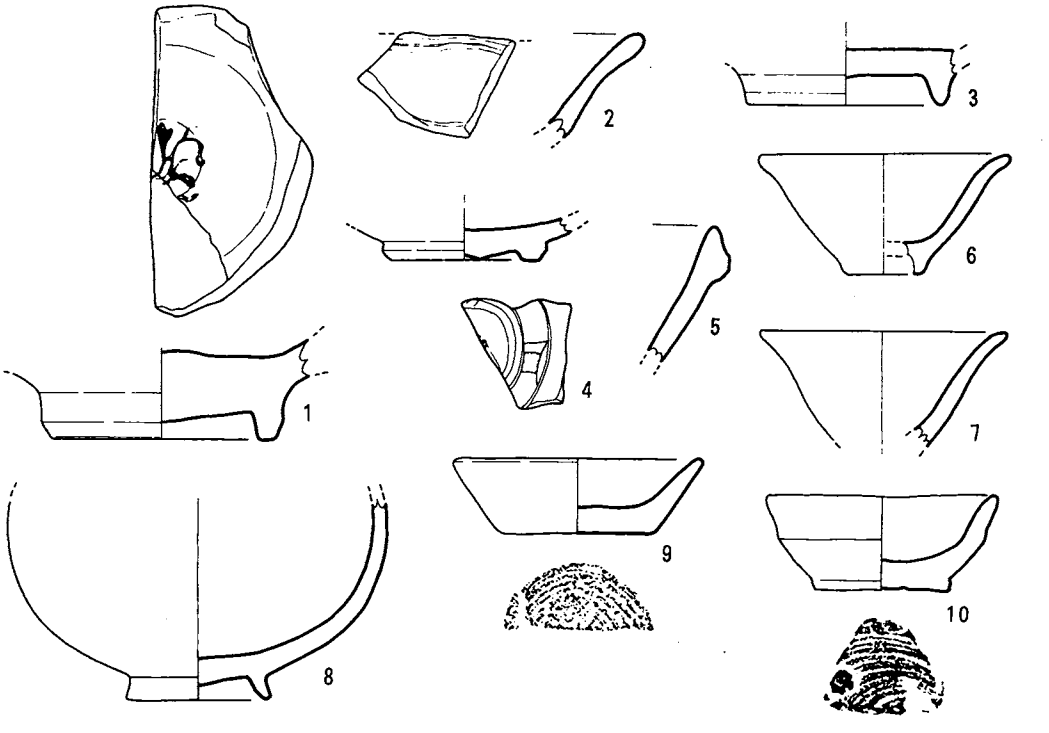
50～53は青磁で、釉色は52が濃緑色で他はオリーブ灰色を呈する。53の底部は極めて扁平で、復元口径 8.0cmを測る。54は白磁碗で、復元口径10.4cmを測り、口縁は直口気味となる。55～58は青白磁である。55の高台はやや外側へ張り出し、57は復元口径 9.2cmを測る。

59～62は土師器の皿と坏である。59は皿で復元口径 6.0cm・器高 1.5cm・復元底径 4.7cmを測り、口縁直口である。62の体部は肉厚で、底部からの立ち上がりより口縁まで均一の厚さである。63・64・67は中世雑器で、67の底部は碁笥底を呈する。

65・66は近世陶器で66の釉色は内器面が浅黄色、外器面は緑色でやや薄目に施釉されている。68・69は小型管状土錘である。

〔地山直上より出土〕

70は瓦質のもので条線の一単位は6本を数える。71は焼成不良の中世雑器で、条線の一単位は5本である。72は中世雑器の火舎で、外器面に花柄（5枚花）の文様と一条の沈線が施されている。73は小型の管状土錘である。

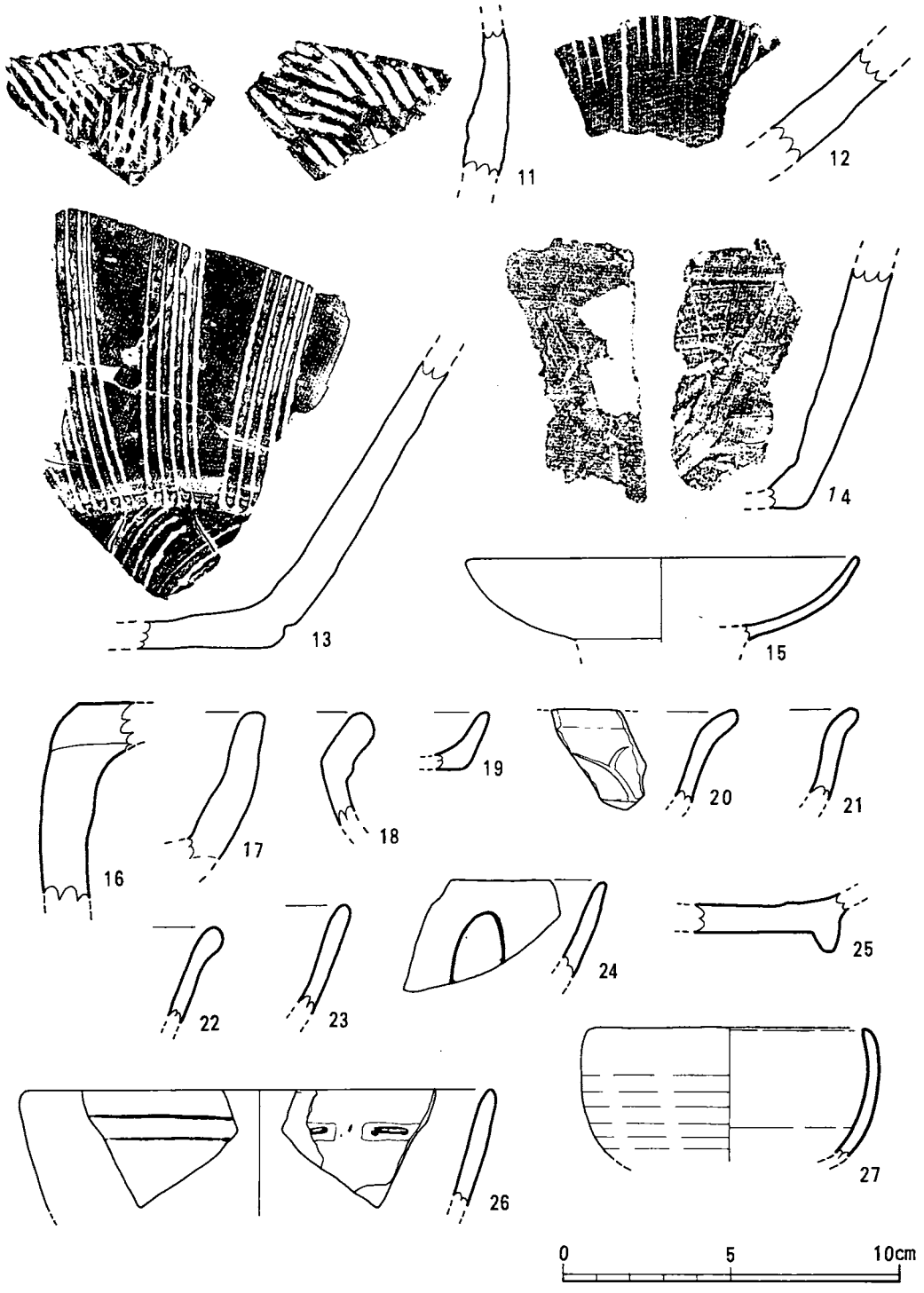


第52図　1T出土遺物の実測図①

0　5　10cm

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
1 青磁 (碗)	底部は中央部まで肥厚(厚さ1.9cm)。 畳付きは扁平(幅5mm)。 底径 6.0cm。	(調整) ロクロ回転による粗いナデ。高台は削り出し。 (文様) 内底面の中央部に抽象的文様。	(胎土) 灰白色で緻密。 (釉色) 緑灰色、やや厚く施釉、外底面は露胎。 (焼成) 良。貫入が走る。
2 青磁 (稜花皿)	体部の上位はわずかに外弯。	(調整) ロクロ回転によるナデ。口唇部は平らに近い。指頭で押えてある。 (文様) 内器面の口縁下に浅い3条の沈線。	(胎土) 灰色。堅く締まる。 (釉色) 淡いオリーブ灰色。ムラなく薄く施釉。 (焼成) 良、細かい貫入が走る。
3 青磁	底部は薄手(厚さ 0.7cm)。 畳付きはやや丸味を帯びる。 復元底径 5.4cm。	(調整) ロクロ回転によるナデ。高台は削り出し。外底面は回転ヘラ削り。	(胎土) 白色で堅緻。 (釉色) 緑灰色、やや厚めに施釉。高台部の内面は露胎。 (焼成) 良好。
4 白磁 (皿)	高台は低く(高さ2mm)、中央部寄りで0mmとなる。 畳付きは扁平(幅5mm)。 外底面の中央部はやや凸。 復元底径4.0cm。	(調整) 高台に怡りを有する。怡りは丁寧なヘラ削り。 外底部は回転ヘラ削り。	(胎土) 白色。 (釉色) 薄黄白色。内外器面に施釉。 (焼成) 良好。内底面に重ね焼きの痕が残る。
5 白磁	口唇部は玉縁状を呈する。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 白黄色。非常に緻密。 (釉色) 白黄色。ややくすんだ感じ。 (焼成) 不良。
6 白磁 (碗)	体部はやや内弯気味にラッパ状に開き、上位でわずかに外弯。 口径 6.7cm・器高 3.2cm・底径 2.0cm。	(調整) ロクロ回転によるナデ痕も見られない程、丁寧。	(胎土) 灰白色。非常に緻密で混入物無し。 (釉色) 灰白色。高台の外面は一部、無釉。内器面は施釉。 (焼成) 良。
7 〃	No.6と同様。 体部は中途でやや肥厚。 復元口径 6.5cm。	(調整) ロクロ回転の横ナデと縦方向のナデ痕。	(胎土) No.6と同様。 (釉色) 灰白色。 (焼成) 良。内外器面の上位に貫入が走る。
8 青白磁 (碗)	体部は大きく内弯する。 高台は外側へ張り出す。 底径 3.8cm。	(調整) ロクロ回転によるナデ痕が、かすかに見られる。	(胎土) 灰色。 (釉色) オリーブ灰色。 (焼成) 良。
9 土師器 (皿)	体部は船型を呈する。 復元口径 6.7cm・器高 2.0cm・復元底径 4.1cm。	(調整) 横方向のナデ。 底部は丁寧な糸切り。	(胎土) 雲母片(多)と、0.5mm前後の砂粒(少)を含む。 (色調) 鈍い橙色。 (焼成) 比較的、良。
10 土師器 (杯)	体部はややラッパ状を呈する。 復元口径 6.1cm・器高 2.5cm・復元底径 3.6cm。	(調整) 全面、横方向のナデ。 底部は糸切り。	(胎土) 雲母片を含む。 (色調) 橙色。 (焼成) 比較的、良。
11 須恵器	――――	(調整) 内外器面とも平行の叩き痕あり。	(胎土) 雲母片と、0.5mm前後の砂粒をわずかに含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 不良。
12 瓦質 擂鉢	――――	(調整) 条線の一単位は5本、使用により磨滅。 内器面の調整不明、外器面は横方向の指ナデ。	(胎土) 透明細砂粒と白色細砂粒を含み、気泡がある。 (色調) 内器面:オリーブ灰色。 外器面:浅黄色、オリーブ灰色。 (焼成) 良。
13 〃	体部は直線的に立ち上がる。 体部はラッパ状に開く。	(調整) 内器面の体部と底部に5本を一単位とする条線あり。 底部については右回りの半曲線となる。	(胎土) 透明細砂粒を含む。 (色調) 内器面:灰黄色。 外器面:灰白色。 (焼成) 良。
14 中世雑器	残存の体部は漸次、肥厚しながら直に立ち上がる。体部は直線的に伸びる。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 雲母片や1mm弱の砂粒を含む。 (色調) 内器面:明褐灰色。 外器面:鈍い黄橙色。 (焼成) 良。

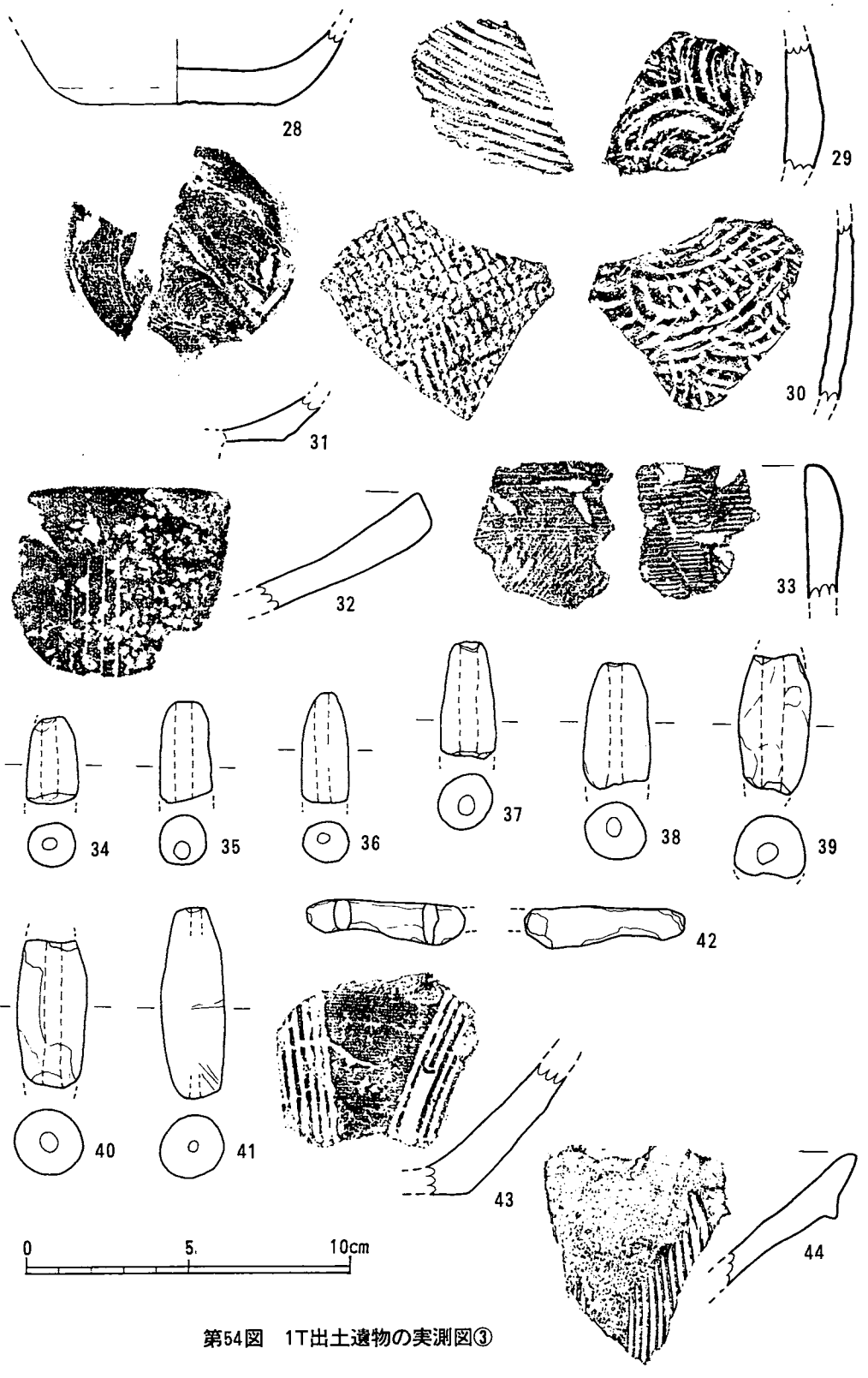
第32表　1T出土遺物の観察表①



第53図　1T出土遺物の実測図②

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
15 陶器 (Ⅲ)	体部はやや内弯する。 口径 11.7cm。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 緻密で混入物なし。 (釉色) 暗灰黄色。 (焼成) 極めて良。
16 中世雑器 (須恵系)	甕の口縁部か？	(調整) 横方向の粗いナデ。	(胎土) 緻密。0.1～1mmの砂粒を含む。 (色調) 灰色。 (焼成) 良。
17 中世雑器 (土師系)	体部の中途より下位はやや肥厚(厚さ 1.1cm)。 坏の類か？	(調整) 内器面：横方向のナデ。 外器面：右斜め下方向のナデ。	(胎土) 雲母片と、0.5～1mmの砂粒を含む。 (色調) 内器面：灰白色。 外器面：鈍い橙色。 (焼成) 比較的、良。
18 中世雑器	――――	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) ごく少量の砂粒(1mm弱)を含む。 (色調) 暗赤褐色。 (焼成) 良。施釉あり。
19 土師器 (Ⅲ)	――――	(調整) 不明。	(胎土) 雲母片と、0.5～1.0mmの砂粒を含む。 (色調) 橙色。 (焼成) 比較的、良。
20 青磁	体部の上位はやや外弯する。	(調整) ロクロ回転によるナデ。 (文様) 内器面に蓮弁文様。	(胎土) 灰白色。緻密。 (釉色) オリーブ灰色。やや厚目に施釉。 (焼成) 良。内外器面に貫入が走る。
21 〃	体部の上位はわずかに外弯する。	(調整) ロクロ回転によるナデ。	(胎土) 白色。緻密。橙色の粒を含む。 (釉色) 明るい緑灰色。ムラなく薄い施釉。 (焼成) 良。内外器面に細かい貫入が走る。
22 〃	口唇部はやや丸味を帯びて肥厚。	(調整) ロクロ回転によるナデ。	(胎土) 灰色。緻密で締っている。 (釉色) オリーブ灰色。くすんだ感じで、かなり使用した痕がうかがわれる。 (焼成) 良好。
23 〃	――――	(調整) ロクロ回転によるナデ。	(胎土) 白色。緻密。 (釉色) 口唇部付近は緑灰色。その他は浅黄色を薄目に施釉。
24 〃	体部の中途から口唇部にかけて、わずかに肥厚。 口縁はやや直口気味。	(調整) 不明。 (文様) 内器面にほとんど消えかかった単弁文様。	(胎土) 白色。非常に緻密で締っている。 (釉色) オリーブ灰色。やや厚目に施釉。内器面はやや光沢が鈍い。 (焼成) 良好。
25 〃	付け高台。	(調整) ロクロ回転によるナデ。 外底面はヘラ削り。	(胎土) 白色。緻密。 (釉色) オリーブ灰色。外底面の高台内は露胎。施釉にややムラあり。 (焼成) 良。内外器面に貫入が走る。
26 〃	体部上位は、わずかに窪む。	(調整) ロクロ回転によるナデ。 (文様) 退化した雷文帯。	(胎土) 白色。堅緻。 (釉色) 淡いオリーブ灰色。 (焼成) 良好。貫入が走る。
27 青白磁	体部は内弯する。 復元口径 8.9cm。	(調整) ロクロ回転によるナデ。 外器面は稜線が目立つ。	(胎土) 非常に緻密。混入物なし。 (釉色) 灰白色。 (焼成) 良好。

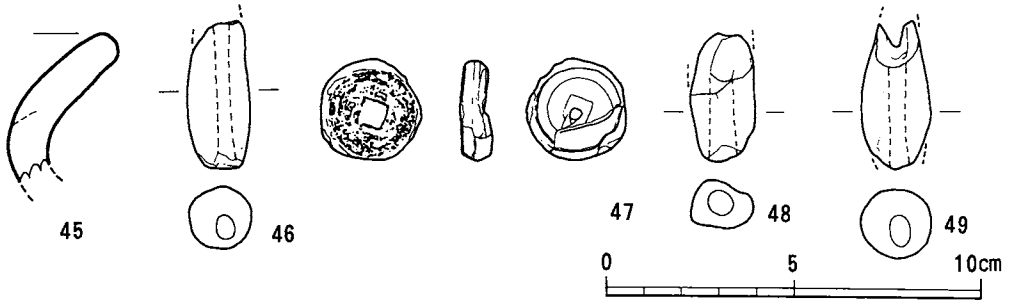
第33表　1T出土遺物の観察表②



第54図　1T出土遺物の実測図③

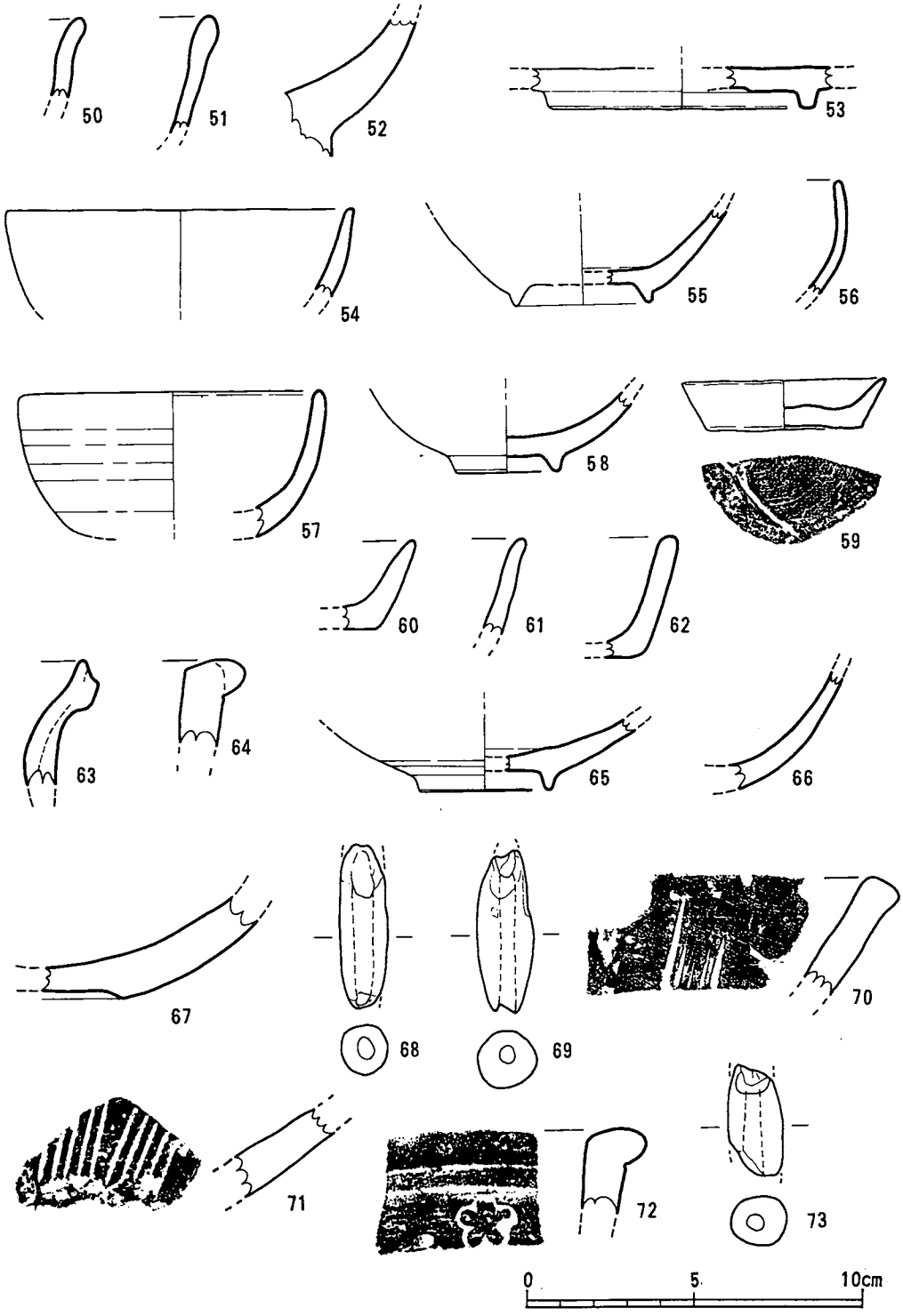
No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
28 土師器 (坏)	残存の体部は肥厚(厚さ 1.0cm)。	(調整) 横方向のナデ。 切り離しは糸切りによる。	(胎土) 混入物無し。 (色調) 鈍い橙色。 (焼成) 焼き締めが効いており、質量感のある土器となっている。
29 須恵器	――――	(調整) 内器面に同心円、外器面に平行の叩き痕あり。	(胎土) 0.3～1mmの砂粒を含む。 (色調) 内器面：黄灰色。 外器面：灰白色。 (焼成) 良。
30 〃	――――	(調整) 内器面に同心円、外器面に格子目の叩き痕あり。	(胎土) 0.1～0.3mmの砂粒を含む。 (色調) 灰白色（黄灰色の釉が一部にあり）。 (焼成) 良。
31 土師器	残存底部は中央寄りで薄壁（厚さ 4 mm）、端部で肥厚（厚さ 8 mm）。おそらく脚が付くものと思われる(脚部の接合部で欠損)。	(調整) 内器面：スス磨き。外器面：横方向のナデ。	(胎土) 雲母片を含む。 (色調) 内器面：黒色。 外器面：灰白色。 (焼成) 比較的、良。
32 瓦質 擂鉢	残存体部は下位から上位にかけて漸次、肥厚。 口唇部は厚さ1.2cm。	(調整) 条線の一単位は 4 本。 内外器面ともヘラ磨き。	(胎土) 透明細砂粒や白色・黒色の雲母粒を含む。気泡あり。 (色調) 浅黄橙色～黄灰色。 (焼成) 良。
33 瓦質土器	残存の内器面は直に立ち上がり、外器面は弧状に伸びる。 口唇部は扁平（幅 6 mm）。	(調整) 横方向のハケ目。部分的に斜めのハケ目。	(胎土) 雲母を含む。 (色調) 灰色。 (焼成) 比較的、良。
34 管状土錘	残存の長さ 2.3cm。 直径 1.3cm× 1.5cm。 重さ 4.86 g。	(調整) 丁寧な調整。	(胎土) 密であるが、やや軟質。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 良。
35 〃	残存の長さ 3.1cm。 直径 2.5cm× 2.5cm。 重さ 6.04 g。	(調整) 丁寧な調整。	(胎土) 密であるが、やや軟質。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 良。
36 〃	長さ 3.4cm。 直径 1.4cm× 1.2cm。 重さ 6.77 g。ほぼ完形品。	(調整) 下端部は、ヘラ切りの可能性あり。	(胎土) 細密。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 良。
37 〃	残存の長さ 3.5cm。 直径 1.8cm× 1.6cm。 重さ 9.48 g。	(調整) 非常に丁寧な造り。 ナデ調整の可能性あり。	(胎土) 細密。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 良。
38 〃	残存の長さ 3.7cm。 直径 2.0cm× 1.7cm。 重さ 14.94 g。	(調整) 上端部は、ほぼ平らでヘラ切りの可能性あり。丁寧な調整。	(胎土) 緻密。 (色調) 灰白色～鈍い黄橙色。 (焼成) 良。
39 〃	残存の長さ 4.0cm。 直径 2.2cm× 1.7cm。 重さ 17.24 g。 大形品でいびつな形。	(調整) 粗い。	(胎土) 密。1 mm程の砂粒をわずかに含む。 (色調) 灰白色、一部灰色。 (焼成) 良。
40 〃	残存の長さ 4.5cm。直径 2.1cm × 2.0cm。重さ 19.07 g。 質量感のある大型品。	(調整) 比較的粗い。	(胎土) 密。 (色調) 灰色。 (焼成) 良。
41 〃	長さ 5.8cm。直径 1.9cm。重さ 22.49 g。完形品。	(調整) 両端部は丸味があり、ナデたように思われる。 丁寧な調整。	(胎土) 密。 (色調) 灰白色。 (焼成) 良。
42 刀子	残存最大長 5.0cm。残存幅（最大）1.3cm、（最小）0.8cm。	――――	――――
43 瓦質 擂鉢	――――	(調整) 条線の一単位は不明。 内外器面とも指ナデ。	(胎土) 白色。透明細砂粒や、かなり大粒(直径 3 mm)の砂粒を多量に含む。 (色調) 内器面：灰白色。 外器面：暗灰黄色。 (焼成) 良。
44 〃	口縁は肥厚し、口唇部は中途と端部でやや窪む。 器面はひずみが激しい。	(調整) 条線の一単位は11本で、非常に密に掻かれている。 ロクロ調整と思われる。	(胎土) 白色砂粒や、透明細砂粒を含む。 (色調) 内器面：赤灰色。 外器面：明褐灰色。 (焼成) 不良。

第34表　１Ｔ出土遺物の観察表③



No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
45 須恵器 (短頸壺)	残存体部は大きく外弯。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 0.5mm～3mmの黒粒を多量に含む。 (色調) 灰白色。 (焼成) 良。
46 管状土錘	残存の長さ 3.9cm。 直径 1.7cm× 1.6cm。 重さ 9.75 g。	――――	(胎土) 多孔質。軟質である。 (色調) 淡黄色～灰色。 (焼成) 良。
47 寛永通宝	直径 2.4cm、輪の幅 0.2cm、孔の一辺の長さ 0.6cm。 3枚半が重なって接着している。	――――	――――
48 管状土錘	残存の長さ 3.3cm。 直径 1.6cm× 1.2cm。 重さ 6.12 g。	――――	(胎土) 多孔質。軟質である。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 良。
49 〃	残存の長さ 3.8cm。 直径 1.9cm× 1.7cm。 重さ 9.86 g。	――――	(胎土) 密。やや軟質。 (色調) 灰色。 (焼成) 良。
50 青磁	残存体部はわずかに外弯。	(調整) ロクロによる回転ナデ。	(胎土) 灰白色。緻密。 (釉色) オリーブ灰色。 (焼成) 良好。細かい貫入が走る。
51 〃	口縁は丸味を帯びて肥厚。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 灰色。非常に堅緻。 (釉色) オリーブ灰色。比較的薄目に施釉。 (焼成) 良好。
52 〃	残存体部の下位は肥厚 (厚さ1.7cm)。	――――	(胎土) 白色。極めて精良。 (釉色) 濃緑色。釉厚は平均1.5mm。 (焼成) 非常に緻密。内外器面に大きな貫入が走る。
53 〃	扁平な底部 (厚さ7mm)。 高台の畳付きも扁平 (幅5mm)。 復元底径 8.0cm。	(調整) 高台部は削り出し。 高台内部はヘラ削り。 内器面はロクロによる回転ナデと思われる。	(胎土) 灰白色。非常に緻密。 (釉色) オリーブ灰色。外器面は露胎。 (焼成) 良好。細かい貫入が走る。
54 白磁	残存体部は、わずかに内弯。 口縁はやや直口気味となる。 復元口径10.4cm。	(調整) ロクロ回転のナデ。 (文様) 図化出来ない程、細かい文様あり。	(胎土) 白色。緻密。 (釉色) 白色半透明。残存の体部全面に施釉。 (焼成) 良好。
55 青白磁	高台はやや外側に張り出す。	(調整) ロクロによる回転ナデ。 高台は削り出しによるものと思われる。	(胎土) 灰色を呈し、わずかにオレンジ色の粒を含む。固く締まっている。 (釉色) 無色透明。残存体部の全面に施釉。但し、高台内部は薄く光沢がない。 (焼成) 良好。
56 〃	体部は大きく内弯する。	(調整) ロクロによる回転ナデ。	(胎土) 灰白色。堅緻。 (釉色) オリーブ灰色。 (焼成) 良好。
57 〃	体部は内弯し、やや肉太 (厚さ5mm) である。 復元口径 9.2cm。	(調整) ロクロによる回転ナデ 外器面に稜線が目立つ。	(胎土) 灰白色。堅緻。 (釉色) 白色半透明。 (焼成) 良好。

第35表　2・3T出土遺物の観察表



第56図　3T出土遺物の実測図

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
58 青白磁	高台はわずかに外側へ張り出す。 体部はやや内弯する。	（調整）ロクロによる回転ナデ。 高台はヘラ削りと思われる。	（胎土）灰色。非常に堅緻。 （釉色）灰色。残存体部の全面に施釉。光沢あり。
59 土師器 （皿）	体部は船型を呈する。 復元口径 6.0cm・器高 1.5cm・ 復元底径 4.7cm。 口縁直口。	（調整）内器面は横ナデ。外底面に糸切り痕。	（胎土）非常に堅緻。混入物は極小。 （色調）黒褐色。 （焼成）極めて良好。
60 土師器 （坏）	体部はやや直線的に開く。 器高 2.6cm。	（調整）内外両器と横方向のナデ。	（胎土）比較的硬質で非常に緻密。細砂粒がごくわずかに混入。 （色調）橙色。 （焼成）良好。
61 土師器	体部は口縁でわずかに外反。	（調整）横方向のナデ。	（胎土）0.5～1mm の砂粒をわずかに含む。 （色調）鈍い橙色。 （焼成）比較的良好。
62 土師器 （坏）	体部は肉厚（厚さ6mm）。 体部は立ち上がりより口縁まで、均一の厚さである。	（調整）わずかに横方向のナデ。 外底面の切り離し不明。	（胎土）雲母片0.5mm程の砂粒や、1.0mmの赤褐色の粒を含む。 （色調）鈍い橙色。 （焼成）比較的、良好。
63 中世雑器	残存体部は大きく外弯する。 口縁で肥厚し、突帯状となる。 体部は上位で一旦くびれる。	（調整）ロクロによる回転ナデ。	（胎土）灰色。わずかに砂粒を含む。 （色調）汚れた感じの黒色。 （焼成）良好。
64 〃	口唇部は半楕円形状となって右斜め上に突き出す。	（調整）不明	（胎土）非常に堅緻。若干の細砂粒を含む。 （色調）内器面：明黄褐色。 外器面：鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
65 陶器	高台は直立。 体部は大きく開く。 底径 4.0cm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。 高台は削り出しと思われる。	（胎土）浅黄色。非常に堅緻。 （釉色）無色。透明の釉。高台の内外両面と畳付きは露胎。 （焼成）良好。
66 〃	残存体部はやや内弯する。	（調整）ロクロによる回転ナデが顕著に残る。	（胎土）灰白色。非常に堅緻。 （釉色）内器面：浅黄色。外器面：緑色（やや薄く施釉）。 （焼成）良好。細かい貫入が走る。
67 中世雑器 （皿）	底部は碁笥底を呈する。 残存体部は肉太である。 厚さ 1.2cm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。 外底面はヘラ削り。	（胎土）鈍い橙色。緻密。黒色の細粒を混入する。 （色調）灰黄褐色。 （焼成）良。
68 管状土錘	残存の長さ 4.8cm。 直径 1.5cm× 1.4cm。 重さ 9.39g。	（調整）丁寧な造り。	（胎土）密。多孔質。 （色調）鈍い黄橙色。 （焼成）良。
69 〃	残存の長さ 4.8cm。 直径 1.8cm× 1.7cm。 重さ 11.80g。	――――	（胎土）密で、やや軟質。 （色調）鈍い橙色。 （焼成）良。
70 瓦質 擂鉢	口唇部は扁平（幅1.1cm）。	（調整）ヘラ磨き後、内外器面とも横方向の指ナデ。 条線の一単位は6本。	（胎土）白色細砂粒を含む。 （色調）内器面：鈍い褐色。 外器面：灰色。 （焼成）良好。
71 中世雑器 （擂鉢）	――――	（調整）器面はローリングが激しい。内器面はヘラ磨きと思われる。 条線の一単位は5本。	（胎土）透明白色。細砂粒を含む。 （色調）内器面：鈍い黄橙色。 外器面：浅黄褐色。 （焼成）不良。
72 中世雑器 （火舎）	口唇部は扁平（幅 1.7cm）で、突帯状に右斜め上へ突き出す。	（調整）口唇部と外器面は横方向のナデ。 （文様）外器面に花柄（5枚葉）の文様と、1条の沈線あり。	（胎土）非常に堅緻。若干の黒色鉱物を含む。 （色調）内器面：鈍い黄橙色。 外器面：灰白色。 （焼成）極めて良好。
73 管状土錘	残存の長さ 3.2cm。 直径 1.6cm× 1.4cm。 重さ 5.88g。	（調整）丁寧な造り。	（胎土）細密でやや軟質。 （色調）淡黄色。 （焼成）良。

第36表　3Ｔ出土遺物の観察表

4．4トレンチ出土の遺物

〔現水田より出土〕

74・75は青磁で、74は櫛描文様が描かれている。75は盤の口縁部である。釉色は74がオリーブ灰色で75が明オリーブ色を呈する。76は白磁で復元口径 9.9cmを測り、体部は薄壁で、直線的に伸び、口縁でやや外弯する。77～79は青白磁で、79の内底面には橙色釉の施文が残る。

80～82は擂鉢である。80・81は中世雑器で、82は瀬戸系の陶器が使用されている。80・81の条線の一単位は８本で、81の底部には明瞭な糸切り痕が残る。82は型押しによる格子状文様が施文されている。83～85は須恵器である。叩き痕は、83が格子目・弧状、84が平行、85が格子目・平行である。86は中世雑器で外器面にヘラ状工具により沈線を施す。

87～90は近世染付である。91は近世陶器で、底部は碁笥底を呈する。

92・93はキセルの吸い口である。

〔洪水層より出土〕

94～97は青磁である。97は胴部の飾りが剝落したものと思われる。釉色は94・97が明オリーブ色で、96がオリーブ灰色を呈する。97は上質の青磁で元代のものと考えられる。98・99は白磁である。98は復元口径 8.6cmを測る。体部は薄壁で直線的に大きく開く。

100～105 は土師器の皿と坏である。 100は焼き締めが効いている。103・104の外底面には丁寧な糸切り痕が残る。105 には板目圧痕が見られる。 106・107 は高台付きの土師器である。106 の高台は、大きく弯曲しながら外側へ張り出す。 107の高台は肉太で直立する。

108～115 は須恵器である。 108は外器面に複線波状文が施されている。叩き痕は 109が平行・同心円、 110が平行・弧状、 111が平行・同心円、112・113が平行である。 116・117 は須恵系のもので、 117は外器面の口縁下に沈線が走る。 118は瓦質の擂鉢である。 119・120 は土師系土器で 119の内器面には指による回転の痕が残る。

121～136 は管状の土錘である。小型の 121～129 と、やや大型の130 ～136 に大別されるが、さらに大型のものは長身タイプと、ずんどうタイプに細分可能である。小型の完形品は125で、長さ 4.7cm・直径 1.5× 1.3cmを測る。大型で長身タイプは 132で、長さ 6.3cm・直径 1.2cmを測り、ずんどうタイプは 134で、長さ 4.8cm・直径 2.0cmを測る。

〔埋没水田より出土〕

137～ 142は青磁である。 137は退化した雷文帯文様があり、 139は内底面に文様がヘラ描きされている。釉色は 137が緑色、 139が灰青色で他はオリーブ灰色を呈する。 143は白磁で、144 は青白磁である。 144は復元口径10.0cm・器高 2.6cm・復元底径 5.0cmを測り、高台は若干、外側へ張り出す。 145は古銭で永楽通宝である。

146は土師器で、外底面に糸切り痕が残る。

147・148・150は須恵器である。147 は外底面に糸切り痕が残り、150 の叩き痕は平行と格子目

である。149 は瓦質で、軽量の土器である。

151～ 162は管状土錘である。151 ～158 は小型で、158 は長さ 5.1cm・直径1.7 ×1.5 cmを測る。159 ～162 は大型で、これらは長身タイプの 160（長さ 6.6cm、直径 1.6cm）と、ずんどうタイプの 159・161・162（長さ4.8 ～ 5.4cm、直径 1.7～ 2.7cm）に細分される。

〔埋没水田の下位部分より出土〕

163は土師器碗で、体部は内弯し、口縁近くでやや外反する。口縁直口で復元口径10.2cmを測る。 164～166 は須恵器である。 164は蓋坏身、 165は高坏片、 166は脚部で外底面は糸切りと思われる。 167は高坏の脚部で土師器である。

〔近世墓壙より出土〕

ＳＥ０１： 168の青磁と 169の近世染付けが出土。 168の釉色は緑色でかなり厚めの施釉である。169 は復元口径 8.0cm、器高 4.0cm、復元底部 3.2cmを測る。

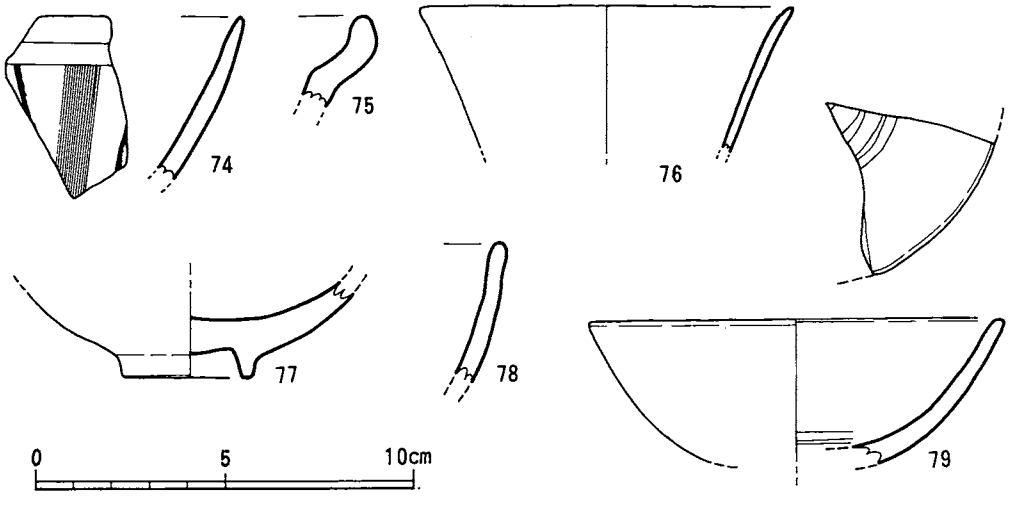
ＳＥ０４： 170の土師器、 171の鉄器、 172・173 の須恵器が出土。172 の叩き痕は弧状・平行、173 の叩き痕は弧状・格子目である。

ＳＥ０５： 174の須恵器と 175の青白磁が出土。 174は口縁で大きく外反する。

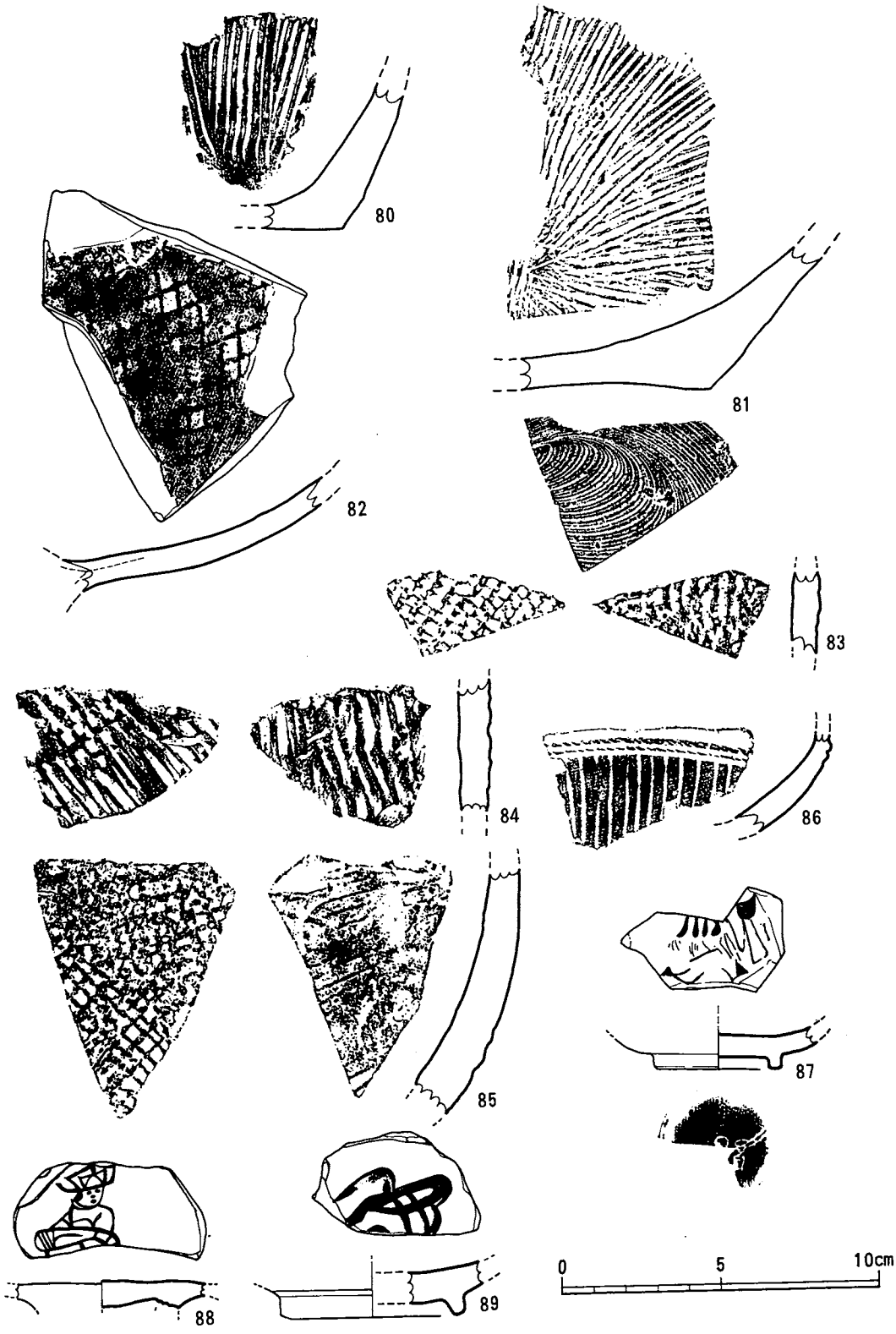
ＳＥ０６： 176の管状土錘が出土。ほぼ完形品で、長さ 6.0cm、直径 1.5× 1.4cm、重さ12.06 g を測る。

ＳＥ０７： 177は近世雑器である。色調は赤茶褐色で内外器面に刷毛目が残る。

ＳＥ０８： 178は鉄器（刀子）で 179は近世陶器である。



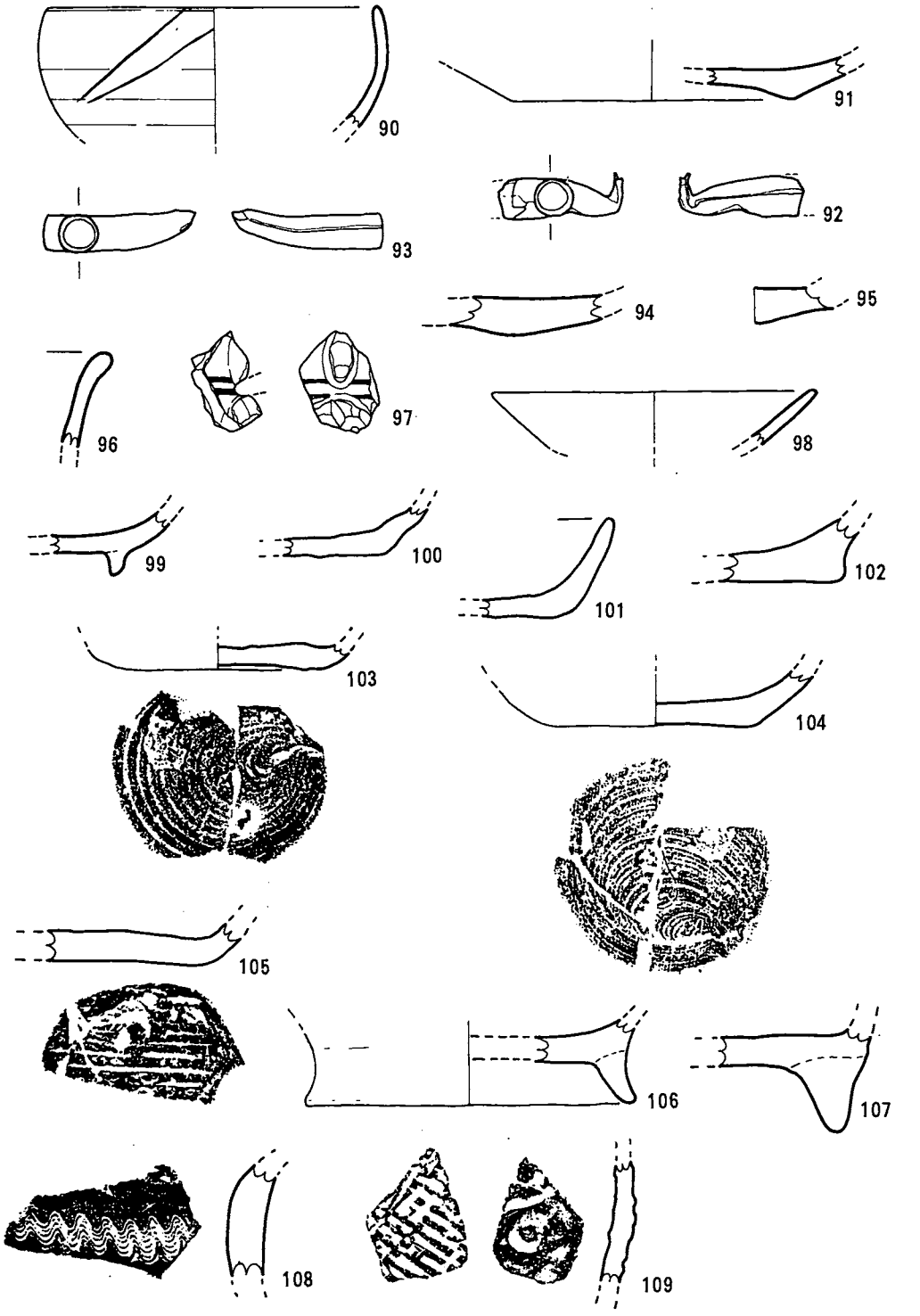
第57図　4T出土遺物の実測図①



第58図　4T出土遺物の実測図②

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
74 青磁	残存体部はわずかに内弯する。	（調整）ナデと思われる。 （文様）外器面に櫛描文様。	（胎土）白黄色で緻密。 （釉色）薄いオリーブ灰色。（やや厚めに施釉）。 （焼成）良好。
75 青磁 （盤）	盤と思われる。 残存体部は中途で外弯し、口唇部近くで直立する。	（調整）横方向のナデ。	（胎土）灰白色。緻密。一部橙色。 （釉色）明オリーブ色（比較的薄く施釉）光沢なし。 （焼成）良好。
76 白磁 （碗）	体部は薄壁で（厚さ3㎜）、直線的に伸び、口縁でやや外弯する。 復元口径 9.9cm。	（調整）ロクロによる非常に丁寧な回転ナデ。	（胎土）白色。 （釉色）白色。光沢あり。 （焼成）良好。
77 青白磁 （碗）	高台は直立。 復元底径 3.5cm。	（調整）内外器面はロクロによる回転ナデ。高台内部は回転ヘラ削り。	（胎土）灰色。非常に堅緻。 （釉色）オリーブ灰色。畳付きのみ露胎。 （焼成）良好。内器面に貫入走る。かなりの付着物あり。
78 青白磁	残存体部はわずかに内弯する。	（調整）内器面は横ナデ。外器面は縦方向のナデも見られる。	（胎土）灰色。非常に堅緻。 （釉色）灰色。 （焼成）良好。
79 青白磁 （碗）	体部は開き気味に若干、内弯する。 復元口径11.0cm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。 （文様）内器面の底部に橙色の釉で施文。	（胎土）灰色。非常に緻密。 （色調）灰白色。 （焼成）良好。
80 中世雑器 （擂鉢）	――――	（調整）条線の一単位は8本。 ロクロによる回転ナデ。 底部はヘラ切りか？	（胎土）透明細砂粒をわずかに含む。 （色調）内器面：鈍い橙色。 外器面：鈍い褐色。 （焼成）良。
81 〃	――――	（調整）条線の一単位は8本か？ 左回りの擂線。 外器面はロクロによる回転ナデ。 底部は糸切りによる切り離し。	（胎土）透明細砂粒をわずかに含む。 （色調）内器面：鈍い橙色。 外器面：褐灰色。 （焼成）良。
82 瀬戸系 擂鉢	――――	（調整）内器面は型押しによる格子状文様が施文。 外器面は横方向のヘラ削りのような条痕。	（胎土）灰色。緻密。 （釉色）オリーブ色。両面に施す。 （焼成）良好。
83 須恵器	――――	（調整）内器面に弧状、外器面に格子目の叩き痕あり。	（胎土）1㎜前後の黒い粒を含む。 （色調）内器面：黄灰色。 （焼成）良。
84 〃	――――	（調整）両面に平行の叩き痕あり。	（胎土）0.5㎜前後の砂粒を含む。 （色調）灰色。 （焼成）極めて良好。
85 〃	残存体部は肉太（厚さ1.0～1.4cm）。	（調整）内器面に平行、外器面に格子目の叩き痕が見られるが、一部磨耗している。	（胎土）0.5～1㎜の砂粒を含む。 （色調）灰黄褐色。 （焼成）極めて良好。
86 中世雑器	――――	（調整）内外器面はロクロによる回転ナデ。 （文様）ヘラ状工具により沈線文を施す。	（胎土）灰色。かなり堅緻。 （釉色）両面に薄く透明の釉が施されているが、外器面はわかりにくい。 （焼成）良好。
87 染付	高台は直立。 畳付きは扁平（幅4㎜）。 底径 4.0 cm。	（調整）内外器面はロクロによるナデ。削り出しによる高台部は回転ヘラ削り。 （文様）内器面に文様、外底面に文字有り。	（胎土）乳白色。 （釉色）薄黄色。 （焼成）極めて良好。
88 〃	外底面の中央はやや凸。 内底面の中央はやや凸。	（文様）内器面に文人画像。	（胎土）乳白色。 （釉色）薄黄色。 （焼成）良。

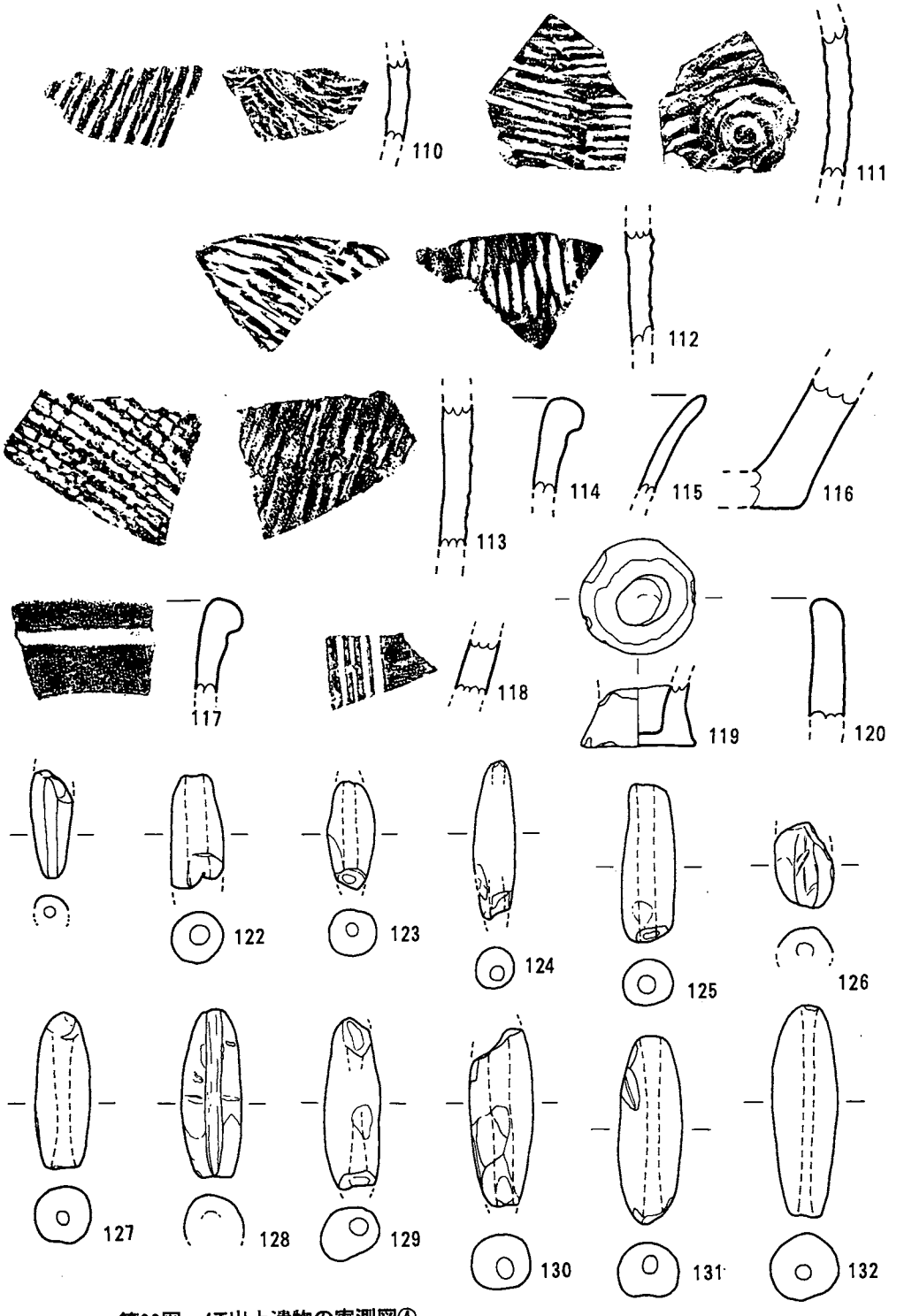
第37表　4Ｔ出土遺物の観察表①



第59図　4T出土遺物の実測図③

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
89 染付	高台はやや外側へ張り出す。 底径 5.6cm。	（調整）内外器面はロクロによるナデ、削り出しによる高台部は回転ヘラ削り。 高台と外器面との境に呉須による界線。	（胎土）灰白色。緻密。 （釉色）内外器面は、黒色釉で施文し、その上から灰白色半透明の釉で施釉。高台内外は露胎。 （焼成）良。内外器面とも細かい貫入が走る。
90 〃	体部はやや内弯する。 体部は下位より均一の厚さで口縁へ至る(厚さ3mm)。 復元口径 10.0cm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。	（胎土）灰白色。堅く締まる。 （釉色）灰白色半透明を施釉し、その上から緑色の釉で外器面に施文。 （焼成）良。細かい貫入が内外器面に走る。
91 陶器	底部は、碁笥底を呈する。	（調整）ロクロによる回転ナデ。 外底部は回転ヘラ削り。	（胎土）灰白色。緻密で堅く締まる。 （釉色）内器面：薄い透明の釉。 外器面：灰色半透明の釉。外底部は露胎。
92 〃	残存部の長さ 3.7cm。 長径 1.0cm。短径 0.8cm。	――――	――――
93 〃	長さ 4.4cm。 直径 1.0cm。	――――	――――
94 青磁	――――	（調整）外底部はヘラによる切り離し。内底部は不明。	（胎土）灰白色。非常に堅緻。 （釉色）内底部：明オリーブ灰色。外底部：赤色の釉と明オリーブ色の釉。 （焼成）良。外底部に付着物あり。
95 〃	元の青磁と思われる。	――――	（胎土）白灰色。極めて精良。 （釉色）薄緑色。外底部は露胎であるが、中央部を指圧(1.8cm×1.3cm）の範囲に限って施釉。 （焼成）極めて良好。
96 〃	残存体部はわずかに外弯する。 口縁は丸味を帯びてやや肥厚 厚さ6mm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。	（胎土）灰色。緻密。 （釉色）オリーブ灰色。 （焼成）良。内外器に貫入が走る。
97 〃	――――	（文様）器面の中位にヘラ描きで2条の線を入れ、その上から施釉。	（胎土）灰白色。緻密。 （釉色）明オリーブ色。厚目に施釉。 （焼成）良好。
98 白磁	体部は直線的に大きく開く。 体部は薄壁（厚さ 3.5mm)。 復元口径 8.6cm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。	（胎土）灰白色。非常に堅緻。 （釉色）灰色半透明。 （焼成）良好。わずかに貫入が走る。
99 〃	――――	（調整）ロクロによる回転ナデ。 高台は貼り付けによるものと思われる。	（胎土）白色。緻密。 （釉色）白色。施釉にムラあり。 高台の畳付きは露胎。 （焼成）良好。
100 土師器	底部端でやや肥厚（厚さ7mm）。	（調整）横方向のナデ、外底面に粗い糸切り痕。	（胎土）0.2～0.5mmの砂粒が少量混入している。 （色調）灰白色。 （焼成）良。焼き締めがきいている。
101 土師器 （坏）	――――	（調整）横方向のナデ。 外底部の切離しは不明。	（胎土）わずかに1mm前後の赤褐色の混入物あり。 （色調）浅黄橙色。 （焼成）良好。
102 〃	底部端は大きく肥厚（厚さ 1.6cm）。	――――	（胎土）わずかに1mm前後の赤褐色の混入物あり。 （色調）浅黄橙色。 （焼成）良好。

第38表　4T出土遺物の観察表②



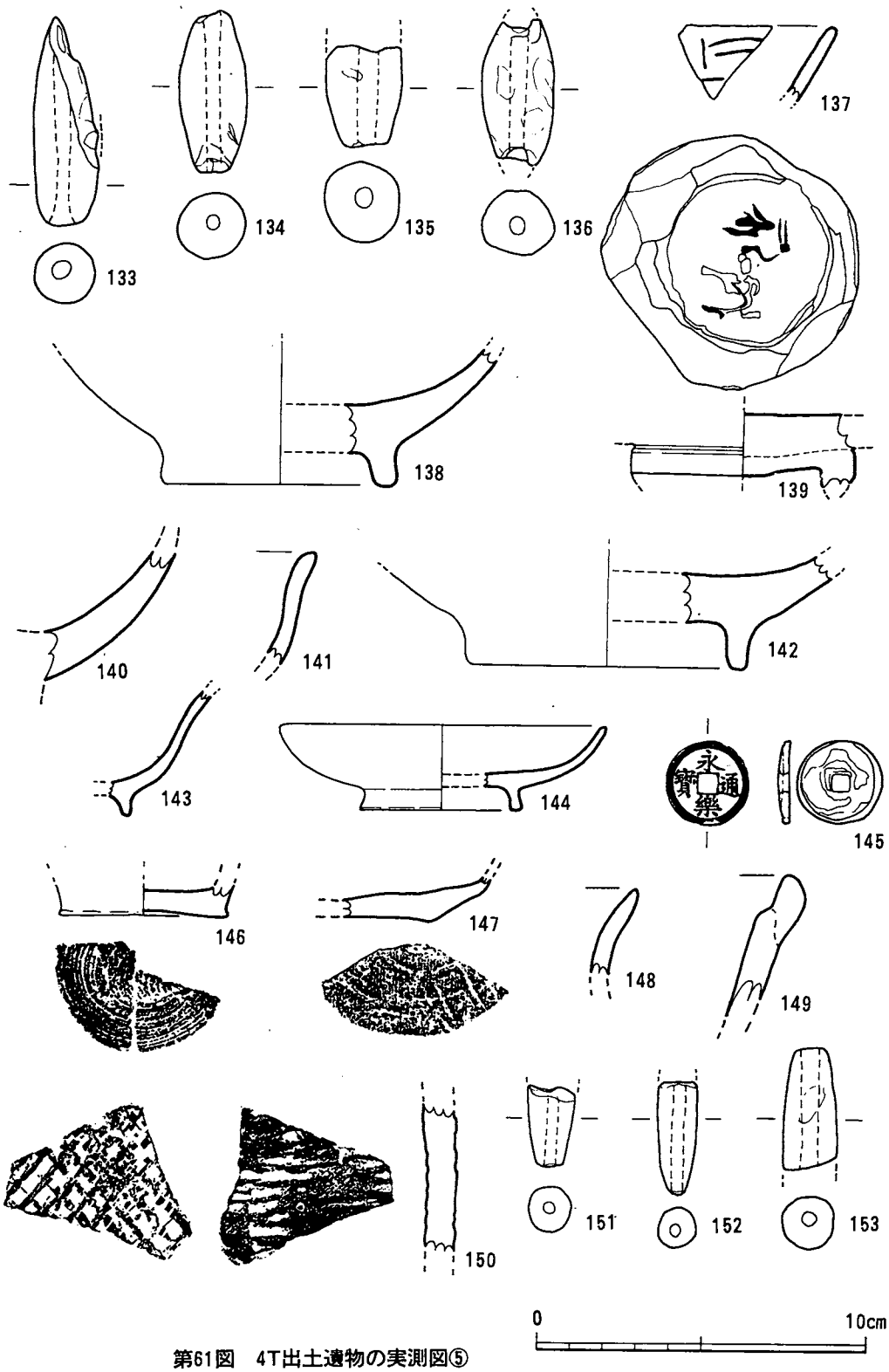
第60図　4T出土遺物の実測図④

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
103 土師器	――――	(調整) 外底部は丁寧な糸切り痕。	(胎土) 0.5mm 前後の砂粒が、ごくわずかに混入する。 (色調) 浅黄橙色。 (焼成) 良好。
104 〃	――――	(調整) 外底部は丁寧な糸切り痕。	(胎土) 0.1 ～0.5mm の砂粒、赤褐色の粒をわずかに含む。 (色調) 浅黄橙色。 (焼成) 良好。
105 〃	底部の中央部でやや肥厚 (厚さ 9 mm)。	(調整) 外底部に糸切り痕、板目の痕がみられる。	(胎土) 0.1 ～0.5mm の砂粒らしきものを、わずかに含む。 (色調) 橙色。 (焼成) 良好。
106 〃	高台は大きく弯曲しながら、外側へ張り出す。 復元底径 9.9cm。	(調整) 内底部に横方向のナデ。高台は張り付け。	(胎土) 0.3 ～0.5mm の赤褐色の混入物が、わずかに混じる。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 良好。
107 土師器	高台は直立。 肉太の高台。	(調整) 高台は貼り付け (接合面は幅2.4cm)。	(胎土) 1 mm前後の砂粒を含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 良好。
108 須恵器	――――	(調整) 横方向のナデ。 (文様) 外器面に複線波状文。	(胎土) 0.5 ～1.5mm の砂粒をわずかに含む。 (色調) 灰色。 (焼成) 不明。
109 〃	――――	(調整) 内器面に同心円、外器面に平行の叩き痕あり。	(胎土) 0.5 ～1 mmの砂粒をわずかに含む。 (色調) 灰黄色。 (焼成) 不完全で須恵器になりきっていない。
110 〃	――――	(調整) 内器面に弧状、外器面に平行の叩き痕あり。	(胎土) 1 mm前後の砂粒や雲母片を含む。 (色調) 灰色。 (焼成) 極めて良好。
111 〃	――――	(調整) 内器面に同心円、外器面に平行の叩き痕あり。	(胎土) 0.5 ～1 mmの砂粒を含む。 (色調) 灰黄褐色。 (焼成) 極めて良好。
112 〃	――――	(調整) 内外器面に平行の叩き痕あり。	(胎土) 0.5mm 前後の砂粒がわずかに含まれている。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 不完全で須恵器になりきっていない。
113 〃	――――	(調整) 内外器面に平行の叩き痕あり。	(胎土) 0.5 ～1 mmの砂粒をわずかに含む。 (色調) 灰色。 (焼成) 良好。
114 〃	口唇部は半楕円形状に肥厚。	(調整) 横回転。	(胎土) 0.3 ～0.7mm の砂粒をわずかに含む。 (色調) 浅黄色。 (焼成) 極めて良好。
115 〃	体部は薄壁 (厚さ 4 mm) で、わずかに外弯する。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 0.2 ～0.5mm の砂粒を含む。 (色調) 内器面：灰白色。 外器面：黄灰色。 (焼成) 極めて良好。
116 陶器	体部は肉厚 (厚さ 2.1cm)。	(調整) 外器面に横方向の粗い調整痕。	(胎土) 0.5 ～2 mmの砂粒をわずかに含む。 (色調) 外器面は灰色、他はレンガ色。 (焼成) 良好。

第39表　4 T出土遺物の観察表③

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
117 須恵器 土器	口縁は丸味を帯びて肥厚。 外器面の口縁下に沈線。	(調整) 横回転。	(胎土) 0.3 ～0.7mm の砂粒をわずかに含む。 (色調) 浅黄色。 (焼成) 極めて良好。
118 瓦質 擂鉢	――――	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 1mm前後の砂粒を含む。 (色調) 内器面：鈍い赤褐色。 外器面：灰色。 (焼成) 良好。
119 土師質 土器	――――	(調整) 外器面は横方向のナデ。 内器面は指による回転の痕。	(胎土) 非常に細かい雲母片を含む。 (色調) 浅黄橙色。 (焼成) 良好。
120 〃	――――	(調整) 外器面は横方向のナデ。 内器面は指による回転の痕。	(胎土) 非常に細かい雲母片を含む。 (色調) 浅黄橙色。 (焼成) 良好。
121 管状土錘	残存の長さ3.2cm。重さ1.86g。	(調整) 丁寧な造り。指ナデか?	(胎土) 多孔質。透明細砂粒をわずかに含む。もろい。 (色調) 浅黄橙色。 (焼成) 良好。
122 〃	残存の長さは3.5cm。直径1.6cm。 重さ 7.72g。	(調整) 丁寧な造り。ヘラ調整。	(胎土) 緻密。透明細砂粒を含む。 (色調) 鈍い黄橙色～灰黄褐色 (焼成) 良好。
123 〃	残存の長さ 3.2cm。 直径 1.5cm× 1.4cm。 重さ 5.67g。	(調整) 粗雑な造り (使用痕によるものかは不明)。ヘラ調整。	(胎土) 多孔質。もろい。白色砂粒を含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 不良。
124 〃	長さ 4.7cm。 直径 1.2cm。 重さ 9.86g。 ほぼ完形。	(調整) 丁寧な造り、穿孔状況不明。	(胎土) 多孔質。透明の白色細砂粒を含む。 (色調) 淡黄色～明黄色褐色。 (焼成) 不良。
125 〃	長さ 4.7cm。 直径 1.5cm× 1.3cm。 重さ 9.86g。ほぼ完形。 器形は柱状形を呈す。	(調整) 胎土の動きにより、両端を持って、ひねったようである。	(胎土) 多孔質。透明細砂粒が含まれる。もろい。 (色調) 浅黄橙色。 (焼成) 不良。
126 〃	残存の長さ3.0cm。 重さ3.03g。	(調整) 丁寧な造り。	(胎土) 多孔質でもろい。透明結晶粒を含む。 (色調) 浅黄色。 (焼成) 良好。
127 〃	残存の長さ 4.7cm。 直径 1.7cm× 1.6cm。 重さ11.41g。 ほぼ完形。	(調整) 丁寧な造り。ヘラ磨き?	(胎土) 多孔質でもろい感じ。透明細砂粒が含まれる。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 良好。
128 〃	残存の長さ5.0cm。 重さ10.06g。	(調整) 丁寧な造り。ヘラ磨きか? 穿孔部分が管状のものを引き抜いた様子が読み取れる。	(胎土) 白色細砂粒を含む。 (色調) 淡黄色。 (達成) 良好。
129 〃	残存の長さ 5.1cm。 直径 1.8cm× 1.4cm。 重さ 11.76g。	(調整) ヘラ磨きか?	(胎土) 多孔質。白色。透明の細砂粒が含まれる。 (色調) 淡黄色～明黄褐色。 (焼成) 不良。
130 〃	残存の長さ 5.3cm。 直径 1.8cm× 1.6cm。 重さ 15.11g。 器面に紐ずれの痕あり。	(調整) 丁寧な造り。	(胎土) 白色。黒色の透明細砂粒を含む。 (色調) 鈍い黄橙色～明黄褐色 (焼成) 良好。
131 〃	長さ 6.3cm。 直径 1.8cm× 1.6cm。 重さ 17.94g。 ほぼ完形	(調整) 丁寧な造り。ヘラ磨き?	(胎土) 多孔質。黒色。白色の透明細砂粒が含まれる。 (色調) 灰黄褐色～浅黄橙色。 (焼成) 良好。

第40表　4T出土遺物の観察表④



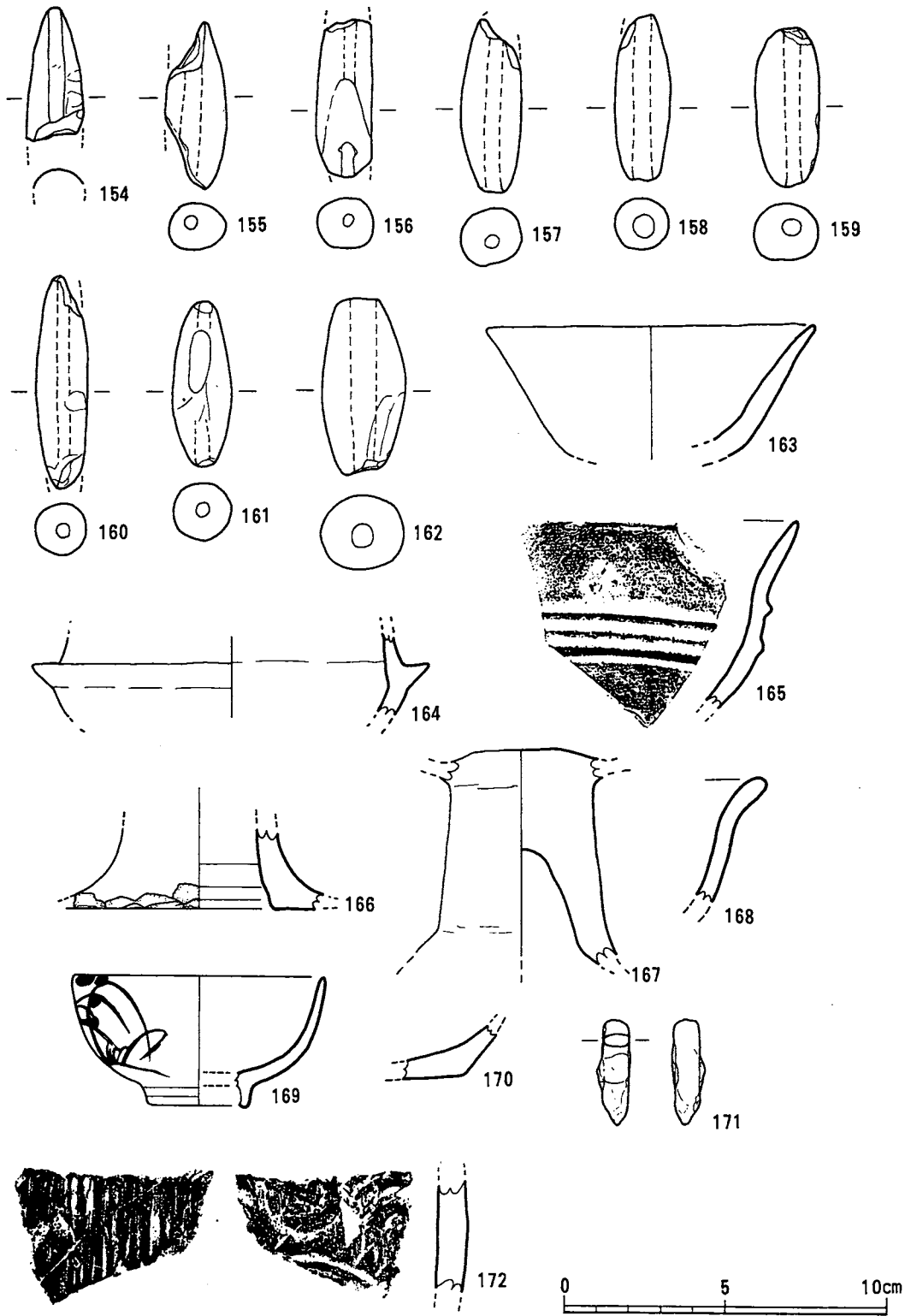
第61図　4T出土遺物の実測図⑤

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
132 管状土錘	長さ 6.3cm。 直径 1.2cm。 重さ 19.72g。 ほぼ完形。	(調整) 粗雑な造り。ヘラ磨き。	(胎土) 多孔質でもろい。透明な結晶を含む。 (色調) 橙色～淡黄色。 (焼成) 良好。
133 〃	残存の長さ6.3cm。 直径 1.8cm。 重さ 17.12g。	(調整) 丁寧な造り。	(胎土) 多孔質。白色。透明細砂粒を含む。もろい。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 不良。
134 〃	長さ 4.8cm。 直径 2.0cm。 重さ18.26g。	(調整) 丁寧な造り。指ナデ?	(胎土) 緻密。透明細砂粒を含む。 (色調) 鈍い橙色～鈍い黄橙色。 (焼成) 良好。
135 〃	残存の長さ 3.1cm。 直径 2.3cm× 2.4cm。 重さ 16.14g。	(調整) 丁寧な造り。ヘラ磨き。	(胎土) 多孔質。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 不良。
136 〃	残存の長さ 4.4cm。 直径 2.2cm× 1.9cm。 重さ 16.58g。	(調整) 粗雑な造り。ヘラ調整。	(胎土) 多孔質。もろい。白色砂粒や透明結晶粒を含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 不良。
137 青磁	残存体部は均一の厚さで口縁に至る。	(調整) ロクロによる回転ナデ。 (文様) 外器面に退化した雷文。	(胎土) 灰白色。堅緻。 (釉色) 緑色。 (焼成) 良好。気胞のようなものが見られる。
138 〃	底部は肉太で (厚さ 1.4cm)、高台の畳付きも幅広 (幅5mm) である。 復元底径 7.4cm。	(調整) ロクロによる回転ナデ。高台部は削り出し。	(胎土) 白色。堅緻。黒色の混入物。 (釉色) オリーブ灰色。厚目に施釉。 (焼成) 良好。
139 〃	底部は中央部で特に肉厚 (厚さ 1.8cm)。	(文様) 内底面に文様。	(胎土) 灰橙色。 (釉色) 灰青色。内底面と高台内は露胎。 (焼成) 良好。
140 〃	――――	(調整) ロクロによる回転ナデ。	(胎土) 灰白色。緻密。黒色の微粒子が混入。 (釉色) オリーブ灰色。やや厚目に施釉。 (焼成) 良好。円外器面に細かい貫入が走る。
141 〃	口縁はわずかに外弯する。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 白色。堅緻。 (釉色) 薄いオリーブ灰色。光沢は余りない。 (焼成) 良。内外器面に細かい貫入が走る。
142 〃	底部は肉太 (厚さ 1.5cm)。 高台の高さ 1.4cm。 復元底径 7.0cm。	(調整) 内底面は回転によるヘラ削り。高台部は削り出し。	(胎土) 灰白色。堅緻。 (釉色) オリーブ灰色。かなり厚目に施釉。外底面は露胎。 (焼成) 良好。内外器面に貫入が走る。
143 白磁	――――	(調整) ロクロによる回転ナデ、高台内部はナデ。畳付きはヘラ削り。	(胎土) 白色。堅緻。 (釉色) 白色半透明。畳付きを除き全面に施釉。 (焼成) 良好。
144 青白磁	体部は大きく開き内弯する。 高台は若干、外側へ張り出す。 復元口径 10.0cm・器高 2.6cm・復元底径 5.0cm。	(調整) ロクロによる回転ナデ。高台は削り出し。	(胎土) 精良。 (釉色) オリーブ灰色。光沢あり。 (焼成) 良好。
145 古銭	永楽通宝。直径 2.5cm、輪の幅 0.15cm、孔 一辺 0.5cmの方向。	――――	裏面はほぼ全面に錆が付着する。
146 土師器	復元口径 5.1cm。	(調整) 横方向のナデ。外底面に糸切り痕。	(胎土) 軟質でもろい。緻密。混入物なし。 (色調) 橙色。 (焼成) 良好。

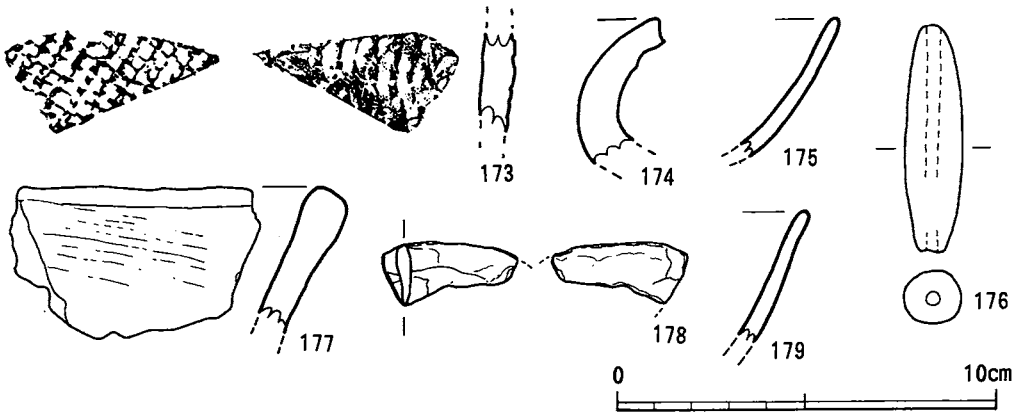
第41表　4T出土遺物の観察表⑤

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
147 須恵器	――――	（調整）横方向のナデ。外底面に糸切り痕。	（胎土）0.3 ～1㎜ の砂粒をわずかに含む。 （色調）灰色。 （焼成）良好。
148 〃	体部は外弯する。	（調整）横方向のナデ。	（胎土）0.5 ～1.5㎜ の砂粒をわずかに含む。 （色調）内器面：灰オリーブ色。 外器面：灰色。 （焼成）良好。
149 瓦質土器	外器面は口縁近くでやや外反し、内器面は口縁でやや窪む。	――――	（胎土）軟質で軽い、非常に緻密で混入物は少ない。 （色調）黄灰色。 （焼成）良好
150 須恵器	――――	（調整）内器面に平行、外器面に格子目の叩き痕あり。	（胎土）雲母片、0.3～1.5㎜の砂粒を含む。 （色調）内器面：鈍い黄橙色 外器面：鈍い橙色。 （焼成）不完全で、須恵器になりきっていない。
151 管状土錘	残存の長さ 2.4cm。 直径 1.3cm。 重さ 3.66g。	（調整）丁寧な造り。ヘラ調整。	（胎土）多孔質。もろい。 （色調）淡赤橙色～鈍い橙色。 （焼成）良好。
152 〃	残存の長さ 3.4cm。 直径 1.2cm× 1.1cm。 重さ 4.44g。	（調整）丁寧な造り。指ナデ？	（胎土）緻密。 （色調）灰白色～灰色。 （焼成）良好。
153 〃	残存の長さ 3.6cm。 直径 1.6cm。 重さ 9.19g。	（調整）丁寧な造り。ヘラ調整。	（胎土）白色や黒色の透明細砂粒を含む。 （色調）浅黄橙色。 （焼成）良好。
154 〃	残存の長さ4.0cm。 重さ5.43g。	（調整）丁寧な造り。穿孔は管状の工具で、ややねじりながら押し込んだものと思われる。 指ナデ。	（胎土）白色の透明細砂粒を含む。 （色調）淡黄色。 （焼成）良好。
155 〃	残存の長さ 5.1cm。 直径 1.8cm× 1.4cm。 重さ 10.18g。	（調整）丁寧な造り。ヘラ調整。	（胎土）多孔質。白色。 （色調）鈍い橙色。 （焼成）良好。
156 〃	残存の長さ 4.8cm。 直径 1.8cm× 1.5cm。 重さ 13.76g。	（調整）丁寧な造り。	（胎土）多孔質。もろい。 （色調）鈍い黄橙色。 （焼成）不良。
157 〃	残存の長さ 2.7cm。 直径 1.9cm× 1.7cm。 重さ 16.14g。	（調整）丁寧な造り。ヘラ調整。	（胎土）多孔質。 （色調）鈍い黄橙色。 （焼成）不良。
158 〃	長さ 5.1cm。 直径1.7cm× 1.5cm。 重さ 11.34g。 ほぼ完形。	（調整）丁寧な造り。指ナデ？	（胎土）多孔質。透明細砂粒を含む。 （色調）淡黄色。 （焼成）良好。
159 〃	残存の長さ 4.8cm。 直径 2.0cm× 1.8cm。 重さ 13.83g。	（調整）丁寧な造り。紐の痕らしきものが付着。	（胎土）多孔質。透明結晶粒を含む。 （色調）浅黄色。一部褐灰色。 （焼成）良好。
160 〃	残存の長さ 6.6cm。直径 1.6cm。 重さ 15.35g。細身の土錘。	（調整）丁寧な造り。指ナデ？	（胎土）気胞あり。 （色調）灰色。 （焼成）良。
161 〃	残存の長さ 5.0cm。 直径 1.9cm× 1.7cm。 重さ 12.17g。	（調整）ヘラ調整。	（胎土）多孔質。もろい。透明細砂粒を含む。 （色調）淡黄色。 （焼成）不良。
162 〃	長さ 5.4cm。直径 2.7cm× 2.3cm。重さ 28.82g 大型の土錘。ほぼ完形。	（調整）丁寧な造り。	（胎土）透明結晶粒を多く含む。 （色調）褐色～灰黄色。 （焼成）良好。

第42表　4Ｔ出土遺物の観察表⑥



第62図　4T出土遺物の実測図⑥



第63図　4T出土遺物の実測図⑦

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
163 土師器 (碗)	体部は内弯し、口縁部近くでやや外弯する。口縁直口。 復元口径 10.2cm。	(調整) 横方向の回転ナデ。	(胎土) 混入物なし。精良。 (色調) 橙色。 (焼成) 良好。
164 須恵器 (蓋坏身)	――――	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 0.3 ～2㎜の砂粒をわずかに含む。 (色調) 灰色。 (焼成) 良好。
165 須恵器 (高坏片)	残存体部は内弯し、中途でやや外弯する。 口縁直口。	――――	(胎土) 1㎜前後の砂粒をわずかに含む。 (色調) 灰色。 (焼成) 良好。
166 須恵器	――――	(調整) ロクロ調整、外底面は糸切りと思われる。	(胎土) 白色細砂粒。気泡あり。 (色調) 内器面：オリーブ灰色 外器面：暗緑灰色。
167 土師器 (高坏)	――――	(調整) 内器面に指頭痕。外底面の所々に円が残る。	(胎土) 多孔質で、もろい。砂粒を多く含む。 (色調) 浅黄橙色。 (焼成) 普通。
168 青磁	体部は口縁でわずかに外弯。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 白色。緻密。 (釉色) 緑色。かなり厚目に施釉。 (焼成) 良好。
169 染付 (碗)	体部は大きく内弯。 口縁はやや直口気味。 復元口径 8.0cm・器高 4.0cm・復元底径 3.2cm。	(調整) ロクロによる回転ナデ。 (文様) 呉須による曲線文様。	(胎土) くすんだ灰色。緻密。 (釉色) くすんだ灰色。高台の畳付きのみ露胎。 (焼成) 良好。高台内にトチが多量に付着。
170 土師器	――――	――――	(胎土) 精良。 (色調) 褐灰色。 (焼成) 良好。
171 鉄器(楔)	完形。長さ 3.2cm。幅 0.9cm。厚さ 0.3cm。	――――	――――
172 須恵器	――――	(調整) 内器面に弧状、外器面に平行の叩き痕あり。	(胎土) 0.5 ～1㎜の砂粒をわずかに含む。 (色調) 灰色。 (焼成) 良好。
173 〃	――――	(調整) 内器面に弧状、外器面に格子目の叩き痕あり。	(胎土) 1㎜前後の黒い粒を含む。 (色調) 黄灰色。 (焼成) 良好。
174 須恵器 (短頸壺)	体部の口縁は大きく外弯する。	(調整) 横方向のナデ。	(胎土) 0.5 ～1㎜ の砂粒を含む。 (色調) 灰色（一部、灰白色）。 (焼成) 極めて良好。

第43表　4T出土遺物の観察表⑦

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
175 青白磁	体部はわずかに内弯。	(調整) 内器面：ロクロによる回転ナデ。外器面：回転ヘラ削りの後、ロクロによる回転ナデ。	(胎土) 灰色。堅緻。 (釉色) 灰色。半透明。 (焼成) 良好。
176 管状土錘	長さ 6.0cm。 直径 1.5cm× 1.4cm。 重さ 12.06g。ほぼ完形。	(調整) 丁寧な造り。	(胎土) 気泡あり。 (色調) 淡黄色。 (焼成) 良好。
177 雑器	口縁はやや肥厚 (厚さ 1.2cm)。 口唇部は扁平 (幅 7mm)。	(調整) 内外器面に刷毛目が残る。口唇部はナデ。	(胎土) 1mm程の砂粒を多く含む。 (色調) 赤茶褐色。 (焼成) やや不良。
178 鉄器(刀子)	長さ 3.6cm。幅 1.6cm。 厚さ 0.4cm。	――――	――――
179 陶器	残存の体部は口縁で、ごくわずかに外弯する。	(調整) ロクロによる回転ナデ。	(胎土) 灰色。堅緻。 (釉色) 灰白色。極めて薄い施釉。 (焼成) 良好。

第44表　4 T出土遺物の観察表⑧

5．5トレンチ出土の遺物

〔現水田層より出土〕

180は青白磁である。体部は大きく内弯し、復元口径 9.0cmを測る。

181は土師器坏で、外底面はヘラ切りである。 182・183 は中世雑器で 183は擂鉢に利用されている。条線は密に掻かれ、一単位の数は不明。 184は須恵器で、叩き痕は平行である。

185は近世陶器で、青色釉の文様がある。 186～188 は近世染付皿である。いずれも呉須による文様が描かれている。

〔洪水層より出土〕

189～193 は青磁である。 189は口縁で肥厚し、口唇部はやや扁平である。復元口径 9.0cmを測る。 190は稜花皿である。 191・192 には退化した細蓮弁文様が描かれている。釉色は 190が明るい緑灰色で、他はオリーブ灰色を呈する。 194は白磁である。体部は口縁でやや外弯し、復元口径 8.3cmを測る。

195～199 は須恵器で、195・197 の叩き痕は内器面が同心円である。196は坏で復元口径 8.1cm、器高 2.2cm、復元底径 4.0cmを測り、外底面には糸切り痕が残る。同じく 198の外底面にも糸切り痕が残る。 199の叩き痕は格子目である。 200は須恵系土器で、外底面にヘラ切り痕が残る。 201は土師器で、外底面に糸切り痕が残る。内底面の端部周縁を細かな刻み目が放射状に半周する。

202～208 は管状土錘である。 202～206 が小型で、207・208は大型である。

209～211 は鉄器で、 211は刀子と思われる。

〔埋没水田より出土〕

212～217 は青磁である。 212は復元口径16.0cmを測り、退化した細蓮弁文様が描かれている。213 にはヘラ状工具で浅く描かれた蓮弁文様がある。 214は香炉の類と思われる。釉色は 215 と 217が緑灰色で、他はオリーブ灰色である。 218・219 は白磁である。 218の底部は中央部で肥厚し、 219は外底面の中央部でやや凸となる。

220～227 は土師器の皿と坏である。 220はヘラ切りの皿で、他は糸切りの坏である。221 の内器面は、ロクロ痕が小さな隆起帯となっている。222はややラッパ状の体型をなし、口径7.4cm、器高 2.7cm、底径 4.7cmを測る。 223の外底はやや上げ底となる。

226～228 は須恵器である。叩き痕は 226が同心円で、 227は格子目と円形、 228は平行である。 229は中世雑器で、外器面に平行の叩き痕があり、堅く焼き締まっている。

230・231 は須恵系の土器である。230は非常に粗い造りで、器面の凹凸を消していない。231の口唇部は扁平で、やや肥厚する。 232は土師系土器で、口縁直口である。 233は瀬戸系の陶器で、釉色は緑灰色を呈する。 234・235 は鉄釘で、234 が角釘、235 は平釘である。

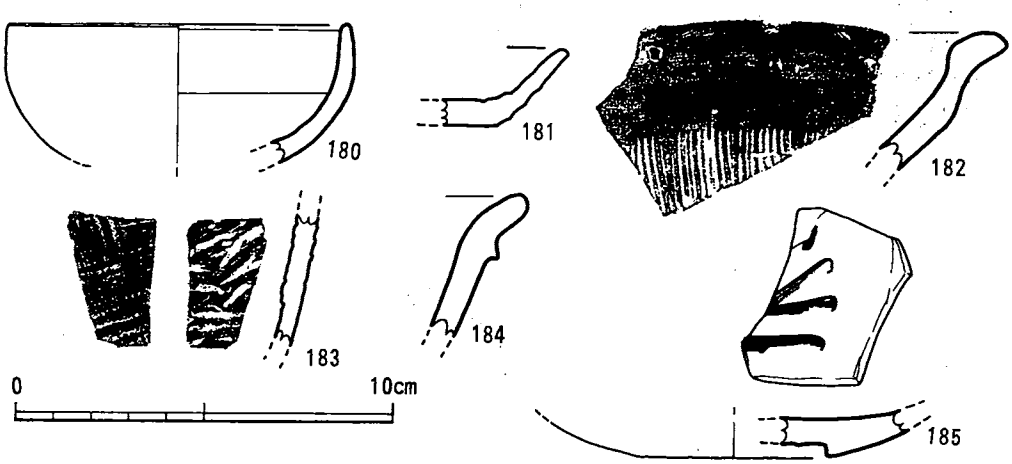
236～246 は管状土錘である。小型は 236～242 で、大型は 243～246 である。その中で 246 は長さ 6.4cm・直径 2.0×1.8 cmを測り、大型の長身タイプである。同じく大型でも243 と245 はあきらかにずんどうタイプである。

〔埋没水田の下位部分より出土〕

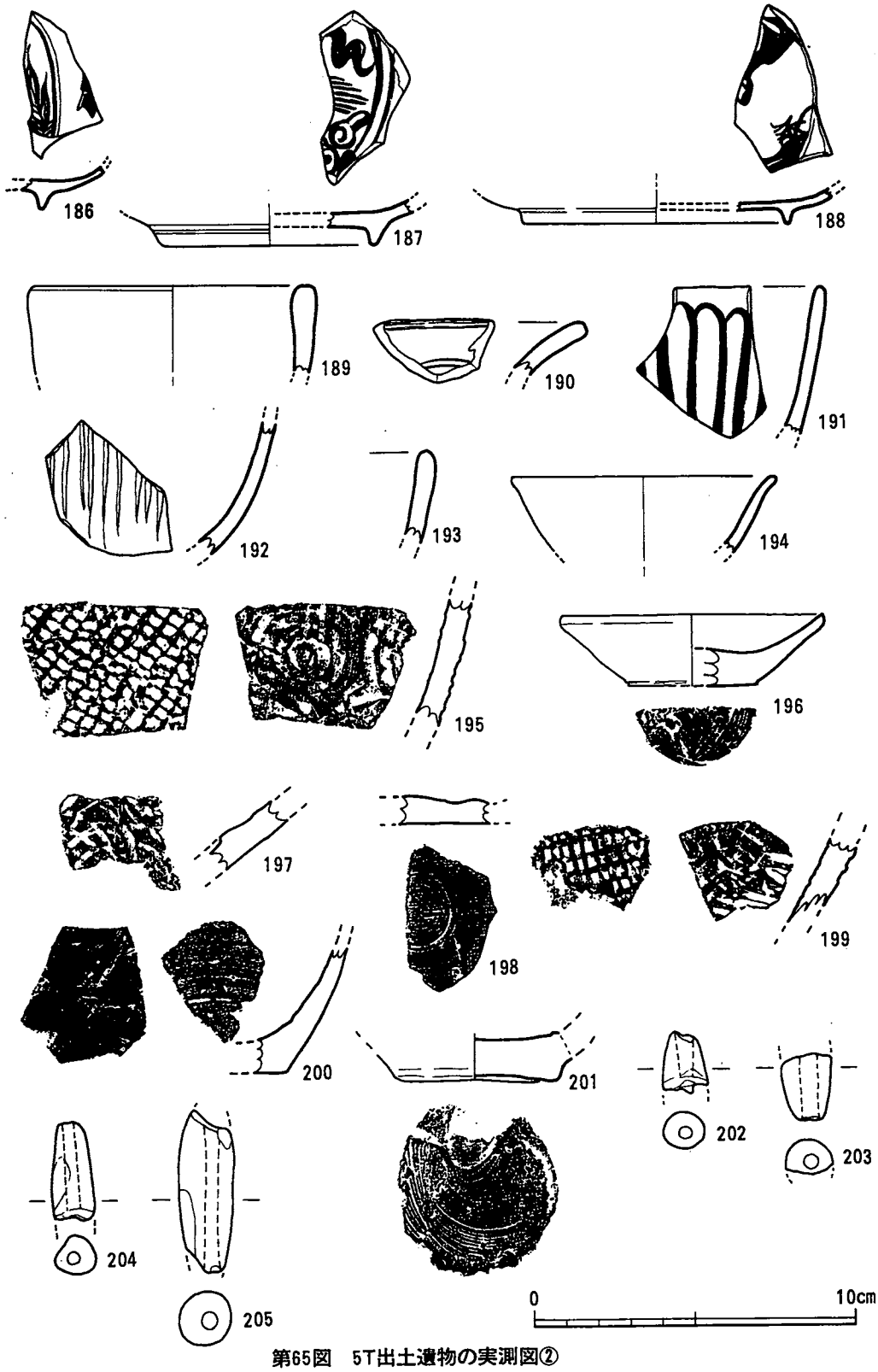
247は瓦質の擂鉢である。残存体部は中途で大きく外弯する。条線の一単位は不明。248・249 は須恵器である。248 は口縁下部で「く」の字に屈曲、曲部をつまみ出している。249 は平行・格子目の叩き痕であるが、外器面にはさらに横方向のナデが加えられる。

〔近世墓坑から出土〕

ＳＥ１１： 250の青白磁が出土した。体部は大きく開き、わずかに内弯する。復元口径12.1cmを測る。



第64図　5T出土遺物の実測図①



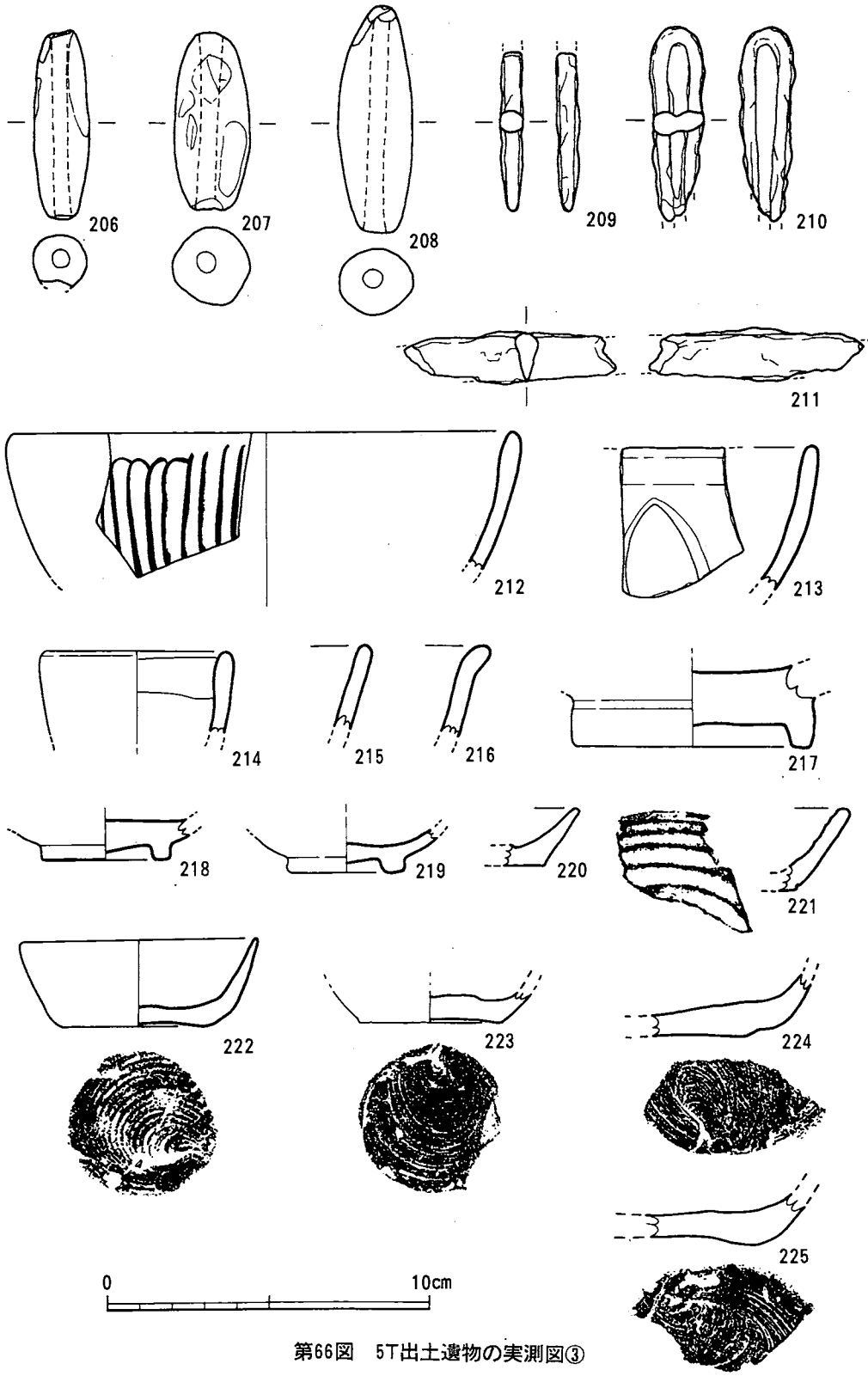
第65図　5T出土遺物の実測図②

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
180 青白磁	体部は大きく内弯する。 復元口径 9.0cm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。	（胎土）灰色。堅緻。 （釉色）無色透明、内器面の一部に露胎の部分あり。さらに、内器面の施釉には、ややムラが見られる。 （焼成）良好。
181 土師器 （坏）	――――	（調整）ロクロ調整。ヘラ状工具を使用していたと思われる。 外底面はヘラ切り。	（胎土）白色細砂粒を包む。 気泡あり。 （色調）淡橙色～灰白色。 （焼成）良好。
182 中世雑器	体部はわずかに外反し、外器面の上位に突帯が付く。	（調整）丁寧。ロクロ回転によるナデ。	（胎土）堅く締まっている。 （色調）紫黒色。 （焼成）良好。
183 中世雑器 （擂鉢）	体部は外弯し、口唇部も半楕円形状に肥厚する。	（調整）ロクロ回転によるナデ。 内器面の口縁下に沈線（縦位）を櫛目状に施す。 条線の一単位は不明。	（胎土）緻密。 （色調）灰色。 （焼成）良好。
184 須恵器	――――	（調整）内外器面に平行の叩き目あり。	（胎土）白色細砂粒を含む。 （色調）灰色。 （焼成）堅く焼き締まる。
185 陶器 （染付）	底部は碁笥底。	（調整）底部はヘラ削り。他の器面はナデ？ （文様）内器面に青色釉の文様。	（胎土）白色。緻密。 （釉色）白色半透明。外器面に限り、釉は五角形になるように施されている。底部は露胎。 （焼成）良好。内外器面に貫入が走る。
186 染付	高台は直立。	（調整）削り高台。 （文様）内底面に施文。高台の外縁に2条の輪線。	（胎土）白色。少量の黄褐色土が混入。 （色調）白色。呉須の色は青黒色。畳付きから高台両側にかけて露胎。 （焼成）良好。
187 〃	復元高台径 6.6cm。	（調整）削り高台。 （文様）内底面に呉須による文様、高台外縁の上位に輪線。	（胎土）白色。精良。 （釉色）青黒色。 （焼成）良好。
188 〃	高台は直立。 底部は薄壁（厚さ2mm）。 復元底径 8.4cm。	（調整）削り高台。 内底面に施文。	（胎土）白色。薄褐色が混入。 （色調）白色。呉須の色は青黒色。 （焼成）極めて良好。
189 青磁	体部は口縁で肥厚（厚さ8mm）。 口唇部はやや扁平。 復元口径 9.0cm。	（調整）ロクロ回転によるナデ。	（胎土）白色。堅緻。 （釉色）淡いオリーブ灰色（光沢あり）、内器面の施釉にはムラがある。 （焼成）良。貫入が走る。
190 青磁 （稜花皿）	――――	（調整）ロクロによる回転ナデ。 （文様）口唇部の内側下に2条の沈線、さらにその下に細い沈線を巡らす。	（胎土）灰白色。堅緻。 （釉色）明るい緑灰色。薄目に施釉。 （焼成）良好。貫入が走る。
191 青磁 （碗）	残存体部の器壁は下位から、口縁まで均一（厚さ 4.5cm）。 体部はわずかに内弯する。	（調整）ロクロによる回転ナデ。 （文様）外器面に細蓮弁文様。	（胎土）灰白色。堅緻。 （釉色）オリーブ灰色。均一の厚さで施釉。 （焼成）良好。貫入が走る。
192 青磁	――――	（調整）ロクロによる回転ナデ。 （文様）外器面に細蓮弁文様。 内器面にも文様があるが、極めて薄く図化できない。	（胎土）灰色。非常に堅緻。 （釉色）オリーブ灰色。やや厚目に施釉、ムラなし。 （焼成）良好。
193 〃	口唇部はやや肥厚する。	（調整）ロクロによる回転ナデ。	（胎土）白色。やや粒が目立つ。 （釉色）明るい緑灰色。施釉にムラがあり、気泡が認められる。 （焼成）良好。内外器面に貫入が走る。

第45表　5T出土遺物の観察表①

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
194 白磁 （碗）	体部は口縁でやや外弯する。 復元口径 8.3cm。	（調整）ロクロによる丁寧な回転ナデ。	（胎土）白色。 （色調）白色。やや薄いオリーブ色が混じる。 （焼成）良好。
195 須恵器	――――	（調整）内外器面に叩き痕あり。内器面：同心円。外器面：叩き目は粗雑で粘土が乾かないうちに叩いたか、焼成が良くなかったものと思われる。	（胎土）白色細砂粒と炭化物が混入。外器面に気泡多し。 （色調）内器面：黄灰色。 外器面：灰白色。 （焼成）不良。
196 〃	底部は中央部寄りで肥厚（厚さ1.1cm）し、体部に向って漸次、薄壁となる。 体部は直線的に大きく開く。口唇部はやや内傾。 復元口径 8.1cm・器高 2.2cm・復元底部 4.0cm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。外底面は糸切り。	（胎土）白色細砂粒が若干含まれる。 （色調）内器面：黒褐色～灰褐色。外器面：灰褐色。 （焼成）良好。焼き締められている。
197 〃	――――	（調整）内器面に同心円の叩き痕あり。	（胎土）白色細砂粒。水晶結晶片を含む。気泡あり。 （色調）内器面：灰黄色。 外器面：灰白色。 （焼成）良好。
198 〃	――――	（調整）外底面は糸切り。	（胎土）水晶結晶を含む。 （色調）内器面：鈍い黄橙色。 外器面；灰黄色。 （焼成）良好。
199 〃	――――	（調整）内外器面に格子目の叩き痕あり。	（胎土）白色細砂粒を含む。内部の粘土を別の粘土で挟んでいる。 （色調）鈍い橙色。胎土内は灰色。 （焼成）良好。
200 須恵質土器	――――	（調整）ロクロによる調整。外底面はヘラ切り。	（胎土）白色細砂粒を含む。堅く焼き締まる。 （色調）灰白色。 （焼成）良好。
201 土師器	底部は肉太（厚さ 1.1cm）。 外底はやや上げ底。 底径 5.2cm。	（調整）内底面：ロクロによる調整。端部周縁に細かな刻目が放射状に入る（約半周）。 外底面：糸切り痕。	（胎土）白色細砂粒を含む。 （色調）内器面：灰褐色。 外器面：褐灰色。 （焼成）良好。
202 管状土錘	残存の長さ 1.3cm。 直径 1.3cm× 1.1cm。 重さ 2.38g。	（調整）ヘラ調整？	（胎土）多孔質。白色細砂粒を含む。一部に長さ8mm程の石粒が含まれる。 （色調）鈍い橙色。 （焼成）良好。
203 〃	残存の長さ2.0cm。重さ3.24g。	（調整）丁寧な造り。ヘラ調整？	（胎土）白色細砂粒を含む。 （色調）鈍い黄橙色～灰黄褐色。 （焼成）良好。
204 〃	残存の長さ 3.0cm。 直径 1.2cm。 重さ 4.60g。	（調整）丁寧なヘラ調整？	（胎土）白色。透明細砂粒を含む。 （色調）褐灰色。 （焼成）良。
205 〃	残存の長さ 5.0cm。 直径 1.7cm× 1.6cm。 重さ 10.82g。	（調整）ヘラ調整。	（胎土）気泡あり。白色。透明細砂粒がかすかに含まれる。 （色調）鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
206 〃	直径 1.7cm。 重さ 13.75g。 ほぼ完形	（調整）丁寧な造り。ヘラ調整。	（胎土）透明細砂粒を含む。 （色調）浅黄橙色。 （焼成）良好。
207 〃	長さ 5.4cm。直径2.4cm。 重さ2 4.25g。一部欠損あり。 大型の土錘。ほぼ完形。	（調整）ヘラ調整？　指ナデ？ 端部も外器面から直接、調整していると思われる。	（胎土）透明白色や黒色の細砂粒が含まれる。 （色調）鈍い橙色。 （焼成）良好。

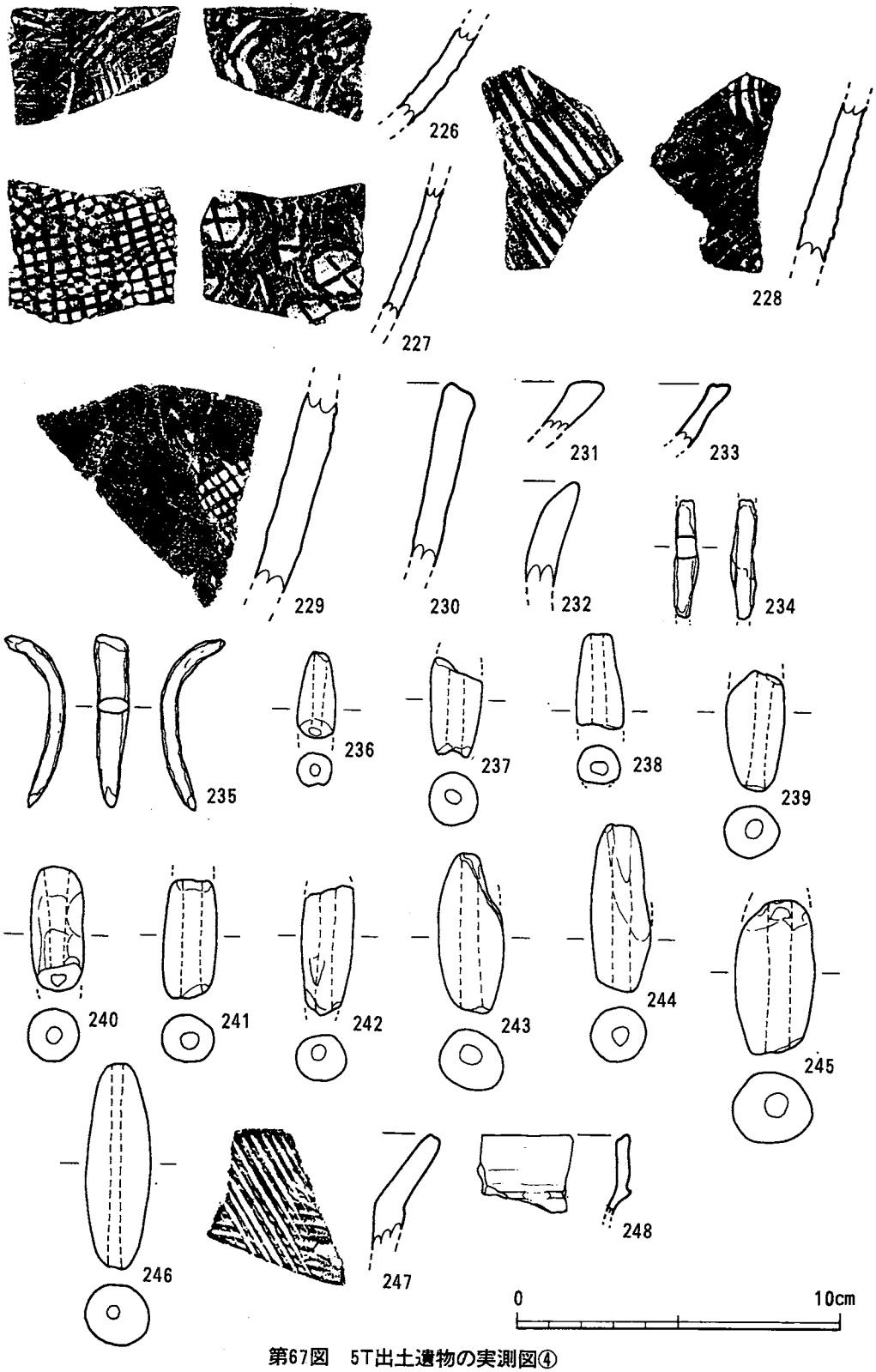
第46表　5T出土遺物の観察表②



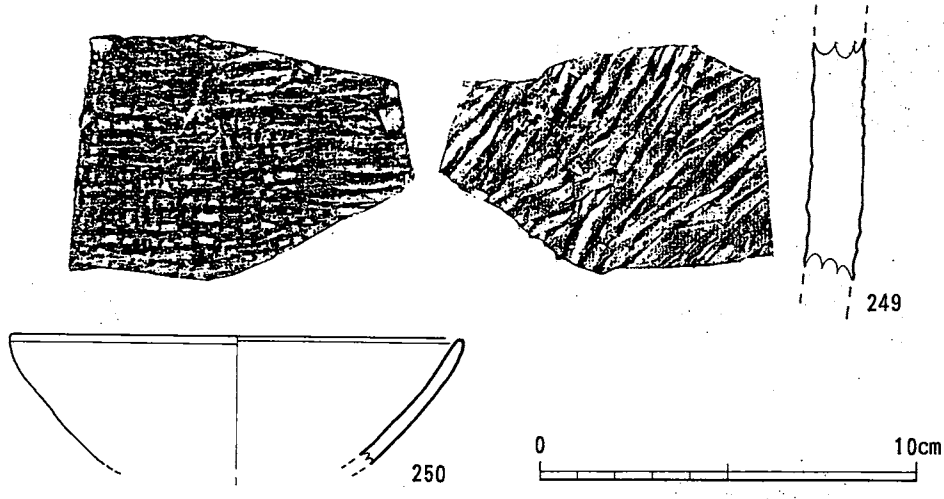
第66図　5T出土遺物の実測図③

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
208 管状土錘	長さ 7.0cm。 直径2.3×2.0cm。 重さ 24.43g。 大型の土錘。ほぼ完形。	(調整) 丁寧な造り。指ナデ?	(胎土) 透明や黒色細砂粒を含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 良好。
209 鉄　釘	丸釘 (頭部欠損)。 残存の長さ 4.9cm。幅 0.75cm。 厚さ 0.75cm。	――――	――――
210 鉄　器	鉄の鎖? 残存の長さ 6.0cm。幅 1.75cm。 厚さ 0.8cm。	――――	――――
211 鉄器(刀子)	長さ 6.5cm。幅 1.6cm。厚さ 0.7cm。	――――	――――
212 青　磁 (碗)	体部はやや内弯し、口唇部は肥厚する (厚さ 6mm)。 復元口径 16.0cm。	(調整) ロクロによる回転ナデ。 (文様) 退化した細蓮弁文様。	(胎土) 白色。緻密。 (釉色) 淡いオリーブ灰色。内器面はやや厚目に施釉。 (焼成) 良好。内外器面に細かい貫入が走る。
213 青　磁	体部はやや内弯。体部は均一の厚さで口縁に至る (厚さ 6mm)。	(調整) ロクロによる回転ナデ。 (文様) 外器面にヘラ状工具で浅く描かれた蓮弁文様。	(胎土) 灰白色。非常に堅緻。 (釉色) オリーブ灰色。ムラなく施釉。 (焼成) 良好。内外器面に貫入が走る。
214 〃	口縁部はやや肥厚。 香炉の類と思われる。 復元口径 6.0cm。	(調整) ロクロによる回転ナデ。 口唇部の内側直下に白っぽい稜線。	(胎土) 白色。非常に堅緻。 (釉色) やや、くすんだ感じの淡いオリーブ灰色。外器面に厚く施釉。 (焼成) 良好。内外器面に貫入が走る。
215 〃	体部は均一の厚さ (5mm) で口縁に至る。	(調整) ロクロによる回転ナデ。	(胎土) 灰白色。堅緻。 (釉色) 明るい緑灰色。細かい気泡が全面に認められ、あまり光沢がない。 (焼成) 良好。
216 〃	体部は口縁でやや外弯する。	(調整) ロクロによる回転ナデ。	(胎土) 灰白色。堅緻。 (釉色) オリーブ灰色。やや厚目に施釉。 (焼成) 良好。内外器面に細かい貫入が無数に走る。
217 〃	底部は肉太 (厚さ 1.6cm) で扁平。底径 7.2cm。	(調整) ロクロによる回転ナデ。 高台内面と外底部はヘラ削り。	(胎土) 灰白色。緻密。 (釉色) 緑灰色を薄く施釉。高台の内底部と内縁は露胎。 (焼成) 良好。
218 白　磁	底部は中央部で肥厚 (厚さ 1.0cm)。畳付きは扁平 (幅 5mm)。 底径 4.0cm。	(調整) 内器面はロクロによる回転ナデ。高台部は回転ヘラ削り。	(胎土) 白色。非常に堅緻。 (釉色) 灰白色半透明。高台部内面は露胎。 (焼成) 良好。
219 白　磁 (皿)	外底面の中央はやや凸。	(調整) ロクロによる回転ナデ。 畳付きと高台の端はヘラ削り。	(胎土) 白色。 (釉色) 白黄色半透明。外器面の下位は露胎。 (焼成) 良好。
220 土師器	――――	(調整) ロクロによる調整。ヘラ状工具を使用? 外底面はヘラ切り。	(胎土) 気泡あり。白色細砂粒を含む。 (色調) 淡橙色～灰白色。 (焼成) 良好。
221 〃	――――	(調整) ロクロ調整。内器面はロクロの痕が、小さな隆起帯となっている。外底面に糸切り痕。	(胎土) 水晶結晶片を含む。 (色調) 鈍い黄橙色～鈍い褐色。 (焼成) 良好。
222 〃	完形品。小型の坏でラッパ状の体型。口径 7.4cm。器高 2.7cm。 底径 4.7cm。	(調整) ロクロ調整。外底面に糸切り痕。	(胎土) 水晶結晶片と黒雲母を含む。 (色調) 鈍い橙色。 (焼成) 良好。

第47表　5T出土遺物の観察表③



第67図　5T出土遺物の実測図④



第68図　5T出土遺物の実測図⑤

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
223 土師器	底径4.5cm。 外底はやや上げ底。	（調整）外底面は糸切り痕。	（胎土）軟質。緻密。混入物少なし。 （色調）浅黄橙色。 （焼成）良好。
224 〃	――――	（調整）ロクロ調整。外底面に糸切り痕。立ち上がり部分で若干、段になっている。	（胎土）水晶結晶片を含む。外器面は焼き締めがきているが、内器面はもろい感じ。 （色調）内器面：橙色。 外器面：鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
225 〃	――――	（調整）ロクロ使用による横ナデ。外底面に糸切り痕。	（胎土）かなり堅緻。 （色調）橙色。 （焼成）極めて良好。
226 須恵器	――――	（調整）内外器面にヘラによる調整痕と、同心円の叩き痕あり。	（胎土）白色細砂粒を長径8mm程の小石を含む。堅く焼き締まっている。 （色調）灰色。 （焼成）良好。
227 〃	――――	（調整）内器面に円形、外器面に格子目の叩き痕あり。	（胎土）白色細砂粒を含む。堅く焼き締まる。 （色調）内器面：橙色。 外器面：灰色。 （焼成）良好。
228 〃	――――	（調整）外器面に平行の叩き痕あり。	（胎土）白色細砂粒を含む。長径1cm以上の小石も含まれる。堅く焼き締まっている。 （色調）内器面：灰黄褐色。 外器面：鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
229 中世雑器	――――	（調整）内器面：指ナデ。 外器面：ヘラ削り後に一部、格子目の叩き。	（胎土）白色細砂粒と水晶結晶片を含む。堅くて焼き締まっている。 （色調）鈍い橙色。 （焼成）良好。
230 須恵系	体部は直線的に伸びる。口唇部は扁平でやや肥厚（厚さ 1.0cm）し、若干窪む。	（調整）須恵器としては非常に粗く、器面の凹凸を消していない。	（胎土）非常に硬質で緻密。細砂粒と黒色鉱物が、わずかに含まれる。 （色調）内器面：鈍い橙色。 外器面：灰黄褐色。 （焼成）極めて良好。

第48表　5T出土遺物の観察表④

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
231 須恵系	口唇部は扁平でやや肥厚（幅1.0cm）する。	（調整）ロクロ調整。	（胎土）気泡が見られる。白色細砂粒を含む。焼き締めがきいている。 （色調）灰白色。（焼成）良好。
232 土師器	残存の体部は内器面で外弯し、半三日月形状を呈する。 口縁直口。	――――	（胎土）非常に緻密で軽質。 （色調）内器面：鈍い黄橙色。 外器面：浅黄橙色。(焼成)良好。
233 陶器	残存の体部は外器面でやや外弯。 口唇部はわずかに窪むが、ほぼ扁平（幅6mm）。	（調整）ロクロによる回転ナデ。	（胎土）灰白色。堅緻。 （釉色）緑灰色。使用痕が目立つ。（焼成）良好。
234 鉄釘 （角釘）	残存の長さ 3.6cm。幅 0.75cm。 厚さ0.5cm（両端部を欠損）。	――――	――――
235 鉄釘 （平釘）	残存の長さ 5.5cm。幅 0.95cm。 厚さ 0.58cm。弯曲し、楔の可能性もある。	――――	――――
236 管状土錘	残存の長さ 2.6cm。 直径 1.1cm× 0.9cm。 重さ 2.78g。	（調整）指ナデ。	（胎土）透明や白色細砂粒を含む。 （色調）黄灰色。（焼成）良好。
237 〃	残存の長さ 3.0cm。直径 1.6cm。 × 1.5cm。重さ 6.45g。	（調整）丁寧なナデ。	（胎土）透明砂粒を含む。 （色調）灰白色。（焼成）良好。
238 〃	残存の長さ 2.8cm。重さ3.86g。	（調整）指ナデ。	（胎土）透明細砂粒を含む。 （色調）浅黄橙色。（焼成)良好。
239 〃	残存の長さ 3.7cm。直径 1.7cm × 1.5cm。重さ 8.79g。	（調整）粗雑な造り、ヘラ調整。	（胎土）透明細砂粒を含む。 （色調）鈍い黄橙色。(焼成)良好。
240 〃	残存の長さ 3.7cm。直径 1.6cm。 重さ 9.20g。	（調整）ヘラ削り後。指ナデ。	（胎土）透明細砂粒を含む。 （色調）褐灰色。（焼成）良好。
241 〃	残存の長さ 3.6cm。直径 1.6cm × 1.4cm。重さ 8.02g。	（調整）丁寧な造り。ヘラ調整。	（胎土）透明細砂粒を含む。 （色調）浅黄色。（焼成）良好。
242 〃	残存の長さ 4.0cm。直径 1.6cm ×1.4cm。重さ 8.94g。	（調整）丁寧な造り。ヘラ削り	（胎土）白色細砂粒を含む。 （色調）鈍い黄橙色。(焼成)良好。
243 〃	残存の長さ 4.9cm。直径 2.1cm ×1.7cm。重さ 15.55g。 大型の土錘。	（調整）丁寧な造り。指ナデ。	（胎土）白色細砂粒と透明細砂粒を含む。 （色調）鈍い黄橙色。(焼成)良好。
244 〃	残存の長さ 5.1cm。直径 1.7cm。 重さ 11.34g。	（調整）指ナデ。	（胎土）透明細砂粒を含む。もろい。 （色調）淡黄色。（焼成）良好。
245 〃	残存の長さ 4.5cm。直径 2.5cm × 2.1cm。重さ 21.01g。 大型の土錘。	（調整）ヘラ調整。	（胎土）透明細粒を含む。 （色調）浅黄色。（焼成）良好。
246 〃	完形。長さ 6.4cm。直径 2.0cm × 1.8cm。重さ 19.68g。	（調整）丁寧な造り。指ナデ。	（胎土）透明細砂粒を含む。 （色調）淡黄色。（焼成）良好。
247 瓦質 （擂鉢）	残存の体部は中途で大きく外弯する。体部の伸びは直線的。	（調整）横方向のナデ。	（胎土）白色細砂粒・黒雲母片・水晶結晶を含む。締まった感じ。 （色調）内器面：明黄褐色、外器面：明褐色。（焼成）良好。
248 須恵器	口縁下部で「く」の字に屈曲し、屈曲部をつまみ出している。 口唇内部に段が1条入る。	（調整）ロクロ調整。	（胎土）白色細砂粒と黒色細砂粒を含む。 （色調）灰白色。（焼成）良好。
249 〃	――――	（調整）内器面に平行の叩き痕あり。外器面は格子の叩き目のあとから、横方向のナデ。	（胎土）白色細砂粒を含む。堅く焼き締まっている。 （色調）灰色。（焼成）良好。
250 青白磁	体部は大きく開き、わずかに内弯する。 復元口径 12.1cm。	（調整）ロクロによる回転ナデ。	（胎土）灰白色。堅緻。 （釉色）白色半透明。 （焼成）良好。

第49表．5Ｔ出土遺物の観察表⑤

第２節　縄文式土器

１．４トレンチ出土の縄文式土器

〔Ⅷ層より出土〕

251 ～253 は口縁下に沈線がある。 251は粘土の貼り付けにより口唇部が肥厚し、直下に２条の沈線が巡る。253 は沈線に加えて口縁下に貼り付けの突帯がある。突帯には斜行する刻みが入る。

254 ～ 262は体部がほぼ均一の厚さで口縁部に伸びており、やや大型で厚壁の深鉢土器である。器形の代表例として 262が掲げられる。口唇部は概して扁平の傾向にある。 254は横方向の条痕に横方向の磨きが重なり、 255は横とやや斜め方向の条痕が残る。 257は内外器面に貝殻かと思われる工具による条痕が残る。 258は残存体部が大きく屈曲する。260 は焼成不良で、横方向に粗い条痕を残す。 262は復元口径39.0cmで、胴部はやや内側へ屈曲する。

263 は口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ、山形口縁としている。 264も同様の造りであるが、山形口縁にまでは至っていない。

265 ～268 は、やや小型で薄壁の鉢形土器で、器形は 267によってほぼ知る事ができる。265は口唇部が扁平となっている。 267は復元口径17.0cmを測り、口縁直口である。体部はラッパ状に開き、上位でやや内側へ屈曲する。外器面の口縁部に不規則な沈線文が残り、下位部分には粘土を輪積みの後、指で潰した様な４～５枚の痕が残る。 268は内器面が研磨されている。

269 ～271 は頸部が「く」の字に屈曲する薄壁の鉢形土器で、浅鉢である。 271から器形がわかる。復元口径29.1cmで体部も中途で腰折れとなり、外側へ反「く」の字に屈曲する。 269は口唇部の下位に沈線がある。

272 ～278 は 262タイプの鉢形土器の底部である。底径は 7.2～10.9cmを測る。 273・275の底部がやや薄壁で、他は肉太である。 277は外器面の立ち上がりに貝殻条痕文が残る。 278の内器面は黒色研磨状を呈する。

〔ＳＫ０１より出土〕

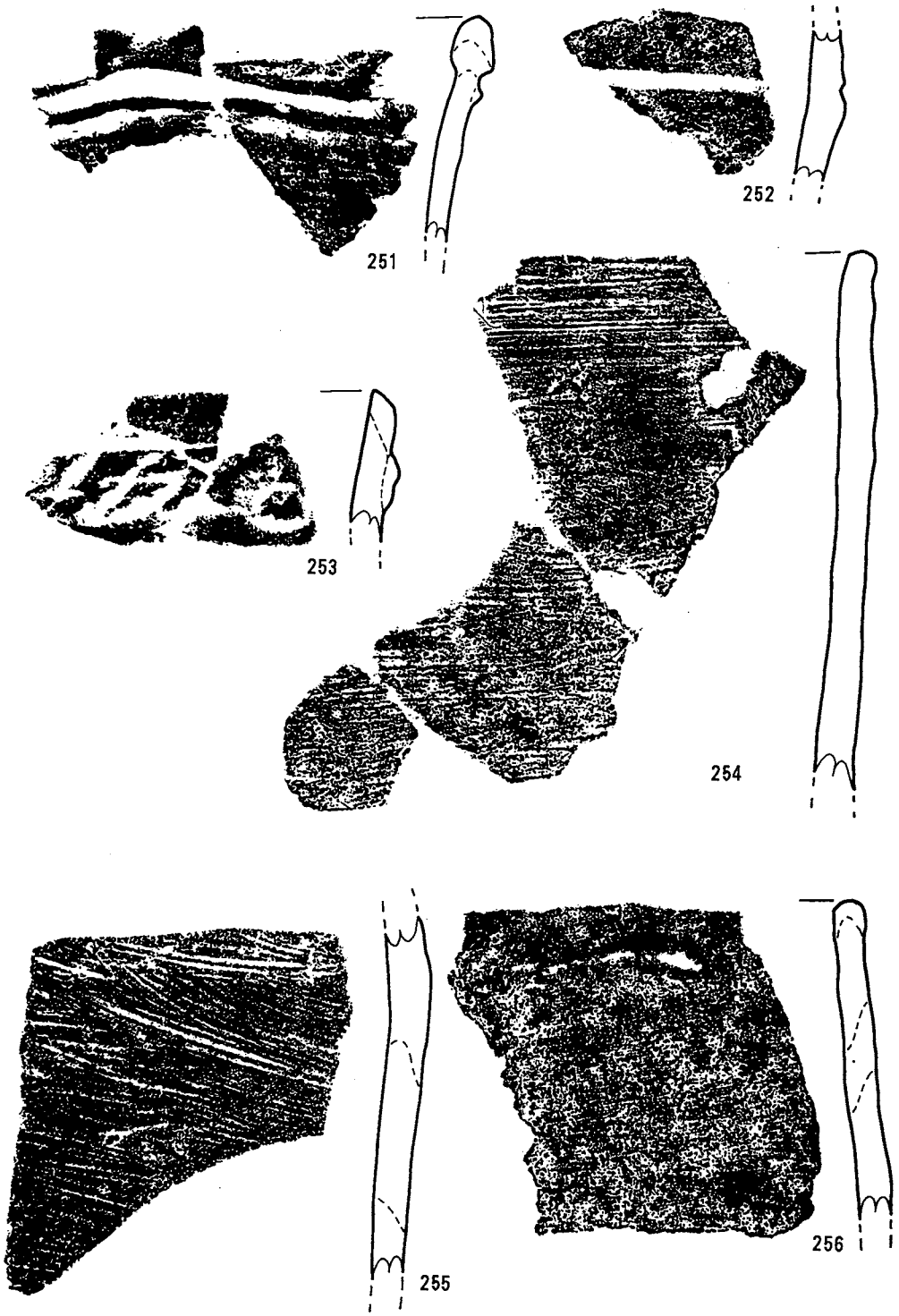
279 は炉跡から出土した 262タイプの深鉢形土器で、復元口径23.8cmを測る。外器面の中途に１条の太めの沈線が巡る。

〔洪水層・埋没水田より出土〕

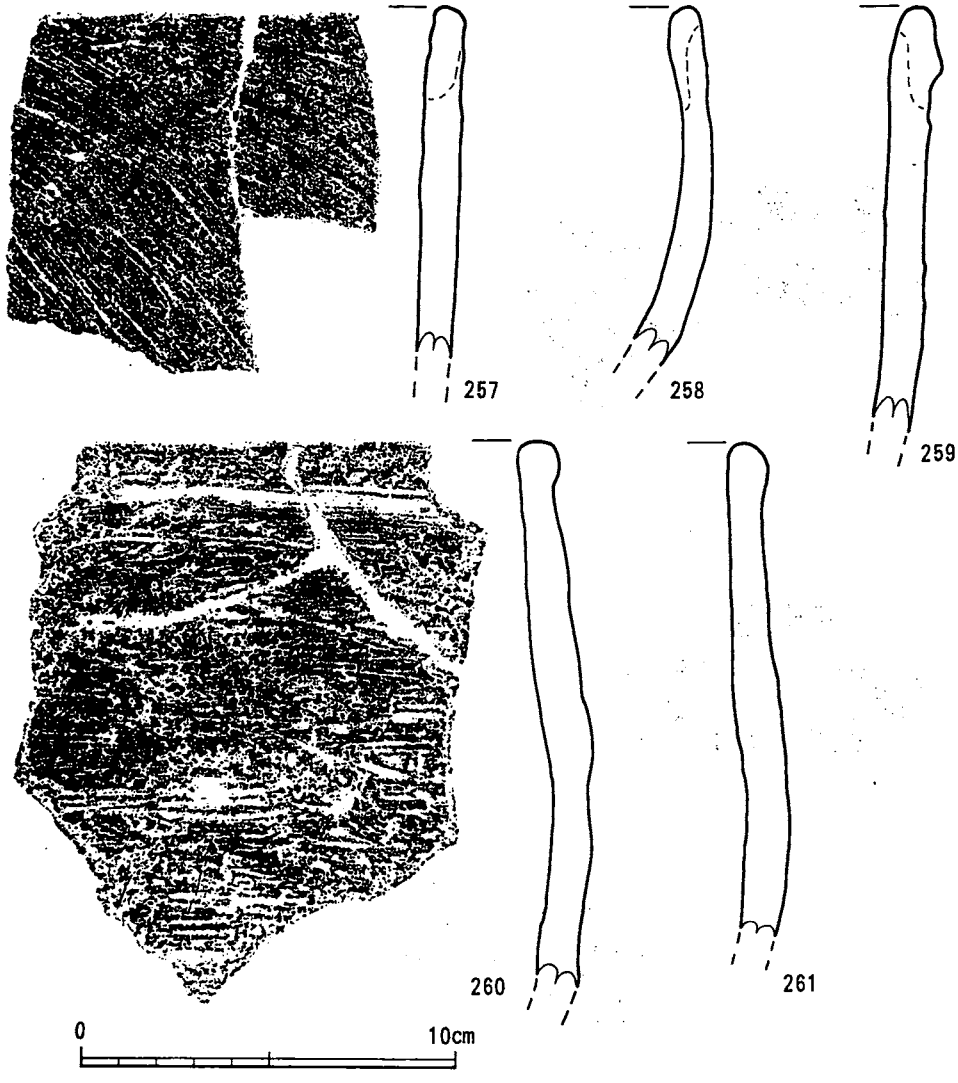
280 ～283 は洪水層から出土したものである。280・282 は口縁部にヘラによる刻目突帯があり、 281は外器面に刺突文を残す。 283は口唇部の下に突帯が巡る。 284は底部で、埋没水田より出土した。

〔近世墓壙より出土〕

285は口縁下に沈線がある。 286は底径 9.3cmを測り、底外部は大きく張り出す。



第69図　４Ｔ出土の縄文式土器実測図①



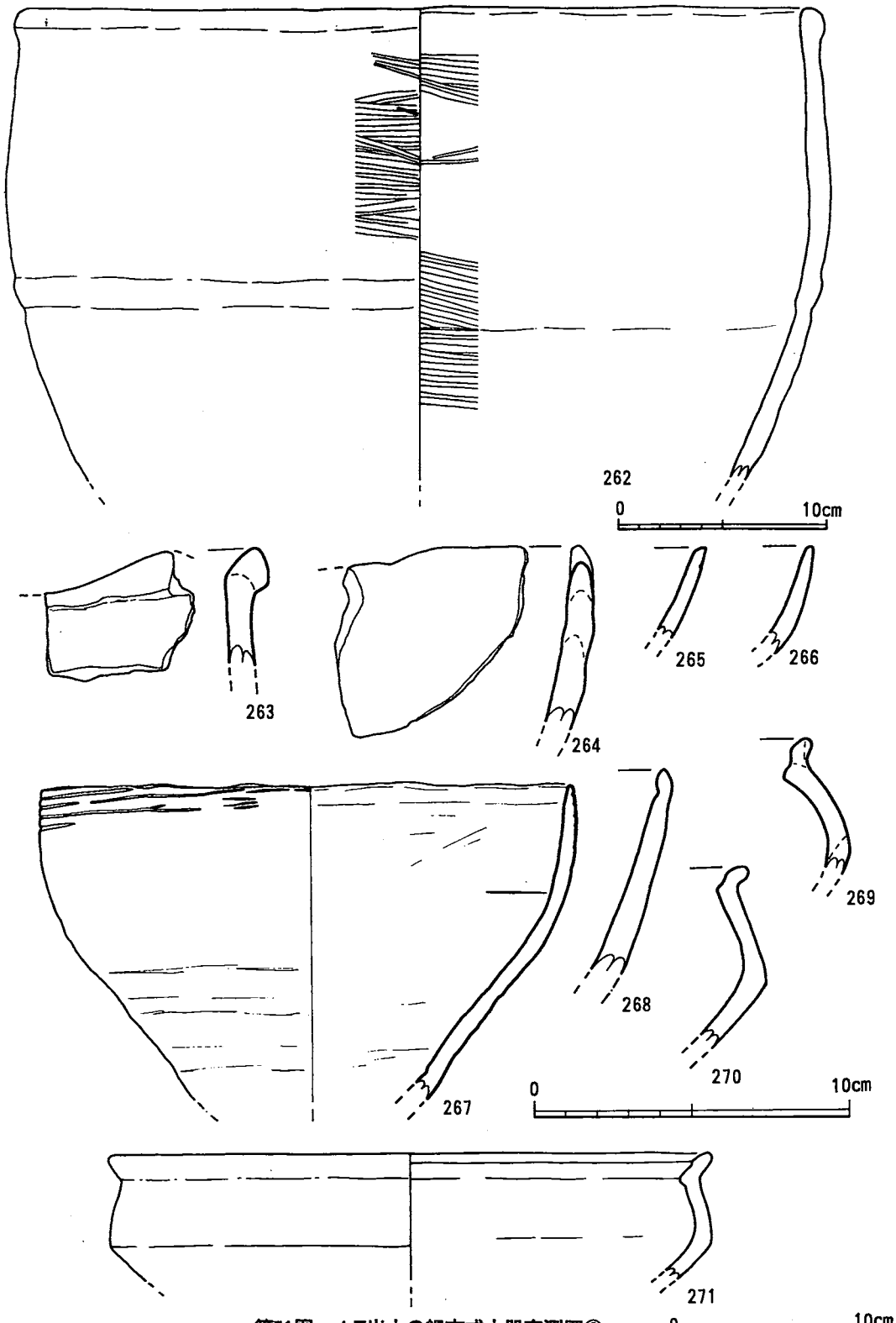
第70図　4T出土の縄文式土器実測図②

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
251 深鉢形土器	――――	（文様）粘土を3重に貼り付け、肥厚した突起状の口縁部をつくり、直下に沈線を施している。	（胎土）比較的、堅緻。砂粒を若干含む。 （色調）内器面：褐色。 外器面：暗褐色。 （焼成）良好。
252	――――	（調整）外器面の一部に横方向の調整痕。	（胎土）0.8～1.5㎜前後の砂粒を含む。 （色調）赤褐色。 （焼成）もろい。
253 〃	――――	（文様）外器面の口縁下に横方向の張り付け突帯が一本ある。その上に斜行（右上～左下）する刻みと、横方向の凹線が施されているが、順序は一定していない。	（胎土）緻密で締まっているが若干、軟質。混入物は細砂粒をわずかに含む。 （色調）鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
254 〃	体部は直線的に伸びる。	（調整）内器面の全面に横方向の条痕が残り、上位部分については、それを消す形で横方向に磨いた痕が見られる。	（胎土）比較的、堅緻。砂粒と黒雲母をわずかに含む。 （色調）内器面：黒褐色。 外器面：鈍い褐色。 （焼成）良好。

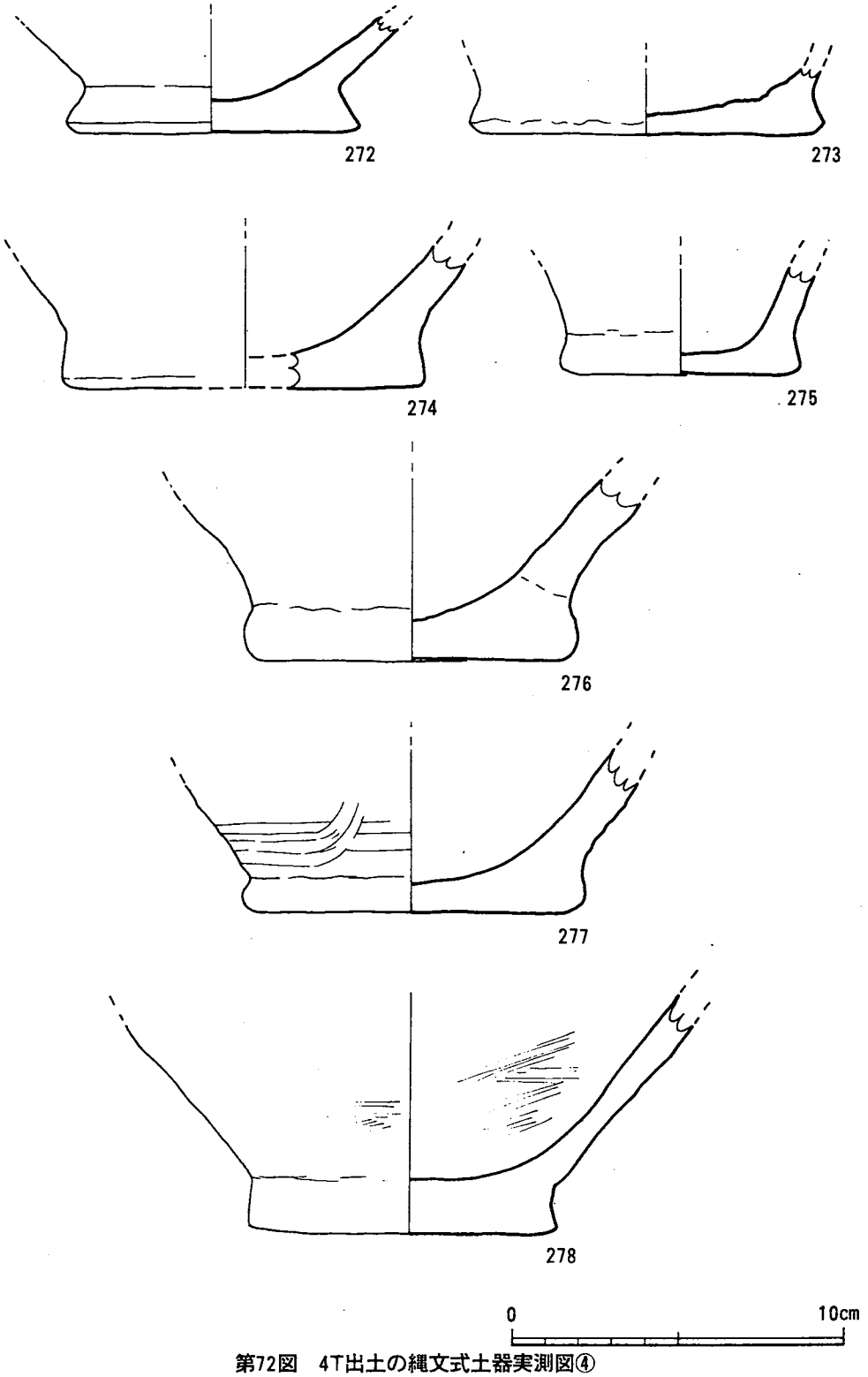
第50表　4T出土の縄文式土器観察表①

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
255 深鉢形土器	――――	（調整）内外器面に横とやや斜め方向（左上～右下）の条痕。	（胎土）多孔質で細砂粒と黒雲母を多く混入する。 （色調） （焼成）良好。
256 〃	――――	（調整）口縁肥厚部の下端には、内外器面に指で押えた痕、外器面に横方向のわずかな条痕。	（胎土）硬質。多くの砂粒と少量の黒雲母を含む。 （色調）内器面：赤褐色。 外器面：黒褐色。 （焼成）良好。
257 〃	――――	（調整）内外器面に貝殻かと思われる工具による条痕。 内器面：横及び右上～左下へ。 外器面：左上～右下へ。	――――
258 〃	体部はやや内弯。	――――	（胎土）多孔質でもろい。大粒の砂粒と黒雲母が含まれる。 （色調）内器面：鈍い黄褐色。 外器面：暗褐色。 （焼成）良好。
259 〃	――――	――――	（胎土）比較的、堅緻。大粒の砂粒と、少量の黒雲母片を含む。 （色調）内器面：鈍い黄褐色。 外器面：橙色。 （焼成）良好。
260 〃	――――	（調整）内外器面に横方向の粗い条痕。	（胎土）砂粒と黒雲母を含む。 （色調）内器面：黒褐色。 外器面：褐色。 （焼成）不良(器面はボロボロ)。
261 〃	――――	（調整）内外器面に横方向のナデ。	（胎土）砂粒と黒雲母を含む。 （色調）内器面：鈍い黄橙色。 外器面：鈍い橙色。 （焼成）やや不良（器面はくずれやすい）。
262 〃	胴部はやや内側へ屈曲。 復元口径 39.0cm。	（調整）内器面：横方向のナデ。但し、胴部の条痕は屈曲部を中心に残る。 外器面：所々に条痕が残り、その上に横方向のナデ。	（胎土）比較的、硬質。砂粒を少量含む。 （色調）内器面：黒褐色。 外器面：鈍い褐色。 （焼成）良好。
263	――――	（文様）口縁部に粘土紐を貼りつけて肥厚させ、山形口縁としている。	（胎土）多孔質で若干、粗い。砂粒を多量に含む。 （色調）明褐色（突起部は黒褐色）。 （焼成）普通。
264	――――	（文様）口縁部の一部が突出しているが、山形口縁には至っていない。	（胎土）多孔質で比較的、軟質。砂粒を含む。 （色調）明黄褐色。 （焼成）不良。
265 鉢形土器	口唇部は平坦。	――――	（胎土）黒雲母をわずかに含む。 （色調）鈍い黄褐色。 （焼成）比較的、良。
266 〃	――――	――――	（胎土）黒雲母と砂粒を含む。 （色調）内器面：黒褐色。 外器面：鈍い黄橙色。
267 〃	復元口径 17.0cm。	（調整）内器面；全面に指、又はヘラによる横あるいは、若干斜めナデ。外器面：体部の下位に輪積みの後、指でつぶした様な4～5条の痕。 （文様）外器面の口縁部に不規則な沈線文。	（胎土）非常に緻密。 （色調）内器面：暗褐色。 外器面：鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
268 〃	――――	（調整）内器面は研磨。	（胎土）比較的、堅緻。細砂粒や黒雲母をわずかに含む。 （色調）内器面：鈍い黄褐色。 外器面：鈍い橙色。 （焼成）良好。

第51表　4Ｔ出土の縄文式土器観察表②



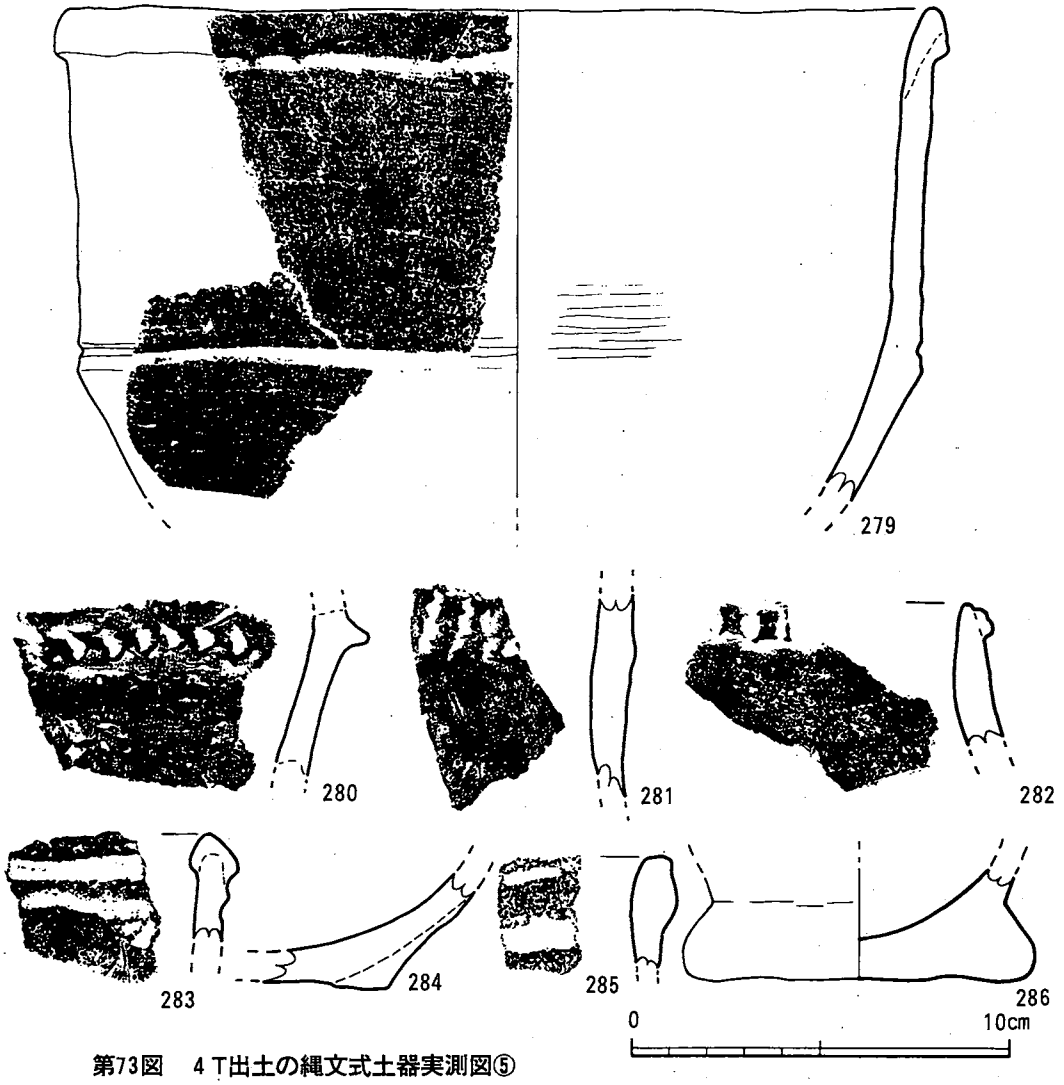
第71図　4T出土の縄文式土器実測図③



第72図　4T出土の縄文式土器実測図④

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
269 鉢形土器	頸部は「く」の字に屈曲。 口唇部の下位に凹線。	(調整) 内器面の胴部と口唇部の外面に、横方向のナデ。	(胎土) 非常に緻密。細砂粒をわずかに含む。 (色調) 内器面：灰黄褐色。 外器面：浅黄橙色。 (焼成) 良好。
270 〃	頸部は「く」の字に屈曲。 口唇部の下位に凹線。	(調整) 内器面に横方向のナデ。	(胎土) 比較的、堅緻。少量の細砂粒を含む。 (色調) 内器面：鈍い黄褐色。 外器面：鈍い黄橙色。 (焼成) 良好。
271	頸部は「く」の字に屈曲。 体部は中途で外側へ、反「く」の字に屈曲。 復元口径29.1cm。	(調整) 内外器面に横方向のナデ。内器面の屈曲部に指頭による凹み。	(胎土) 極細の砂粒を含む。 (色調) 内器面：灰黄褐色。 外器面：鈍い黄褐色。 (焼成) 良好。
272	復元底径 8.8cm。	(調整) 内底面：上半分はヘラ状工具によるナデ、幅2～3mmの浅い沈線。下半分はナデ。	(胎土) 小砂粒を含む。 (色調) 内器面：褐色。 外器面：灰褐色。 (焼成) 良好。
273	底径 10.7cm。	(調整) 内底面に指頭痕による凹凸。	(胎土) 粗くもろい。砂粒、黒雲母を多量に含む。 (色調) 内器面：褐色。 外器面：橙色。 (焼成) 普通。
274	復元底径 10.9cm。	(調整) 内底面に指頭痕によるわずかな凹凸。	(胎土) 黒雲母、砂粒を含む。 (色調) 内器面：褐色。 外器面：鈍い橙色。 (焼成) 普通。
275	底径 7.2cm。	――	(胎土) 砂粒と黒雲母を含む。 (色調) 内器面：赤褐色。 外器面：褐色。 (焼成) 普通。但し、若干、器面はもろい。
276	底径 10.2cm。	――	(胎土) 砂粒を含む。 (色調) 赤褐色。 (焼成) 比較的、良好。但し、器面はくずれやすい。
277	復元底径 10.4cm。	(調整) 外器面に貝殻条痕文？	(胎土) 外器面は堅緻。内器面は粗くもろい。砂粒、黒雲母を多く含む。 (色調) 橙色。 (焼成) 良好。
278	底径 9.3cm。	(調整) 外底面を除き、器面には指頭痕がわずかに残るが、それを横や斜行させて、ナデにより消している。 内底面には縦横のナデ。内器面は黒色研磨状を呈する。	(胎土) 多孔質でもろい。砂粒を多く含む。 (色調) 内器面：暗褐色。 外器面：赤褐色。 (焼成) 良好。
279 深鉢形土器	復元口径 23.8cm。	(調整) 内器面：かすかに横方向のナデ。 (文様) 外器面の中途に一条の太め沈線。	(胎土) 比較的、粗い。砂粒を多量に含む。 (色調) 内器面：暗褐色 外器面：褐色。 (焼成) 普通。
280	――	(調整) 横ナデ。 (文様) 頸部にヘラによる刻目突帯。	(胎土) 砂粒や雲母片を多く含む。 (色調) 内器面：鈍い黄橙色。 外器面：灰黄褐色。 (焼成) 良好。
281	――	(文様) 外器面に刺突文。	(胎土) 雲母や砂粒を含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 良好。
282	――	(調整) 横方向のナデ。 (文様) 口縁部に刻目突帯文。	(胎土) 砂粒と黒雲母片を多量に含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 良好。

第52表　4T出土の縄文式土器観察表③



第73図　4T出土の縄文式土器実測図⑤

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
283	口縁部は波状口縁になると思われる。	（文様）口唇部の下に横方向の一条の突帯。	（胎土）比較的、堅緻。砂粒を多く含む。 （色調）暗褐色。 （焼成）良好。
284	――――	――――	（胎土）比較的、堅緻。砂粒を多く含む。 （色調）内器面：鈍い黄褐色。 外器面：浅黄橙色。 （焼成）普通。
285	口縁下に沈線。	――――	（胎土）比較的、堅緻。砂粒を多く含む。 （色調）暗褐色。 （焼成）普通。
286	底径 9.3cm。	――――	（胎土）比較的、硬質。大粒の砂を多く含む。黒雲母が混じる。 （調整）内器面：鈍い黄橙色。 外器面：明褐色。 （焼成）良好。

第53表　4T出土の縄文式土器観察表④

2．5トレンチ出土の縄文式土器

〔Ⅷ層より出土〕

287 ～290 は口唇部に刻目突帯がある。287 の内外器面はヘラ磨きされ、突帯は雑な造りである。 289は焼成不良で、器面が崩れやすい。

291 ～293 は口唇部に指頭による刺突文があり、292･293 には下部にも同じ刺突文が施されている。291･292 の内外器面はヘラ磨きである。

294･295 は山ノ寺式か夜臼式の土器であろう。口唇部に残る突帯が接合によるものかは不明である。296 は口縁部に指頭による指突文が残る。

297･298 は口縁部にリボン状の突起物があり、黒川式土器の可能性がある。

299 は口縁下に突起物が貼り付いている。300･301 は胴部が反「く」の字に屈曲し、口唇部と胴部に刻目突帯を残す。302 は内器面に沈線があり、外器面は研磨されている。303 は口縁下部にヘラ状施文具による斜行沈線があり、外器面にヘラ磨きが残る。304 は口縁部に粘土紐状のものが巻かれて肥厚する。 305は太めの沈線が横と斜めから施されている。306 は沈線のような条痕を残す。307 は不規則方向の条痕があるが、貝殻によるものかは不明である。308 は口縁部と胴部の屈曲部の直上に沈線を施文し、上から重ねて平行沈線文が施文されている。309 は薄壁の小型タイプの土器である。

310 は丸底のやや浅鉢タイプの鉢形土器で口径 9.9cm・胴部径11.6cm・器高 6.5cmを測る。311 ～314 は浅鉢形土器で、頸部が「く」の字に屈曲する。 313は口唇部直下の内外器面に太めの沈線を巡らす。 314は胴部径18.4cmを測り、胴部は大きく張り出す。

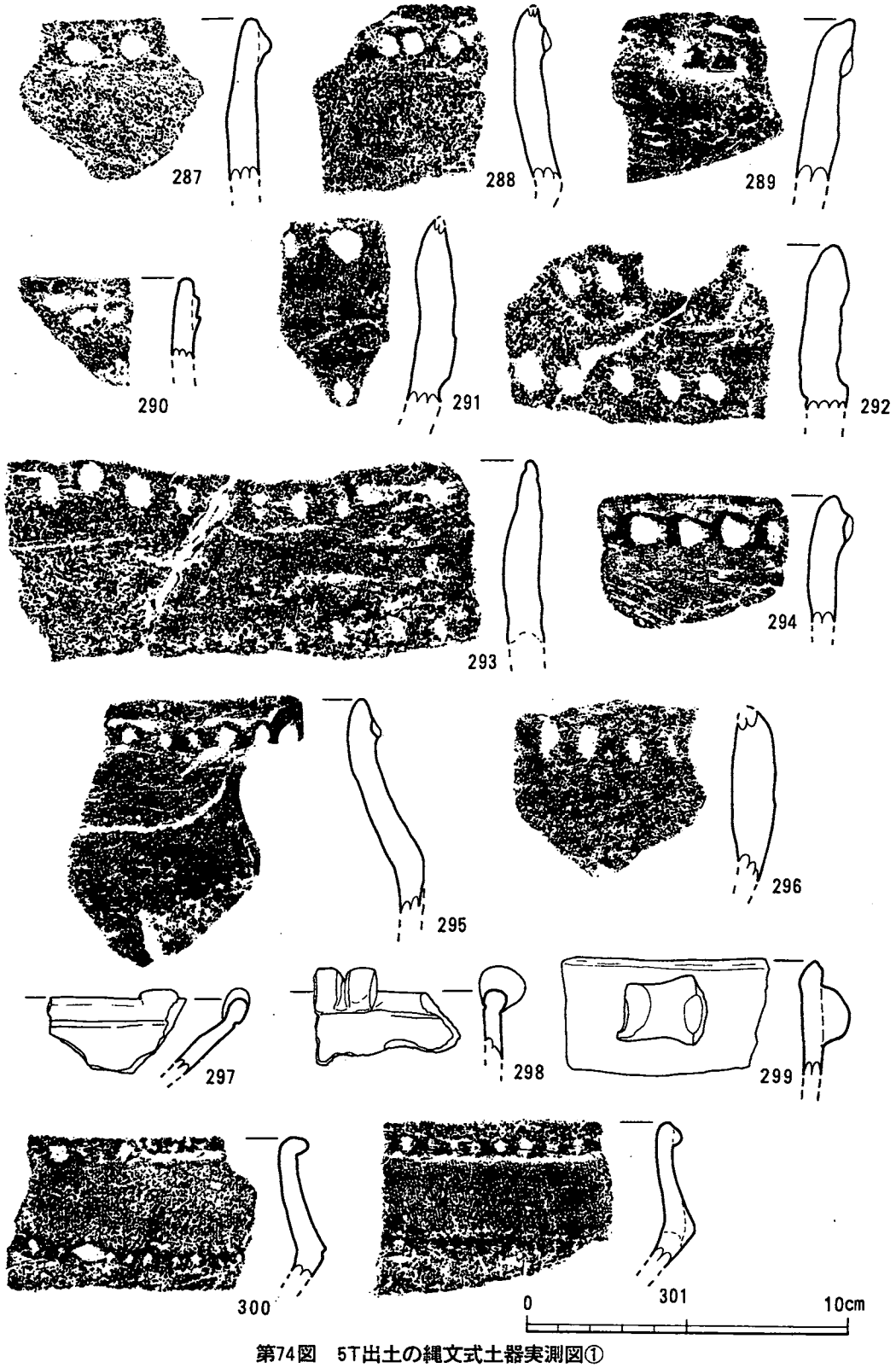
315 は復元頸部径 9.8cmで頸部は「く」の字に外反するが、310 や314 のタイプとは多少異なる。

316 ～318 は 267か324 タイプの土器であろう。317 318 は口縁直口である。

319 ～323 は 262タイプの土器と思われる。 320は残存体部がやや内側へ屈曲する。323 は残存体部が若干外側へ屈曲し、口縁直口となる。

324 は復元口径36.6cmを測る大型の鉢形土器で、頸部に1条と口縁部の外器面に6条の沈線がある。

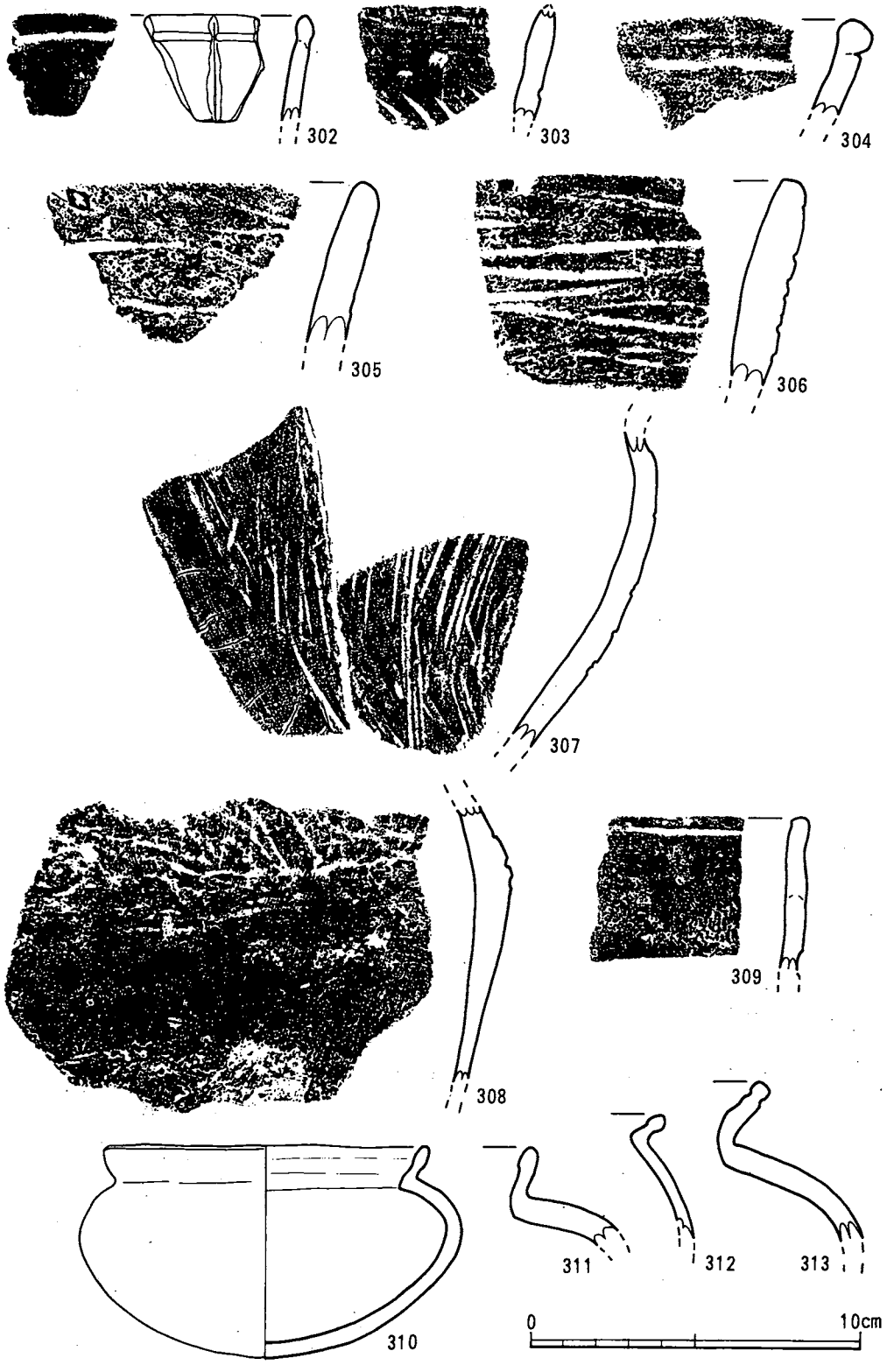
325 ～329 は鉢形土器の底部である。底径 9.0cm～10.7cmを測る。 326の底部は極めて薄壁で、327･328 は上げ底を呈する。 327は両器面に指で押さえた痕跡があり、 328の外底面は上下から指で押さえて造り出している。



第74図　5T出土の縄文式土器実測図①

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
287	――――	（調整）口唇部に刻目突帯（雑な造り）。内外器面は横方向のヘラ磨き。	（胎土）白色細砂粒、黒雲母、赤褐色粒子（直径3㎜）を含む。気胞少々。 （色調）内器面：黒褐色。 外器面：鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
288	胴部は逆「く」の字の屈曲になると思われる。	（調整）内外器面とも横方向のナデ？ （文様）口唇部に黒目突帯。	（胎土）黒雲母、水晶結晶、白色砂粒を含む。わずかに気胞あり。 （色調）内器面：黄灰色。 外器面：鈍い黄褐色。 （焼成）良好。
289	――――	（文様）口唇部に刻目突帯。	（胎土）雲母、砂粒を含む。 （色調）暗褐色。 （焼成）不良。（器面はポロポロくずれる）。
290	――――	（調整）口唇部に明瞭な横ナデ。 （文様）口縁部に刻目突帯の貼り付けあり。	（胎土）白色細砂粒、水晶結晶を含む。締まった胎土。 （色調）内器面：黒褐色。 外器面：灰褐色。 （焼成）良好。
291	――――	（調整）内外器面とも横方向のヘラ磨き。 （文様）口唇部及びその下部に指頭？による刺突文。	（胎土）白色細砂粒、水晶結晶粒を含む。多孔質。 （色調）鈍い黄褐色。 （焼成）良好。
292	――――	（調整）内外器面とも横方向のヘラ磨き。内器面にヘラ痕あり。 （文様）口唇部とその下部に指頭による刺突文。	（胎土）294と同様。 （色調）鈍い黄橙色～鈍い黄褐色。 （焼成）良好。
293	――――	（調整）内器面に横方向の条痕。 （文様）口縁直下と胴部に指頭？によると思われる2条の刺突文。下部下損部は接合面で剝がれ、残存部は製作時の粘土紐の状態を示している。	（胎土）多孔質。細砂粒を含み、少量の黒色鉱物も混入する。 （色調）鈍い黄褐色。 （焼成）良好。
294	山ノ寺式か夜臼式。	（調整）横方向のナデ。 （文様）突帯が接合かは不明。	（胎土）細かい雲母や砂粒片を含む。 （色調）内器面：黒褐色。 （焼成）良好。
295	山ノ寺式か夜臼式。	（調整）横方向のナデ。 （文様）突帯が接合かは不明。	（胎土）細かい雲母や0.5㎜前後の砂粒をわずかに含む。 （色調）内器面：褐灰色。 外器面：灰黄褐色。 （焼成）良好。
296	――――	（調整）内外器面は横方向の指ナデ。 （文様）口縁部に指頭による指突文。	（胎土）白色細砂粒、黒色砂粒、水晶結晶を含む。 （色調）鈍い黄褐色～褐色。 （焼成）良好。
297	黒川式？	（調整）横方向のナデ。 （文様）口縁部に突起物。	（胎土）1㎜前後の砂粒。 （色調）橙色。 （焼成）やや不良（器面はボロボロくずれる）。
298	黒川式？ 器形に歪みがある。	（調整）横方向のナデ？口唇部直下はヘラ削り？ （文様）口縁部にリボン状突起。	（胎土）細かな雲母、砂粒を含む。 （色調）内器面：鈍い黄褐色。 外器面：灰黄褐色。 （焼成）良好。
299	――――	（文様）口縁下に突起物が貼り付いている。	（胎土）多孔質。砂粒と黒色鉱物をわずかに含む。 （色調）鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
300	胴部は逆「く」の字に屈曲。	（調整）内外器面に横方向のナデ。 （文様）口唇部に刻目突帯。胴部の屈曲部も刻目。	（胎土）黒雲母と白色砂粒を含む。少量の気胞。 （色調）鈍い褐色。 （焼成）良好。

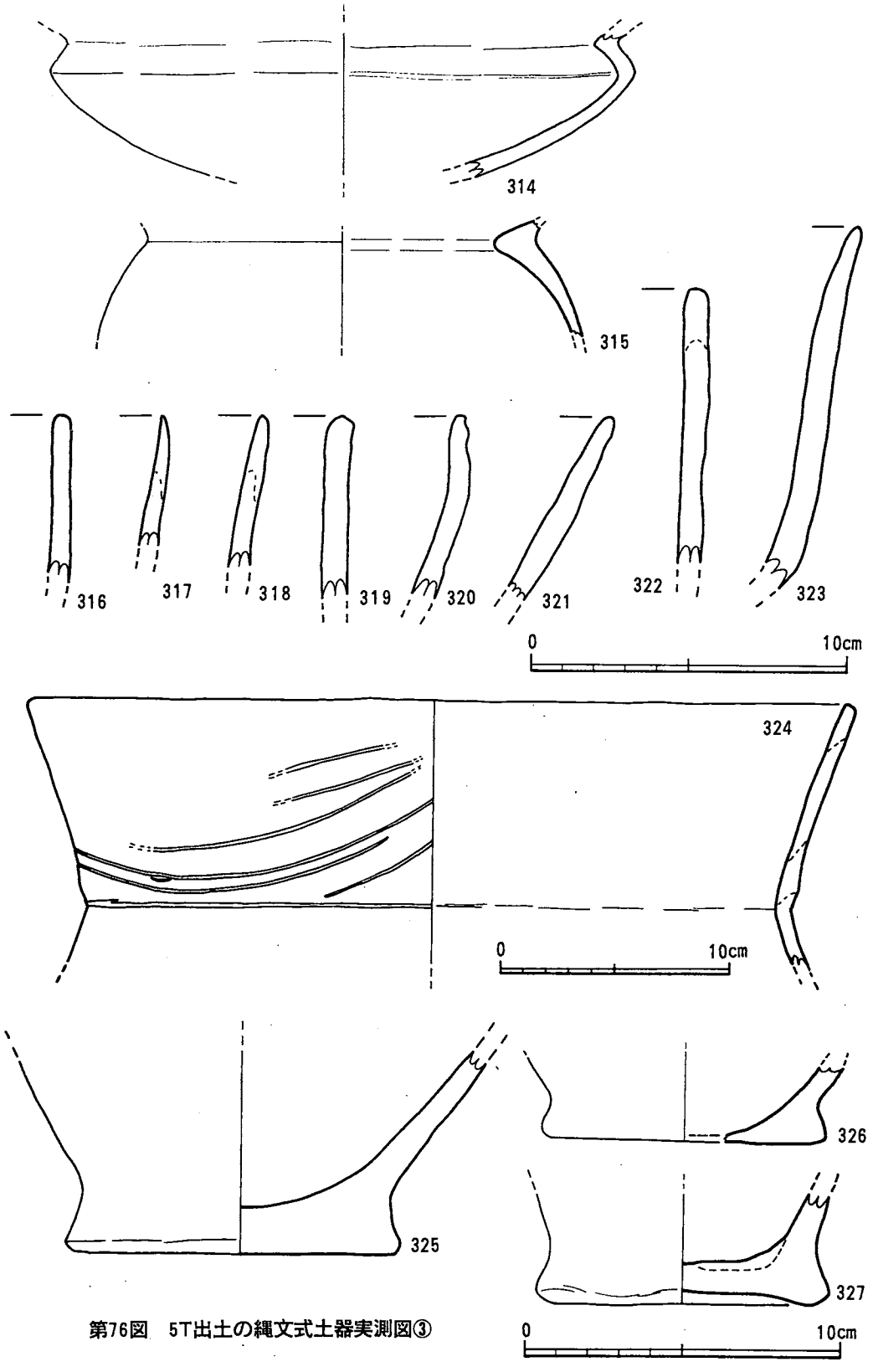
第54表　5T出土の縄文式土器観察表①



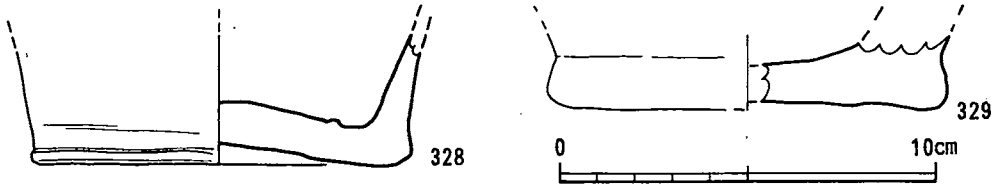
第75図　5T出土の縄文式土器実測図②

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
301 鉢形土器	胴部は逆「く」の字に屈曲。	（文様）口唇部直下に1条の横位の突帯を巡らせ、その上に刻みを施している。同様の事が胴部の屈曲部についても言える。	（胎土）多孔質。砂粒と黒雲母を含む。 （色調）鈍い黄橙色。 （焼成）普通。
302	――――	（調整）外器面：研磨。内器面：縦方向に一本、沈線。	（胎土）非常に堅緻。混入物なし。 （色調）鈍い黄褐色。 （焼成）良好。
303	――――	（調整）内器面：施文具による横方向のナデ後、指ナデ。外器面：横方向のヘラ磨き。 （文様）口縁下部にヘラ状施文具による斜行沈線（6.0～1.0mm間隔）を施文。	（胎土）白色細砂粒と黒雲母を含む。焼き締めがきいている。 （色調）内器面：鈍い黄橙色。 外器面：黒褐色。 （焼成）良好。
304	口縁部は粘土状のものが巻かれて肥厚。	（調整）横ナデ。	（胎土）白色細砂粒、水晶結晶、直径1～2mmの黒色砂粒を含む。 （色調）明褐色～黄褐色。 （焼成）良好。
305	――――	（文様）外器面：太めの沈線が横と斜め（左上～右下）から施されている。	（胎土）比較的、堅緻。大粒の砂粒を多く含み、少量の黒雲母も混じる。 （色調）内器面：褐色。外器面：明赤褐色。 （焼成）良好。
306	――――	（文様）外器面：沈線のような条痕。 （色調）明赤褐色。	（胎土）雲母 0.5～3mmの砂粒を多く含む。 （焼成）やや不良。（器面はボロボロ）。
307	――――	（調整）外器面：不規則方向に条痕が残るが、貝殻によるものかは不明。	（胎土）比較的、堅緻。混入物少なし。 （色調）内器面：鈍い黄褐色。 外器面：鈍い黄橙色。 （達成）良好。
308	――――	（調整）内器面：施文具による横方向のナデの後、指ナデ。 外器面：横方向のナデ。 （文様）口縁部に沈線文。胴部の屈曲部の直上に横方向からの1条の沈線が施文。その上からさらに、平行沈線文が施文。	（胎土）白色砂粒に水晶結晶片を含む。締まった胎土。 （色調）内器面：鈍い黄橙色。 外器面：暗褐色。 （焼成）良好。
309	――――	――――	（胎土）比較的、堅緻。混入物少なし。 （色調）内器面：暗褐色。 外器面：鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
310 鉢形土器	口径 9.9cm。 胴部径11.6cm。 器高 6.5cm。	（調整）激しいローリングを受けており、不明。	（胎土）非常に粗く、多孔質。砂粒を多く含み、黒雲母が混じる。 （色調）鈍い黄褐色。 （焼成）良好。
311 〃	頸部は「く」の字に屈曲。	（調整）横方向のナデ。	（胎土）比較的、堅緻。少量の砂粒と黒色鉱物を含む。 （色調）内器面：黒褐色。 外器面：鈍い黄橙色。 （焼成）良好。
312 〃	胴部は大きく張り出す。	――――	（胎土）比較的、軟質。砂粒を少量含む。 （色調）内器面：鈍い黄褐色。 外器面：鈍い橙色。 （焼成）不良。
313 〃	胴部は大きく張り出す。	（調整）外器面の上位に横方向のナデ。 （文様）口唇部直下に内外器面とも1条ずつ太めの沈線文。	（胎土）比較的、堅緻。砂粒を多量に含む。 （色調）内器面：鈍い黄褐色。 外器面：橙色。 （焼成）普通。

第55表　5T出土の縄文式土器観察表②



第76図　5T出土の縄文式土器実測図③



第77図　5T出土の縄文式土器実測図④

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
314 鉢形土器	胴部 18.4cm。	(調整) 内器面の屈曲部に横方向のナデ。	(胎土) 比較的、粗い。砂粒、黒雲母を少量含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 普通。
315 〃	復元頸部径 9.8cm。	(調整) 横方向の丁寧な調整。	(胎土) 白色砂粒を多く含む。気泡多し。 (色調) 内器面：暗黄褐色。外器面：黒褐色。 (焼成) 良好。
316 〃	――	――	(胎土) 若干、軟質。細砂粒を少量含む。 (色調) 赤褐色。 (焼成) 普通。
317 〃	口縁直口。	――	(胎土) 多孔質。砂粒、黒雲母を多く含む。 (色調) 内器面：黒褐色。外器面：褐色。 (焼成) 普通。
318 〃	口縁直口。	――	(胎土) 若干、軟質。細砂粒と黒雲母を少量含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 普通。
319 深鉢形土器	――	――	(胎土) 比較的、堅緻。細砂粒を多く含む。 (色調) 内器面：黒褐色十灰黄褐色。外器面：明褐色。 (焼成) 良好。
320 〃	――	――	(胎土) 比較的、硬質。混入物は少ない。 (色調) 鈍い黄褐色。 (焼成) 良好。
321 〃	――	(調整) 内外器面とも横方向のヘラ磨き。	(胎土) 白色細砂粒、水晶結晶を含む。多孔質でややもろい。 (色調) 内器面：黒褐色。外器面：鈍い赤褐色。 (焼成) 良好。
322 〃	――	(調整) 外器面に左上～右下へ走る条痕が残る。	(胎土) 比較的、堅緻。少量の砂粒と黒雲母を含む。 (色調) 内器面：鈍い褐色。外器面：暗褐色～黒褐色。 (焼成) 良好。
323 〃	体部はやや外弯。	(調整) 内外器面とも丁寧な横方向のナデ。	(胎土) 白色砂粒、水晶結晶を含む。もろい。 (色調) 黄褐色～鈍い褐色。 (焼成) 不良。
324 鉢形土器	復元口径 36.6cm。	(文様) 頸部は1条の沈線。口縁部外器面は6条の沈線。	(胎土) 比較的、硬質。大粒の砂粒、黒雲母を多量に含む。 (色調) 鈍い褐色。 (焼成) 良好。
325 〃	底径 10.6cm。	(調整) 外器面の立ち上がり部分に横方向のナデ。	(胎土) 非常に粗く、大粒の砂、黒雲母を多量に含む。もろい。 (色調) 内器面：灰黄褐色。外器面：鈍い黄橙色。 (焼成) 不良。

第56表　5T出土の縄文式土器観察表③

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
326 鉢形土器	復元底径 9.0cm。	――――	(胎土) 白色砂粒を含む。 (色調) 内器面：黄橙色。 外器面：橙色。 (焼成) 良好。
327 〃	底径 9.3cm。	(調整) 内外器面の一部に指で押えた痕跡。	(胎土) 硬質であるが器面は多孔質でもろい。砂粒、黒雲母を含む。 (色調) 鈍い黄橙色。 (焼成) 普通。
328 〃	底部は上げ底。 底径 10.0cm。	(調整) 底部端は横方向のナデ。外底面は上下から指で押さえて作り出している。	(胎土) かなり粗い。黒雲母を多量に含む。大粒の砂粒もわずかに混じる。内器面にもろさが目立つ。 (色調) 鈍い黄褐色。 (焼成) 普通。
329 〃	底径 10.7cm。	――――	(胎土) 黒雲母と砂粒を大量に含む。 (色調) 内器面：鈍い黄橙色。 外器面：橙色。 (焼成) 普通。

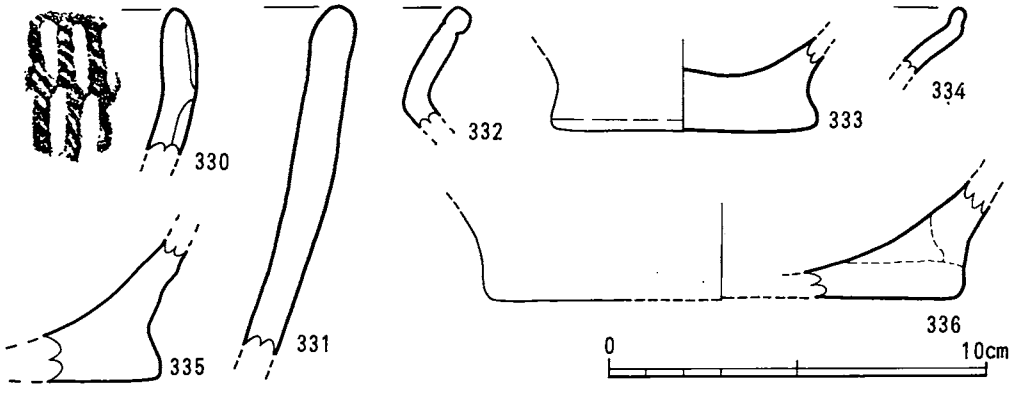
第57表　5Ｔ出土の縄文式土器観察表④

3．1～3トレンチ出土の縄文式土器

いずれも現水田層や洪水層からの出土で、流れ込みによるものと思われる。

330 は棒状施文具による縦の短沈線がある。 331は 262タイプの深鉢土器である。332・334は浅鉢土器で、271・310・314 いずれかのタイプであろう。

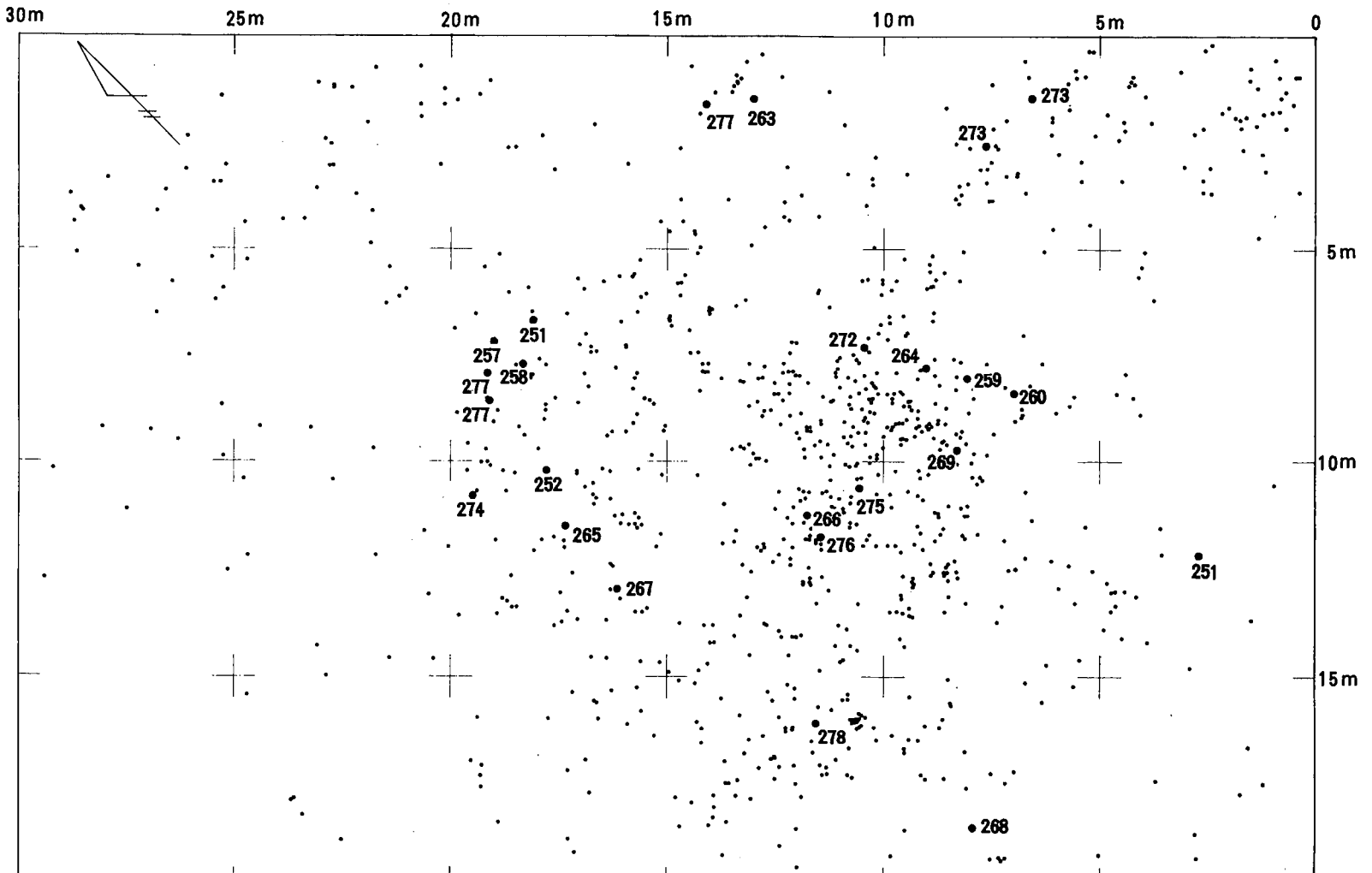
333・335・336 は底部であり、特に333・335の器壁は肉太である。 336は復元底径12.8cmを測り、色調は鈍い黄橙色で弥生式土器の可能性もある。

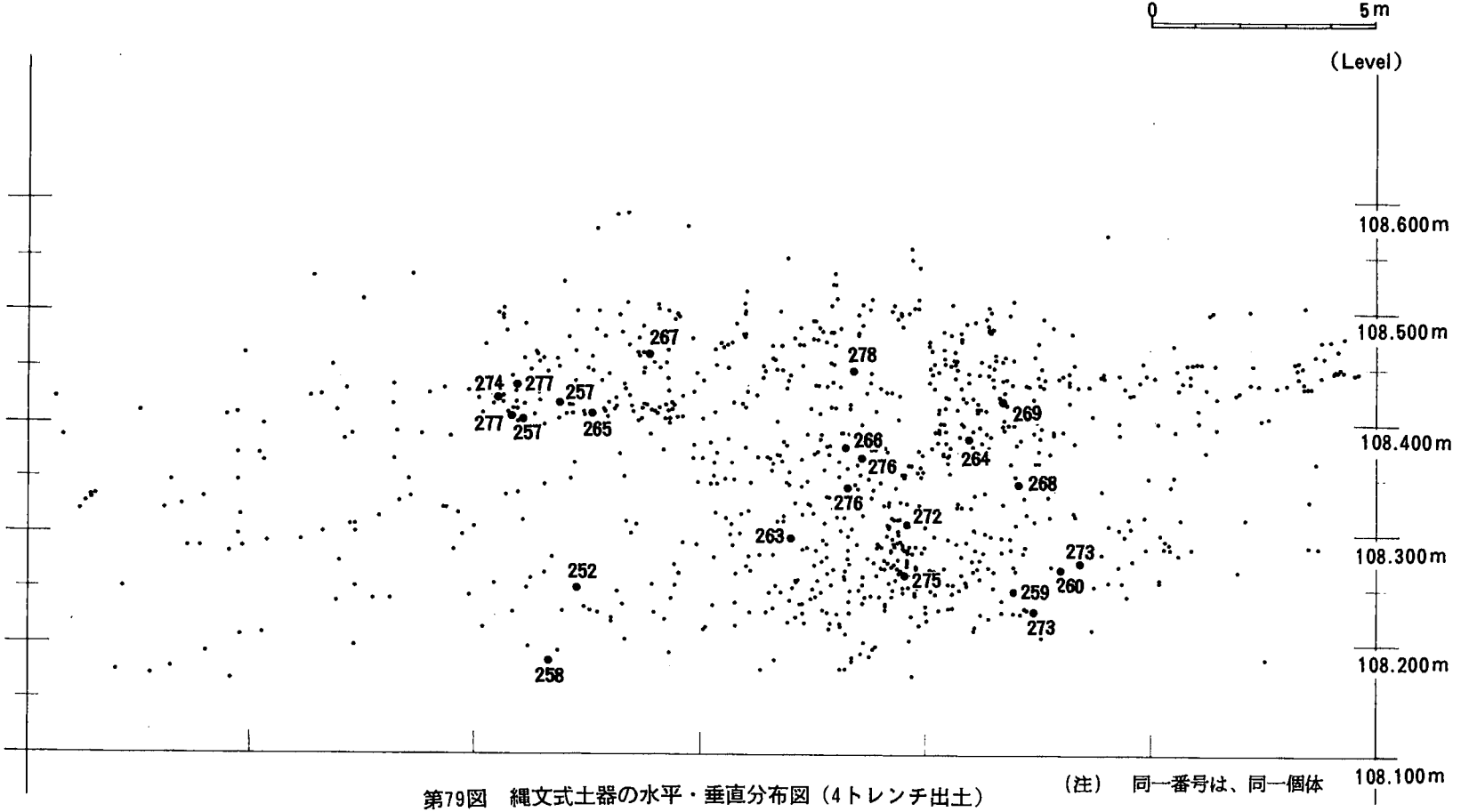


第78図　1～3T出土の縄文式土器実測図③

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
330	――	（調整）内器面：横ナデ。 （文様）外器面：棒状施文具による縦の短沈線。	（胎土）雲母 0.5～2㎜砂粒を含む。 （色調）灰黄褐色。 （焼成）比較的、良。
331 深鉢形土器	――	（調整）横ナデ。	（胎土）雲母片 0.3～1㎜の砂粒を多量に含む。 （色調）赤褐色～黒褐色。 （焼成）やや不良。
332 浅鉢形土器	頸部は「く」の字に外反。	（調整）横方向の調整痕。	（胎土）1㎜前後の砂粒を多量に含む。 （色調）内器面：褐灰色。 外器面：褐色。 （焼成）良好。
333	底径 7.1cm。	（調整）横方向のナデ。	（胎土）多孔質であるが堅緻。混入物は少ない。 （色調）浅黄橙色。 （焼成）良好。
334	――	――	（胎土）0.5㎜前後の砂粒を多く含む。 （色調）黒褐色。 （焼成）比較的、良。
335	――	（調整）体部の立ち上がり。 外器面に横方向の条痕。	（胎土）比較的、堅緻。砂粒を多く含む。 （色調）内器面：明黄褐色。 外器面：褐色。 （焼成）良好。
336	弥生式土器の可能性あり。 復元底径 12.8cm。	――	（胎土）雲母片 0.5～2㎜の砂粒を多量に含む。 （色調）鈍い黄橙色。 （焼成）比較的、良。

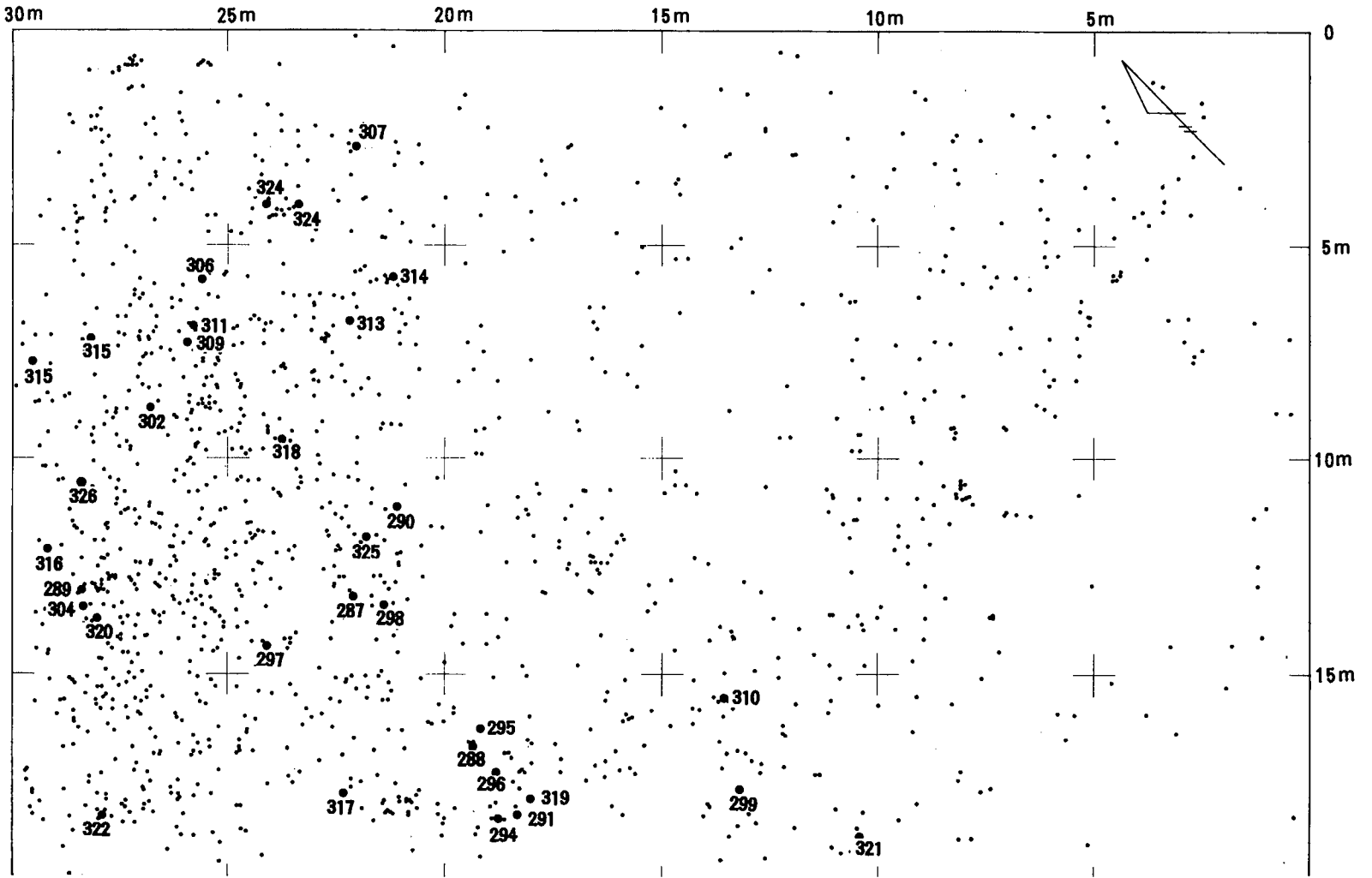
第58表　1～3Ｔ出土の縄文式土器観察表

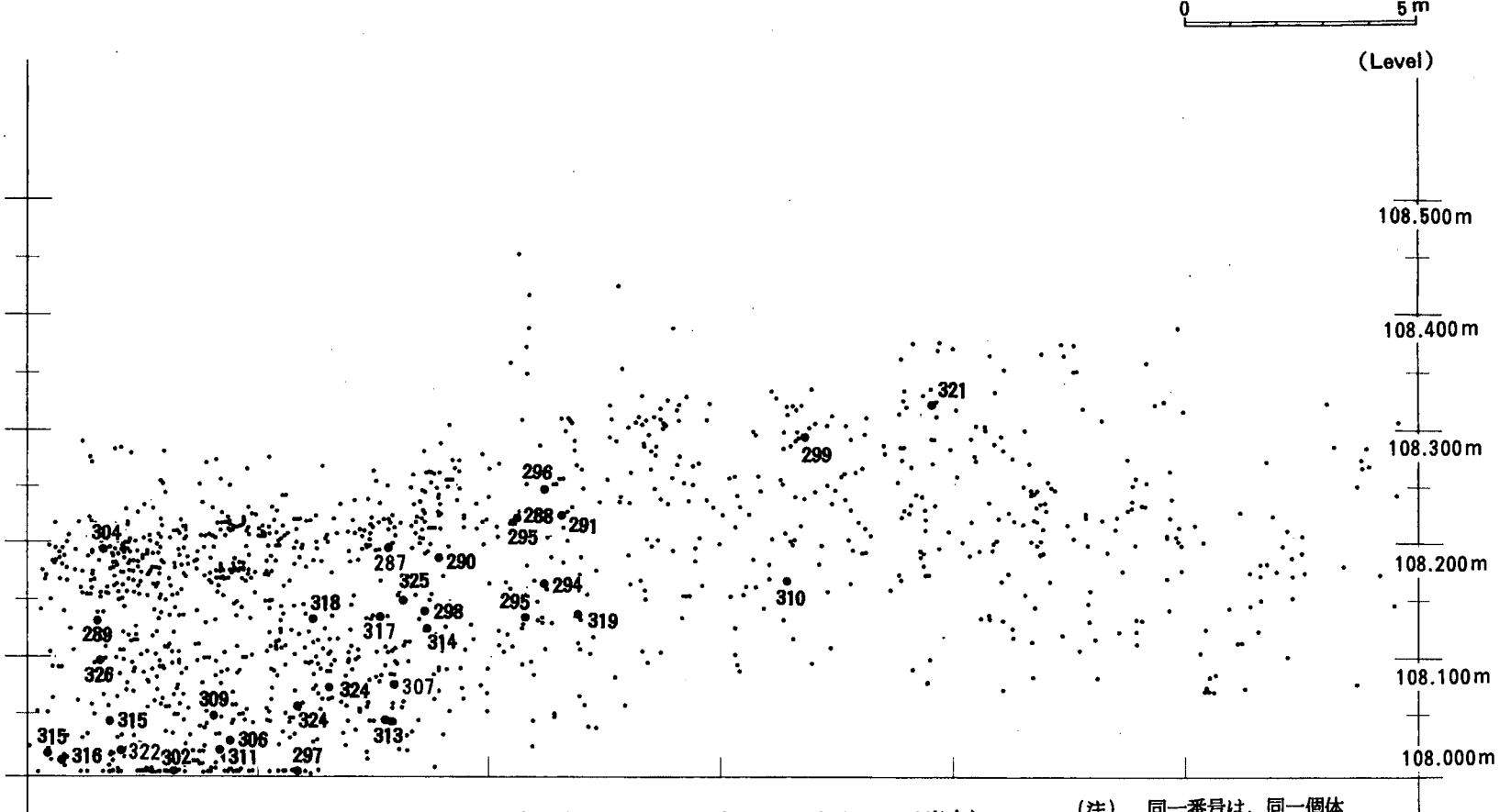

30m
25m
20m
15m
10m
5m
0
5m
10m
15m
277
263
273
273
251
257
258
277
277
272
264
259
260
269
252
274
275
266
276
265
267
251
278
268



第79図　縄文式土器の水平・垂直分布図（4トレンチ出土）

（注）　同一番号は、同一個体


30m
25m
20m
15m
10m
5m
0
5m
10m
15m
307
324
324
306
314
311
313
309
315
315
302
318
326
290
325
316
289
304
287
298
320
297
310
295
288
296
319
317
299
291
322
294
321



第80図　縄文式土器の水平・垂直分布図（5トレンチ出土）

（注）　同一番号は、同一個体

第３節　縄文時代石器

１．打製石斧

七地水田遺跡において 132点の打製石斧が出土した。その中で自然面を残しているものが、約71％にも及ぶことから、石器製作工程は、原石からの一次剥片によって作られていると考えられる。また、完成石斧の欠損品は約 77.9 ％で、かなりの割合であった。この事は打製石斧が、かなり使用頻度の高い消耗品であったことを示唆している。

打製石斧は下記の３類に大別され、各々、さらに細分が可能である。

第Ⅰ類　短冊型

Ⅰ－ａ：〔実測図No.337～375 〕

基部から刃部にかけての両側縁部が、平行に作られている。

Ⅰ－ｂ：〔実測図No.376～416 〕

基部から刃部にかけて、側縁部が広がる作りが成されている。

Ⅰ－ｃ：〔実測図No.417～419 〕

側縁の中央部が膨らむ作りが成されている。

Ⅰ－ｄ：〔実測図No.420～427 〕

基部から刃部にかけて側縁部が広がる。Ⅰ－ｂに類似するが、基部寄りの側縁部に浅い抉りが作られている。

第Ⅱ類　分銅型

Ⅱ－ａ：〔実測図No.428～433 〕

基部から３分の１程の側縁部に強い抉入が見られ、基部先端は丸味を持つ。

Ⅱ－ｂ：〔実測図No.434・435 〕

基部の側縁に抉入があり、基部先端部は直線的である。

Ⅱ－ｃ：〔実測図No.436〕

中央部から基部にかけて、側縁部が狭められている。

Ⅱ－ｄ：〔実測図No.437・438 〕

形状的にはⅠ－ｃに類似するが、片側縁の中央部近くに抉入が見られる。この抉入部は手の指が納まる程の大きさで、中指を抉入部に入れて、石包丁としての機能も考えられる。

第Ⅲ類　尖り型

Ⅲ－ａ：〔実測図No.439～443 〕

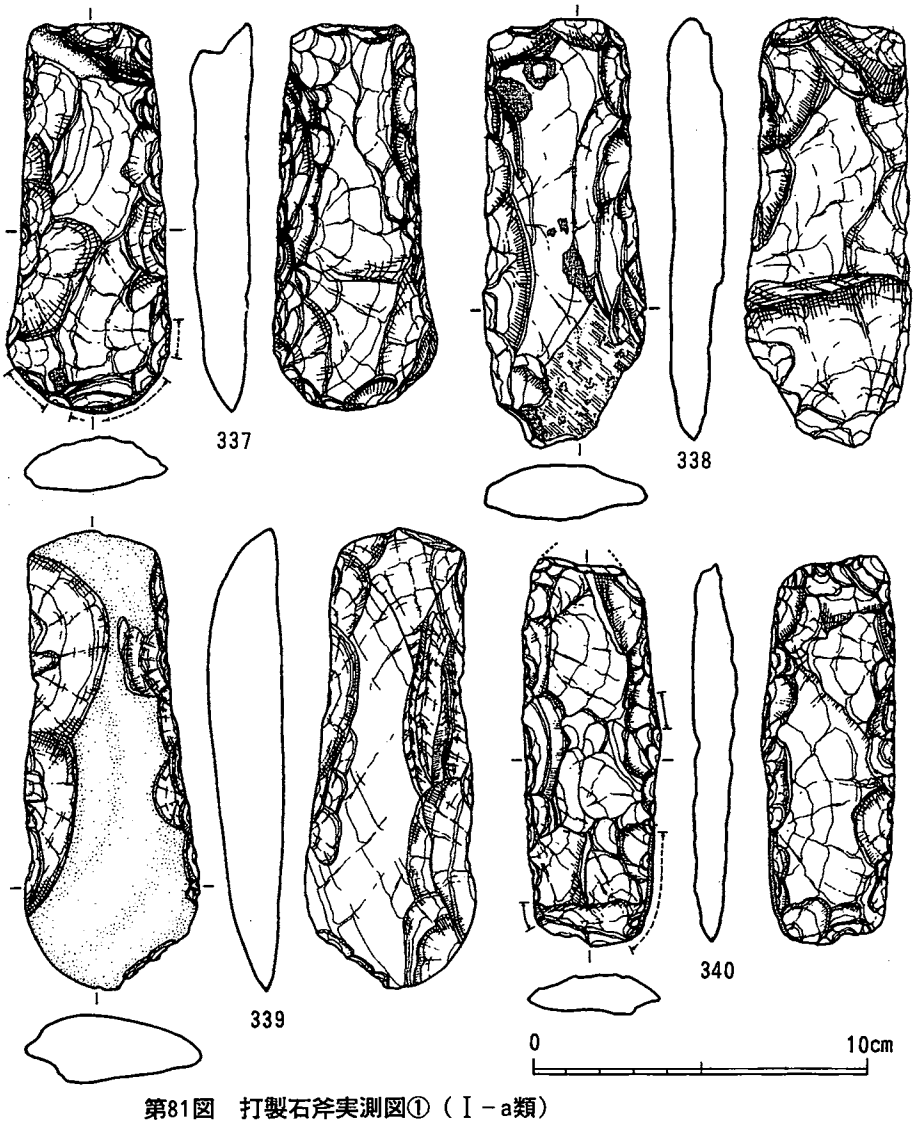
形状的にはⅠ－ｂ・Ⅱ－ｃなどに類似するが、剥片剥離によってできた尖りを先端部にしている。

Ⅲ－ｂ：〔実測図No.444～446〕

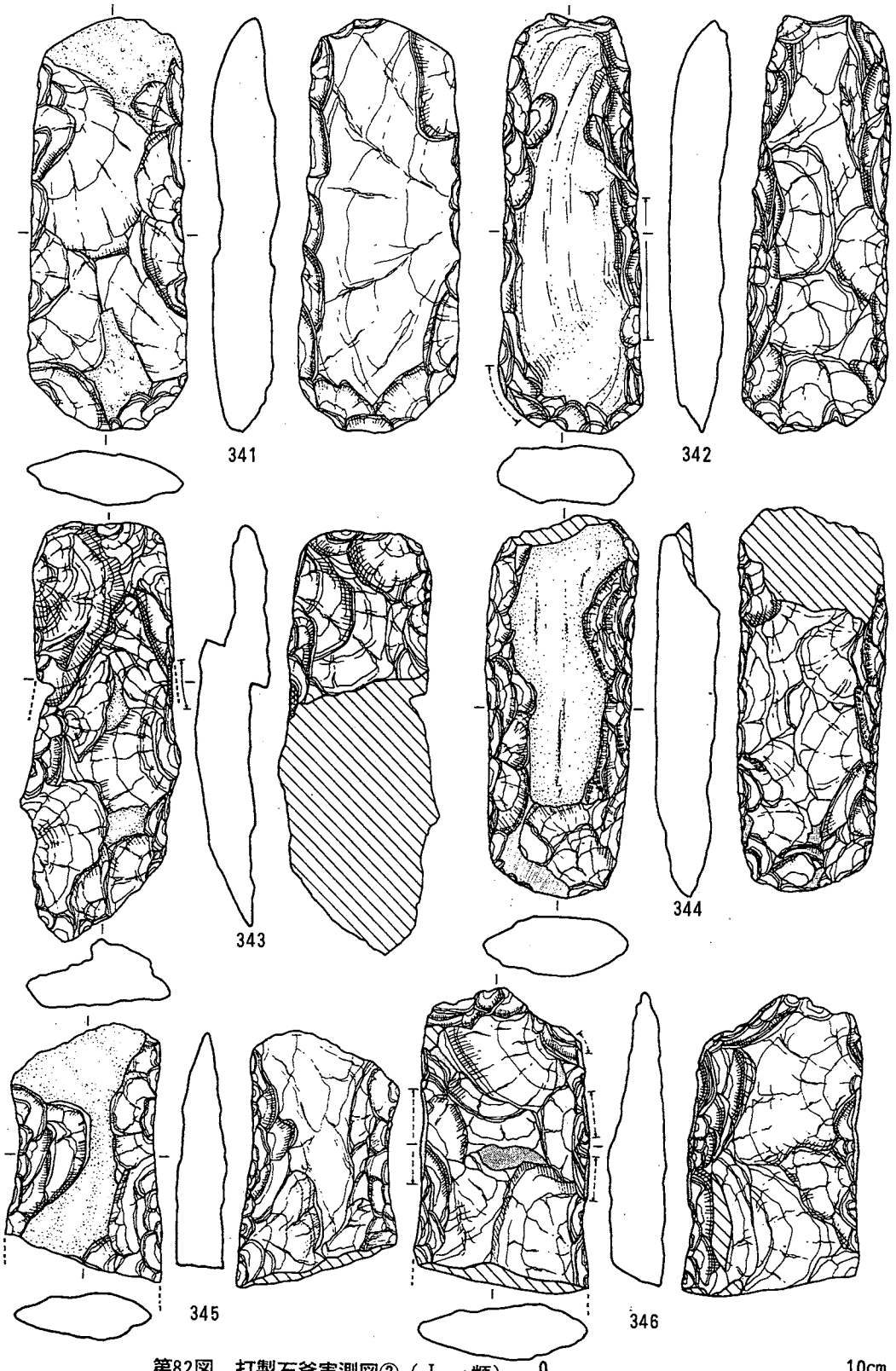
片側縁に刃部を残し、反対側縁は刃潰し加工が施されている。先端部と片側縁部の使用と思われる。446は刃潰し加工の代わりに自然面が利用されている。また、基部の先端部を除いた両側縁部の半分近くまで擦れ面が観察されるので、手に持っての使用が考えられる。

その他　〔実測図No.447～468〕

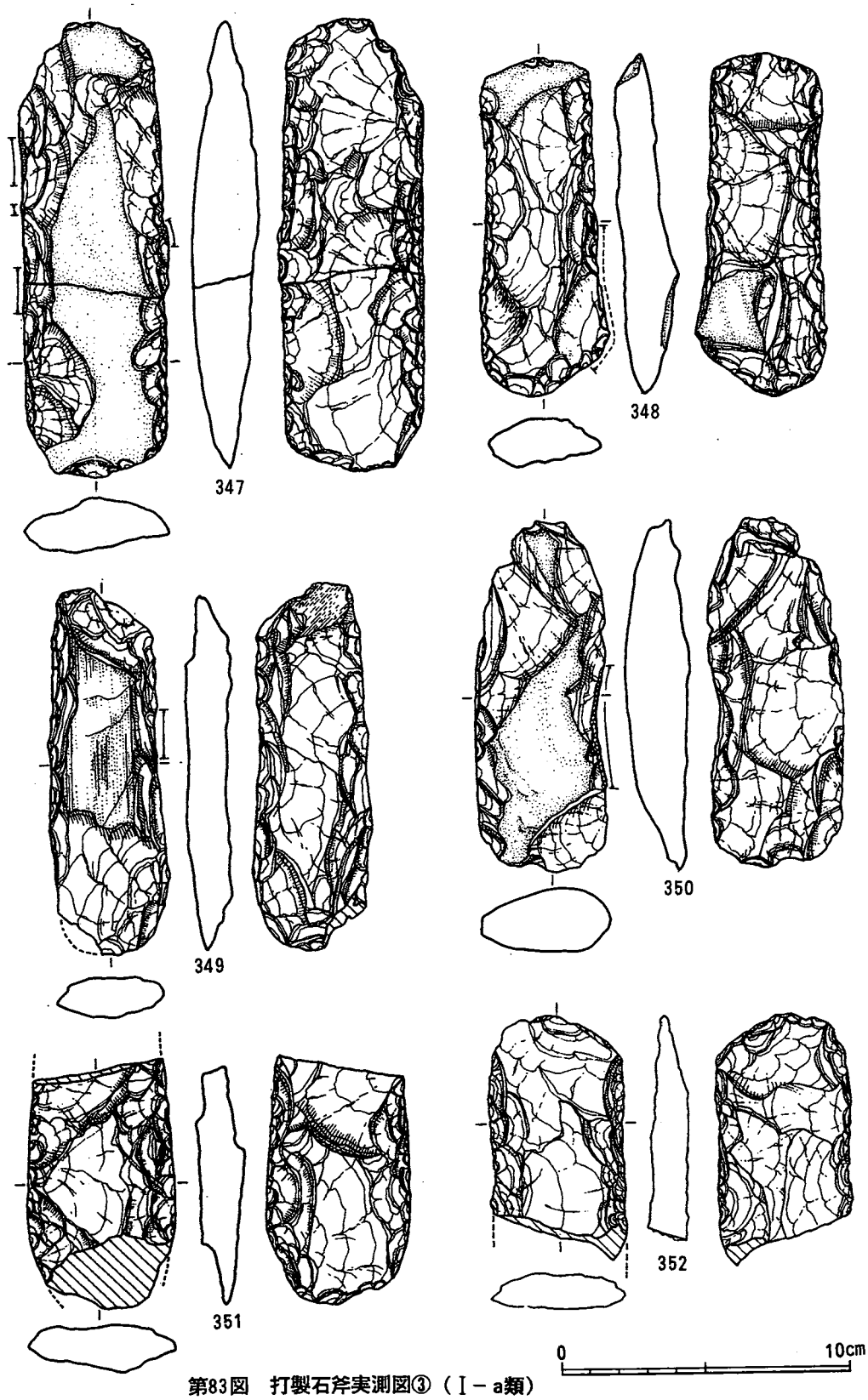
打製石斧と思われるが、総て欠損品で、小さな固体のために分類に当てはめられなかった。



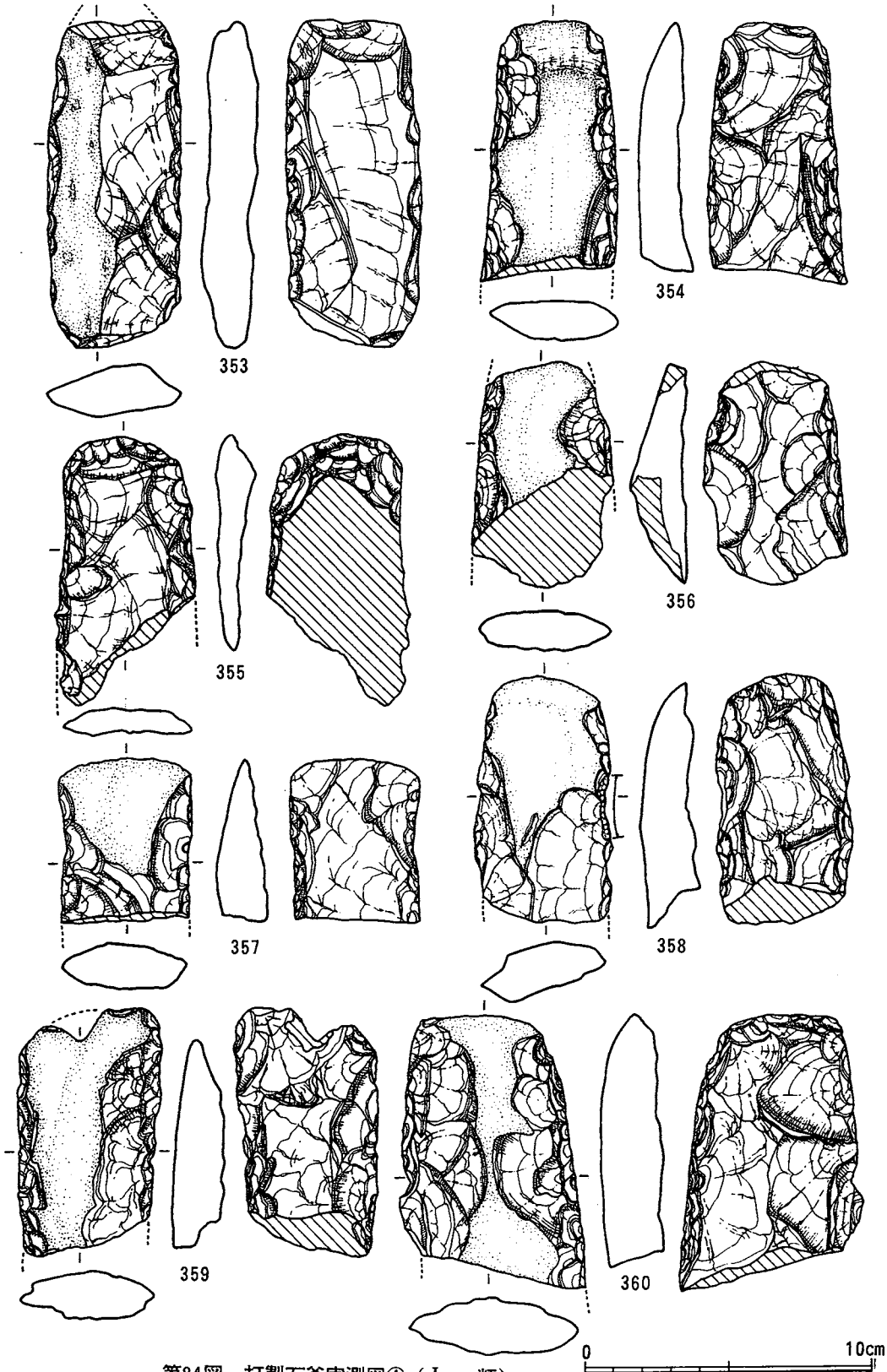
第81図　打製石斧実測図①（Ⅰ－a類）



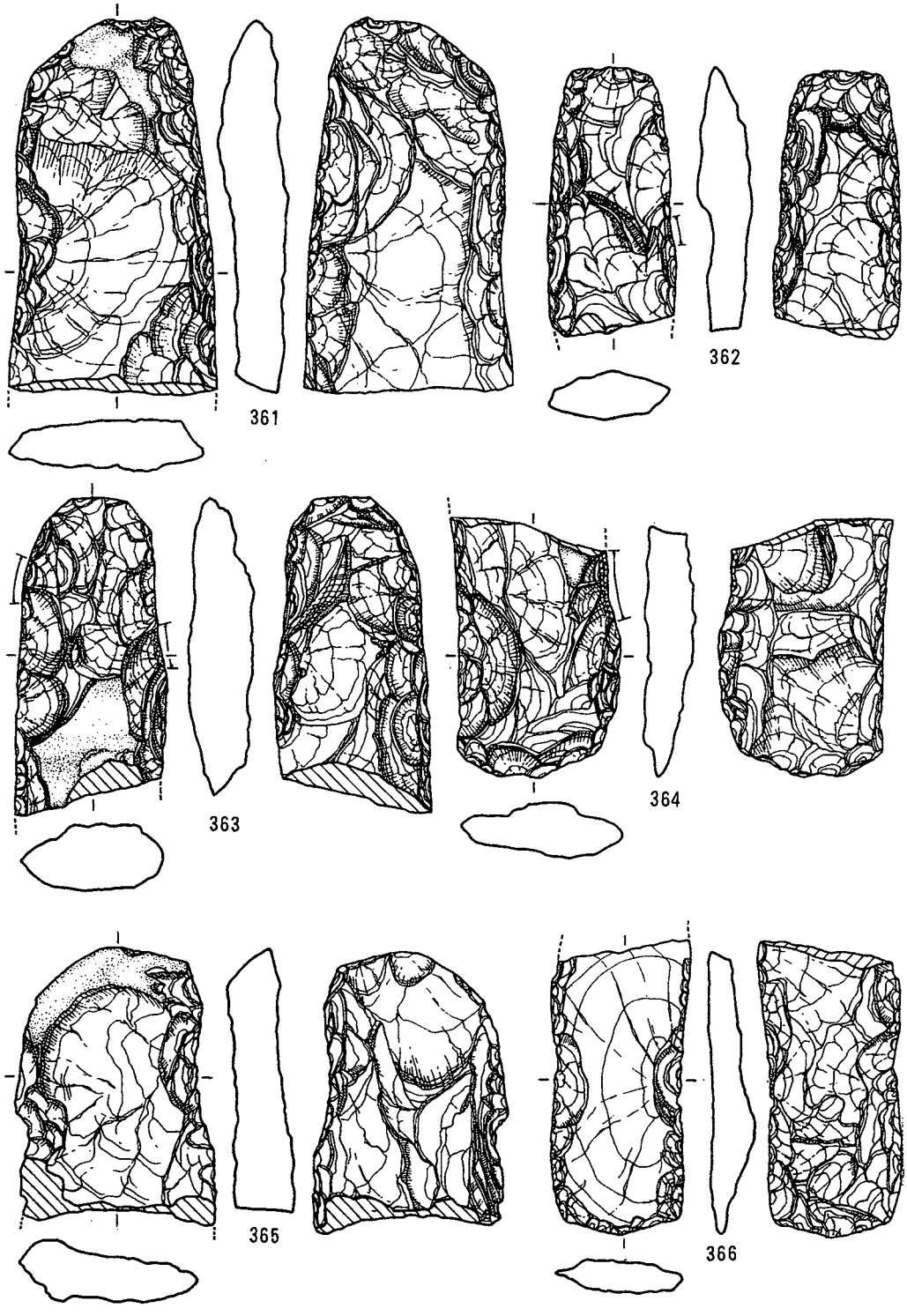
第82図　打製石斧実測図②（Ⅰ－a類）



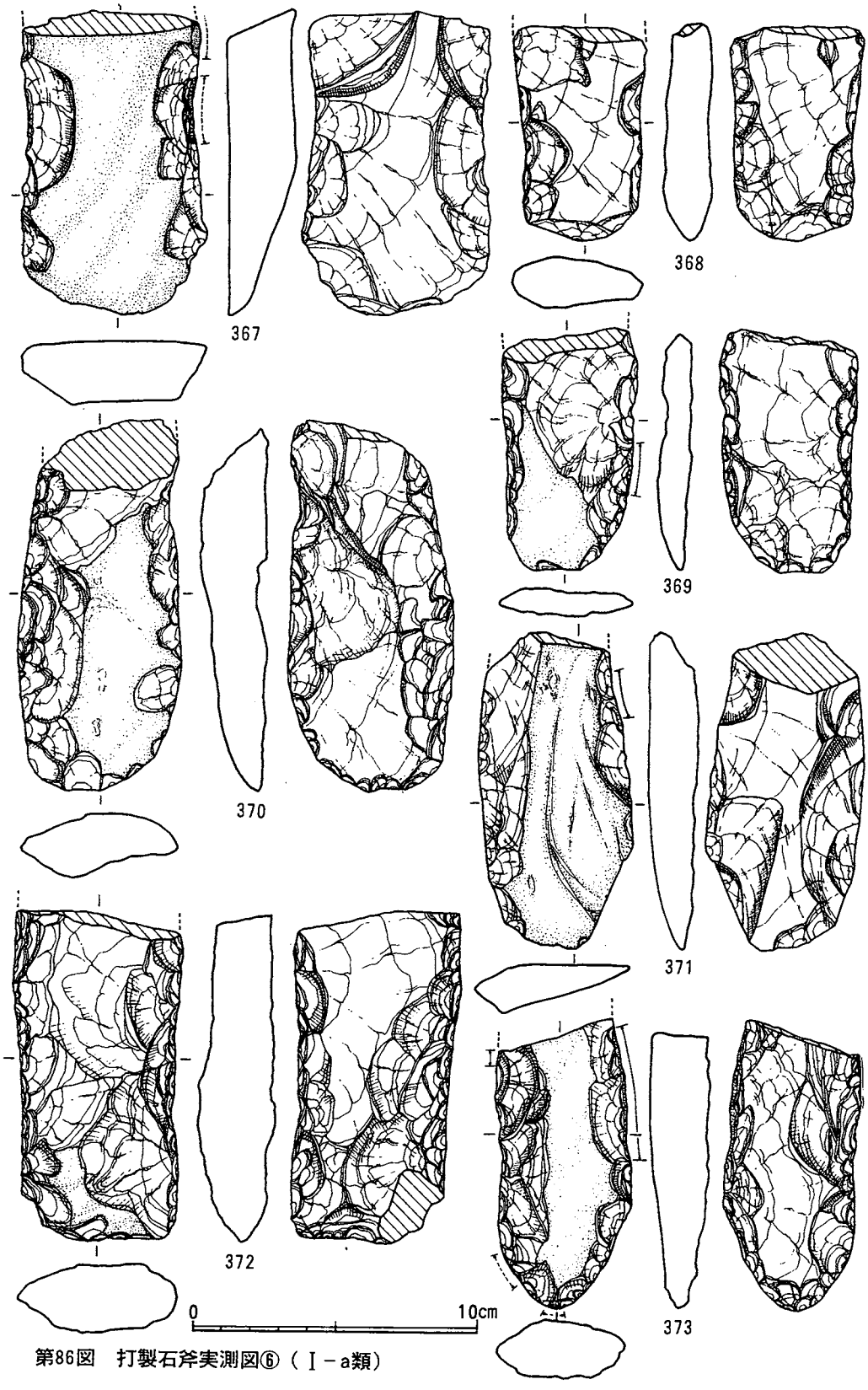
第83図　打製石斧実測図③（Ⅰ－a類）



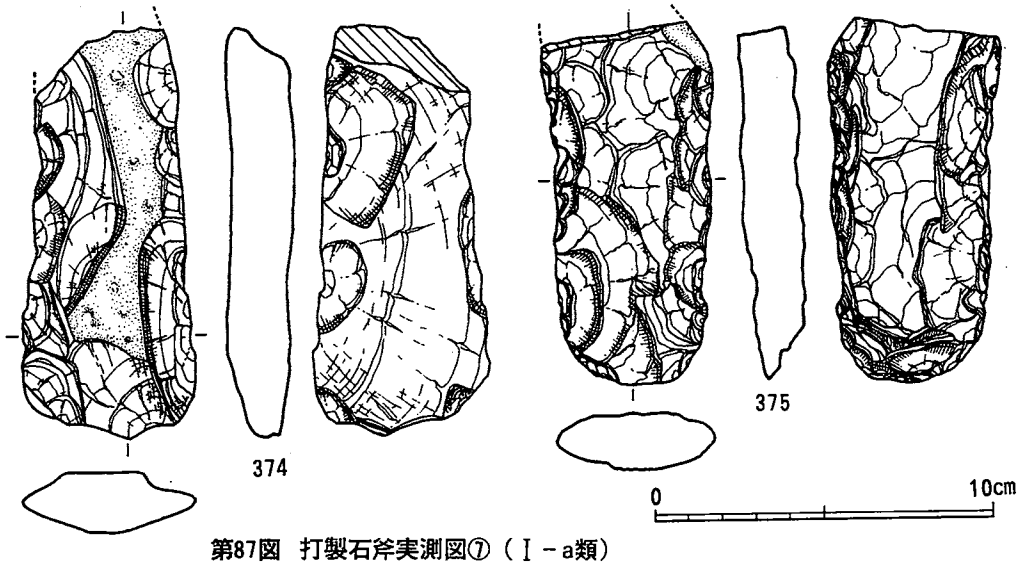
第84図　打製石斧実測図④（Ⅰ－a類）



第85図　打製石斧実測図⑤(Ⅰ－a類)



第86図　打製石斧実測図⑥（Ⅰ－a類）

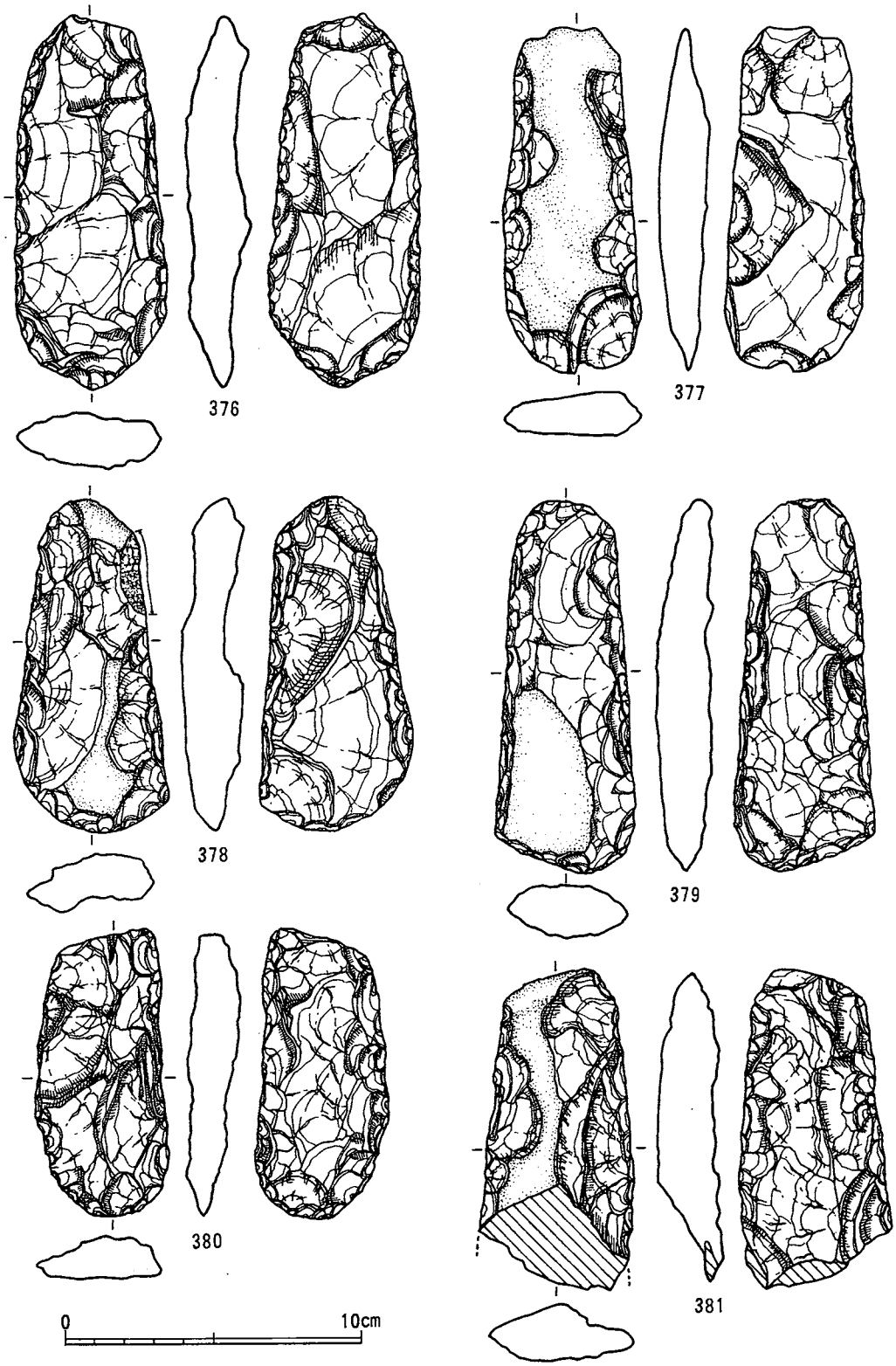


第87図　打製石斧実測図⑦（Ⅰ－a類）

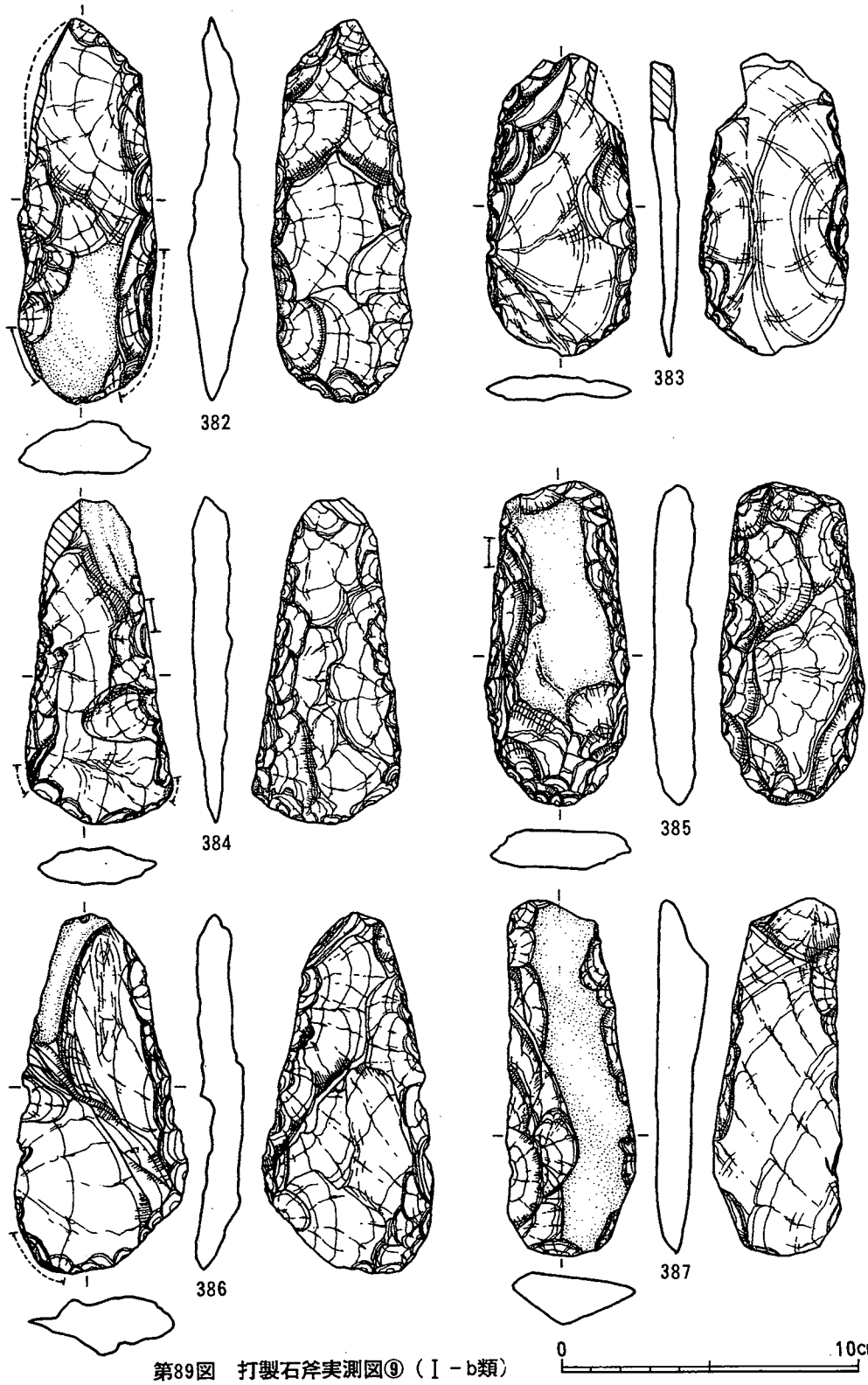
No.	分類	石材	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	出土地点	欠損状態	自然面
337	Ⅰ－a	砂岩	11.2	4.8	1.6	130.28	5 T Ⅶ層	A	有
338	〃	粘板岩	17.5	4.8	1.6	112.45	2 T 洪水層	A	有
339	〃	砂岩	13.4	5.1	2.2	158.35	5 T	A	有
340	〃	〃	11.0	4.0	1.3	78.58	4 T Ⅶ層	B	
341	〃	〃	12.6	4.9	1.9	159.90	4 T Ⅶ層	A	有
342	〃	粘板岩	12.7	4.4	1.7	143.58	4 T Ⅶ層	A	有
343	〃	砂岩	12.2	4.6	2.1	111.69	4 T Ⅶ層	D	有
344	〃	〃	11.7	4.5	1.9	143.10	4 T Ⅶ層	C	有
345	〃	〃	7.7	4.8	1.4	70.39	4 T Ⅶ層	D	有
346	〃	〃	9.1	5.2	1.7	121.24	墓地表採	D	
347	〃	〃	15.5	5.1	2.2	216.61	5 T Ⅶ層	A	有
348	〃	〃	11.6	4.5	1.8	115.78	4 T Ⅶ層	A	有
349	〃	粘板岩	12.5	4.0	1.5	97.87	4 T Ⅶ層	B	有
350	〃	砂岩	11.9	4.6	2.2	124.58	4 T Ⅶ層	A	有
351	〃	〃	8.2	5.1	1.5	81.23	4 T Ⅶ層	C	
352	〃	〃	7.7	4.7	1.4	69.29	5 T Ⅶ層	D	
353	〃	〃	11.2	4.5	1.8	119.08	5 T Ⅶ層	B	有
354	〃	〃	8.5	4.3	1.3	86.89	4 T Ⅶ層	D	有
355	〃	〃	9.2	4.8	1.3	50.26	4 T Ⅶ層	D	
356	〃	〃	7.5	4.9	1.7	70.97	4 T SE01	D	有
357	〃	〃	5.5	4.5	1.7	54.63	4 T SK01	D	有
358	〃	〃	8.5	4.8	1.9	109.29	4 T Ⅶ層	D	有
359	〃	〃	8.0	4.9	1.7	86.90	表採	D	有
360	〃	〃	8.8	6.2	2.1	170.12	5 T	D	有
361	〃	〃	12.1	6.4	2.0	239.79	4 T Ⅶ層	D	有
362	〃	〃	8.7	4.2	1.8	72.88	5 T	D	
363	〃	〃	9.9	5.2	1.9	149.63	4 T Ⅶ層	D	有
364	〃	〃	8.2	5.5	1.6	111.78	4 T Ⅶ層	C	有
365	〃	〃	8.6	6.3	2.0	170.16	4 T Ⅶ層	D	有
366	〃	〃	9.3	4.5	1.4	76.96	5 T Ⅶ層	C	
367	〃	〃	10.4	6.6	2.3	217.70	5 T Ⅶ層	C	有
368	〃	〃	7.3	4.6	1.7	60.92	5 T Ⅶ層	C	
369	〃	〃	8.0	4.6	1.1	60.27	4 T Ⅶ層	C	有
370	〃	〃	12.4	5.7	2.3	193.58	4 T Ⅶ層	C	有
371	〃	〃	10.7	5.3	1.7	98.61	5 T	C	有
372	〃	〃	11.2	5.3	2.2	242.59	5 T Ⅶ層	C	有
373	〃	〃	9.4	4.6	2.1	134.61	5 T Ⅶ層	C	有
374	〃	〃	11.8	5.2	1.9	124.55	5 T Ⅶ層	C	有
375	〃	〃	10.4	4.5	1.8	135.46	4 T SE02	C	有

（欠損状態　A：完形　B：部分欠損　C：基部欠損　D：刃部欠損　E：両端部欠損）

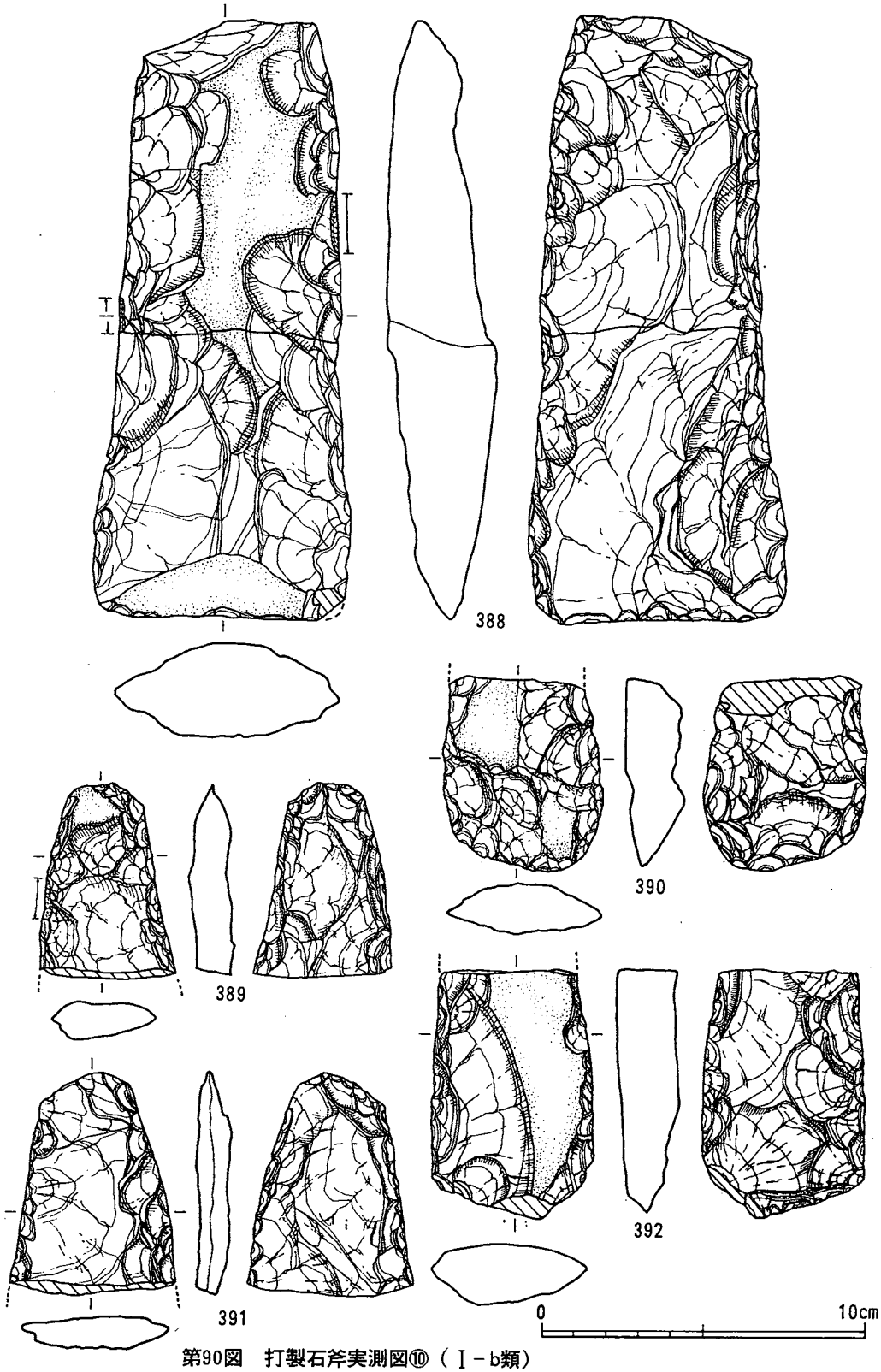
第59表　打製石斧計測表①



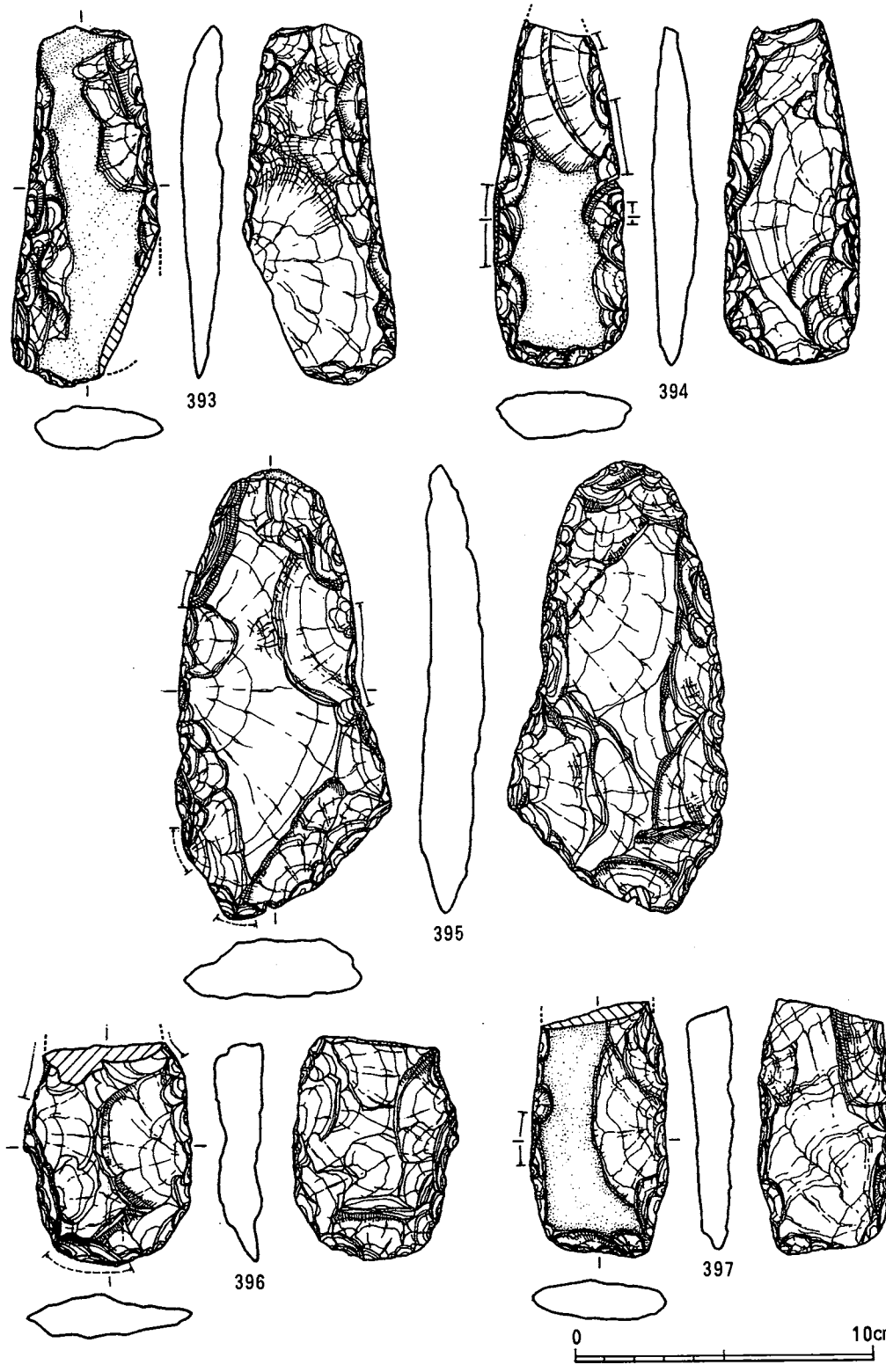
第88図　打製石斧実測図⑧（Ⅰ－b類）



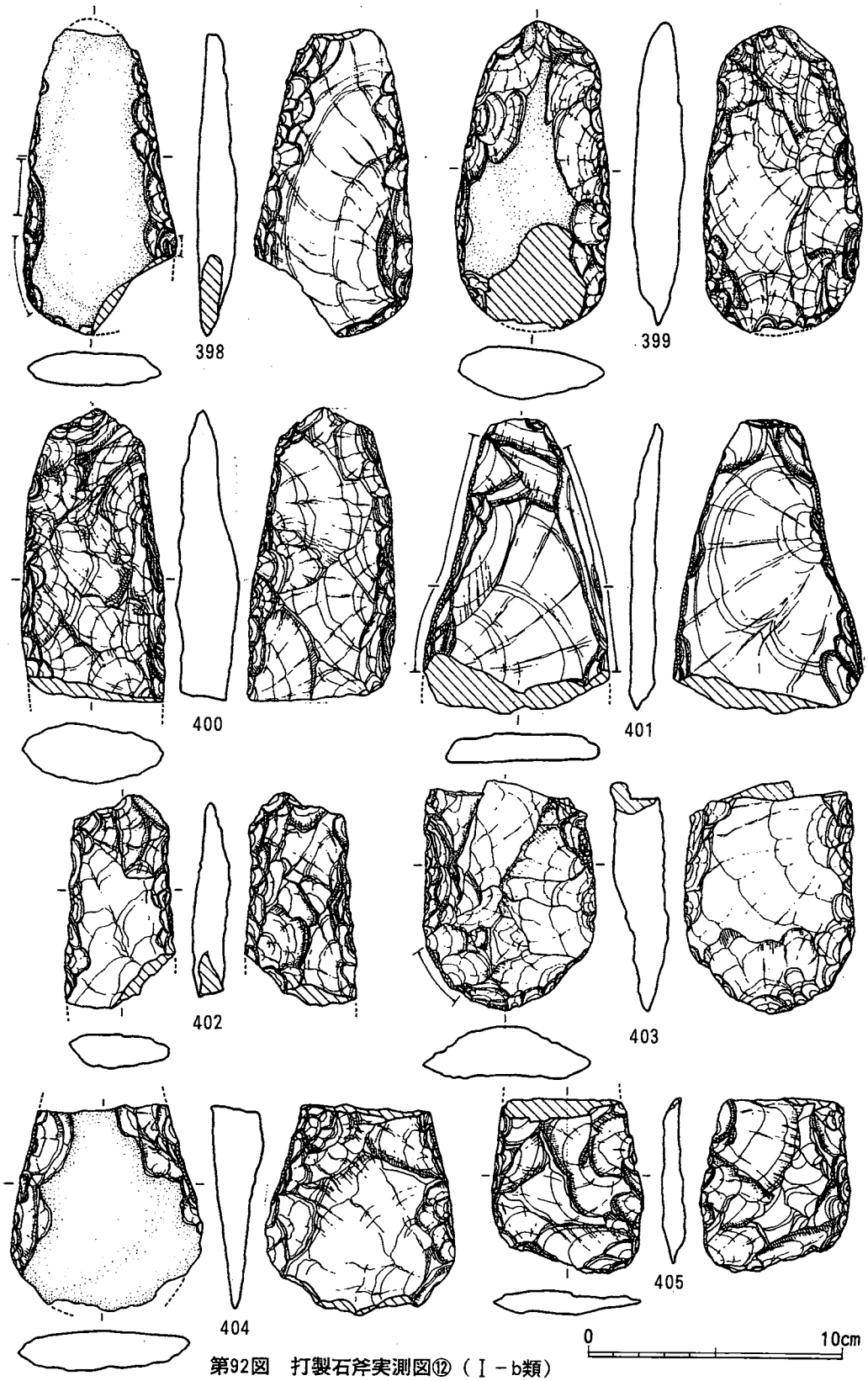
第89図　打製石斧実測図⑨（Ⅰ－b類）



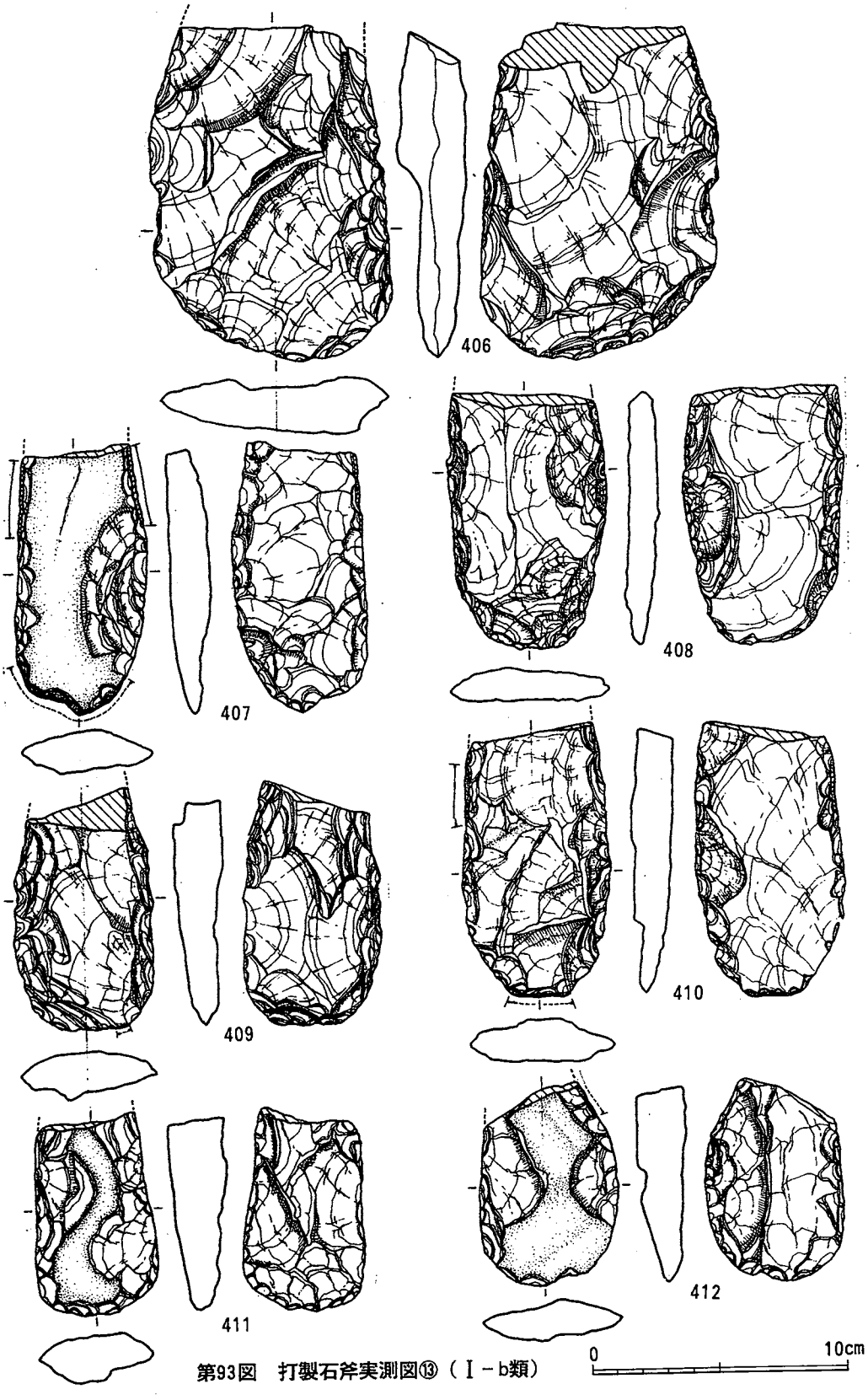
第90図　打製石斧実測図⑩（Ⅰ－b類）



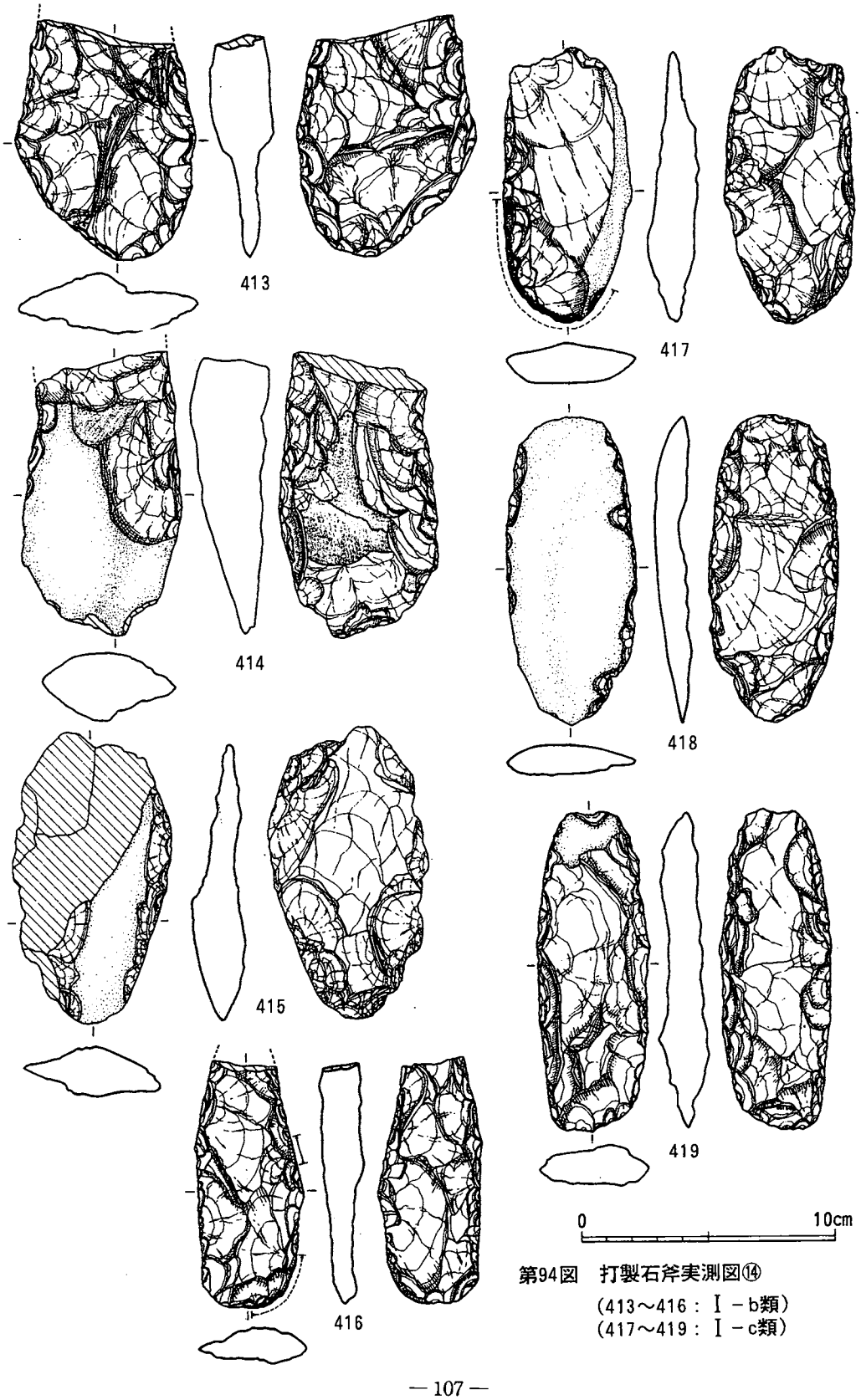
第91図　打製石斧実測図⑪（Ⅰ－b類）



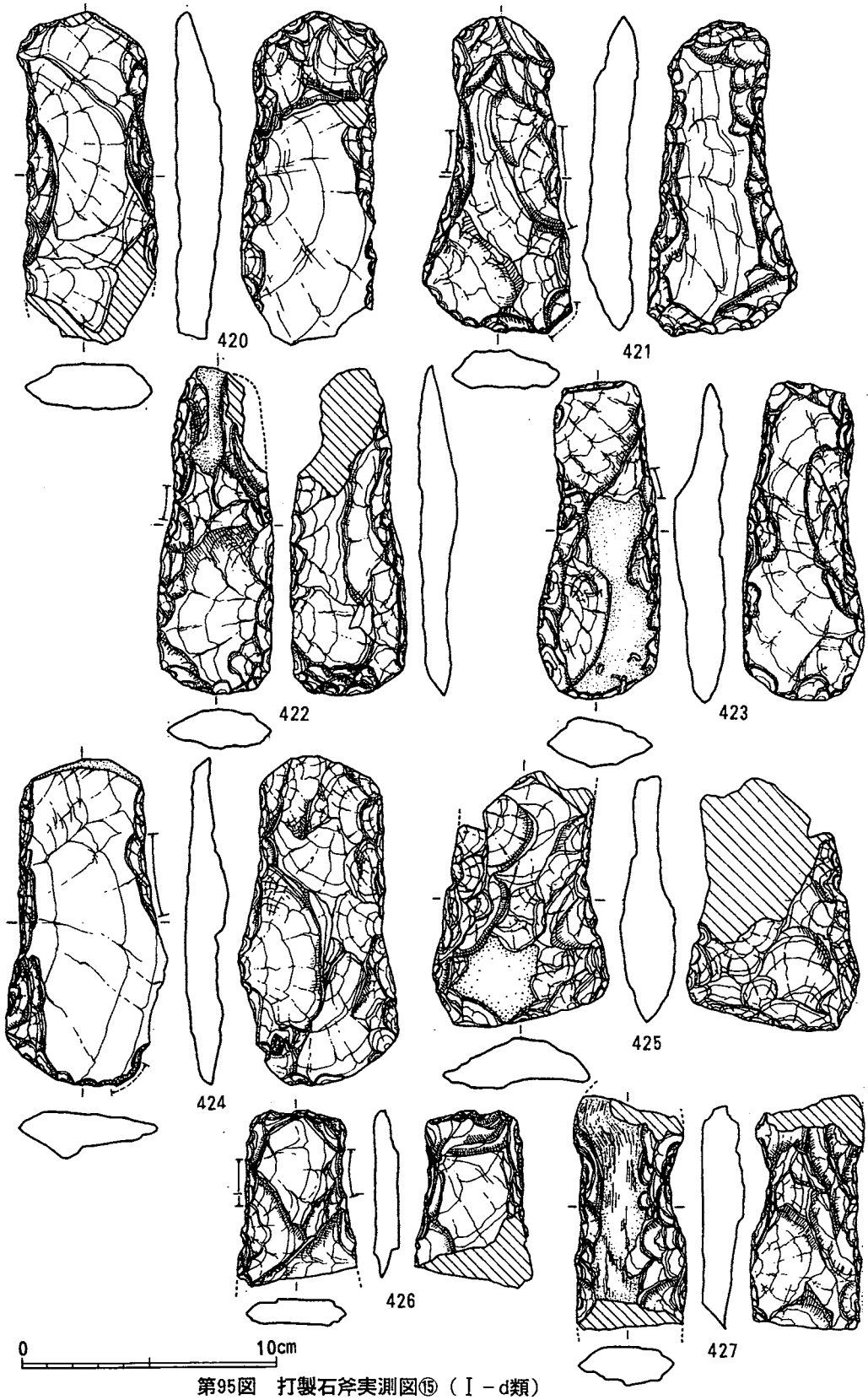
第92図　打製石斧実測図⑫（Ⅰ－b類）



第93図　打製石斧実測図⑬（Ⅰ－b類）



第94図　打製石斧実測図⑭
(413～416：Ⅰ－b類)
(417～419：Ⅰ－c類)

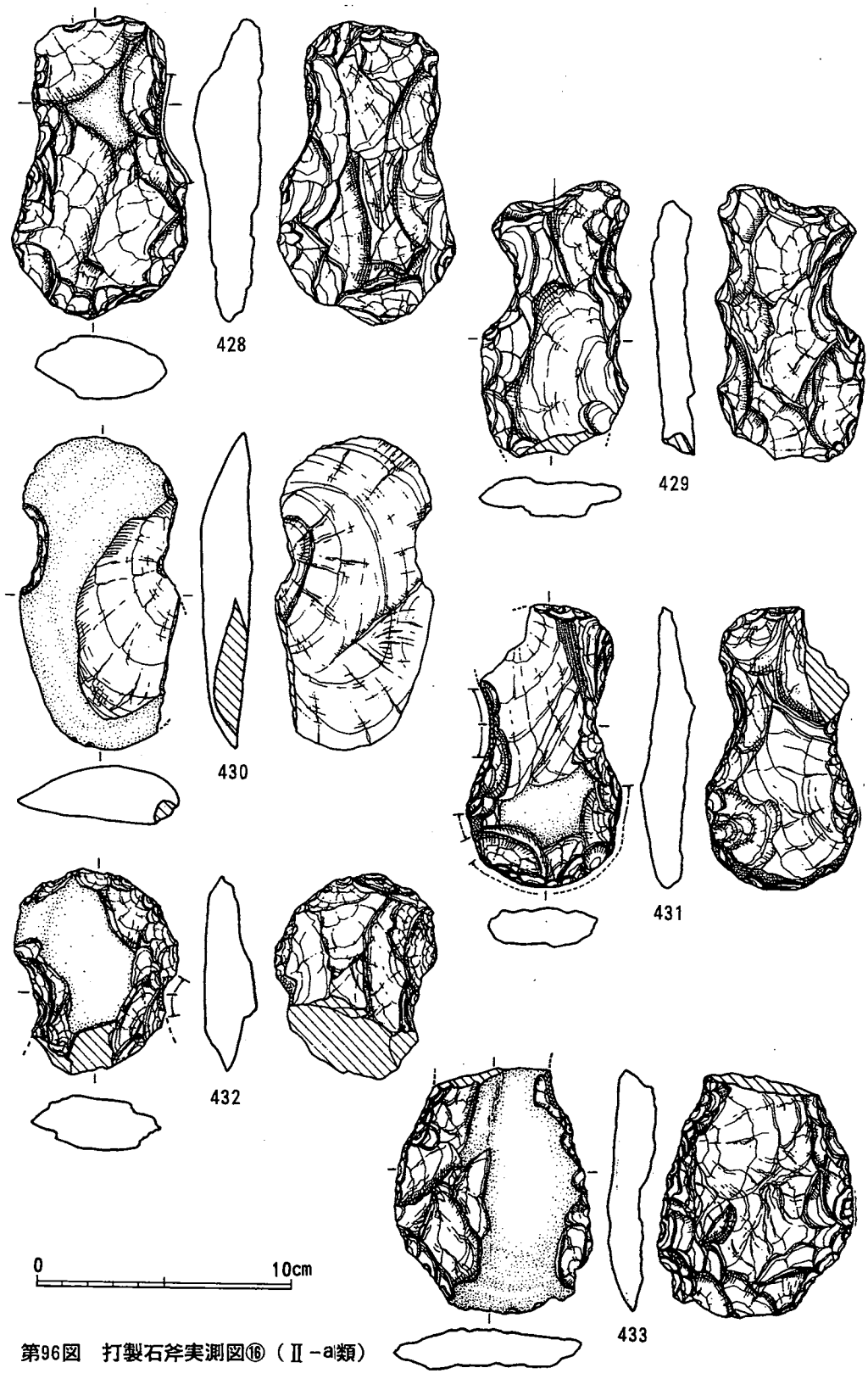


第95図　打製石斧実測図⑮（Ⅰ－d類）

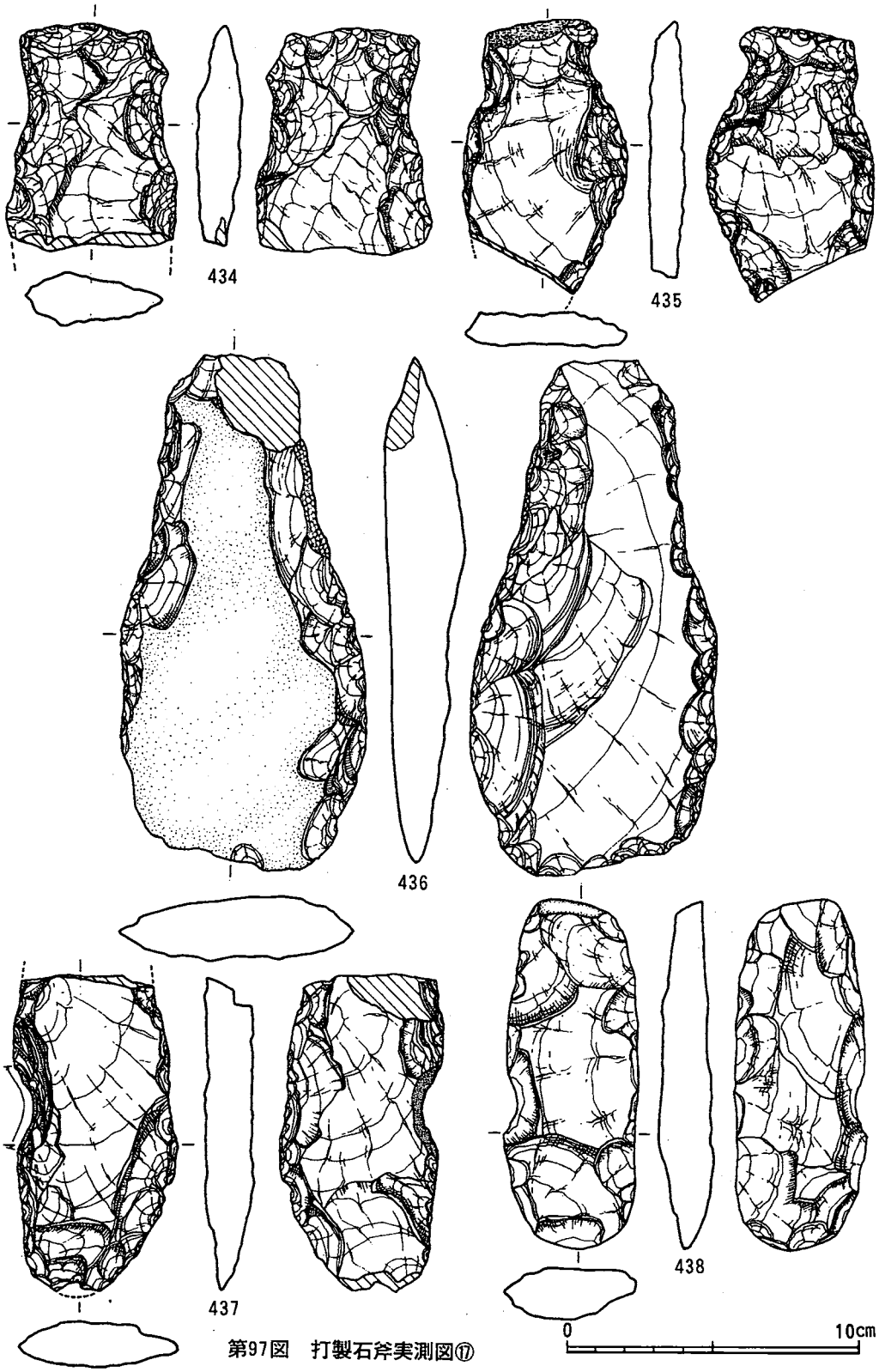
No.	分類	石材	計測値 長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	欠損状態	自然面
376	Ⅰ－b	砂岩	12.4	5.1	1.9	150.81	4 T Ⅷ層	A	
377	〃	〃	11.4	4.6	10.5	91.21	4 T Ⅷ層	A	有
378	〃	〃	10.9	5.1	2.0	134.82	4 T Ⅷ層	A	有
379	〃	〃	12.1	4.7	1.8	144.61	4 T Ⅷ層	A	有
380	〃	〃	9.4	4.4	1.6	78.61	2 T Ⅳ層	A	
381	〃	〃	10.6	5.1	2.0	114.84	表採	D	有
382	〃	〃	12.6	4.6	1.9	115.01	5 T	B	有
383	〃	貢岩	10.0	4.8	0.6	44.04	5 T Ⅷ層	B	
384	〃	砂岩	10.7	4.9	1.2	82.69	4 T Ⅷ層	B	有
385	〃	〃	10.6	4.7	1.4	110.21	4 T Ⅷ層	A	有
386	〃	〃	11.8	5.7	1.9	113.82	5 T Ⅷ層	A	有
387	〃	〃	11.8	4.3	1.7	90.49	5 T	A	有
388	〃	〃	18.4	7.8	3.2	496.55	表採	A	有
389	〃	〃	5.9	4.2	1.2	40.29	4 T Ⅷ層	D	有
390	〃	〃	5.7	4.9	1.5	64.92	4 T Ⅷ層	C	有
391	〃	〃	6.8	5.1	1.0	48.04	4 T Ⅷ層	D	
392	〃	〃	7.6	5.0	1.8	105.84	5 T Ⅷ層	C	有
393	〃	〃	11.1	4.6	1.3	99.51	4 T Ⅷ層	B	有
394	〃	〃	11.2	4.4	1.3	96.15	4 T Ⅷ層	B	有
395	〃	〃	14.6	7.1	2.0	246.88	5 T	A	
396	〃	〃	7.2	5.5	1.7	87.47	5 T Ⅵ層	C	
397	〃	〃	8.1	4.5	1.2	78.52	4 T Ⅷ層	C	有
398	〃	〃	11.7	6.1	1.5	122.55	4 T Ⅷ層	B	有
399	〃	〃	12.0	6.0	2.0	193.66	5 T Ⅷ層	B	有
400	〃	〃	11.3	5.7	2.5	192.71	5 T	D	
401	〃	粘板岩	11.2	7.3	0.9	128.73	4 T Ⅷ層	D	
402	〃	砂岩	7.7	4.0	1.2	61.16	4 T Ⅷ層	D	有
403	〃	〃	8.8	6.7	2.0	139.03	5 T Ⅷ層	C	
404	〃	〃	8.0	7.4	2.0	126.42	4 T SK01	C	有
405	〃	粘板岩	6.8	5.9	0.9	49.27	5 T Ⅴ層	C	
406	〃	砂岩	13.0	9.2	2.3	398.52	5 T Ⅷ層	C	
407	〃	〃	10.1	5.6	1.1	115.08	4 T	C	有
408	〃	〃	9.7	6.1	1.1	118.70	5 T Ⅷ層	C	
409	〃	〃	9.1	5.3	1.9	118.18	5 T Ⅷ層	C	
410	〃	〃	10.3	5.8	1.6	136.90	4 T Ⅷ層	C	有
411	〃	〃	7.4	4.3	2.2	99.31	4 T Ⅷ層	C	有
412	〃	〃	7.6	5.4	1.9	90.53	4 T SK02	C	有
413	〃	〃	8.5	7.2	2.4	147.19	4 T Ⅷ層	C	
414	〃	〃	10.7	6.2	3.1	218.23	4 T Ⅷ層	C	有
415	〃	〃	10.3	6.2	2.0	122.93	5 T Ⅷ層	D	有
416	〃	〃	9.7	4.1	1.6	72.74	4 T Ⅷ層	C	
417	Ⅰ－c	砂岩	10.5	5.0	1.8	106.09	5 T Ⅴ層	A	有
418	〃	〃	12.0	5.0	1.2	97.02	5 T Ⅷ層	A	有
419	〃	〃	12.3	4.2	1.8	116.37	4 T	A	有
420	Ⅰ－d	砂岩	12.6	5.2	1.7	172.37	5 T Ⅷ層	B	有
421	〃	〃	12.1	5.8	1.8	132.49	4 T	A	
422	〃	〃	12.6	4.5	1.5	88.21	4 T Ⅷ層	B	有
423	〃	〃	12.2	4.7	1.8	120.11	4 T Ⅷ層	A	有
424	〃	〃	12.6	5.9	1.6	148.05	5 T Ⅷ層	A	有
425	〃	〃	9.4	6.9	2.1	137.37	5 T Ⅴ層	C	有
426	〃	貢岩	6.8	4.6	1.0	45.78	4 T Ⅷ層	D	
427	〃	〃	9.1	4.4	1.7	82.11	5 T Ⅷ層	E	有

（欠損状態　A：完形　B：部分欠損　C：基部欠損　D：刃部欠損　E：両端部欠損）

第60表　打製石斧計測表②

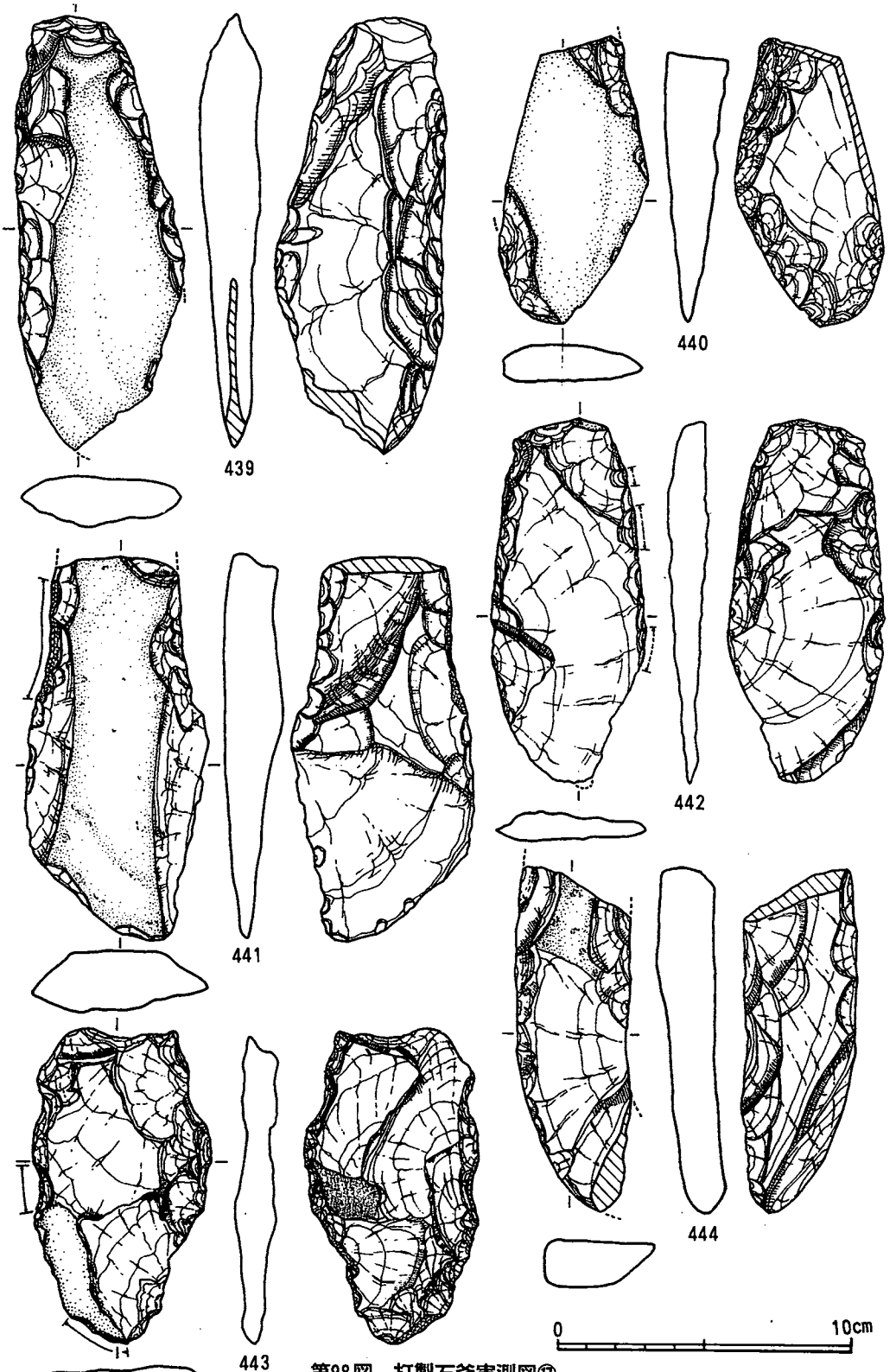


第96図　打製石斧実測図⑯（Ⅱ-a類）

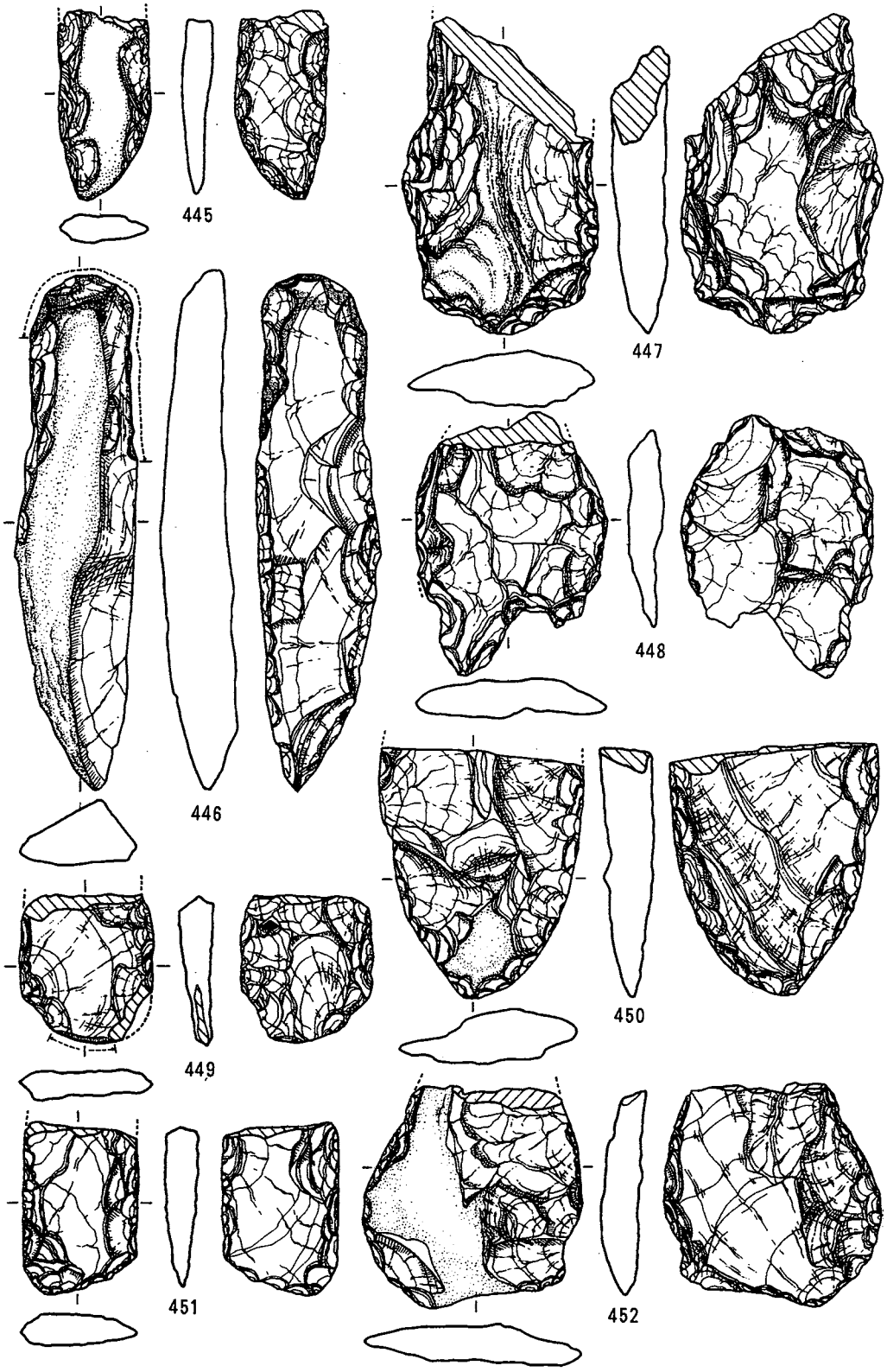


第97図　打製石斧実測図⑰

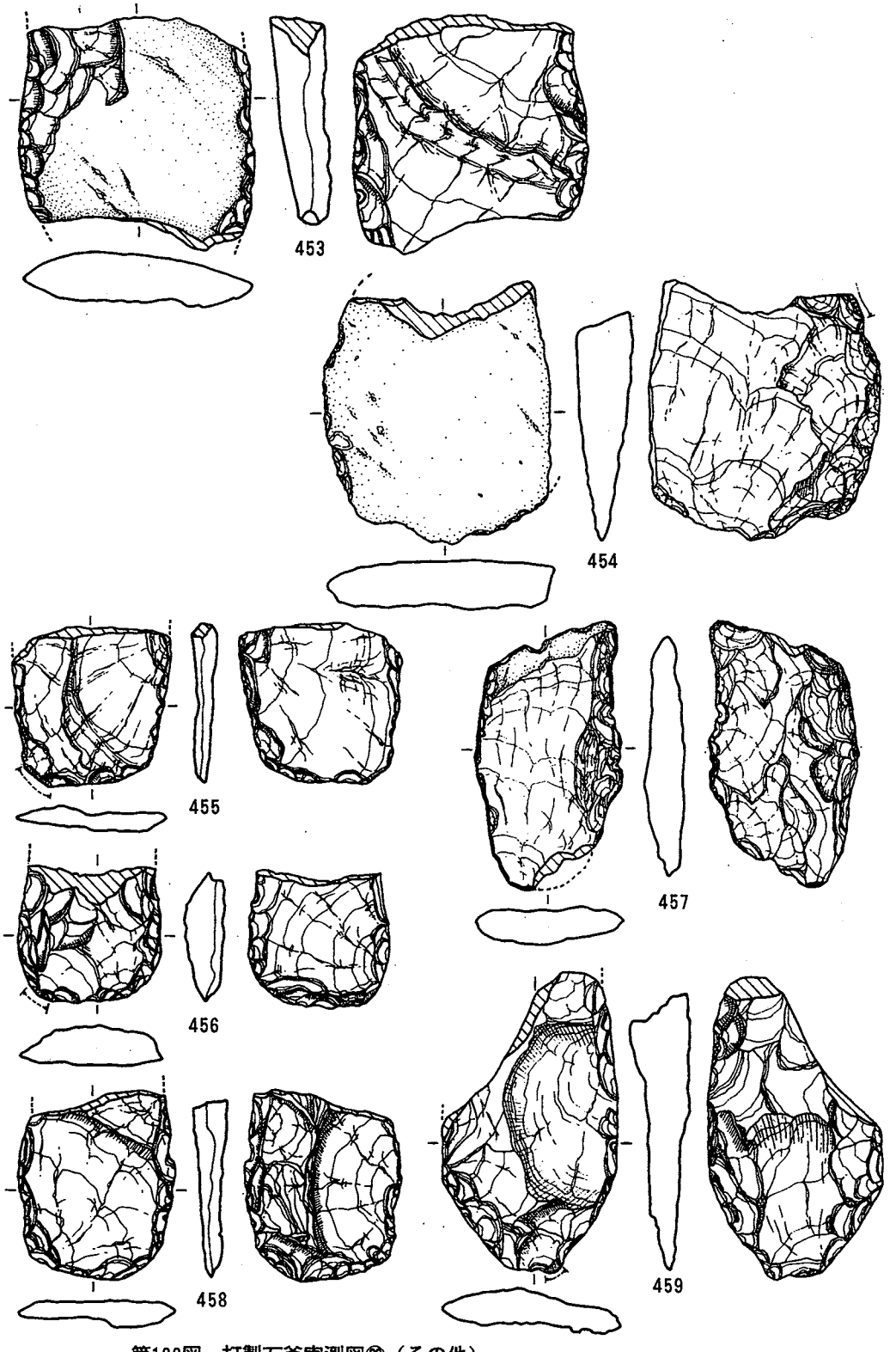
（434.435：Ⅱ－b類）（436.：Ⅱ－c類）（437.438：Ⅱ－d類）



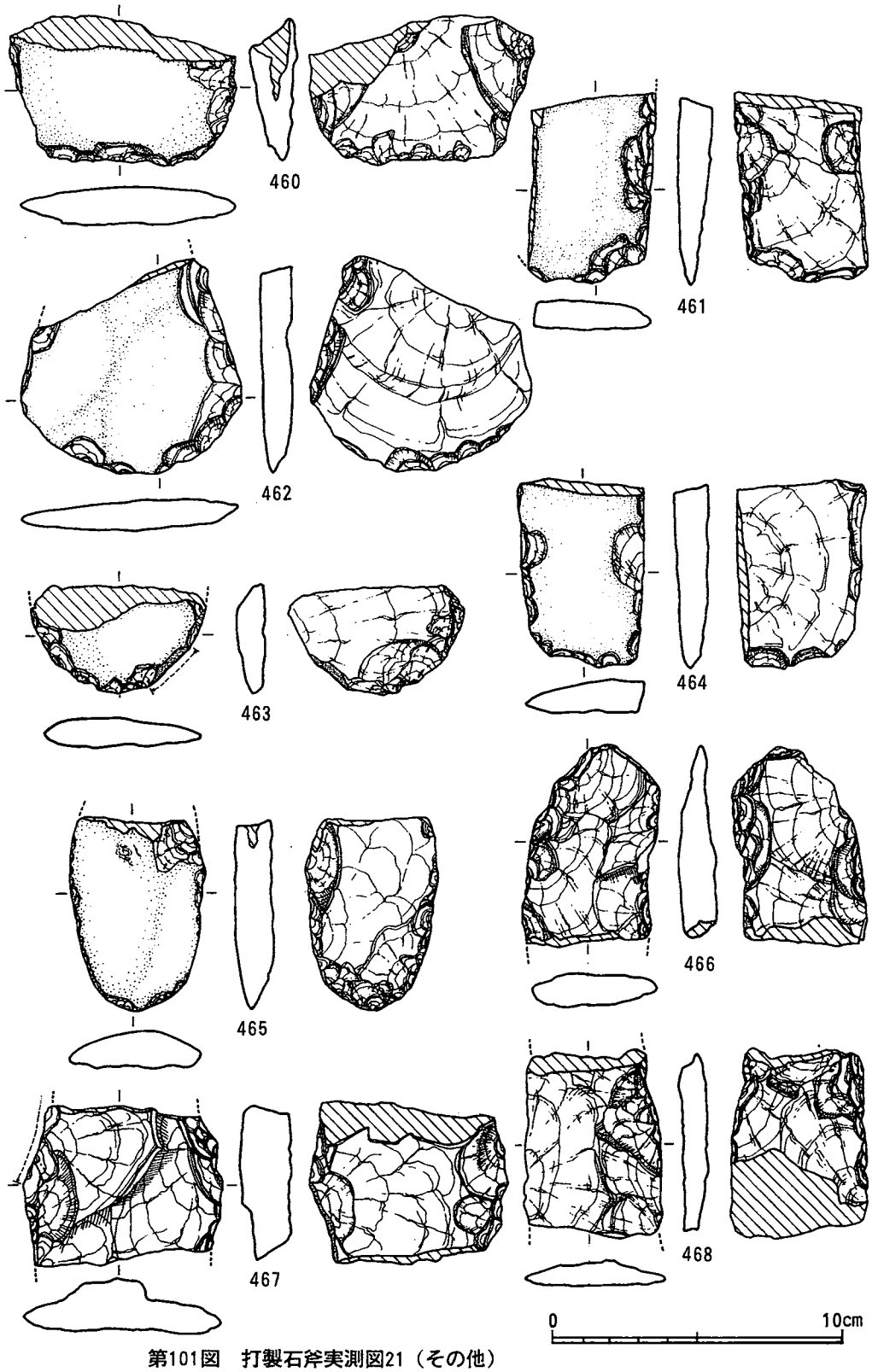
第98図　打製石斧実測図⑰
（439～443：Ⅲ－a類）（444：Ⅲ－b類）



第99図　打製石斧実測図⑲
（445.446：Ⅲ－b類）（449～452：その他）



第100図　打製石斧実測図⑳（その他）



第101図　打製石斧実測図21（その他）

No.	分類	石材	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土地点	欠損状態	自然面
428	Ⅱ－a	砂岩	11.5	7.1	2.6	208.84	4 T Ⅷ層	A	有
429	〃	〃	9.7	5.5	1.3	118.41	4 T Ⅷ層	B	有
430	〃	〃	12.1	6.2	2.3	150.07	5 T Ⅷ層	B	有
431	〃	〃	10.8	6.0	1.7	128.04	5 T Ⅷ層	B	有
432	〃	〃	7.8	6.4	2.0	108.30	5 T Ⅷ層	D	有
433	〃	〃	9.4	7.6	1.6	146.03	4 T Ⅷ層	C	有
434	Ⅱ－b	〃	7.4	5.9	1.5	95.84	5 T	D	
435	〃	〃	9.2	5.7	1.1	86.77	4 T	B	
436	Ⅱ－c	〃	17.2	8.2	2.7	406.35	5 T Ⅷ層	B	有
437	Ⅱ－d	〃	10.7	5.4	1.6	130.73	5 T	B	
438	〃	〃	11.9	4.6	1.8	114.29	4 T Ⅷ層	A	有
439	Ⅲ－a	〃	14.6	5.8	1.9	175.70	4 T Ⅷ層	B	有
440	〃	〃	9.1	4.7	2.1	93.51	5 T Ⅷ層	C	有
441	〃	〃	12.9	6.3	2.0	165.46	4 T Ⅷ層	B	有
442	〃	〃	12.1	5.3	10.3	86.64	5 T	A	有
443	〃	〃	10.4	6.1	1.4	104.75	5 T	A	有
444	Ⅲ－b	〃	10.5	4.0	2.0	111.58	5 T	E	有
445	〃	〃	6.3	3.1	0.9	24.50	5 T	C	有
446	〃	頁岩	17.3	4.2	2.6	162.09	5 T	A	有
447	その他	粘板岩	9.9	6.6	1.8	152.54	4 T Ⅷ層	C	有
448	〃	砂岩	8.1	6.6	1.2	78.25	4 T Ⅷ層	E	
449	〃	〃	4.9	4.5	1.1	31.16	5 T Ⅵ層	C	
450	〃	〃	8.3	7.0	1.7	107.51	4 T Ⅷ層	C	有
451	〃	〃	5.7	4.0	1.1	36.20	4 T	C	
452	〃	〃	6.9	7.4	1.2	89.08	5 T	C	有
453	〃	〃	7.6	8.1	1.8	151.63	4 T Ⅷ層	E	有
454	〃	〃	7.9	7.8	1.9	171.64	5 T	C	有
455	〃	〃	5.3	5.5	0.9	31.72	4 T Ⅷ層	C	
456	〃	〃	4.4	4.8	1.3	43.53	4 T Ⅷ層	C	
457	〃	〃	8.2	5.0	1.3	67.26	5 T	B	有
458	〃	〃	6.4	5.3	1.1	46.30	4 T	C	
459	〃	〃	9.4	6.0	2.0	101.99	4 T Ⅷ層	C	有
460	〃	〃	4.8	7.8	1.6	63.46	5 T Ⅷ層	C	
461	〃	〃	6.3	4.0	1.1	47.55	4 T Ⅷ層	C	有
462	〃	〃	6.9	7.6	1.0	70.90	4 T Ⅷ層	C	有
463	〃	〃	3.6	6.1	0.9	26.49	5 T Ⅷ層	C	有
464	〃	〃	6.1	4.2	1.0	45.99	4 T Ⅷ層	C	有
465	〃	〃	6.4	4.5	1.3	55.81	5 T Ⅴ層	C	有
466	〃	〃	6.6	4.3	1.2	48.54	5 T Ⅴ層	D	
467	〃	〃	5.2	6.8	1.8	94.87	4 T	E	
468	〃	〃	6.4	4.7	0.9	37.40	5 T Ⅵ層	E	

（欠損状態　A：完形　B：部分欠損　C：基部欠損　D：刃部欠損　E：両端部欠損）

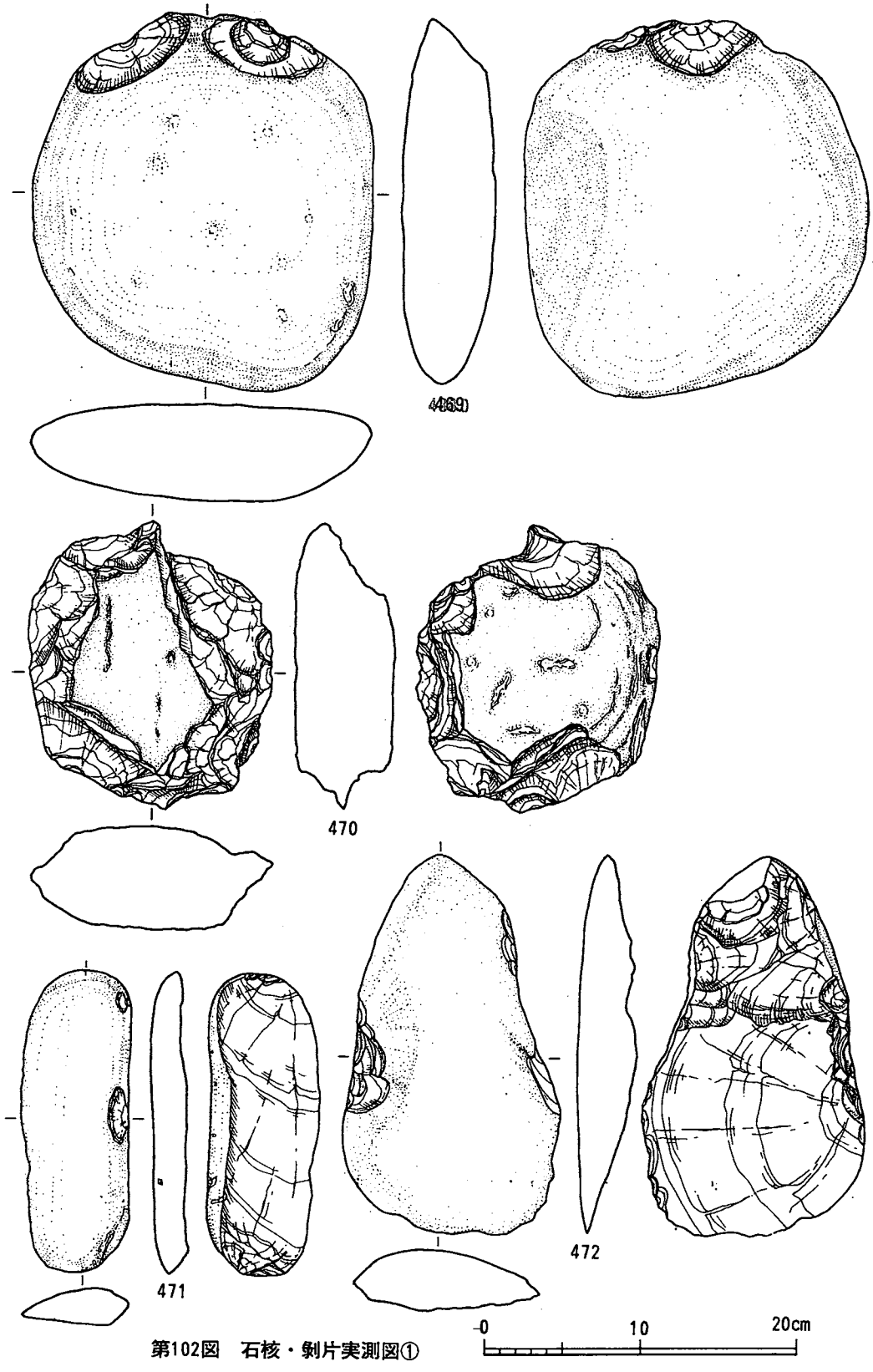
第61表　打製石斧計測表　③

2．石核・剥片

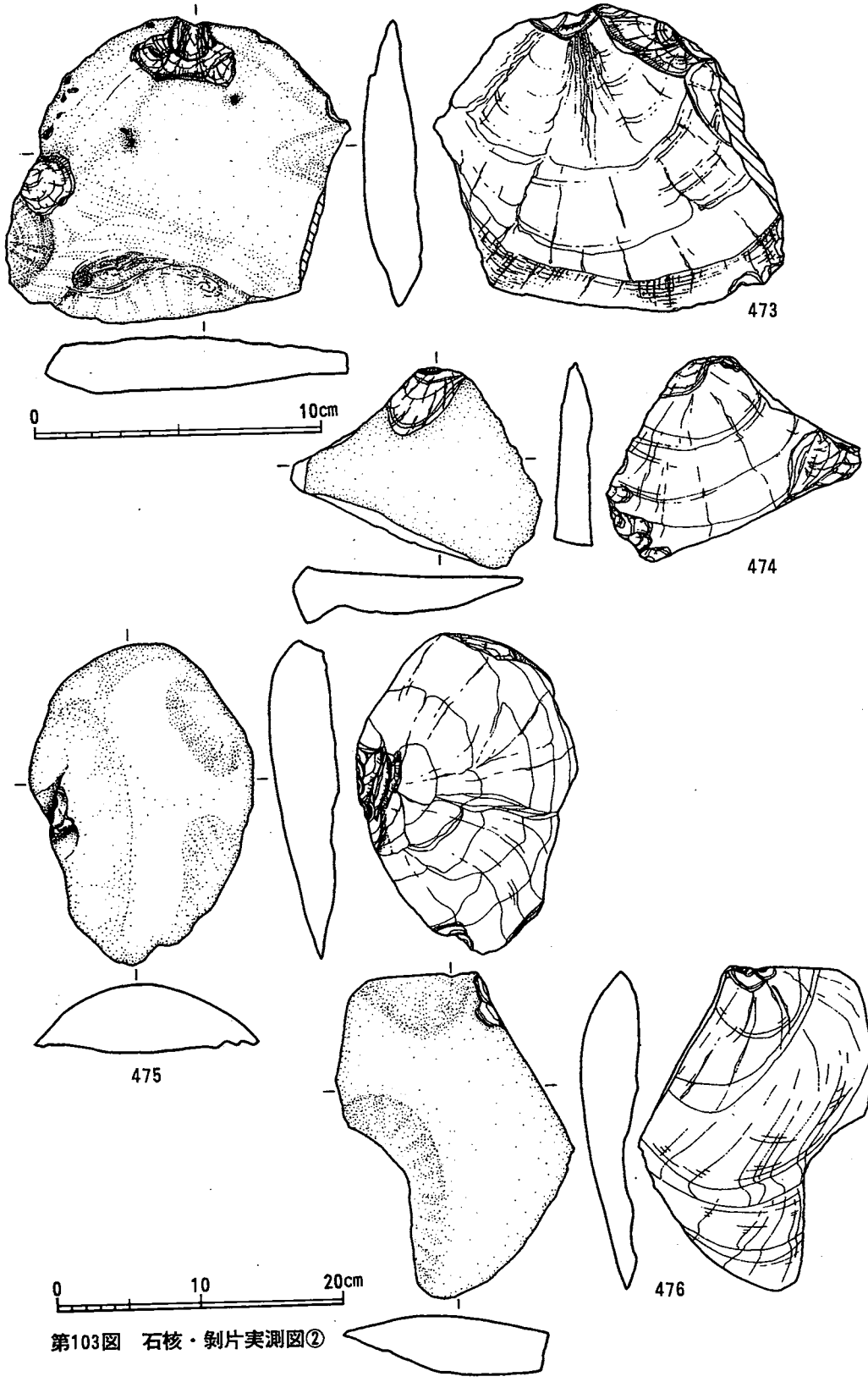
当遺跡からは、2点の石核と、砂岩製の一次剥片を含む多くの細剥片類が出土した。これらは、打製石斧の製作過程において出来たものと思われる。

母岩は川原に転がる扁平な砂岩礫で、縁辺部を打点にし平坦部に向けて敲打を行う。次に縁辺部の打点をずらし、反対側の平坦部に向けて敲打する交互剥離を行っている。こうして出来た横長の一次剥片から打製石斧の製作が行われたと考えられる。当遺跡では、出土した打製石斧の約71％に自然面が残っている。

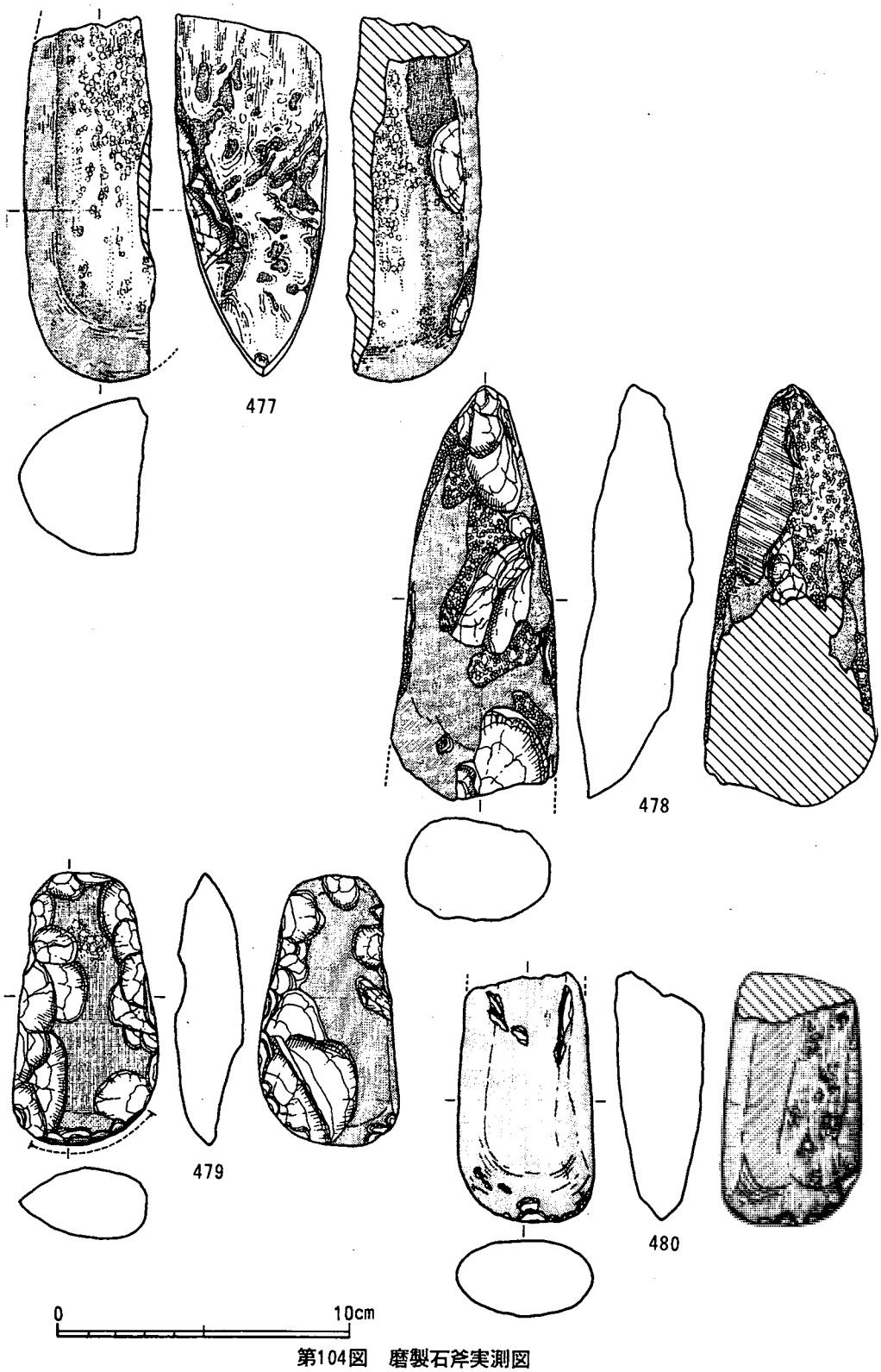
球磨川流域遺跡のアンモン山遺跡・米山遺跡においても、多くの剥片類が出土したが、調査範囲内での石核の出土は見られなかった。このことにより、一旦、川原で扁平な砂岩礫を一次剥片状態にした後、遺跡地に持ち込み、そこで打製石斧の製作が行われていたことが伺われる。



第102図　石核・剝片実測図①



第103図　石核・剝片実測図②



第104図　磨製石斧実測図

No.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	
469	石核	砂岩	23.2	21.8	5.9	1880.0	5 T Ⅷ層
470	〃	〃	17.6	15.6	6.8	2103.16	5 T Ⅷ層
471	剥片	砂岩	19.4	6.9	2.2	463.79	5 T Ⅷ層
472	〃	〃	24.2	12.1	3.6	1375.40	4 T Ⅷ層
473	〃	〃	10.2	10.9	1.8	308.30	5 T Ⅷ層
474	〃	〃	12.6	16.5	2.1	729.99	5 T
475	〃	〃	22.2	15.6	4.5	1635.78	4 T
476	〃	〃	22.4	14.5	3.9	1320.48	4 T Ⅷ層

第62表　石核・剥片計測表

3．磨製石斧

4点の出土があったが、いずれも欠損品であった。477は細粒砂岩製で、縦半分が欠損している。欠損面の高まりの部分に研磨痕が見られる事から、欠損後、砥石として転用されたものと思われる。頁岩製は2点で、基部欠損で刃部に使用による刃毀が見られる480と、刃部欠損で剥離面が残り、高まりの部分を敲打によって整えたあとに研磨されている478があった。479は安山岩製で、荒い剥離ののちに研磨されたものと思われる。裏面先端部の剥離面は使用による欠損と思われる。風化が進んでおり、研磨面もざらついている。

No.	器種	石材	計測値				出土地点	
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)		
477	磨製石斧	砂岩	12.0	4.3	5.0	413.60	4 T Ⅷ層	欠損
478	〃	頁岩	13.9	5.0	3.3	377.76		欠損
479	〃	安山岩	9.0	4.8	2.2	152.04	5 T Ⅷ層	欠損
480	〃	頁岩	8.3	4.6	3.0	176.79	1 T Ⅴ層	欠損

第63表　磨製石斧計測表

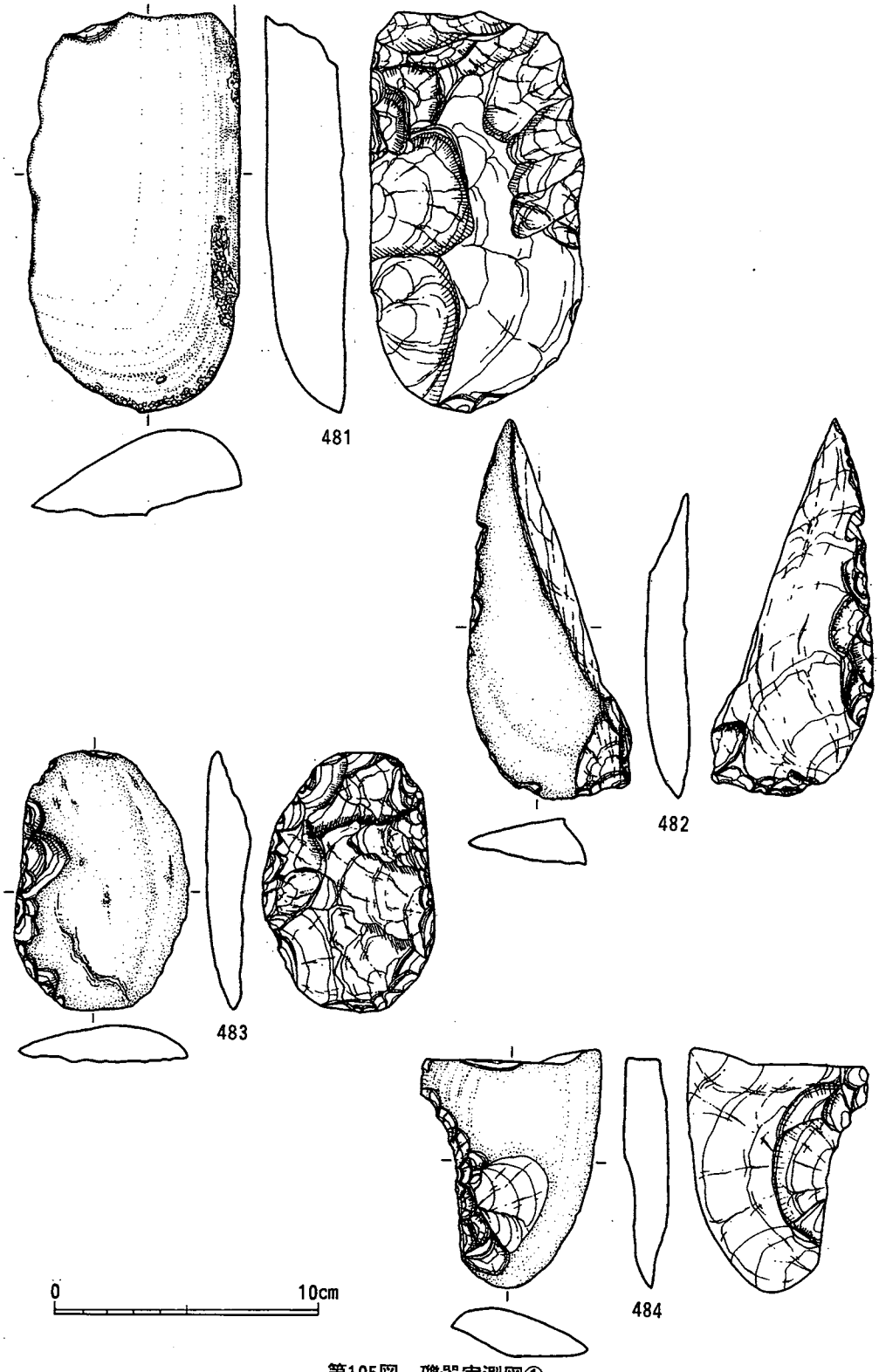
4．礫器

9点の出土があった。481は敲石としても使用されており、側面に片側からの剥離調整による刃部が見られる。482・483は片側に自然面を残して細かな剥離調整によって刃部が作り出されている。484は打点部に抉入状の刃部を作り出している。485・487は両面に自然面を残し、やや大きめの剥離調整で刃部を作り出している。486は石核状を呈し、荒い剥離によって刃部が作られている。488は両面からの剥離調整で刃部を作り出している。489は大型のもので70%程自然面を残し、先端部から大きな剥離が見られる。側面の自然稜線部からの剥離調整が行われ刃部を作り出している。

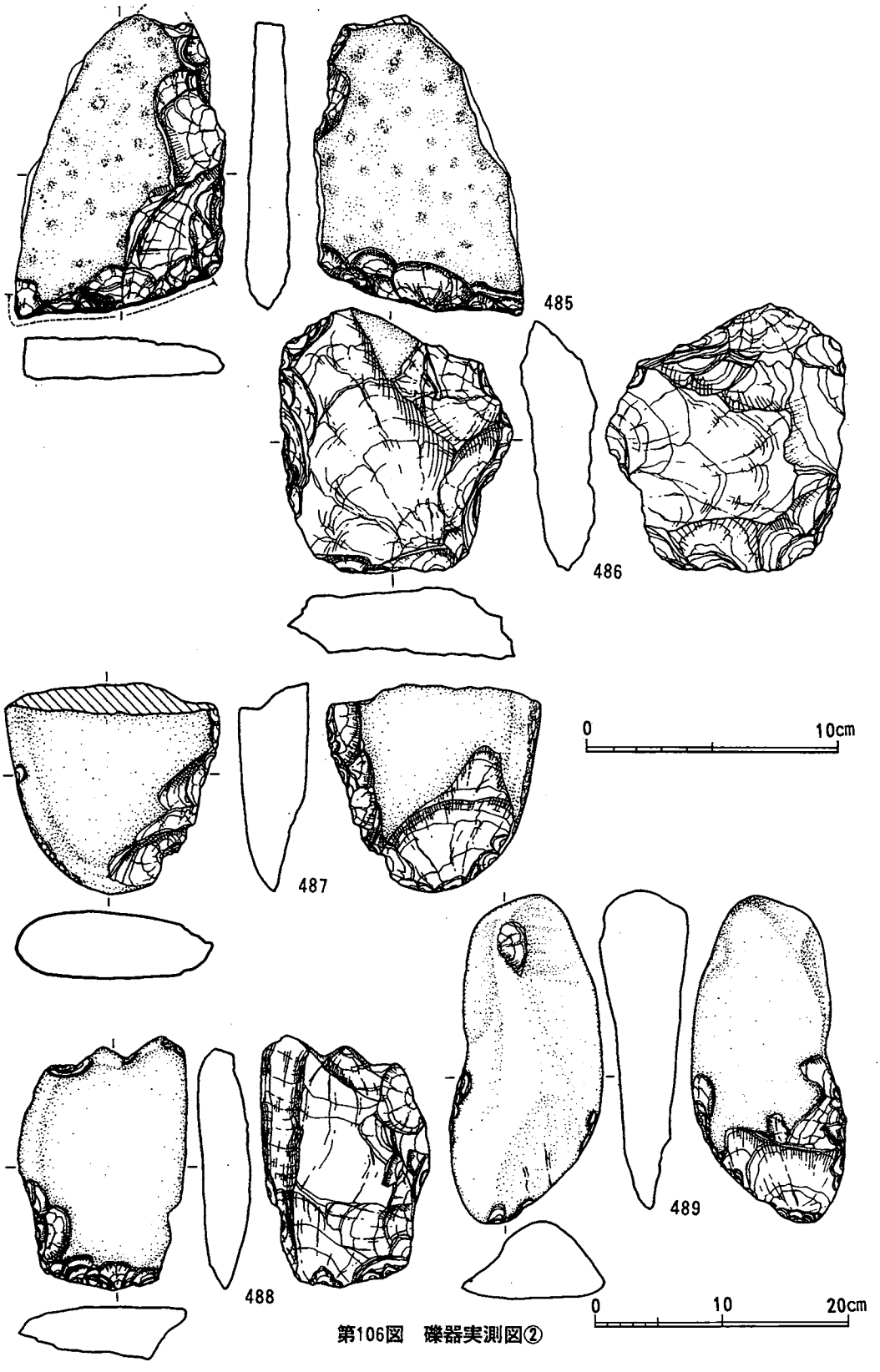
5．円盤状礫器

いずれも砂岩を使用しており、厚みを持ったものは縁辺部に敲打痕が見られる。縁辺部からの剥離は円盤状石製品に比べると大きく、区別の意味からも円盤状礫器として取り上げた。

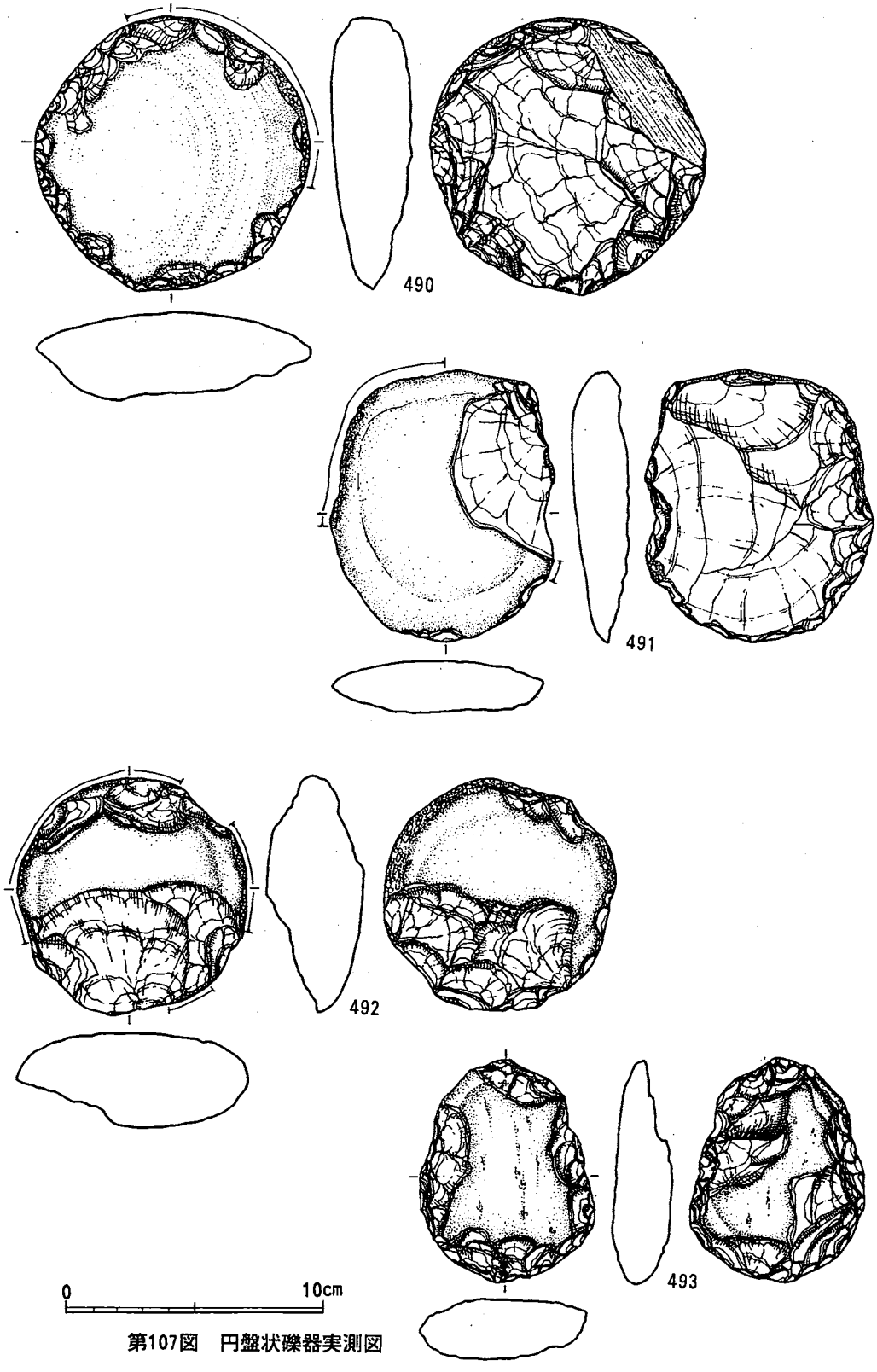
490・491は自然面を片面を残している。492・493は自然面を両面に残している。492は磨石としても使用されている。



第105図　礫器実測図①



第106図　礫器実測図②



第107図　円盤状礫器実測図

No.	器　種	石　材	計　測　値				出土地点
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ(g)	
481	礫　器	砂　岩	15.0	8.2	3.0	510.36	5 T Ⅷ層
482	〃	〃	11.4	4.7	1.3	131.46	5 T Ⅷ層
483	〃	〃	9.7	6.5	1.6	110.57	4 T Ⅷ層
484	〃	〃	8.5	5.2	1.5	97.84	5 T Ⅷ層
485	〃	凝灰岩	11.2	8.0	1.6	255.16	表面採集
486	〃	砂　岩	9.6	9.1	2.2	325.24	5 T Ⅷ層
487	〃	〃	8.1	7.7	2.6	239.75	4 T Ⅷ層
488	〃	〃	18.9	13.4	3.8	1430.35	4 T Ⅷ層
489	〃	〃	24.8	11.7	7.2	2350.58	5 T Ⅷ層
490	円盤状礫器	砂　岩	10.5	10.8	3.0	458.40	5 T Ⅷ層
491	〃	〃	10.2	8.3	1.9	260.01	5 T Ⅴ層
492	〃	〃	8.9	8.7	3.7	339.09	5 T Ⅷ層
493	〃	〃	8.6	6.4	2.2	172.24	表面採集

第64表　礫器・円盤状礫器計測表

6．石　錘

砂岩製８点（494・497・498・500・501・502・503・505）、貢岩製３点（496・499・504）、粘板岩製１点（495）の12点が出土した。形状よって下記の３型に分類される。

①縦型〔495・496・497・498・499・500・501・505〕

楕円形をした扁平な自然礫で最長部の２箇所に剝離・敲打が行われている。

②丸型〔494・502〕

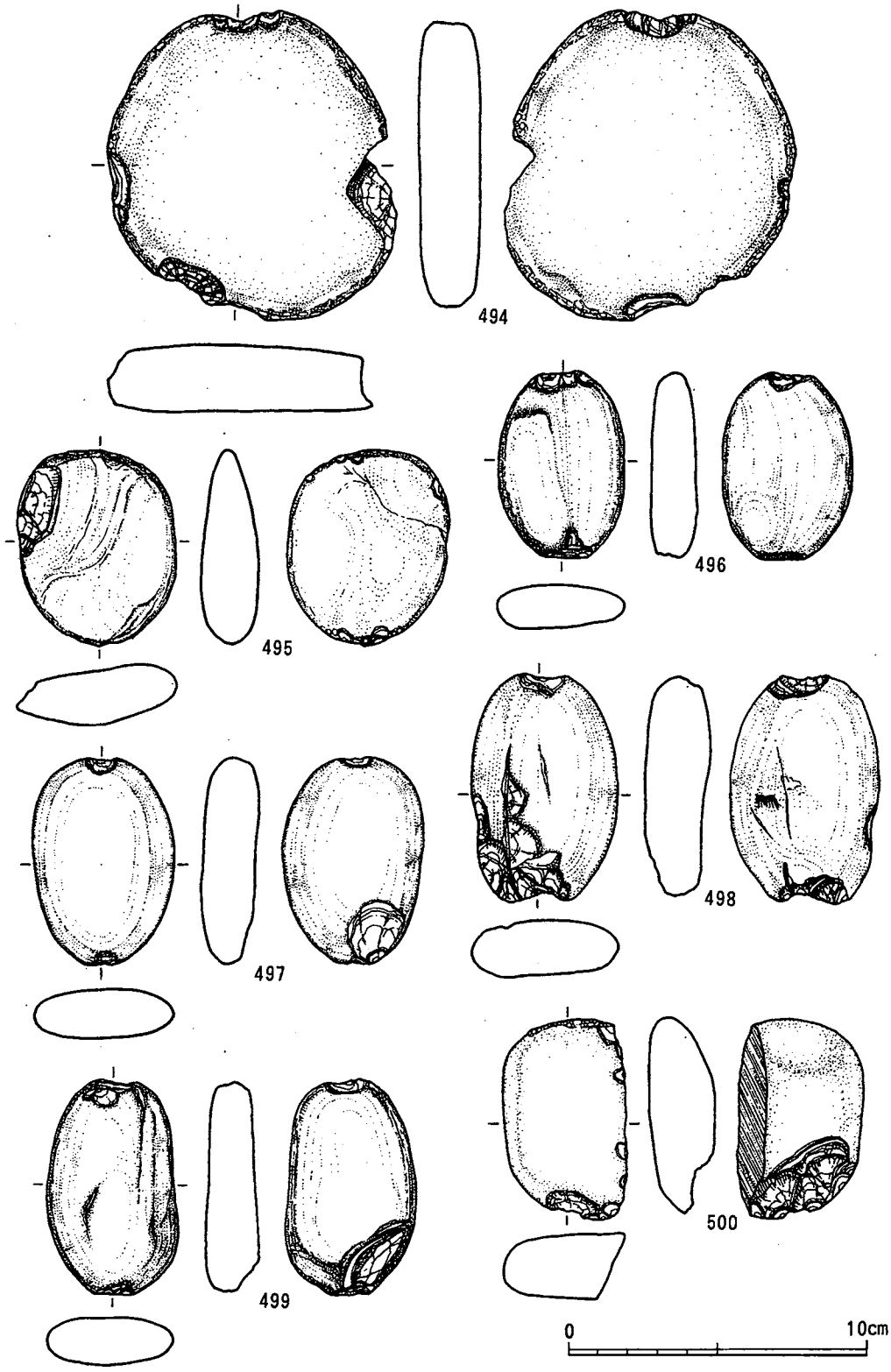
扁平な丸い自然礫を使用し、４箇所に剝離・敲打が行われ、石錘としては十字に紐掛けがなされていたと思われる。尚、細かな敲打が見られるため、敲石の転用とも考えられる。

③異型・横型〔503・504〕

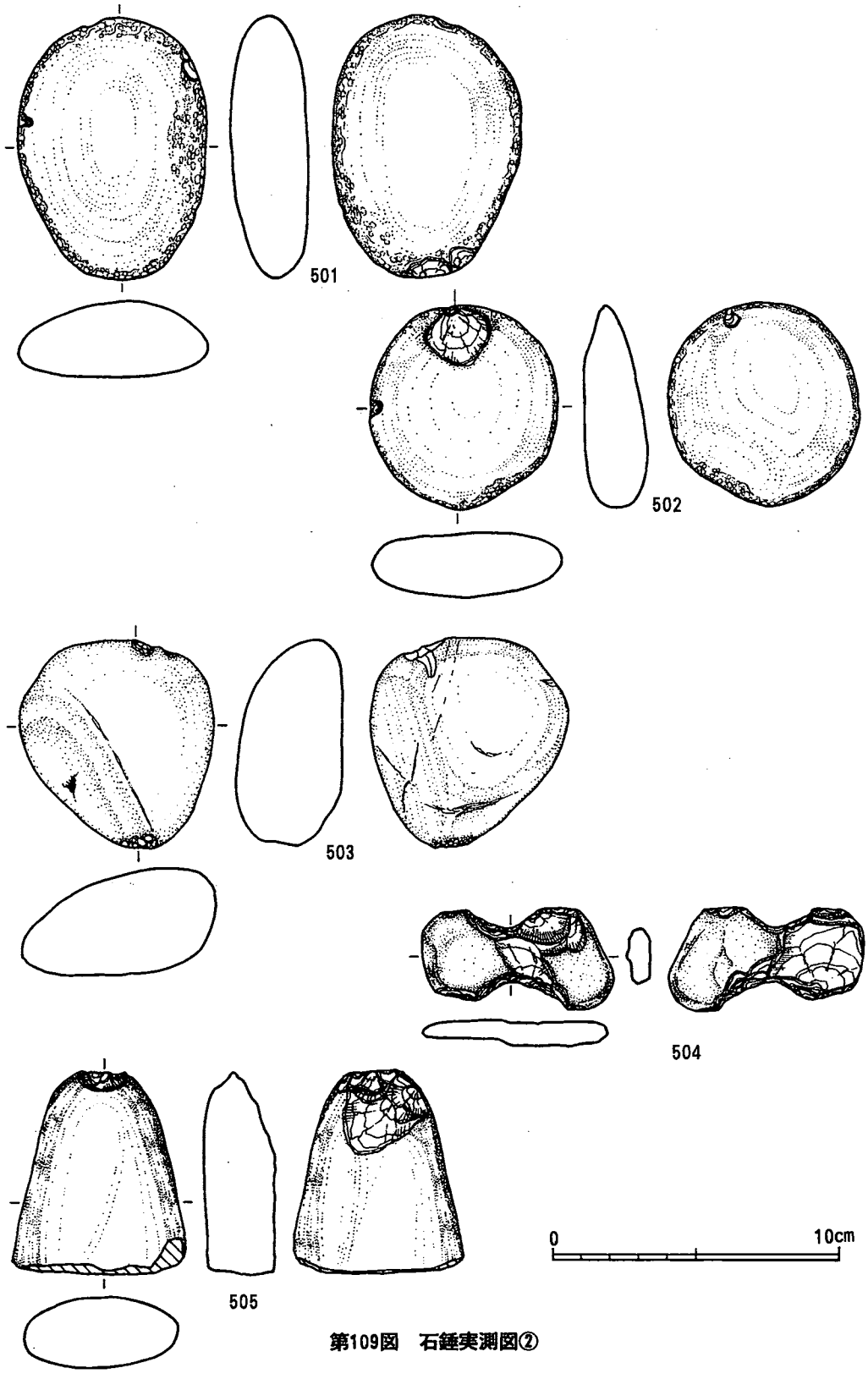
やや不定型な扁平礫で作られており、形状は横型を呈する。縦型・丸型の遺物とは剝離・敲打の度合が異なる。浅い加工に対し、深い抉りとなっている。使用目的による違いと思われる。

No.	器　種	石　材	計　測　値				出土地点	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
494	石　錘	砂　岩	9.4	8.9	2.1	319.58	5 T Ⅷ層	
495	〃	粘板岩	6.4	5.3	1.8	92.26	5 T Ⅷ層	
496	〃	貢　岩	6.1	4.3	1.4	60.36	5 T Ⅷ層	
497	〃	砂　岩	6.8	4.7	1.8	82.86	5 T Ⅷ層	
498	〃	〃	7.2	4.9	1.9	103.86	5 T Ⅷ層	
499	〃	貢　岩	7.1	4.2	1.5	80.49	5 T Ⅷ層	
500	〃	砂　岩	6.3	4.1	2.1	89.77	4 T Ⅷ層	欠損
501	〃	〃	9.0	6.6	2.6	212.95	4 T Ⅴ層	
502	〃	〃	6.9	6.5	1.9	141.72	5 T Ⅷ層	
503	〃	〃	7.1	6.8	3.5	251.04	5 T Ⅷ層	
504	〃	貢　岩	6.3	3.4	0.8	26.09	5 T 洪水層	
505	〃	砂　岩	6.9	5.8	2.4	133.60	5 T Ⅷ層	欠損

第65表　石錘計測表



第108図　石錘実測図①



第109図　石錘実測図②

7．敲石・磨石

敲打痕が確認できる石器については、単に敲石としてのみ使用された「敲石」と、扁平な円礫で縁辺部に木の実などを細かく潰した敲打痕を残し、さらに粉状にするために両面に擦り潰した研磨痕があるのを「磨石」として区分し、これらを下記のように細分した。

第Ⅰ類　敲石

Ⅰ－a：長型〔実測図No.506～513〕

長い自然礫で、両先端部に敲打痕が見られる。

Ⅰ－b：長型〔実測図No.514～520〕

長い自然礫で、先端部と側縁部に敲打痕が見られる。

Ⅰ－c：不定型〔実測図No.521～526〕

ほぼ扁平な自然礫で、敲打痕が周辺に見られる。

523 は側縁部に３箇所と片面に集中的な敲打痕が見られ、台石としての使用も考えられる。

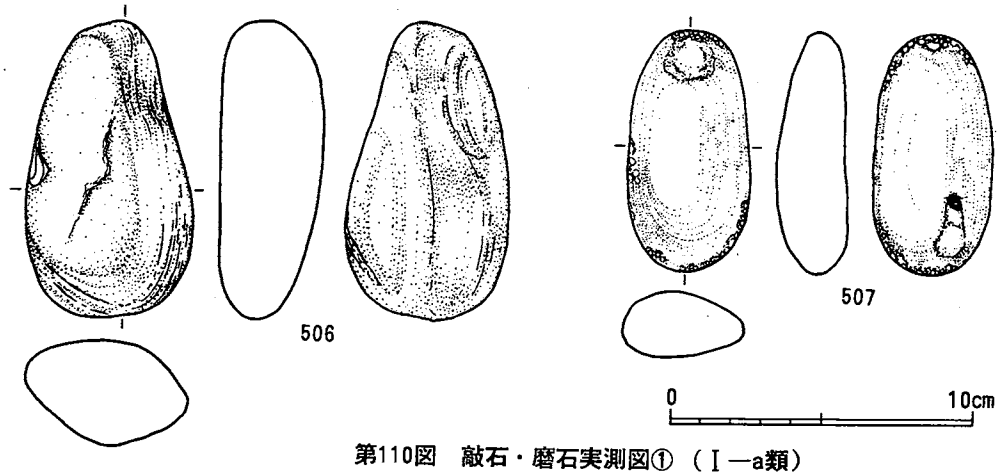
第Ⅱ類　磨石

Ⅱ－a：使用により磨石として最良の形になったもの。〔実測図No.527～529〕

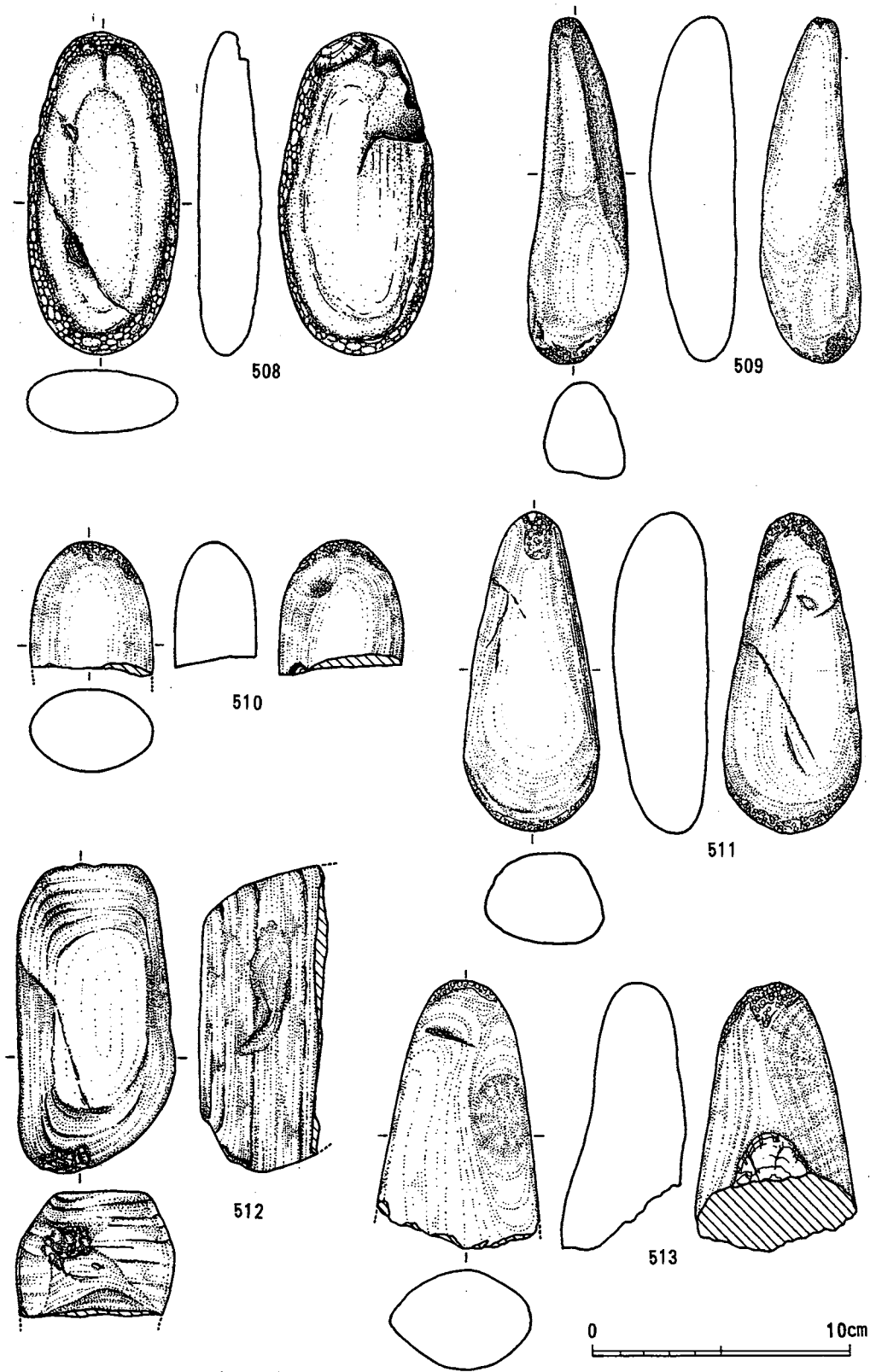
527は砂岩製で、円形に使用されている。両面とも丸みを持ち、縁辺部に弱い敲打痕が見られる。528 529 は凝灰岩製である。 528はやや楕円形をなし、両面とも丸味を持っている。529 は正面は丸味を持ち、裏面は平坦的な使用がなされている。さらに縁辺部に敲打痕が見られる。

Ⅱ－b：丸みを持った自然礫。〔実測図No.530～542〕

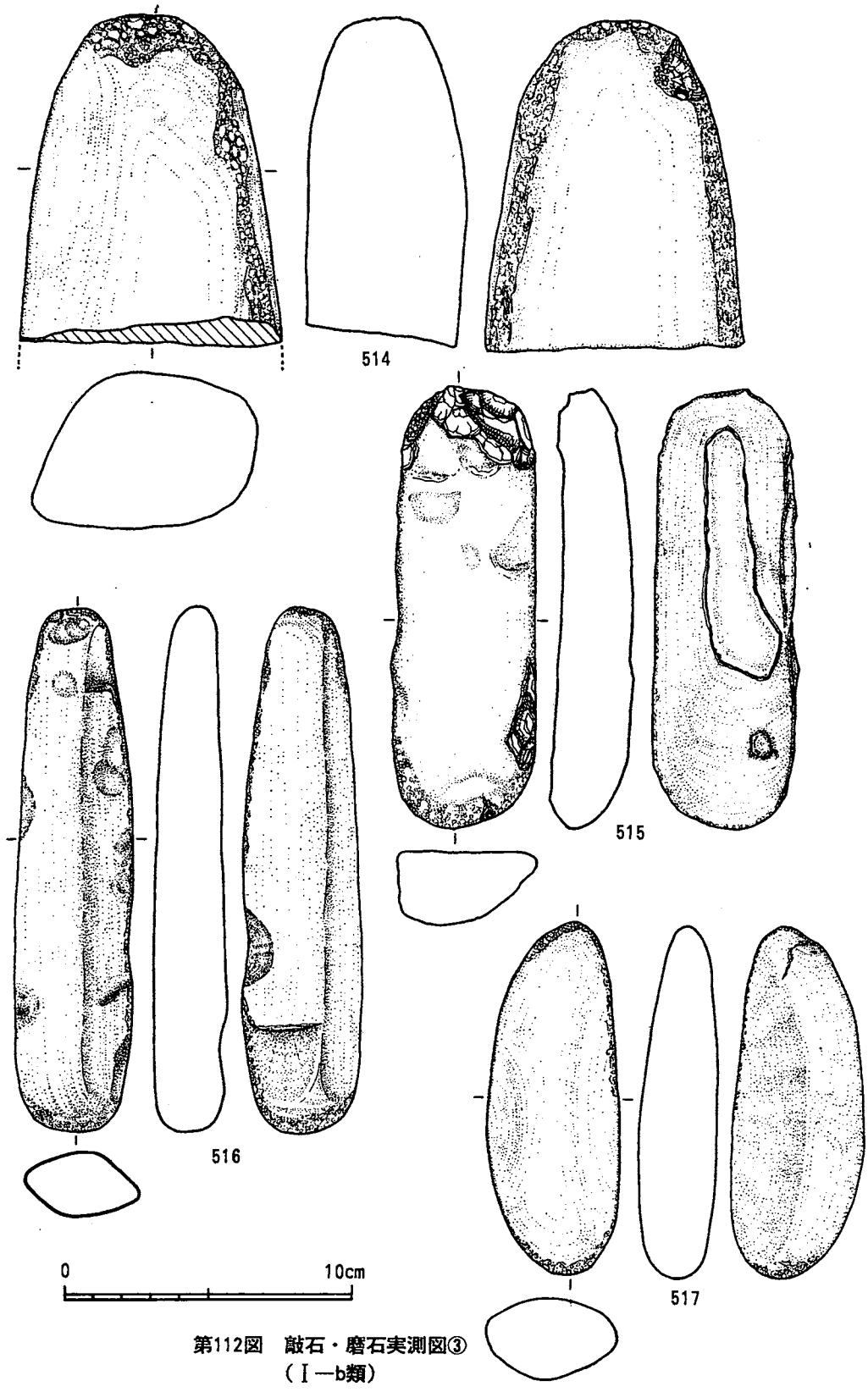
縁辺部に敲打痕があり、両面のいずれかに研磨痕が見られる。器形の変化は見られず、ほぼ自然形を留めている。



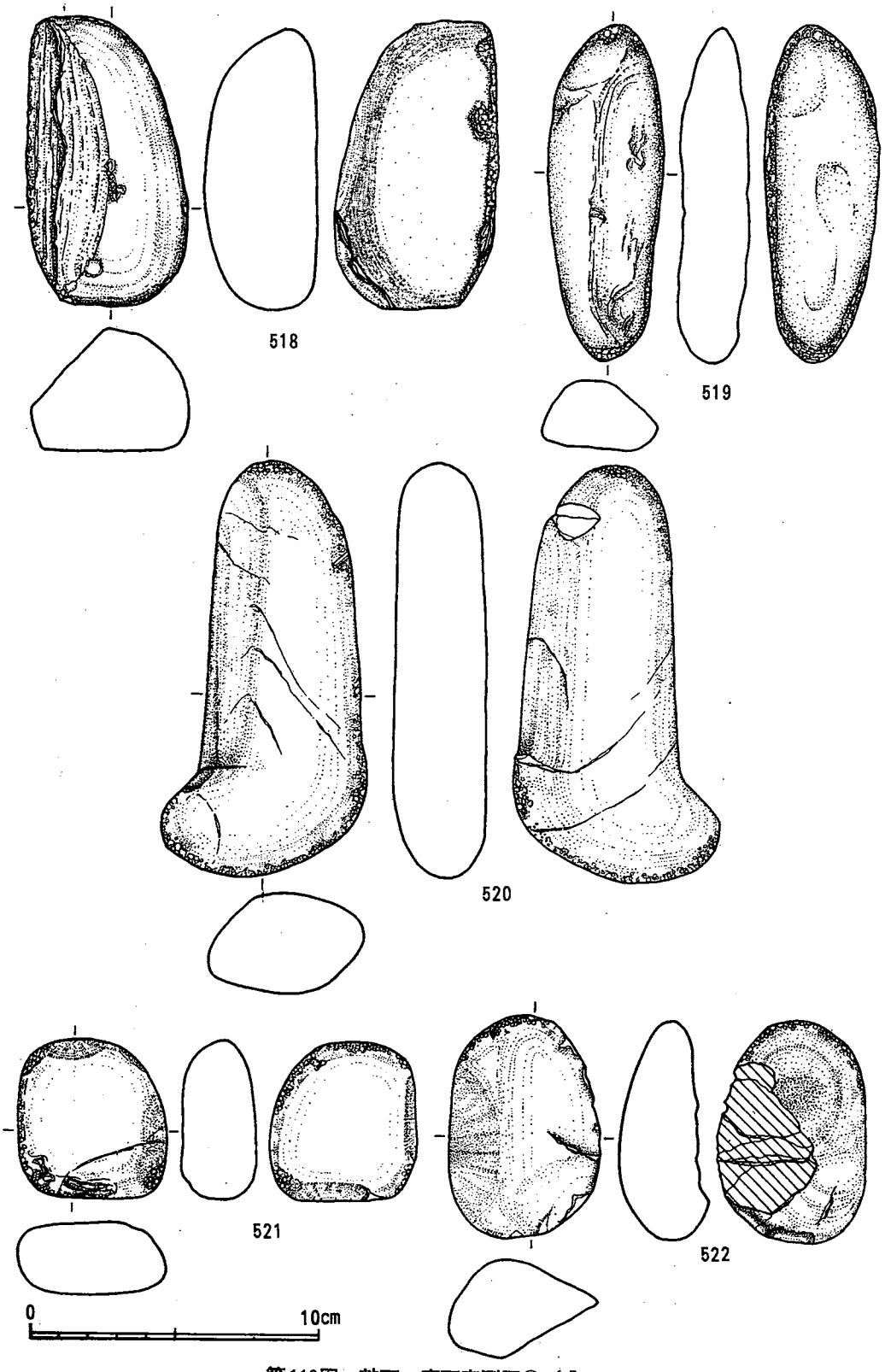
第110図　敲石・磨石実測図①（Ⅰ—a類）



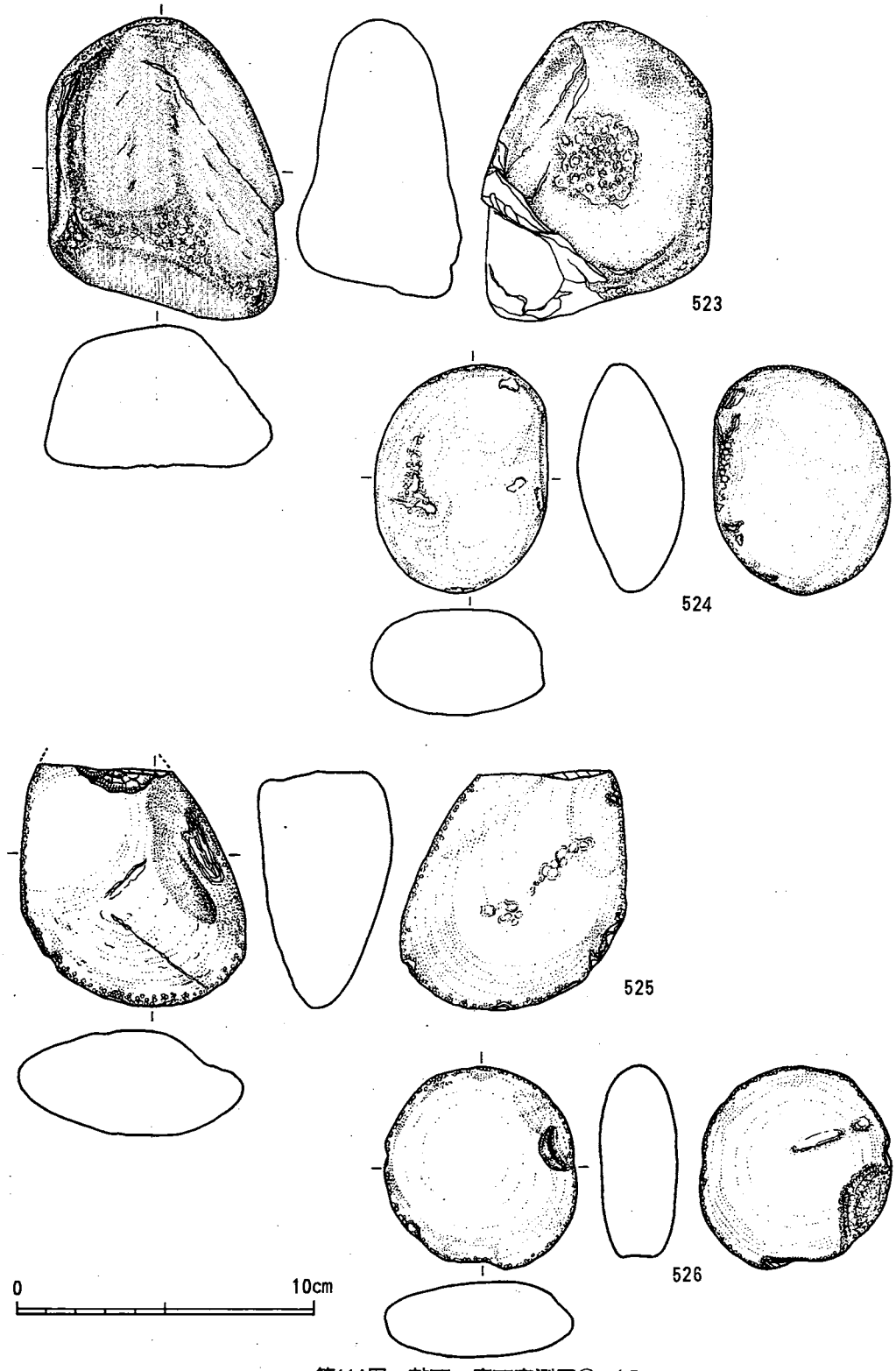
第111図　敲石・磨石実測図②（Ⅰ—a類）



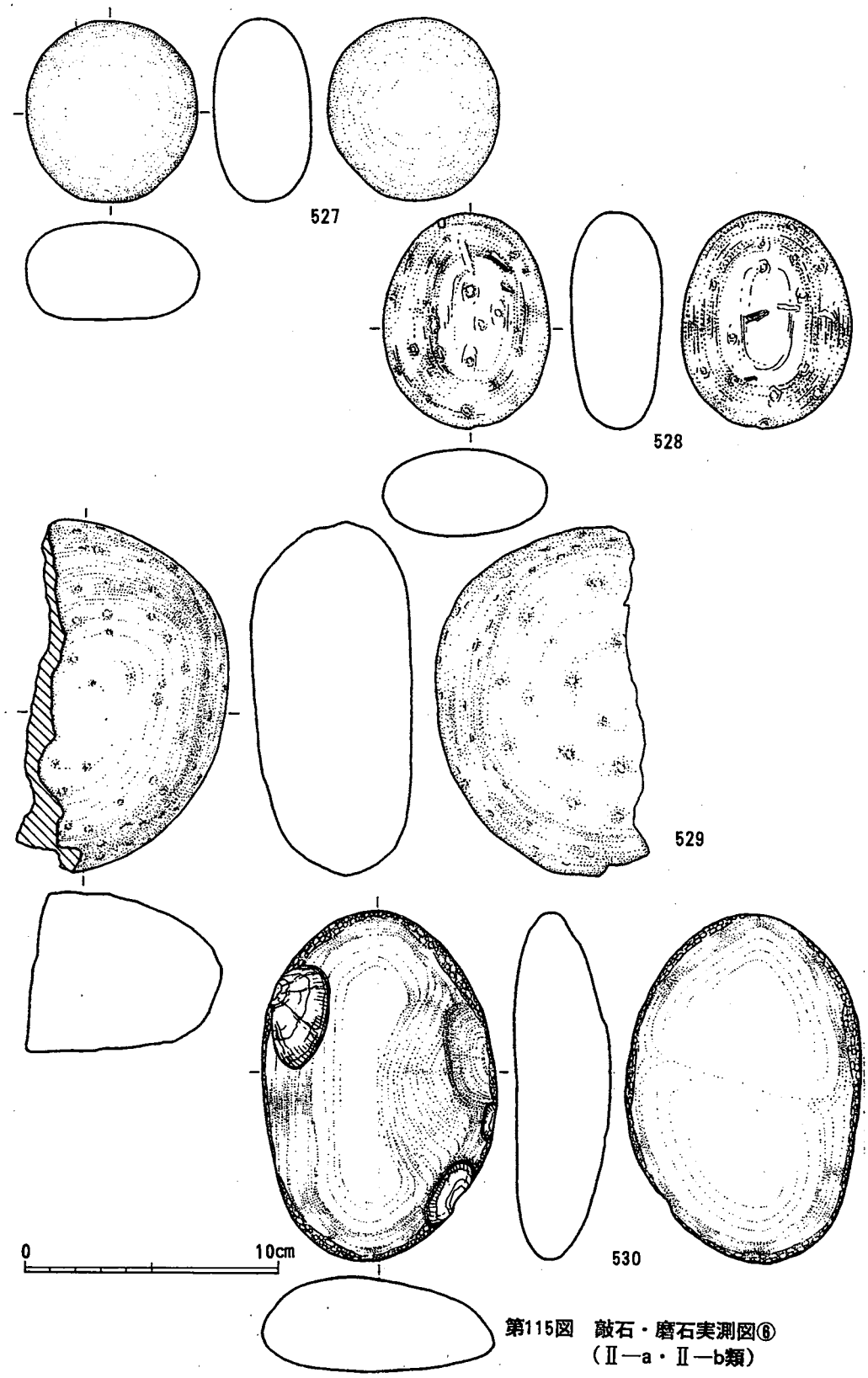
第112図　敲石・磨石実測図③
（Ⅰ—b類）



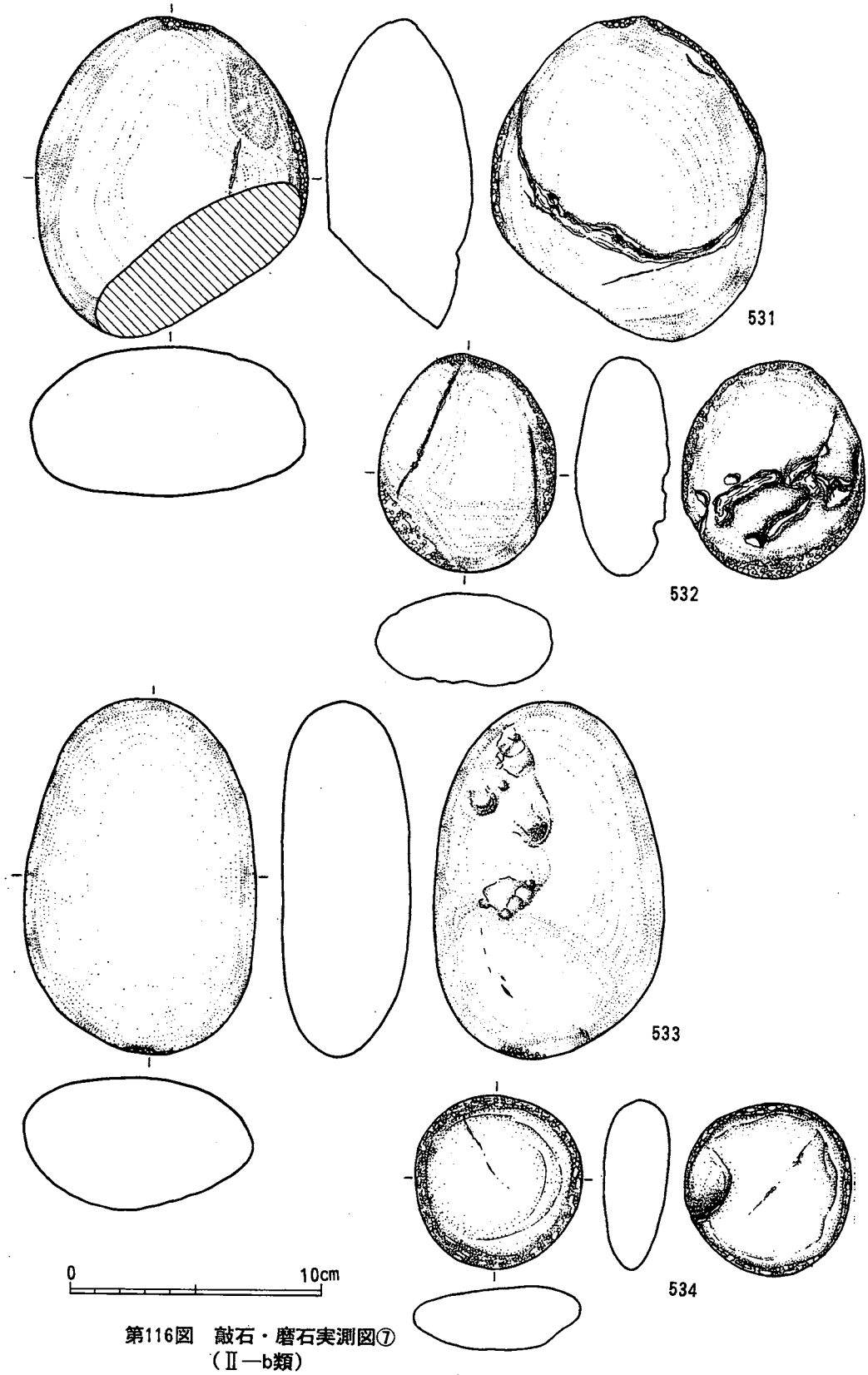
第113図　敲石・磨石実測図④（Ⅰ—b・Ⅰ—c類）



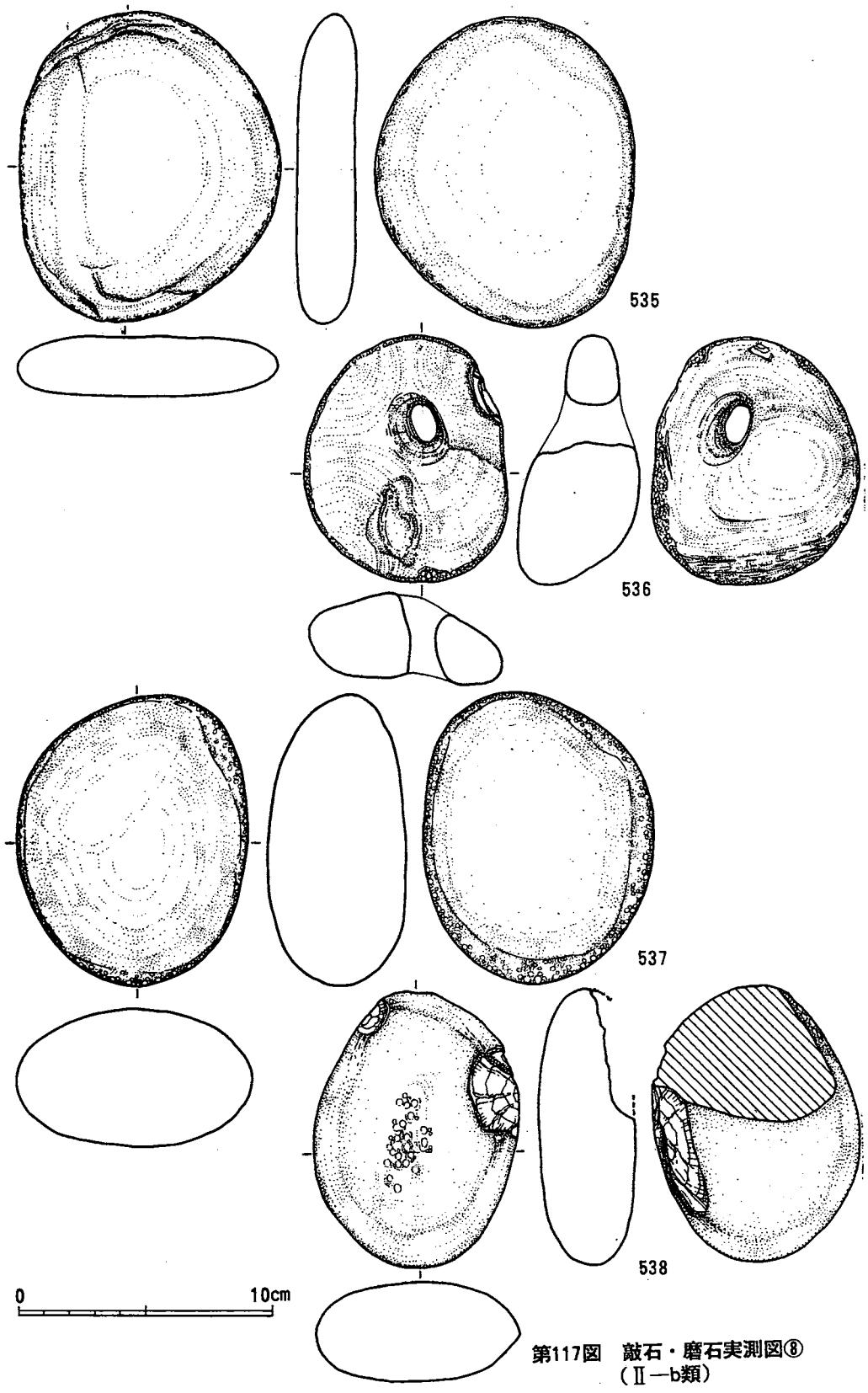
第114図　敲石・磨石実測図⑤（Ⅰ—c類）



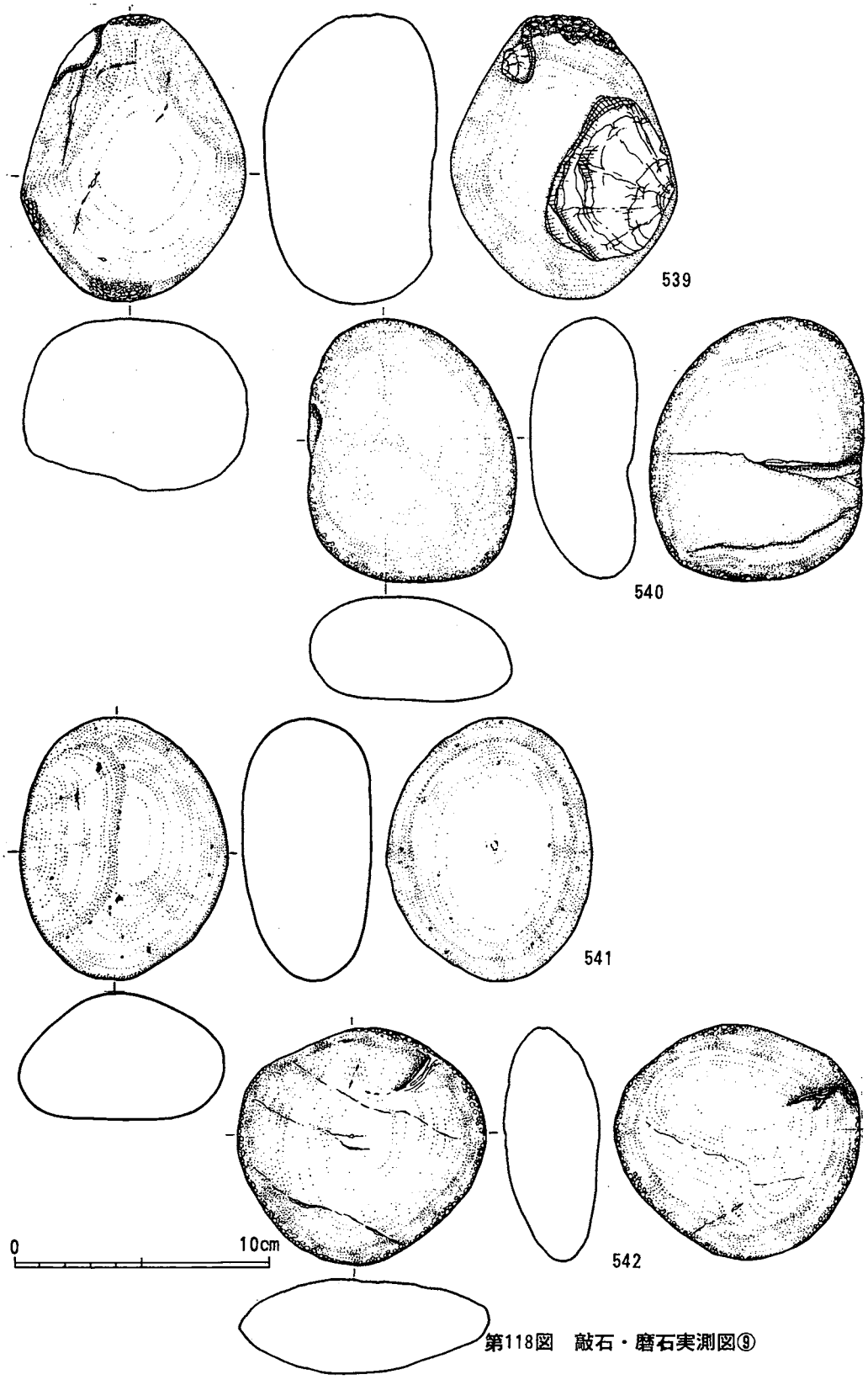
第115図　敲石・磨石実測図⑥
（Ⅱ—a・Ⅱ—b類）



第116図　敲石・磨石実測図⑦
（Ⅱ—b類）



第117図　敲石・磨石実測図⑧
（Ⅱ—b類）



第118図　敲石・磨石実測図⑨

No.	分類	石材	計測値 長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	
506	Ⅰ－a	砂岩	9.7	5.4	3.3	247.94	5 T Ⅷ層	
507	〃	蛇紋岩	7.8	4.1	2.3	109.51	5 T Ⅷ層	
508	〃	砂岩	12.3	5.9	2.4	271.80	4 T Ⅷ層	
509	〃	〃	13.2	3.9	3.3	205.88	5 T	
510	〃	〃	5.1	4.8	3.1	112.81	4 T Ⅴ層	欠損
511	〃	〃	12.2	5.3	3.6	310.97	4 T Ⅷ層	
512	〃	〃	11.7	5.9	4.6	616.23	5 T Ⅷ層	欠損
513	〃	〃	10.4	6.3	3.9	289.60	5 T	欠損
514	Ⅰ－b	砂岩	11.2	7.7	5.4	894.98	5 T Ⅷ層	欠損
515	〃	〃	15.1	4.7	2.4	307.84	4 T	
516	〃	〃	18.0	4.1	2.5	258.06	5 T Ⅷ層	
517	〃	〃	12.1	4.2	2.2	195.67	5 T	
518	〃	〃	9.9	5.2	3.9	293.84	5 T Ⅷ層	
519	〃	泥質砂岩	11.4	3.9	2.2	174.12		
520	〃	砂岩	14.2	7.1	3.2	437.38	4 T Ⅴ層	
521	Ⅰ－c	〃	5.4	5.0	2.5	120.64	1 T Ⅴ層	
522	〃	〃	7.7	5.2	3.1	148.49	4 T Ⅴ層	欠損
523	〃	〃	13.6	10.9	6.5	1531.78	5 T	
524	〃	〃	7.5	5.8	3.5	228.91	4 T	
525	〃	〃	7.8	7.5	4.4	260.39	5 T Ⅷ層	欠損
526	〃	〃	6.4	6.5	2.1	152.97	墓地表面採集	
527	Ⅱ－a	〃	7.0	6.8	3.8	276.10	4 T洪水層	
528	〃	凝灰岩	8.4	6.6	3.4	276.90	5 T洪水層	
529	〃	〃	13.6	7.6	6.3	968.59	5 T Ⅷ層	欠損
530	Ⅱ－b	砂岩	13.6	9.3	3.7	648.67	5 T Ⅷ層	
531	〃	〃	12.1	10.9	5.7	1022.93	5 T Ⅷ層	欠損
532	〃	〃	8.5	7.1	3.6	317.16	5 T Ⅷ層	
533	〃	〃	14.1	9.2	5.1	1019.00	5 T Ⅷ層	
534	〃	〃	6.9	6.6	2.5	182.54	4 T Ⅷ層	
535	〃	〃	11.9	10.3	2.3	486.10	5 T Ⅷ層	
536	〃	〃	9.6	8.0	4.5	381.65	5 T Ⅷ層	
537	〃	〃	11.3	9.1	5.6	845.84	4 T Ⅷ層	
538	〃	〃	10.7	8.3	3.3	417.52	4 T Ⅷ層	欠損
539	〃	〃	11.1	8.7	6.4	943.68	5 T Ⅷ層	
540	〃	〃	10.2	8.3	4.1	538.86	5 T	
541	〃	〃	10.2	8.1	5.0	556.73	5 T	
542	〃	〃	12.9	13.8	5.3	1242.46	5 T Ⅷ層	

第66表　敲石・磨石計測表

8．石　皿

2点の出土である。543 は凝灰岩製で、正面の中央部に凹んだ使用痕があり、裏面全体には研磨面が見られる。 544は砂岩製で、手のひら大の大きさである。片面の中央部がやや凹んでいる。

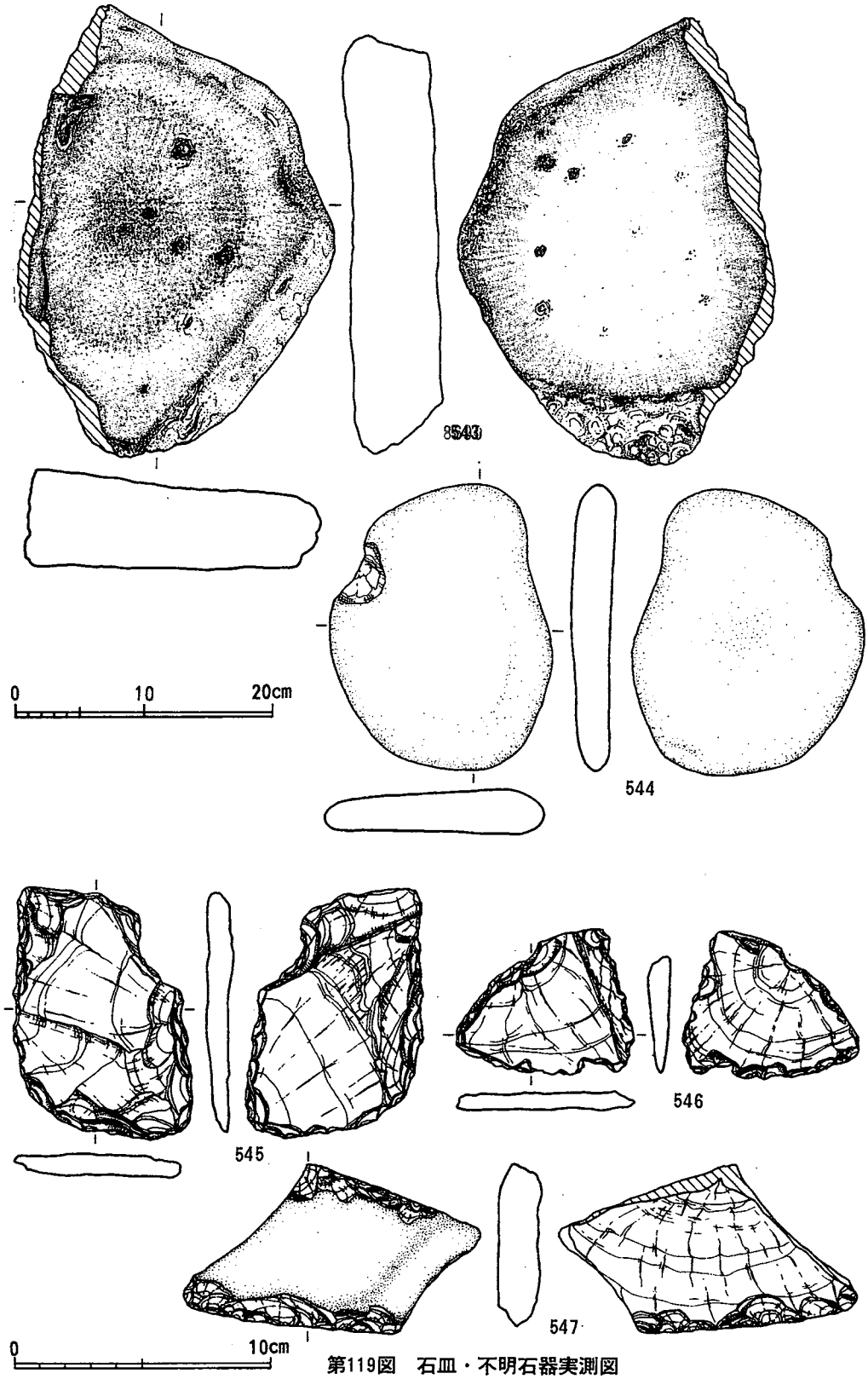
9．不明石器

3点の用途不明石器が見られたが、いずれもスクレーパーの分類に属するものと思われる。

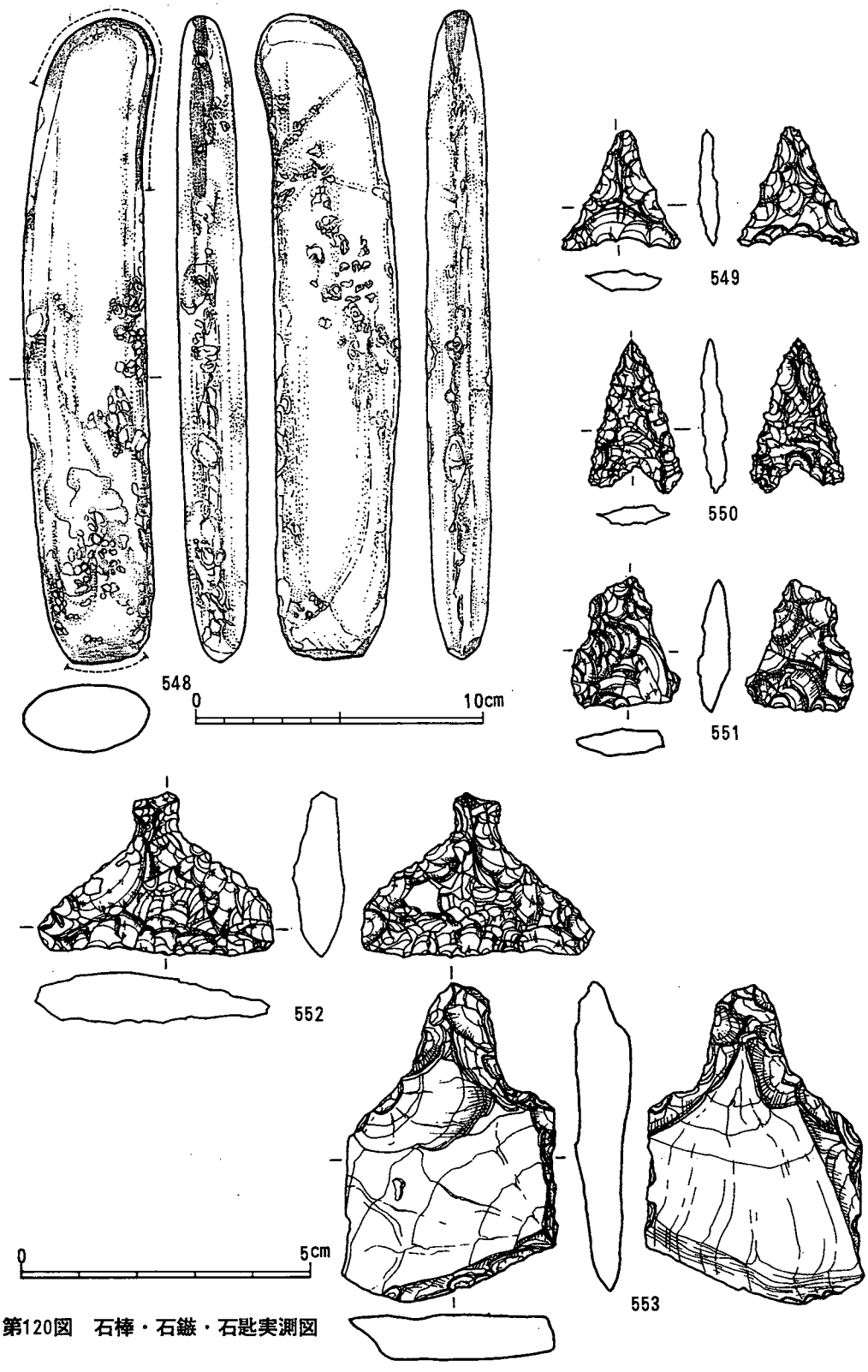
10．石　棒

1点(548) の出土であった。全体に敲打による荒い調整が行われた後で、突起部を消すような軽い研磨が行われている。基部から直線的に成形され、4分の3程の所からやや反り気味に作られている。両先端部に強い研磨面が見られる。砂岩製である。

剝離調整によって作り出され、敲打によって成形されたものか、自然石を敲打によって成形したものかの判断はつかなかった。



第119図　石皿・不明石器実測図



第120図　石棒・石鏃・石匙実測図

11. 石　鏃

安山岩製(549) と黒燿石製(550・551)の出土であった。基部の抉りが僅かにあるが、三角型に分類できる549 と二等辺三角型に分類できる550 とがあった。 551は未完成品である。

12. 石　匙

2点が出土した。いずれもチャート製である。 552は横型に分類され、先端部を欠損している。刃部は両刃と考えられる。 553はつまみ部分を両面から作り出し、刃部は自然の剝離面を利用している。細かな調整は見られず、未完成品の様でもある。

No.	器　種	石　材	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土地点	
543	石　皿	凝灰岩	34.1	24.6	7.2	8690.0		欠損
544	〃	砂　岩	10.9	8.7	1.5	228.10	5 T	
545	不明石器	粘板岩	9.1	6.7	1.0	79.10	4 T SK01	
546	〃	貢　岩	6.9	5.4	0.8	40.29	5 T Ⅴ層	
547	〃	砂　岩	6.2	9.4	1.6	157.63	5 T Ⅷ層	
548	石　棒	砂　岩	21.8	4.3	2.2	394.05	4 T SK02	
549	石　鏃	安山岩	1.8	2.0	0.3	0.85	5 T Ⅷ層	
550	〃	黒燿石	2.1	1.6	0.4	1.08	4 T Ⅷ層	
551	〃	〃	2.2	1.8	0.6	1.85	5 T Ⅷ層	未完
552	石　匙	チャート	2.8	4.0	0.9	7.30	5 T Ⅷ層	
553	〃	〃	5.3	3.7	0.9	19.12	5 T Ⅷ層	

第67表　石皿・不明石器・石棒・石鏃・石匙計測表

13. 小　結

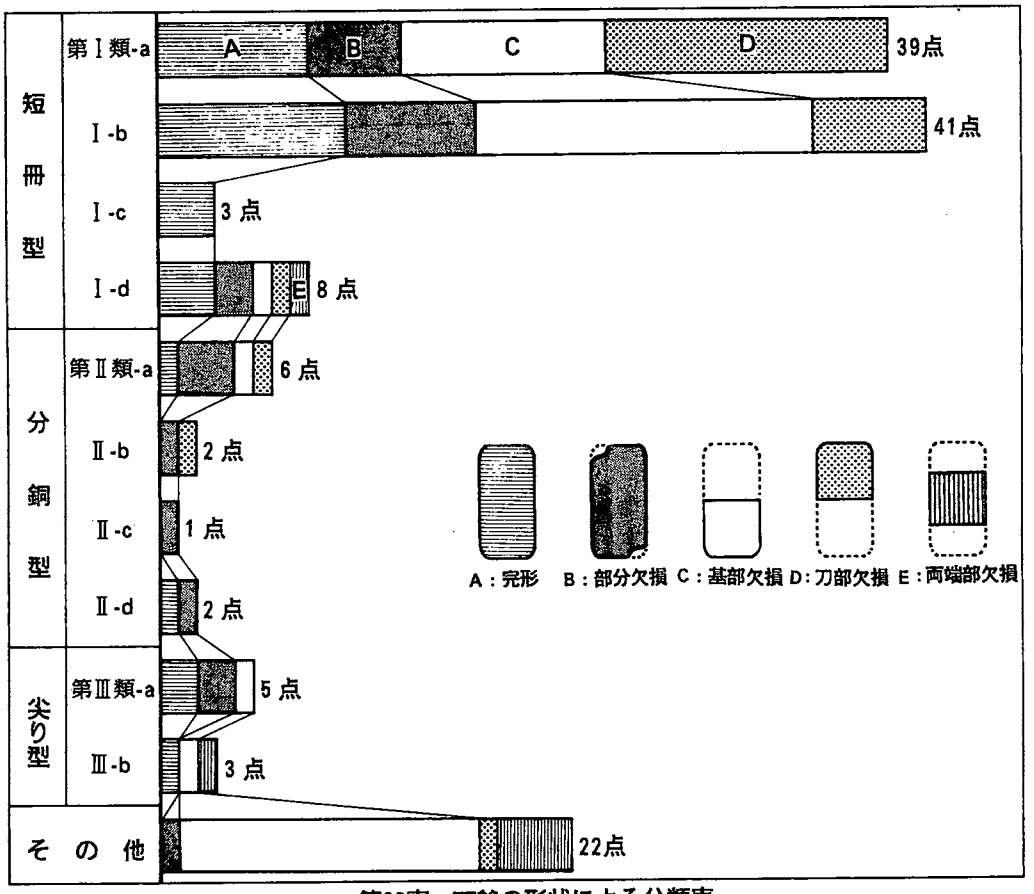
217点を数えた出土石器の約60.8%に当たる 132点の打製石斧が出土した。狩猟社会であった縄文時代早期遺跡の出土石器は、石鏃・石匙・スクレーパー類の剝片石器が全体の50%以上を占めているのに対し、全体量の約60.8%にあたる打製石斧の出土は、縄文時代後期・晩期と考えられている狩猟社会から農耕社会への転換期を伺わせるものである。

石材は主に砂岩で、他に粘板岩・貢岩類があったが、これらは8点にすぎない。磨製石斧が粘りのある石材（安山岩・蛇紋岩・泥質砂岩など）を使用し、耐久性のある石器であるのに対し、打製石斧は容易に入手可能で、加工がしやすい石材を使用していることから、消耗品的な石器であったと思われる。

出土した打製石斧 132点のうち欠損品は 103点で、約78%を占める。欠損品の多さから、直接手に持っての使用より、着柄による使用が考えられる。その可能性を示す痕跡として、基部から3分の1程のところに、交互剝離によってできた尖った稜線部を、細かな敲打による潰し加工痕が見られる。

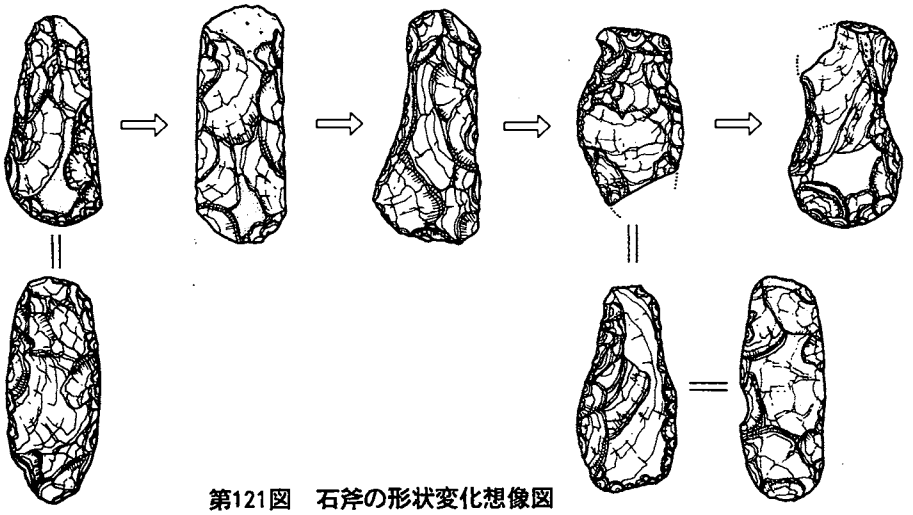
形　状	出土数	出土率
完形品 (A)	29点	22.0%
部分欠損 (B)	23点	17.4%
基部欠損 (C)	49点	37.1%
刃部欠損 (D)	25点	18.9%
両端部欠損 (E)	6点	4.5%
計	103点	77.9%
合　計	132点	

第68表　石斧の欠損率一覧表



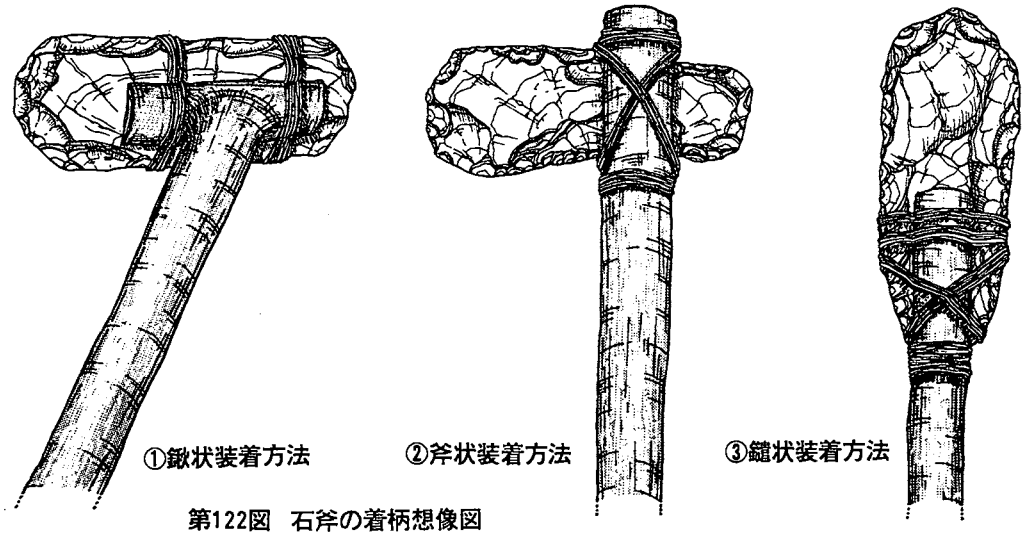
第69表　石斧の形状による分類表

打製石斧は、当初、磨製石斧のように基部から刃部にかけて両縁辺部に広がる形状から、短冊形に変化し、最終的に分銅形に完成して行くと考えられる。形状の違いは、着柄の方法による器形変化と思われる。



第121図　石斧の形状変化想像図

柄の装着方法として、①柄に枝分かれの部分を使い、紐で固定する（鍬状装着方法）。②柄の先端部を半分に割り、石斧を柄に対して直角に挟み込み、紐で固定する（斧状装着方法）。③柄の先端部を半分に割り、石斧を柄に対して垂直に挟み込み、紐で固定する(鑓状装着方法)。以上の方法が考えられるが、着柄方法による石斧の分類は今後の研究課題である。



第122図　石斧の着柄想像図

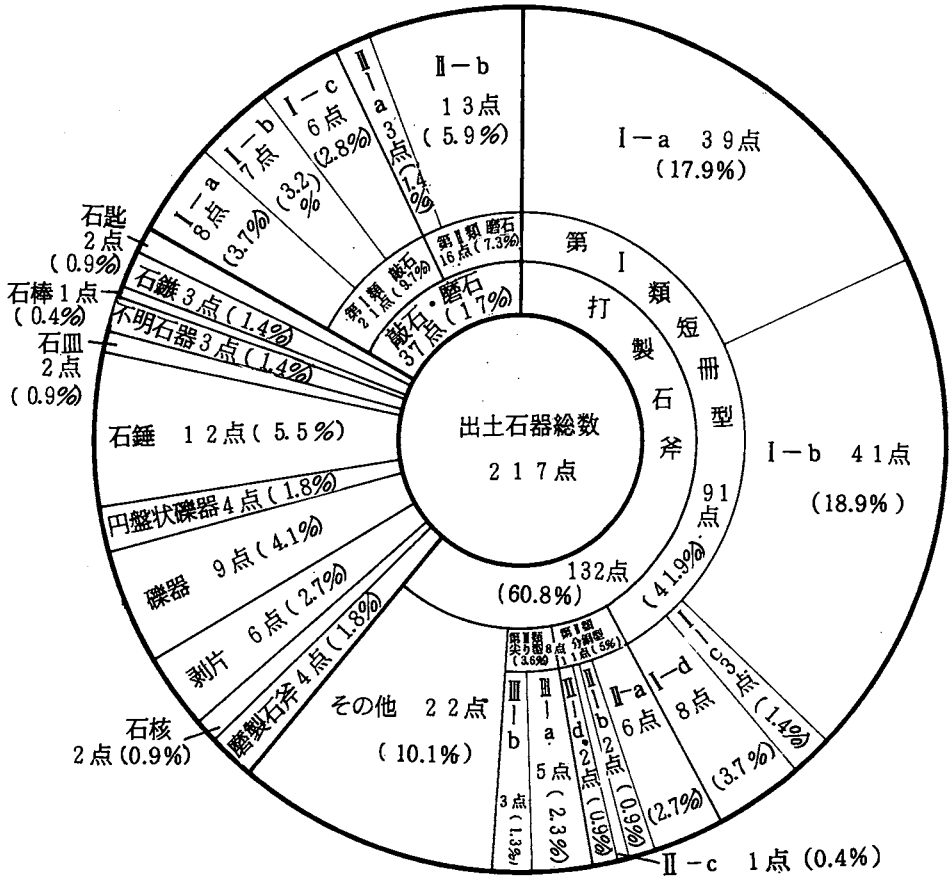
打製石斧は、側縁部に尖った稜線が残るので、紐のかかる部分に直角的な敲打の潰し加工を施したと考えられ、後に潰し加工は分銅形と言われる抉入を持った物へ発展変化していったと思われる。分銅形の利点は紐ずれがなく、着柄が容易であることが掲げられるが、欠点としては抉入が施されている部分からの欠損が多くなることである。

磨製石斧は既に完成された形状であり、石斧に合わせて柄が作られているのに対し、打製石斧の場合は一本の柄で石斧が破損すれば、更にその柄に次の石斧を装着し、使用していたと考えられる。

また、遺跡からは砂岩の石核が２点出土した。母岩は川原の扁平な砂岩礫で、採集地点の川原で交互剥離を行い横長い一次剥片を作りだし、それを遺跡地に持ち帰り、石斧製作を行っていたものと思われる。一次剥片から打製石斧が製作されている事は、出土した打製石斧の約71％が自然面を持つことからも明らかである。

その他、石錘は12点(出土石器総数の約 5.5%)の出土で、縦型が主であった。敲石・磨石は、敲石21点(出土石器総数の約 9.6%)、磨石16点(出土石器総数の約 7.3%)の出土で、敲石としてのみ使用された物と、磨石として使用されながら縁辺部に敲打痕が見られる物とがあった。石棒は１点が完形で出土した。なお、この時代には、用途不明石器として十字形石器や円盤状石器が見られるはずであるが、調査区からは一点の出土も無く、円盤状石器に代わる物として円盤状礫器(４点が出土。出土石器総数の約 1.8%) が出土している。厚めで敲打痕が残り、刃部が縁辺部全域に付いていなかったことから、円盤状石器とは異なる。

狩猟生活を主とした縄文時代早期の遺跡は殆どが台地上にあり、縄文時代後期・晩期の遺跡においては、低地に下ったものと思われる。後者に関しては、球磨川沿岸の七地水田遺跡と、馬氷川沿岸のアンモン山遺跡の二遺跡が好例であろう。この二遺跡の特色は、出土遺物が打製石斧を主とした石器組成になっている事で注目される。



第70表　出土石器の組織表

参考文献

人吉市教育委員会『アンモン山遺跡』1985年

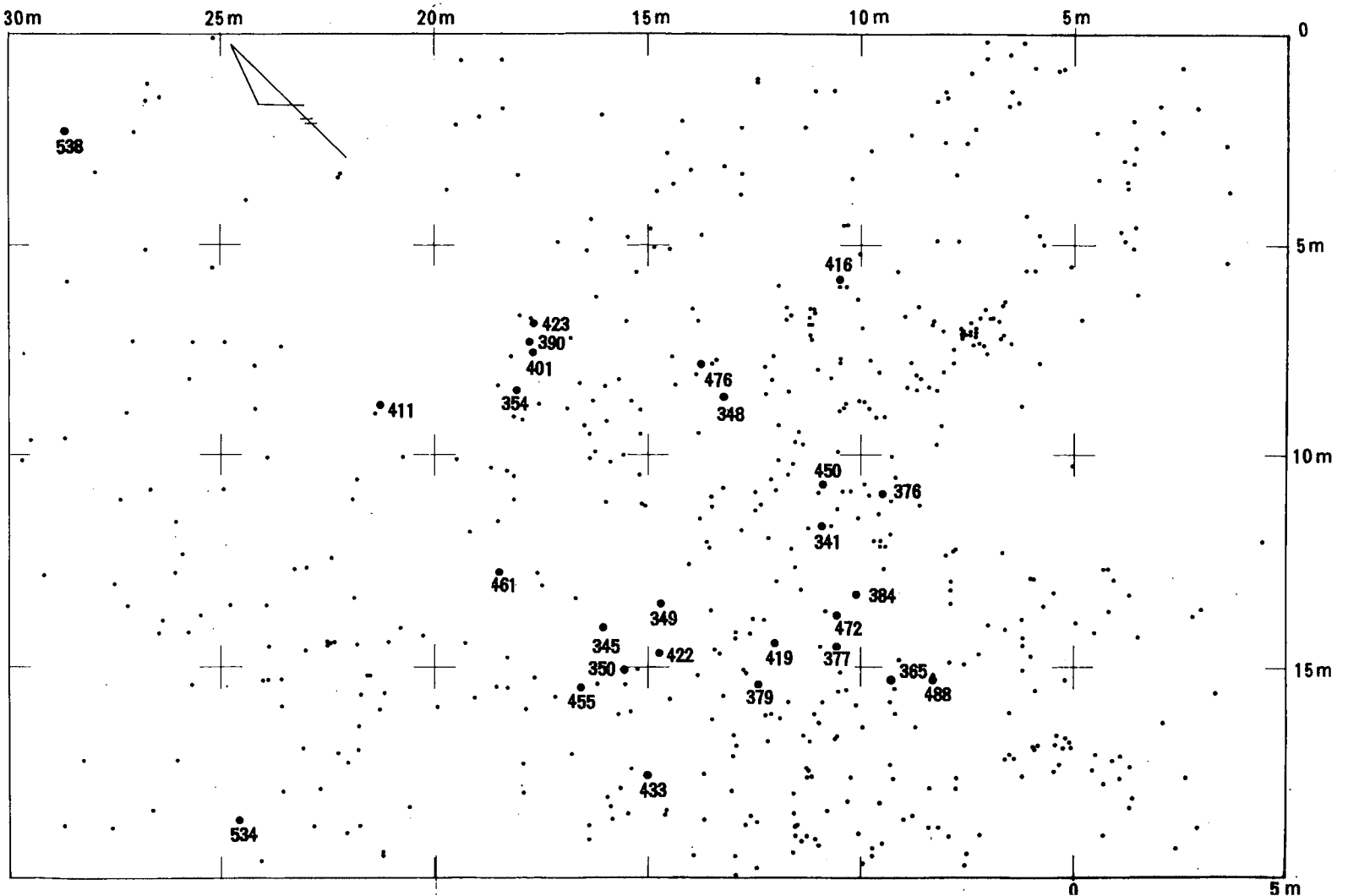
熊本県教育委員会『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県文化財調査報告　第80集　1986年

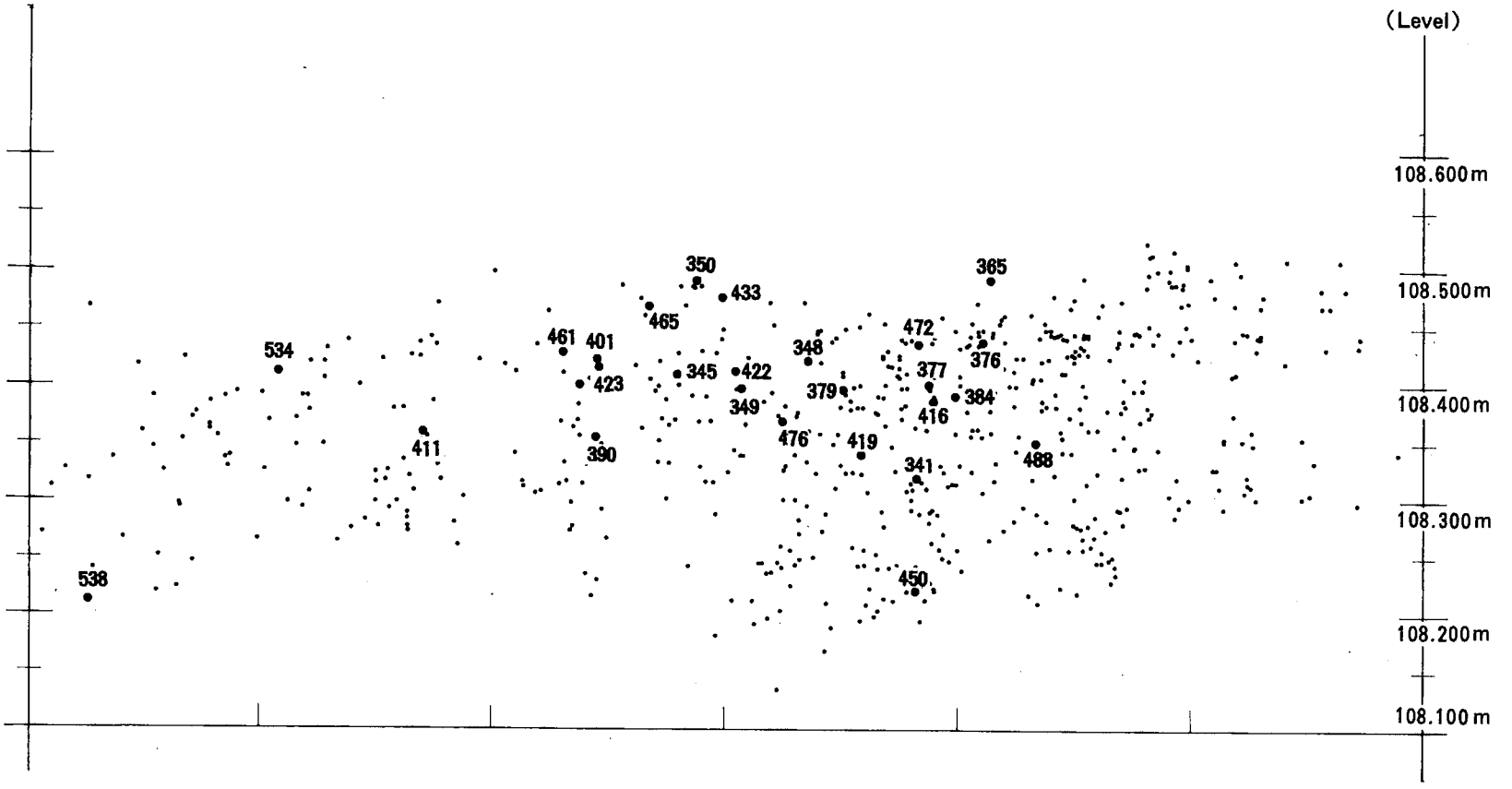
熊本県教育委員会『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告　第90集　1987年

熊本県教育委員会『高城跡』熊本県文化財調査報告　第95集　1988年

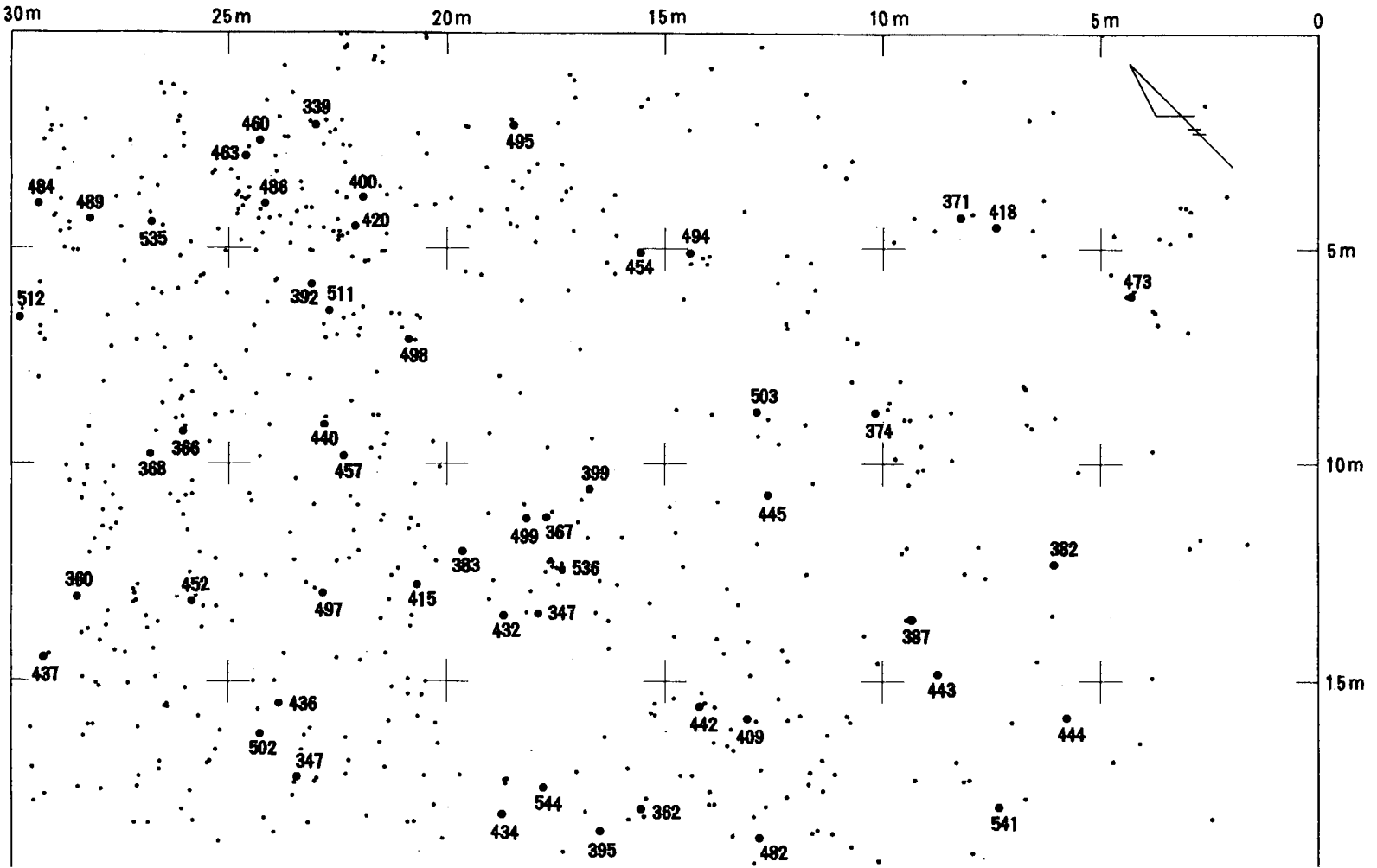
熊本県教育委員会『鼓ケ峰遺跡』熊本県文化財調査報告　第96集　1988年

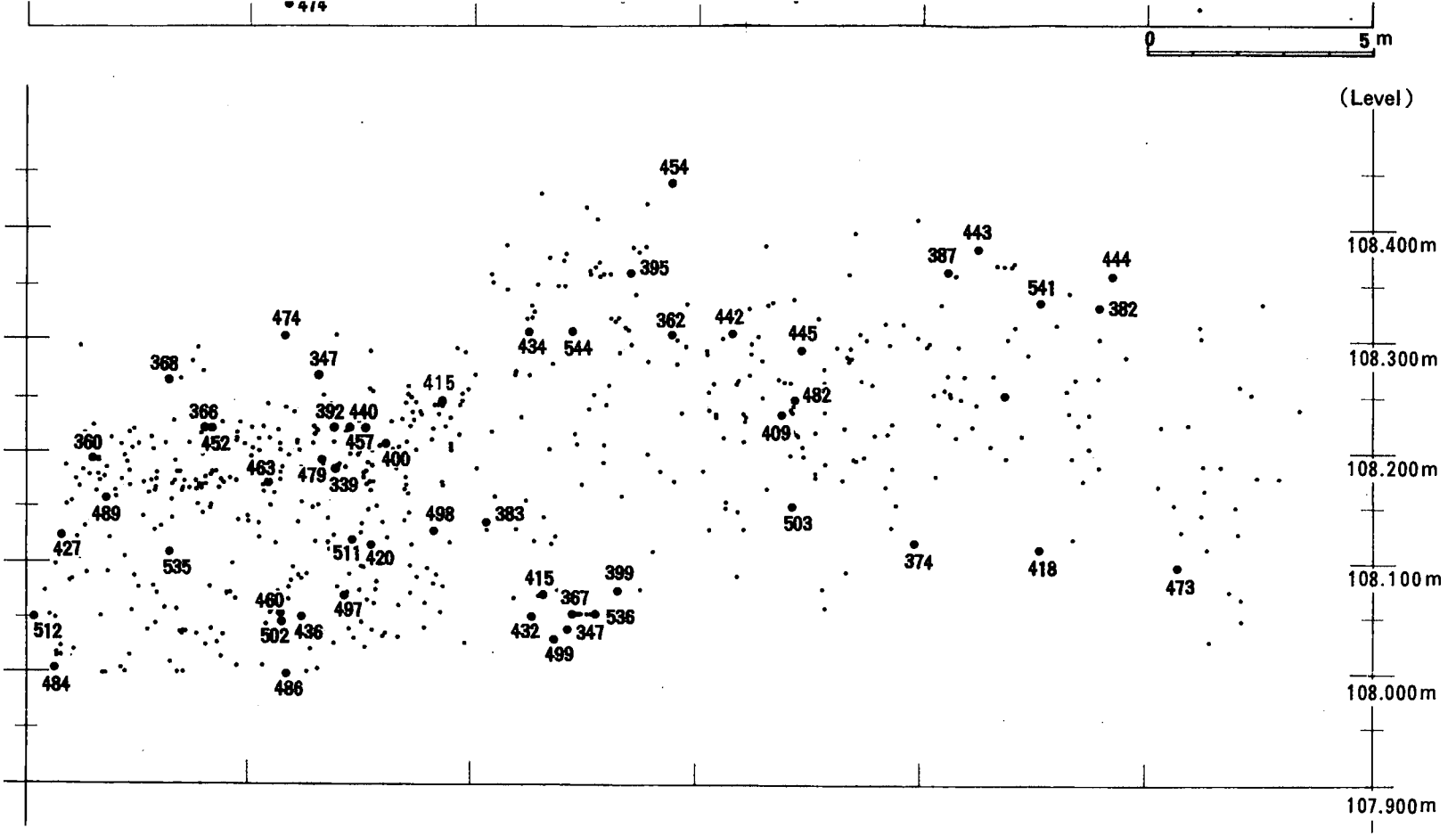
熊本県教育委員会（湯前町　米山遺跡）昭和63年度発掘調査


30m
25m
20m
15m
10m
5m
0
5m
10m
15m
0
5m
538
416
423
390
401
476
348
411
354
450
376
341
461
384
349
472
345
422
419
377
365
350
488
455
379
433
534



第123図　縄文時代石器の水平・垂直分布図（4トレンチ出土）


30m
25m
20m
15m
10m
5m
0
5m
10m
15m
339
460
463
495
484
489
486
400
420
535
371
418
494
454
473
512
392
511
498
503
374
440
366
368
457
399
445
499
367
382
383
536
360
452
497
415
347
432
387
437
443
436
442
409
444
502
347
544
362
541
434
395
482



第124図　縄文時代石器の水平・垂直分布図（5トレンチ出土）

第Ⅳ章　絵図および文献からみた七地水田遺跡

第１節　七地水田の変遷

安永三年(1733)頃に作成された『人吉繊月城下之図』（以下『城下之図』と略す）によれば、今日の七地水田一帯は、江戸時代に一部が村であった事[註(1)]が窺われる。

絵図中には、紛れもなく「新村」と「天神」を中心に人家が描かれており、常秀院・天神などの書き込みがある。

今日、七地の民家はすべて背後の丘陵地にあるが、地元には「球磨川の氾濫で、村がいつも浸水するので、裏山に移った」との言い伝えがあり、『城下之図』の存在と共に七地水田遺跡のあり方を考える上で興味深い。事実、球磨川の洪水は度々であった様で、宝暦五年(1755)の大洪水については『探源記拾遺』に「五月中旬比より、雨降り続き日々止まず、然るに六月八日の夜より甚だ雷鳴り、翌九日[註(2)]に至り暫く小雨に相成り、前代未聞之洪水也数日雨故七地畑、往古より水は無之所水溢れ、大手御門内並に御城外小路、町方舟にて往行、人を助くる所多し、御城内石垣岸崩れ、其外所所破損の所多し、流死人、同じく牛馬・・・（後略）」とある。この記事は洪水の様子を伝えると共に七地についての記述があり、重要である。これによると宝暦五年の七地は、主に畑地であった事がわかる。

同書は絵図に描かれた人家には触れてないが、以上のことから総じて18世紀中葉頃は、いわゆる「七地村」が現在の水田地帯にあり、人家を初めとして寺社などが点在し、主に畑地が拓かれていた事が考えられる。従って、今日の様な一面の水田地帯となったのは、18世紀中葉以降という事になる。

第２節　絵図に見る地名と寺社堂宇

１．清明院跡（字原畑）

『城下之図』では「蓬萊山永国寺昔日此所ニアリテ清明院ト云」と記している。清明院については『南藤蔓綿録』の中に「応永十七年蓬萊山永国寺御開基」「昔日七地東照山清明院ヲ此所ニ移シ右ノ寺号改メラル[註(3)]」とあり、この記述から、七地の東照山清明院を応永十七年(1410)に現在地の土手町に移し、永国寺と言う寺名に改めた事がわかる。廃寺跡に応永十七年以後の五輪塔が存在する事から、記述の内容に若干の疑問点が残るが、遺跡の隣接地に14世紀頃の中世寺院の存在が窺われる点で、重要である。

寺跡の比定地は、今日、調査地近くの水田の中に小高い墓地として残り、五輪塔がある。その内、１基の地輪には下記の銘文がある。

奉為永等大姉霊／干時明応五年丙辰四月二日敬白

2．天満宮跡（字清明）

天満宮は昭和初期まで水田の一隅にあったが、送電線の鉄塔工事に際し、裏山に五輪塔群と共に移転された。

『麻郡神社私考』の中に「勧請年紀未考、元享年中再興、天文年中修造、元禄二年巳巳國郡泰平大家安全ノ祈願[註(4)]トシテ里民宮殿ヲ造営ス同三月六日遷宮」とあり、明治八年五月の『七地村地誌』には「清明　天満神社　社地二畝歩　神殿四坪　拝殿七坪　弘長年間山城国北野天神社ヲ勧請[註(5)]スト云」と記されている。

境内にある永正五年(1508)十月二十七日造立の「阿彌陀三尊石塔婆」は高さ2.30mの五輪塔である。その銘文は人吉庄と須恵庄の庄域を考える上で貴重である。

大日本國鎮西肥後州求麻郡須
　　恵庄於当村毎　　集□
　　一心称六字法号願生□
　　養郷□　今当満時招□
林禅侶造立石塔婆以伸□
養仰願現世頓得安称楽□
来世速至涅槃場殊結縁諸
徒□□功徳月衆縁首吟徹
涅槃□何□九界　動
十虚無塵知彗同圓種智
　　者□　那下筆管云身
　　色如金山端厳甚微妙
干時永正五天戌辰十月二十七日敬白

3．宝珠院跡（字清明）

天満宮の裏地が院跡で、本尊の石造地蔵菩薩座像と宝篋印塔・無縫塔が残っている。さらに、院跡に建つ地蔵堂の棟札には「藍田村七地威龍山宝珠院跡、大正十三年甲子年八月吉日相良四國八拾八箇所建立」と記されている。

宝篋印塔は、享保七年(1722)八月十三日に造立されてもので、高さが2.25mあり、台座に「過去万霊速出苦界早帰真際壇主現在寿域当登覚位」と趣旨が記されている。本願主は「芯蓮尼法印定厳、伊作四郎兵衛」で、施主は相良家臣・家内中のほか五日・七日・九日町の町人、七地赤池村中、石工など数百人が加わり結縁している。

宝珠院は、中世寺院の宝樹庵跡に建立されたものと思われ、再興・廃院の時期については不明であるが、本願主の一人「法印定厳」は、宝珠院の中興開山で真言宗の僧侶であり、その後の住持は蓮光・良伝・厳浄・成辯・成金・辯長・辯快と続いている。

4．花立渕（字大坪）

人吉街道沿いの旧七地・西村の境に位置する所で、七地寄りは渕となっている。七地の花立から対岸の梁瀬村の堂崎（安養寺）までの渡し場跡である。

地名の由来は、相良藩禁制の一向宗の「仏像・経典」などが十島・天満天神近くで焼き捨てられた折、信者が対岸の七地に花を立てて拝んだからと言う。

5．軍（いくさ）の瀬（字宮前）

花立渕の下流に位置し、対岸に梁瀬村十島の天満天神がある。この地も渡し場跡である。

地名の由来は、大永六年(1526)大岩瀬合戦の際に、戦場となった事からと伝えられる。

6．やくえん跡（字天道ケ尾）

『城下之図』に「延宝七年十月二日遠江守頼喬此地ヲ見立テ別業トテ、享保年中迄屋形在其跡廃シテ山地辺残毘沙門堂弁天社残リ、外郭初のコトシ明和ノ末ニ至リテ池ヲ水田ニナシ、諸樹伐尽華、山上ノ毘沙門ハ行基菩薩ノ作也」とある。

やくえん跡には、正和六年(1317)の紀年銘を刻した石塔がある。清明院跡と同様に遺跡周辺において、14世紀頃の文化の存在を伝えるものとして重要視される。

7．天堂カ尾（字天道ケ尾）

『城下之図』には、屋敷を◆で描き「毘沙門」と記している。場所は七地水田遺跡の南側丘陵地で、県教委が発掘調査した「天道ケ尾遺跡」一帯である。

天堂カ尾は字名として用いられ、『南藤蔓綿録』に「宝永四年九月廿一日頼福公天堂カ尾ニテ郡中御組ノ者弓鉄砲御覧遊バサレ候」と見える。毘沙門については「天和元年七地下屋敷毘沙門京都ニ於イテ御修復、同八月堂御建立　九月廿日庚午入仏供養導師願成寺廿一世義辰、右毘沙門天此所百姓庭ニカスカナル草堂ノ内ニ有」とある。

現在、堂宇はなく、毘沙門天像一軀が種元勝弘氏（人吉市）の所蔵となっている。

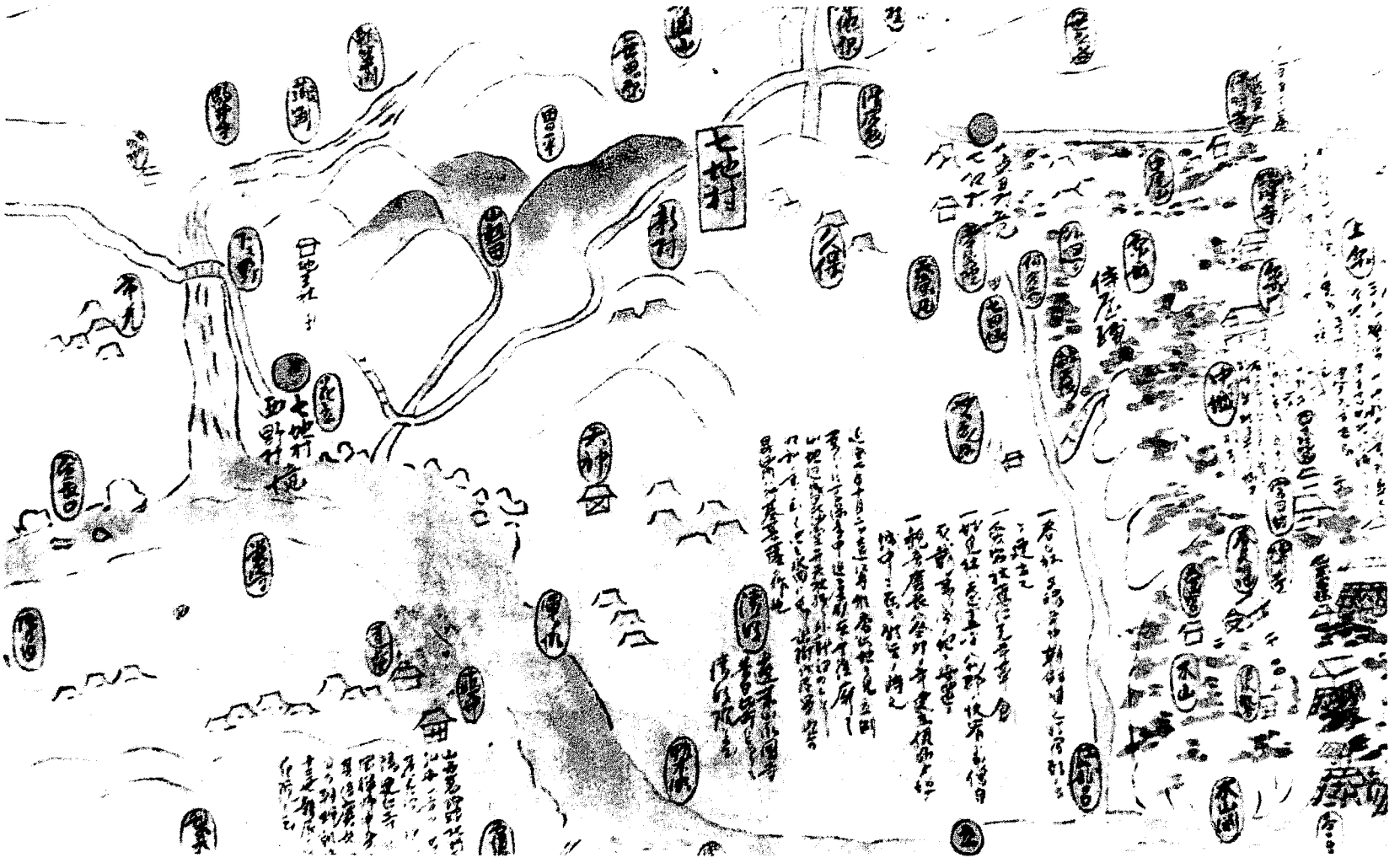
註(1) 故小山勝清氏所蔵であったが、現在、所在不明。絵図写真は上川　香氏から提供を受けたものである。

(2) 人吉市　笹淵　格氏　所蔵

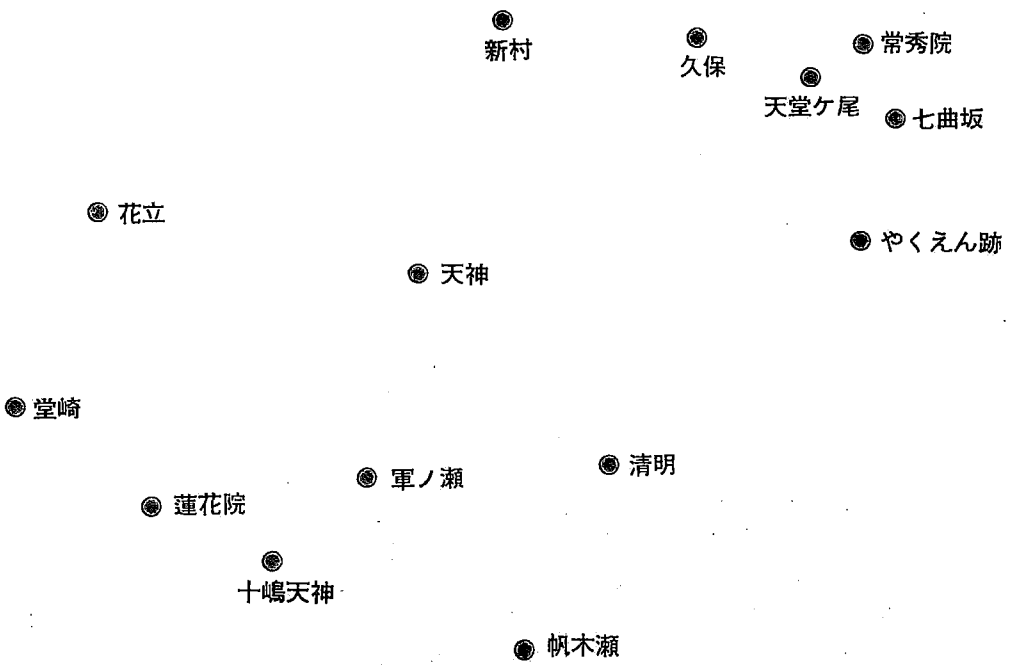
(3) 梅山無一軒著　昭和52年覆刻　青潮社刊

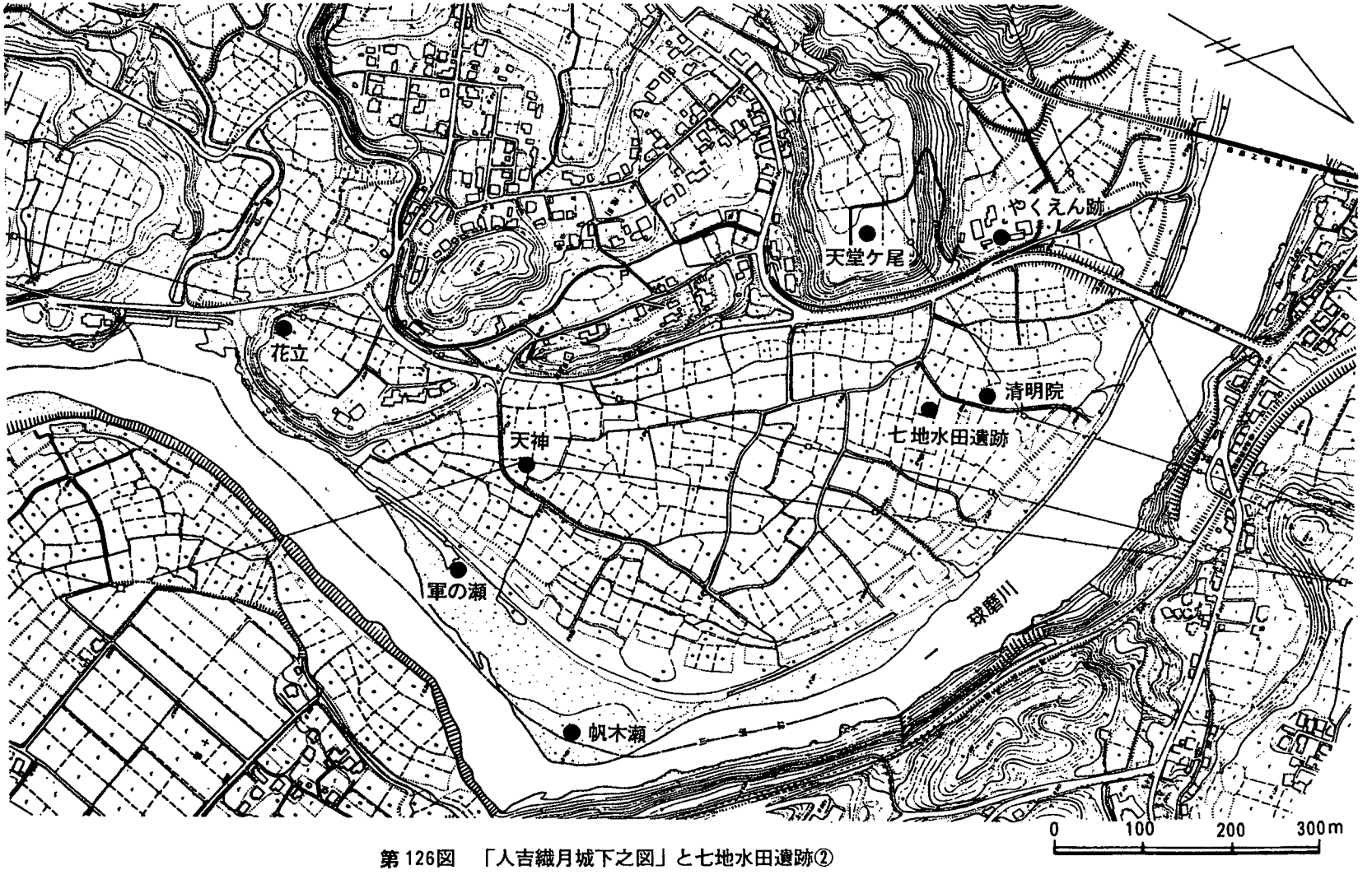
(4) 青井采女佐惟薫著　大正８年に『球磨郡神社記』に改題、覆刻

(5) 『肥後国求麻郡村地誌』所収　昭和51年覆刻　青潮社刊



第125図　『人吉繊月城下之図』と七地水田遺跡①　（写真は上川　香氏提供）


新村
久保
常秀院
天堂ケ尾
七曲坂
花立
やくえん跡
天神
堂崎
清明
軍ノ瀬
蓮花院
十嶋天神
帆木瀬



第126図　「人吉繊月城下之図」と七地水田遺跡②

第3節　岡本河内守頼真について

調査区に隣接する清明院跡の墓地に、戦国武将の岡本河内守頼真とその妻の五輪塔がある。

岡本氏については『南藤蔓綿録』『嗣誠独集覧』等に詳しい記述があり、最近では、渋谷敦氏の『岡本河内守頼真伝』が公刊され、関連資料[註(6)]が集成されている。これらの資料によれば岡本氏は戦国時代末期の人物[註(7)]であり、七地水田遺跡から出土した中世遺物とほぼ同時代であることから、両者の関連が窺われる。従って、ここでは遺跡解明の参考資料として岡本（頼真）氏に触れて見たい。

編纂物の伝記については、みな同じで、下記の文は『南藤蔓綿録』巻之九所収の伝記である。「御感状七通」（『熊本県史料』中世篇第四巻所収）の中の「岡本頼真氏戦場日記」が基になっている。しかし、これには若干の誤読があって、渋谷氏が著書の中で訂正している。

慶長十一年十一月十三日辰刻、七地ノ住人岡本河内頼真病死、時ニ七拾（悟了永頓）其前菊池末葉也、後醍醐天皇ノ御子、建武二年二月九日肥後国不慮ノ干戈ニ依リ先祖何某代国中ヲ立除キ御当地ヲ頼リ五代相良弥三郎頼広公御代大村井口ニ在宅仕リ候、其後嘉慶二年戊辰十月十二日前続公御代菊池十郎高良所々ノ忠貞ニ依リ、原田岩本ニ於テ水田壱町下サレ候、夫ヨリ菊池ヲ岩本ト改メ、其後文安五年戊辰五月十四日長続公御代高良子十郎貞久須恵庄七地ニ聟養子仰付ラレ候、其刻、弓箭最中ニヨッテ赤池境ニ於テ用ニ立チ候、此ノ御感状今ニ有、其後大永六年丙戌義滋公イマダ近江守長唯公ト申奉リシ時、岩本三郎右衛門貞信、人吉ニ於テ粉骨仕リ候、依テ長唯公頼興公御感状有、貞信子岩本右衛門兵衛隆吉ト云、此子則岡本河内也、河内事ハ天文六年丁酉七地ニ生レ弥十郎ト云、其後深水主馬ト改メ、其後岡本源次兵衛ト改メ、高麗御陣前方河内ト改メ、十九歳ニテ初陣ヨリ粉骨十九度、疵ヲ蒙ル事三十一カ所、数通ノ御感状系図ニ相添ヘ今ニ有之、天正十四年丙戌豊後入ノ後ハ島津兵庫頭義弘御所望ニヨッテ内田伝右衛門、菱刈源兵衛、右河内以上三人飯野ニ参ラレ候、島津家ニテノ粉骨ノ趣別紙ニ有、但御感状七通ノ内一通ハ島津入道以心ヨリ頂戴、又河内場数十九度、内島津御奉行川上左近将監ヲ鑓ニテ大口初栗弓箭ニ仕付候事一期ノ大手柄也、帰陣後、義陽公御自身河内方ヘ御見廻一期ノ名誉也、慶長十年六十九歳ノ冬ヨリ煩付、床ツメヨリ鉄砲玉二ツ出候、又骨砕ケ大小廿一出申候、此骨鉄砲玉ニ相添ヘ今ニ有之、右病中長毎公ヨリ久保田半左衛門ヲ以テ御書ヲ下サレ候、今ニ有、但前方ヨリ永国寺十一世耕雲和尚ヨリ兼テ居士号ヲ請、法体ノ約束致シ置キ候処、俄ノ病気差発リ候故病中剃髪致シ其毛髪ヲ人知レザル様紙ニ包ミ其側ニ一首

床ノ間ニ取残シ置ク乱レ髪無クナル跡ノ形見トモ見ヨ

カ様ニイタシ、畳ノ下ニ敷置キ候処ニ病死ノ後見世伜与右衛門、則
別レニシ其タラチネノ乱レ髪由々敷人ノ形見トゾ見ル
右岡本河内事前ニモ有之候へ共委敷故記之
別レニシ其タラチネノ乱レ髪由々敷人ノ形見トゾ見ル

（『南藤蔓綿録』巻之九より抜粋）

岡本河内守頼真は、天文六年(1536)に七地で生まれ、初め弥十郎と名乗り、後、深水主馬、岡本源次平衛と改めている。「岡本名字ヲ名乗事、先年一族ノ内ヨリ求麻郡永里岡本ノ両城ノ主トナル筋目ニ依テ本領ヲ名乗ル、相良義陽公御代ニ度々忠節粉骨仕故上意奉テ御家之字ヲ被下頼真ト号ス」「高麗御陣前方川内ト改メ」とあるから、この時期に岡本河内守頼真と改名したと思われる。

初陣は十九歳で、合戦は十九度経験し、受けた疵は三十一カ所に及んだと言う。慶長十年(1605)の六十九歳の冬に病床について、剃髪し「梧了永頓居士」となっている。

病中の時、床ずれの箇所から、鉄砲玉が２つ、砕けた骨が大小21片も出たという。翌年の慶長十一年十一月十三日に、七十歳で病死している。

岡本氏の先祖が七地村と初めて関わりをもったのは、『南藤蔓綿録』に「文安五年(1498)戊辰五月十四日長続公御代高良十郎貞久須恵庄七地ニ智養子仰付ラレ候」とあり、その頃であったことが窺える。居館の場所は不明であるが、『南藤蔓綿録』の「天和元年七地下屋敷毘沙門・・・・此所百姓庭ニカスカナル草堂ノ内ニ有」という記述内容から、『城下之図』に「毘沙門」と記してある七地の下屋敷が、候補地の一つとして掲げられる。下屋敷にある毘沙門堂は、近年まで現在の「やくえん跡」にあり、この事から「やくえん跡」と居館址の結びつきがでてくる。この「やくえん跡」は、江戸時代に相良藩の下屋敷があった所であるが、敷地内には正和六年(1317)の石塔も残っており、この地が古くから開発されていた事がわかる。「やくえん跡」が戦国時代に岡本氏の居館址であった事は十分に考えられる。

「やくえん跡」は調査区の南側隣接地にあり、この事から岡本氏が周辺水田の開発に何らかの関わりを持っていたのは確実であろう。

註(6) 梅山無一軒著　笹淵　格氏所蔵本による
(7) 渋谷　敦著／岡本勝英氏出版　昭和63年

球磨の石塔拾遺

（歴史考古学第17号・歴史考古学研究会・昭和61年）

前　川　清　一

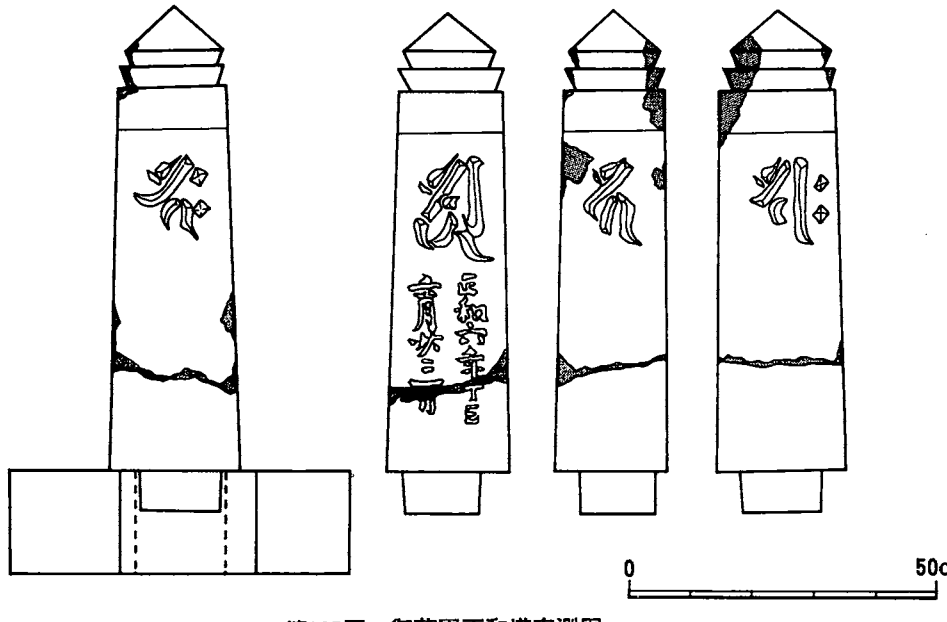
御薬園正和塔　（人吉市七地町字天道ケ尾）

御薬園は人吉城主相良家の下屋敷として延宝七年(1679)に拓かれたものである。

正和塔に関する記録としては『南藤蔓綿録』の元禄二年(1689)条に「同年八月七地御下屋敷荒神御勧請、但六月廿三日地形御普請ノ処、正和六年六月廿三日ト彫付有ル石体ヲ掘突ツ、則当月当日故奇異候事也トテ江戸へ言上有シカハ即御機嫌ニ応へ右ノ石体ヲ以テ荒神ト崇メラレ候」とあり、本塔が荒神として祀られるに至った経緯が知られる。なお、同書の延宝七年(1679)条に「同年十月三日、七地御屋舗御普請、地形始十一月十八日御家并弁財天御再興、鳥居御建立」とあり、当地には以前より御堂の存在が窺われる。

本塔は二条の切り込みの下に額部を示す線を入れ、四面に大きな文字でア・カ・サク・バクの種子を薬研彫し、ア字の下に「正和六年丁巳　(1317)　六月廿三日」と紀年銘を刻している。第127図でお判りのように、下部より15～19cmの所から折れて、割れ口の中央部には直径７cmの丸い穴が上下７～８cm程穿たれている。按ずるに、これは元禄二年の発見時に欠損していたものを、荒神として祀るに当たり、補修擦るための穴と推測される。

現在、榎の大木の根元近くに、本塔と同質の八角形の基礎石の上に立っている。厚さ16cmを測り、中央部には衲穴を設けてある。



第127図　御薬園正和塔実測図

第V章　総　　括

球磨川南岸の低河岸段丘に所在する七地水田遺跡は、周辺に「大坪」という地名を残し、人吉盆地における条里制遺跡の一部と考えられている。

しかるに、九州縦貫自動車道（八代～人吉間）の建設に際し、球磨川を跨ぐ全長 480mの大橋が当遺跡内に架かる事になったため、架橋ボックスの基礎部となる20m×30mの範囲（５ケ所）に限って発掘調査を実施した。

その結果、現水田層から、かなりの中世・近世遺物が出土し、４・５トレンチからは、近世墓坑を初め、洪水層に覆われた埋没水田を検出した。洪水層と埋没水田からは多量の中世遺物が出土している。

さらに、これらの下層からは、縄文時代後・晩期の遺物包含層が検出され、多くの土器と石斧を中心とした石器が出土した。これらの遺物に伴う遺構として、同層から、炉跡と土坑を伴う集石遺構（墓）を検出した。

１．近世墓坑について

洪水層を切り込む12基の土坑が検出された。遺構確認面の埋土は灰色土で、検出状況から、同時期のものと考えられる。ＳＥ０１とＳＥ０８から近世陶器(167) と雑器(175) が出土しており、江戸時代の中期以降のものであろう。性格については、ＳＥ０３から鉄釘が出土した事と、調査区の４トレンチに隣接して近世墓地があることから、墓坑と考えてよい。調査結果から、当時の墓地は４・５トレンチの東側へ拡大していたものと思われる。

２．洪水層について

層厚20cm程の黄灰色土で、小礫が多く混じっている。プラント・オパール分析結果でも、イネの含有率が前後層に比べて 1／7 から 1／10程度の低い数値であった。１～３トレンチまでは部分的な堆積に留まるが、４・５トレンチでは調査区全面に広がりを見せる。

３．埋没水田について

〔発掘調査結果からのアプローチ〕

４・５トレンチから10枚前後が検出された。４トレンチの場合、２枚分が完全な水田で、短冊型を呈し、長軸畦畔15～16.5m×短軸畦畔７～８ｍを測った。（５トレンチで検出した水田もほぼ同じ大きさである ）長軸の向きはいずれも南北方向にあり、短軸が東西方向を示した。これは現水田と比較した場合、畦畔の長軸と短軸の関係が全く逆である。当遺跡が球磨川沿岸の低河岸段丘に所在することや、１～３トレンチから埋没水田が検出されなかったことなどから、今回検出された埋没水田は、部分的に拓かれた小規模な水田であった可能性が強い。

〔出土遺物からのアプローチ〕

現水田層や洪水層及び埋没水田層から出土した中世遺物は、青磁・白磁を見る限りにおいて

は、年代に大差のないことが判る。

①1～3 トレンチ出土の遺物

（現水田層）　2は青磁の稜花皿で、15世紀初めから16世紀中葉までの長期に渡り、製作・使用されたものと考えられる。4は白磁皿で、高台がアーチ状に抉られたタイプで、14世紀後半から15世紀中葉のものと見なされている。5は白磁で、玉縁状の口唇部を有しており、13世紀頃のものである。今回調査区から出土した遺物の中で最古のものである。

（洪 水 層）　20と24は簡略化されたヘラ描きの蓮弁・単弁模様を持つ青磁である。文様は薄く施され、特に24はほとんど消えかかった状態である。15世紀頃に位置付けられている。26は雷文体を持つ青磁で、年代は16世紀より若干、遡ると推察される。

②4 トレンチ出土の遺物

（現水田層）　74は櫛描文様の青磁である。同安窯系で13世紀中葉以前のものと考えられる。75は青磁の盤で、14世紀前半頃のものである。82は瀬戸系の陶器で、擂鉢に利用されている。15世紀頃のものであろう。

（洪 水 層）　97は上質の青磁で元代（14世紀～15世紀）のものと考えられる。

（埋没水田）　137 は青磁で、退化した雷文帯文様を有している。1トレンチの26と同様である。145 は永楽通宝で、初鋳年代は15世紀初頭である。

③5 トレンチ出土の遺物

（洪 水 層）　190 は青磁の稜花皿で、1トレンチの2と同様である。191・192 は退化した細蓮弁文様が描かれた青磁である。15世紀後半まで遡る可能性を持っているとされるが、多くは16世紀前半から中葉の間にあると考えられる。

（埋没水田）　212 は退化した細蓮弁文様が描かれた青磁で、191・192 と同様である。213 は青磁で、簡略化されたヘラ描きの単弁文様を有している。1トレンチの20・24と同様である。

④小　結

出土遺物は大体において15世紀から16世紀にかけてものが多く、これより古い物は伝世品と見なして差し支えないものと思われる。従って、埋没水田の年代は15世紀初頭から16世紀中葉頃と推察される。

〔『求麻絵巻』「人吉繊月城下之図」からのアプローチ〕

今日、七地水田遺跡一帯は、一面の水田地帯であるが、『人吉繊月城下之図』によれば、江戸時代の18世紀中葉頃は一部に人家の並ぶ村であった事が判る。地元に「球磨川の度々の氾濫で、村が裏山に移った 」という伝えがあり、七地水田遺跡のあり方を考える上で、興味深い。さらに宝暦五年(1755)の大洪水を記した『探源記拾遺』に「七地畑、住吉より水は無之所水溢れ」と七地についての記述があり、宝暦五年の七地は主に畑地であった事が判る。以上の事は18世紀中葉頃の事であるが、これから判断しても中世16世紀中葉の七地において、今回、検出

された埋没水田が、今日のように全面的な広がりを有するものとは考えにくい。やはり、低河岸段丘の一部に拓かれた狭い迫田的な水田と考えた方がより妥当であろう。

〔文献史学からのアプローチ〕

調査区の4トレンチ西側の近世墓地に戦国武将の岡本河内守頼真とその妻の墓碑と伝えられるものがある。『南藤蔓綿録』によれば、岡本氏の先祖が七地村と初めて関わりを持ったのは文安五年(1448)であると言う。居館の場所は不明であるが、『人吉繊月城下之図』から、調査区南側に隣接する「やくえん跡」が候補地に掲げられる。岡本氏は、その後、代々、七地に居を構えたものと思われる。かかる意味から岡本氏が調査区を含めた周辺水田の開発に何らかの関わりを持っていたのは確実であろう。

4．縄文時代後・晩期の遺物について

（1）縄文式土器

〔A－1類〕　大型で厚壁の深鉢形土器である。 262や279 に代表されるように、胴部はやや内側へ屈曲する。復元口径は 262が39.0cm、 279が23.8cmを測る。内外器面は調整されているものの、ザラザラしており、概して、脆い。口縁下には沈線を施したものや、貼り付け突帯を有するものの外、刻目突帯や指頭による刺突文が見られる。

〔A－2類〕　大型で薄壁の深鉢土器である。体部の上位は斜めに直線的に伸びる。 324に代表され、復元口径36.6cmを測る。

〔B－1類〕　小型で薄壁の深鉢土器である。口縁直口で、ラッパ状に立ち上がった体部は、上位で直立気味となる。 267に代表され、復元口径17.0cmを測る。

〔B－2類〕　小型の浅鉢形土器で、胴部は大きく膨らみ口縁部で外反する。 310に代表され、口径 9.9cm、胴部径11.6cm、器高 6.5cmを測り、底部は丸底である。

〔B－3類〕　大型の浅鉢形土器で、胴部は内側へ屈曲し、口縁でやや外反する。 271に代表され、復元口径29.1cmを測る。

〔その他　〕　295 は口縁部に指頭による指突文があり、294 とともに山ノ寺式か夜臼式の土器であろう。さらに297 298 は口縁部にリボン状の突起物があり、黒川式土器の可能性がある。

（2）縄文時代石器

〔打製石斧〕　132 点の出土であった。その中で自然面を残しているものが約71％にも及ぶ事から、石斧製作の工程は原石の一次剥片から作られていると考えられる。また石斧の欠損品は約77.9％で、かなりの割合であった。短冊型・分銅型・尖り型の3類に大別される。

〔石核・剥片〕打製石斧の製作過程において出来た物と思われる。石核が2点で、多くの細剥片類が出土した。

〔磨製石斧〕　4点の出土があったが、いずれも欠損品であった。

〔礫　　器〕　ほとんどが砂岩を使用しており、9点の出土があった。

〔円盤状礫器〕 4点が出土した。砂岩が使用されており、厚みを持ったものは縁辺部に敲打痕が見られる。

〔石　　錘〕　12点が出土した。縦型・丸型・異型に3分類される。

〔敲石・磨石〕敲打痕が確認できる石器については、敲石と磨石に大別し、各々さらに敲石（長型・不定型）と磨石（使用により最良の形となったもの・丸味を持った自然礫）とに細分した。

その他、石皿・石棒・石鏃・石匙が出土した。

（3）炉跡

Ⅷ層の縄文時代の土器や石器を取り上げた段階で、15基の炉跡が検出された。炉跡は平面プランにより、溝状を呈する物（3基）と長円形を呈する物とに大別されるが、唯一、両方のプランを兼ね備えるものがあった。しかし、形状は概して不定型で、4トレンチから6基、5トレンチから8基がまとまって検出されている。何の為に設けられた炉跡なのかまったく意味不明で、今後の研究課題であろう。

〔付記〕プラント・オパール定量分析結果

七地水田遺跡は、古代・中世・現代を通じて水田稲作が行われていた。それを科学的に実証するため、宮崎大学農学部助教授の藤原宏志氏に「プラント・オパール定量分析」を依頼した。試料は1・4・5トレンチの深掘壁面、各層から採取した。

1トレンチ　　(t／10a．cm)

	イネ (O. sati.)	イネ籾 (rice g)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
Ⅰ	3.004	1.052	3.117	1.415		0.920	0.317
Ⅱ	4.327	1.516				1.359	0.983
Ⅲ	3.560	1.247				2.674	0.901
Ⅳ－①	2.441	0.855				1.461	1.373
Ⅳ－②	1.243	0.435				1.015	0.786
Ⅴ	3.172	1.111				1.695	0.973
Ⅵ	0.826	2.289	2.285	1.037		1.034	1.161
Ⅶ						1.085	
Ⅷ							1.091
Ⅸ－①							
Ⅸ－②							
Ⅸ－③							
Ⅹ						0.249	

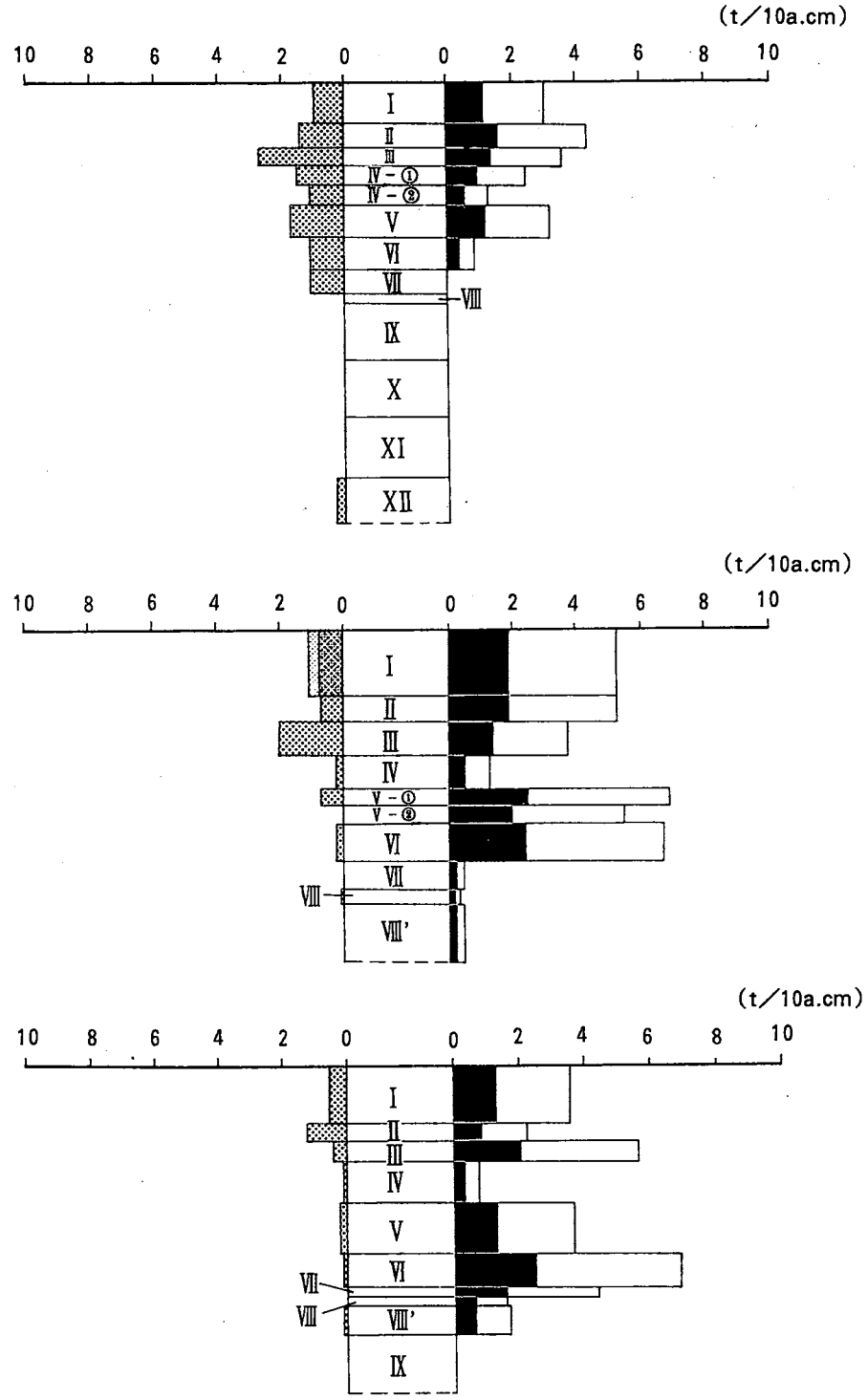
4トレンチ　　(t／10a．cm)

	イネ (O. sati.)	イネ籾 (rice g)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
Ⅰ	5.247	1.838	1.814	0.824	1.031	0.785	1.660
Ⅱ	5.279	1.849	1.565	0.710		0.677	2.703
Ⅲ	3.737	1.309				1.983	3.546
Ⅳ	1.251	0.438				0.204	1.232
Ⅴ－①	6.923	2.426				0.691	1.298
Ⅴ－②	5.474	1.918					1.979
Ⅵ	6.744	2.363	18.658	8.472		0.184	9.008
Ⅶ	0.430	0.151					0.181
Ⅷ	0.298	0.104				0.049	0.126
Ⅷ'	0.440	0.154					0.371

5トレンチ　　(t／10a．cm)

	イネ (O. sati.)	イネ籾 (rice g)	キビ族 (Pani.)	キビ族種 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
Ⅰ	5.344	1.872				1.315	1.660
Ⅱ	3.354	1.175				0.566	
Ⅲ	8.485	2.973	13.204	5.996		3.131	
Ⅳ	1.178	0.413				0.497	
Ⅴ	5.545	1.943				1.851	
Ⅵ	10.361	3.630	2.687	1.220		2.458	
Ⅶ	6.639	2.326				2.917	
Ⅷ	2.407	0.875				1.872	
Ⅷ'	2.604	0.912				0.275	
Ⅸ							

第71表　プラント・オパール定量分析表①



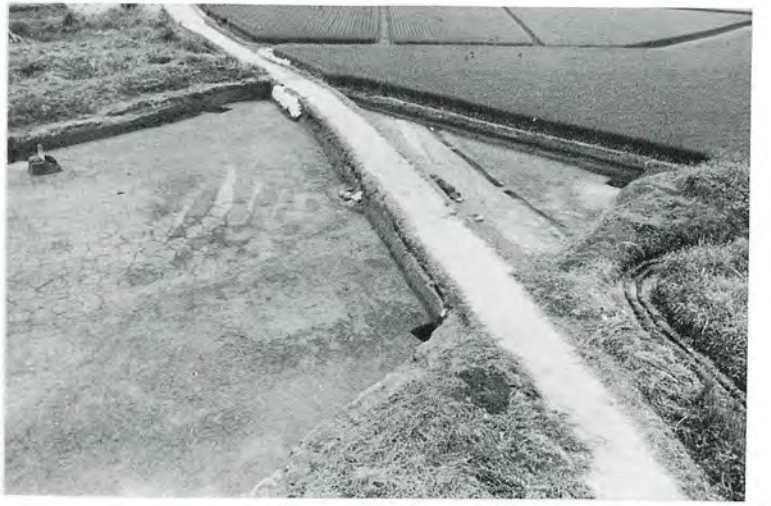
第72表　プラント・オパール定量分析表②

写真図版

① 調査区航空写真（調査区に架かる球磨川第 3 橋）

② 調査区を南から望む

③　5 T検出の畦畔



①　1 T調査区

④　4 T検出の畦畔

②　2 T調査区

図版2

② 4T検出の水田址

③ 4T検出の近世墓坑（SE06）

① 5T西壁の土層断面
（畦畔の検出状況）

図版3

③　5 T縄文調査

①　4 T縄文調査(1)

④　4 T検出の集石遺構（墓）

②　4 T縄文調査(2)

図版 4

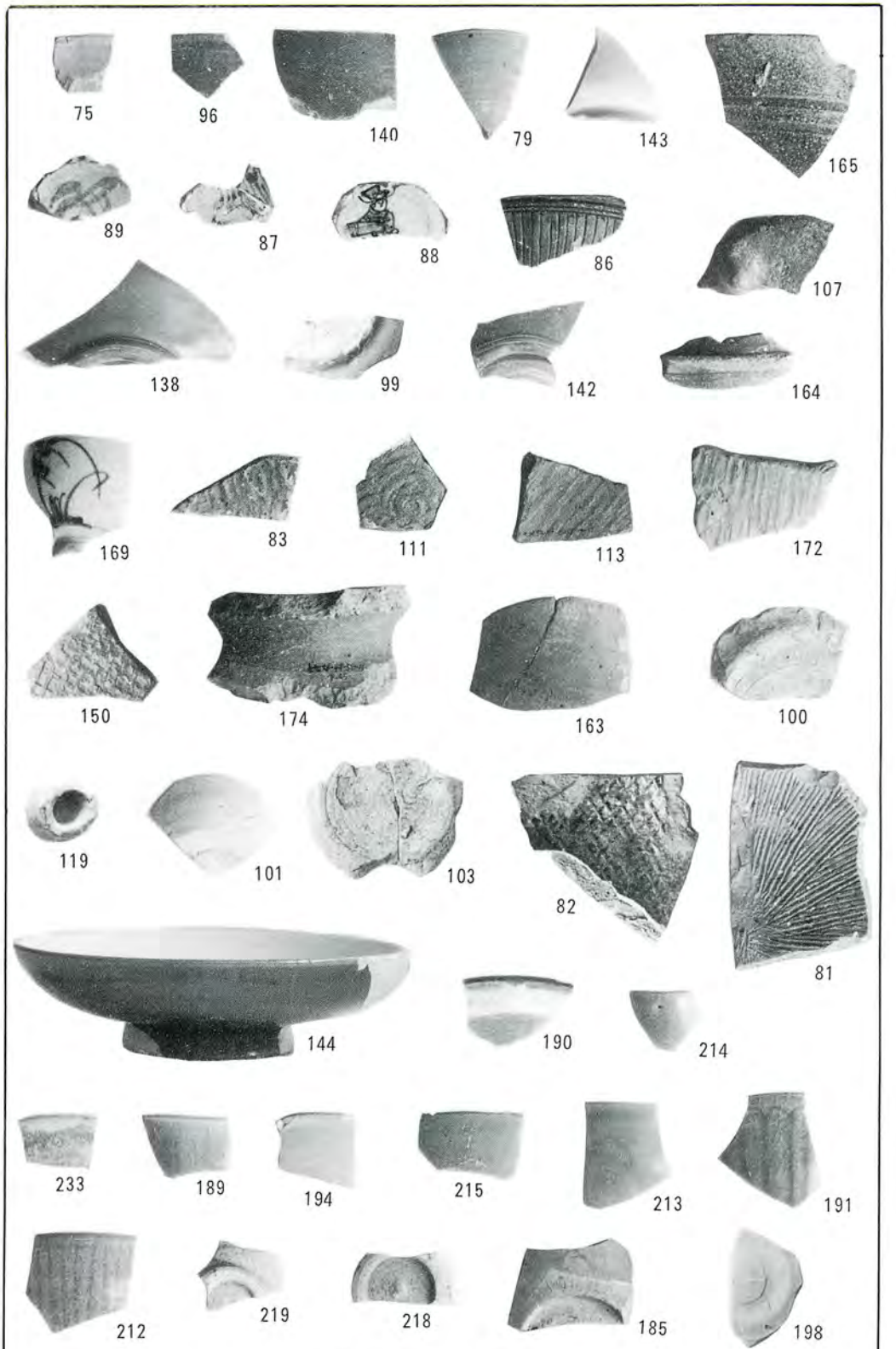
③　５Ｔ検出の炉跡（ＳＫ１１）検出状況

①　４Ｔ検出の炉跡（ＳＫ０３）検出状況

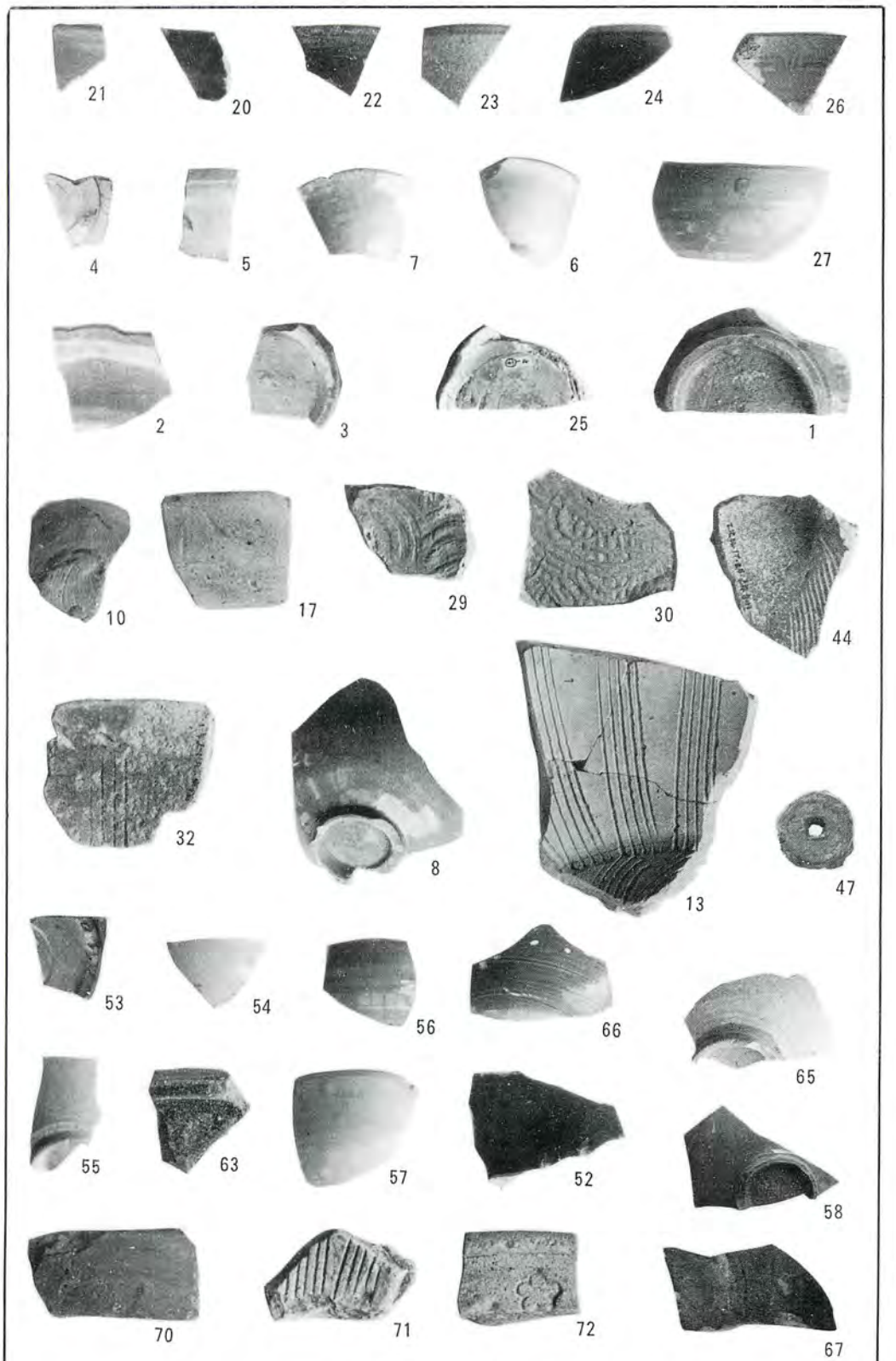
④　５Ｔ検出の炉跡（ＳＫ１１）発掘終了

②　４Ｔ検出の炉跡（ＳＫ０３）発掘終了

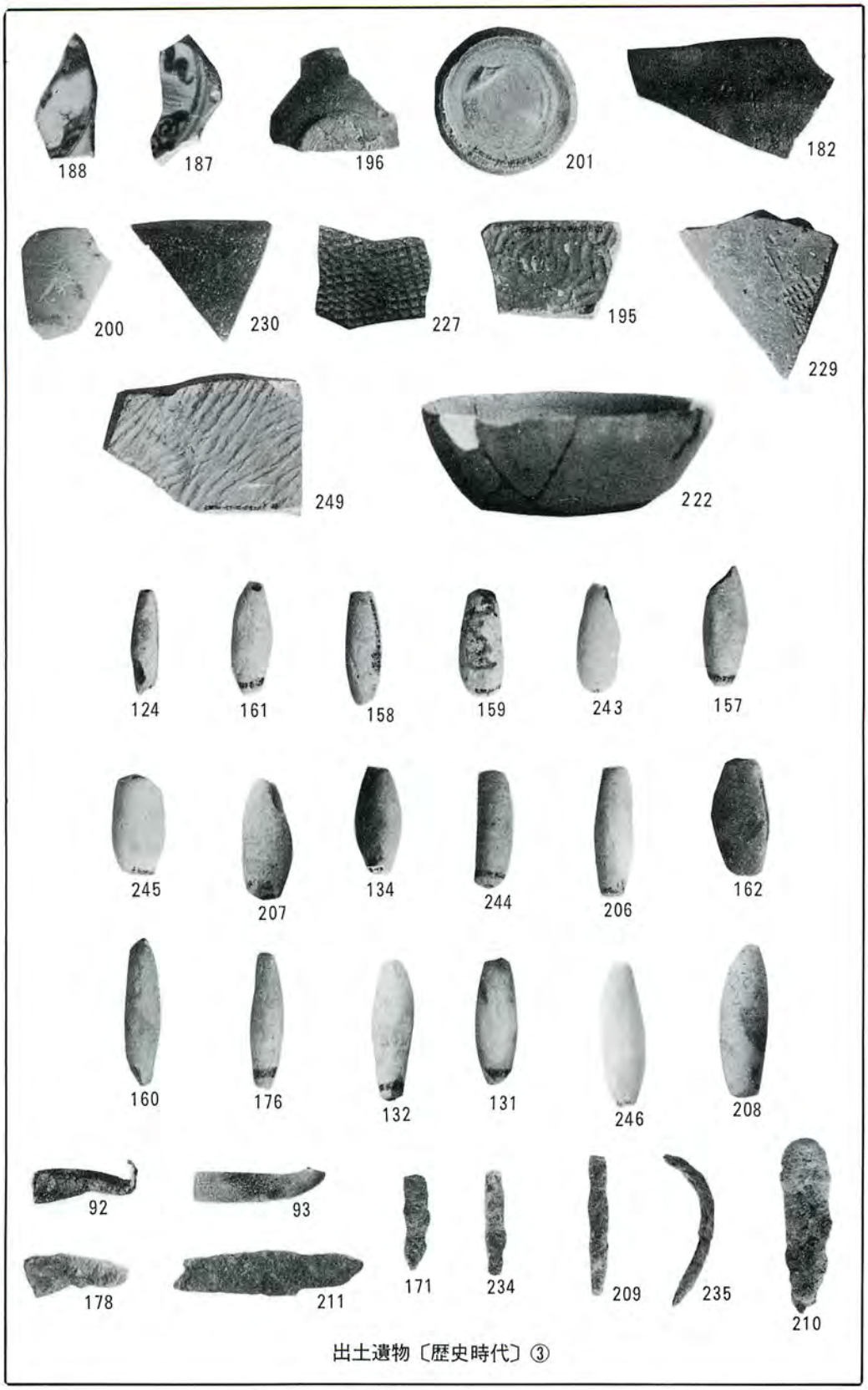
図版５


75
96
140
79
143
165
89
87
88
86
107
138
99
142
164
169
83
111
113
172
150
174
163
100
119
101
103
82
81
144
190
214
233
189
194
215
213
191
212
219
218
185
198

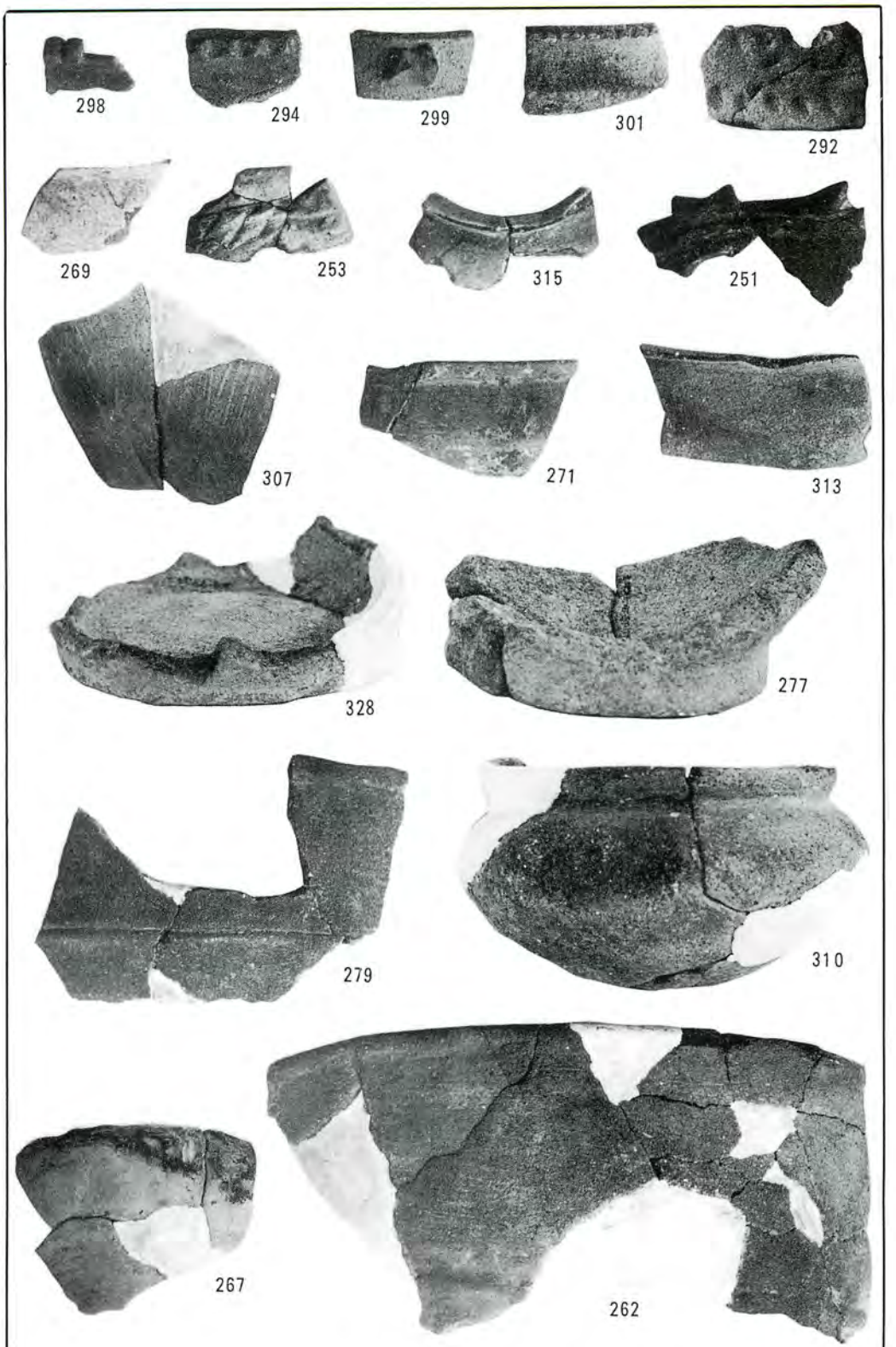
出土遺物〔歴史時代〕①


21
20
22
23
24
26
4
5
7
6
27
2
3
25
1
10
17
29
30
44
32
8
13
47
53
54
56
66
65
55
63
57
52
58
70
71
72
67

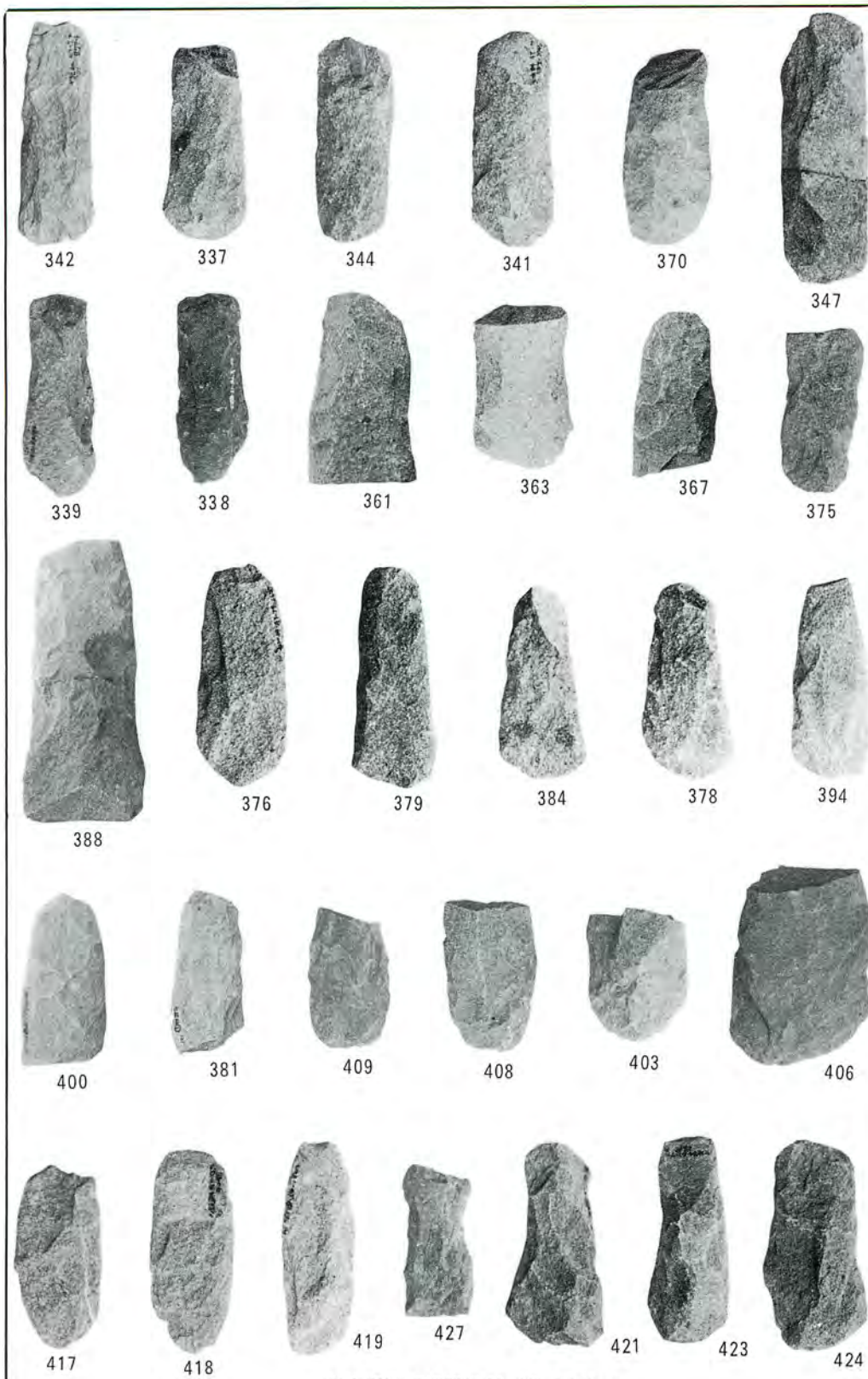
出土遺物〔歴史時代〕②


188
187
196
201
182
200
230
227
195
229
249
222
124
161
158
159
243
157
245
207
134
244
206
162
160
176
132
131
246
208
92
93
178
211
171
234
209
235
210

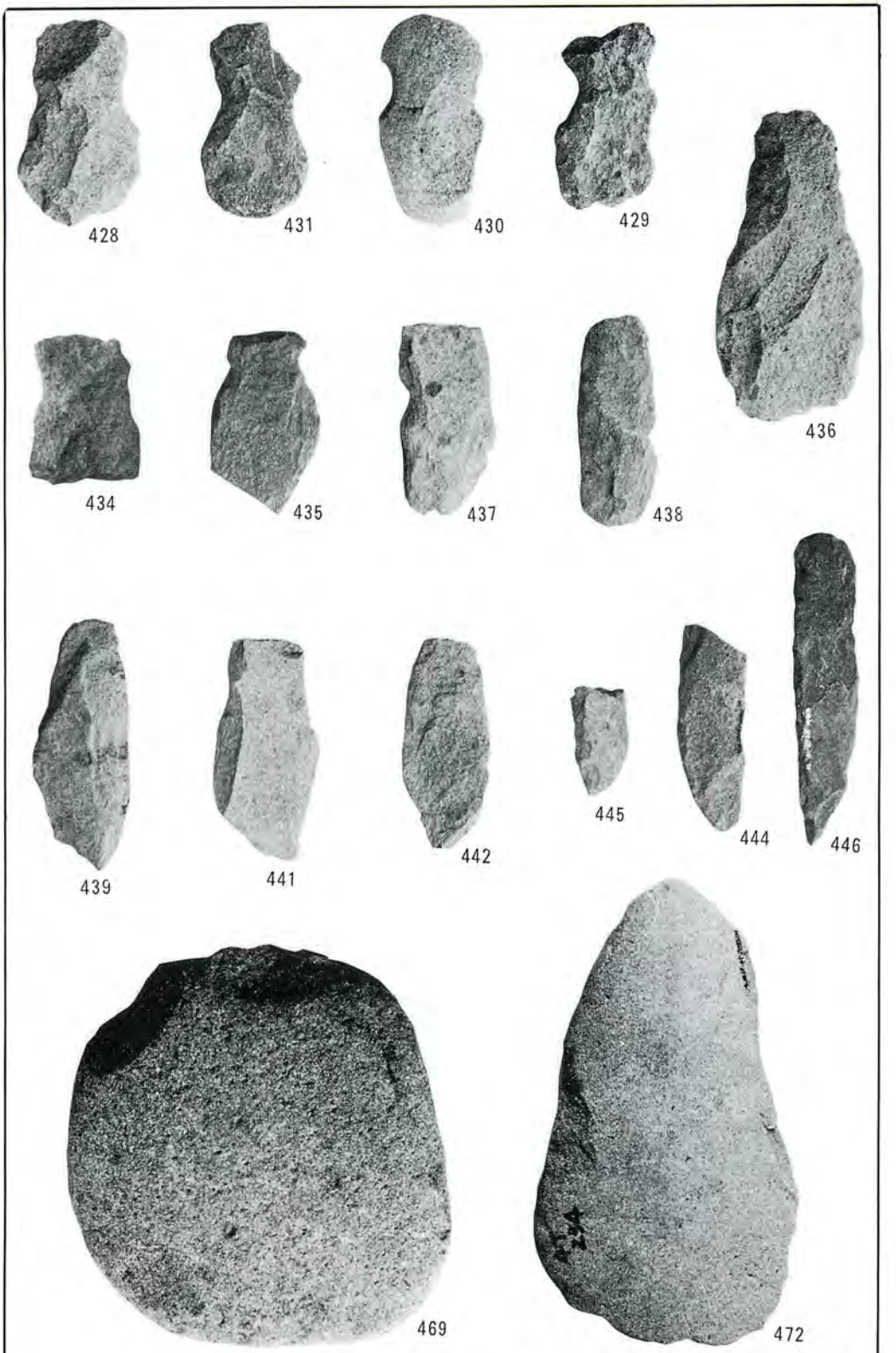
出土遺物〔歴史時代〕③


298
294
299
301
292
269
253
315
251
307
271
313
328
277
279
310
267
262

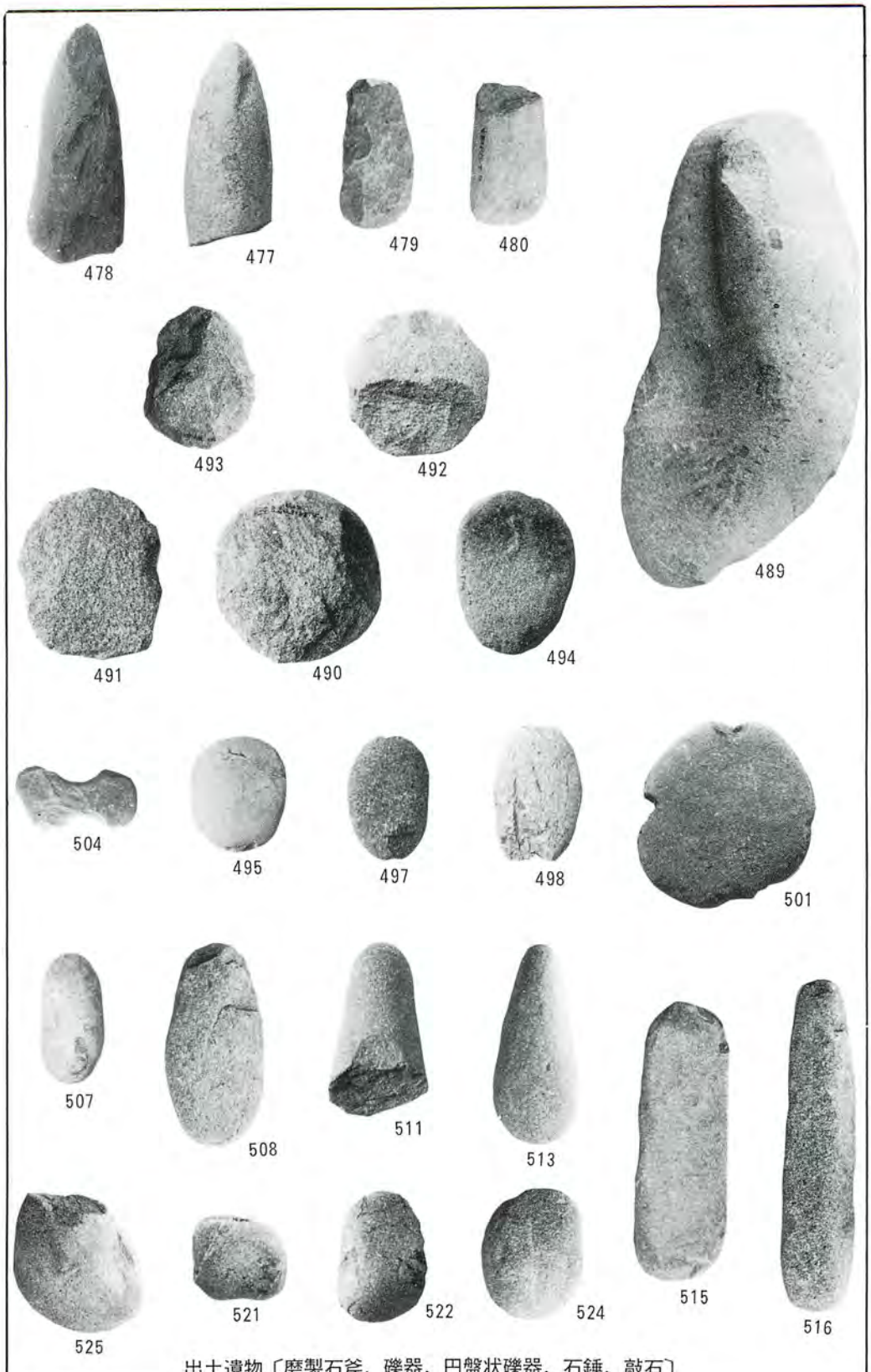
出土遺物〔縄文式土器〕



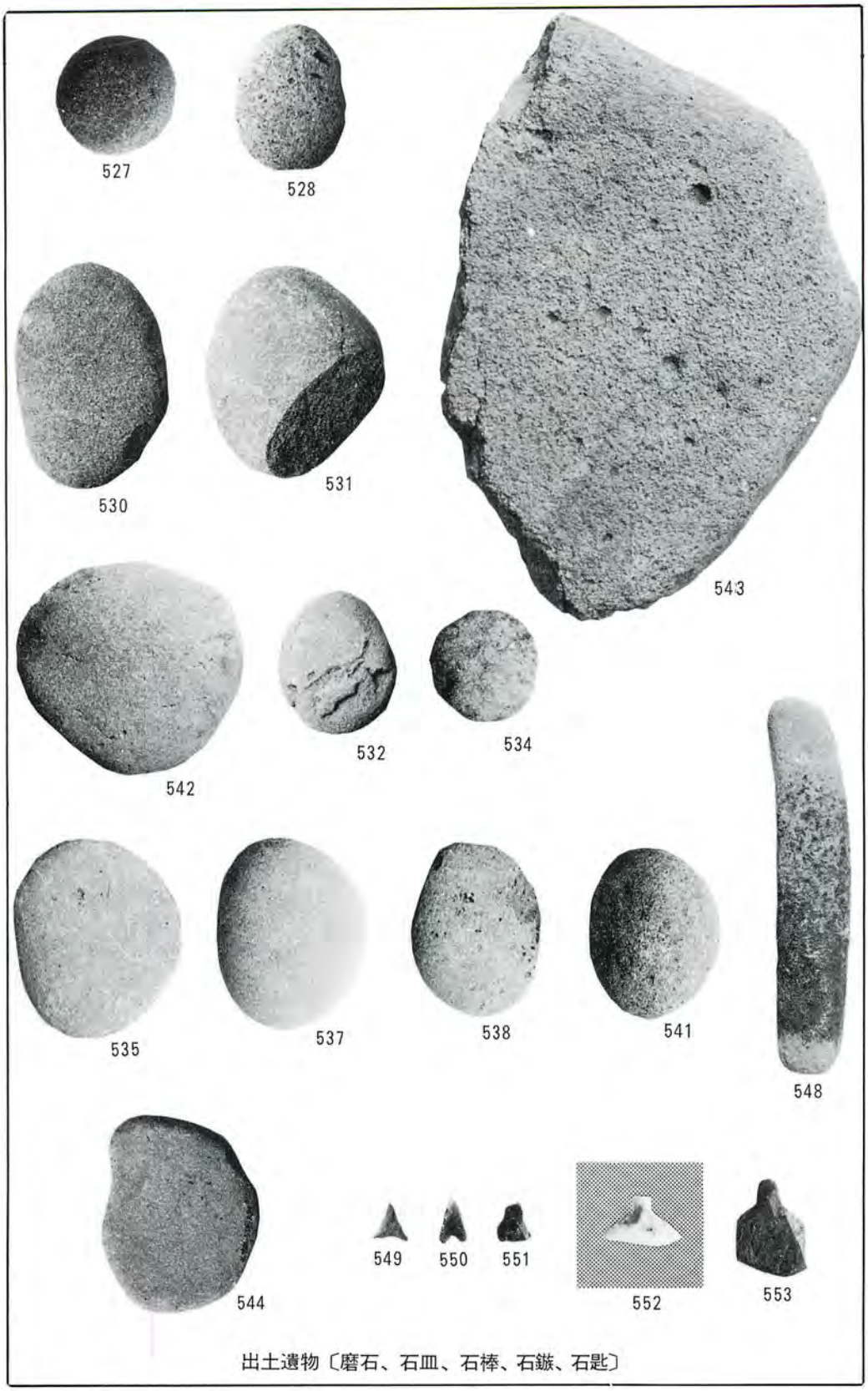
出土遺物〔打製石斧（第Ⅰ類）〕



出土遺物〔打製石斧（第Ⅱ類・ 第Ⅲ類）、石核・剝片〕



出土遺物〔磨製石斧、礫器、円盤状礫器、石錘、敲石〕



出土遺物〔磨石、石皿、石棒、石鏃、石匙〕

あ　と　が　き

発掘調査の途中で田植えが始まり、水掛かり等の問題で種々のトラブルが発生し、一時期は調査を断念しなければならない事態におちいりましたが、道路公団の永渕善吾副所長と村田文敏工務課長の御尽力で、最終的に地元の方々の協力が得られ、無事、調査を終了することが出来ました。

さらに、作業員の方々には、調査時のピークが真夏という悪条件のもと、縄文時代の遺物包含層が硬度の粘土層で、使用した小スコ（移植鏝）が、ほとんど磨滅するほどの厳しい現場となり、多くの苦労をかけました。

関係者の皆様に厚く御礼申しあげます。

なお、報告書作成に際しては、道路公団の岩永一男庶務課長から、多大の御協力をいただき、これに加えて文化課人吉調査事務所の溝口・石工両臨時職員の大いなる努力がありました事を申し添えます。

（大田）

熊本県文化財調査報告　第101集

七地水田遺跡

平成元年1月31日

編集発行　熊本県教育委員会
〒860　熊本市水前寺6丁目18—1
☎熊本（096)383—1111（代）
文化課第2調査係(内)6715

印　刷　有限会社米田印刷
〒862　熊本市坪井6丁目594番地
☎熊本（096)345—0150（代）
FAX　096—345—2628

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 101 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：七地水田遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日